



0054521-000

R388.91-Ko21ウ

日本民謡辞典

小寺融吉・著

壬生書院

昭和10

AID

33.12.10

R  
388.91  
K021



日本民謠辭典

小寺融吉著



一、田舎の風景  
 二、田舎の風景  
 三、田舎の風景  
 四、田舎の風景  
 五、田舎の風景  
 六、田舎の風景  
 七、田舎の風景  
 八、田舎の風景  
 九、田舎の風景  
 十、田舎の風景  
 十一、田舎の風景  
 十二、田舎の風景  
 十三、田舎の風景  
 十四、田舎の風景  
 十五、田舎の風景  
 十六、田舎の風景  
 十七、田舎の風景  
 十八、田舎の風景  
 十九、田舎の風景  
 二十、田舎の風景



田打と種まき

一、田舎の風景  
 二、田舎の風景  
 三、田舎の風景  
 四、田舎の風景  
 五、田舎の風景  
 六、田舎の風景  
 七、田舎の風景  
 八、田舎の風景  
 九、田舎の風景  
 十、田舎の風景  
 十一、田舎の風景  
 十二、田舎の風景  
 十三、田舎の風景  
 十四、田舎の風景  
 十五、田舎の風景  
 十六、田舎の風景  
 十七、田舎の風景  
 十八、田舎の風景  
 十九、田舎の風景  
 二十、田舎の風景









此の世に  
 何事も  
 成るに  
 由りて  
 是の如  
 きの事  
 ありて  
 是の如  
 き事な  
 りと云  
 へば



打 拵

此の世に  
 何事も  
 成るに  
 由りて  
 是の如  
 き事な  
 りと云  
 へば

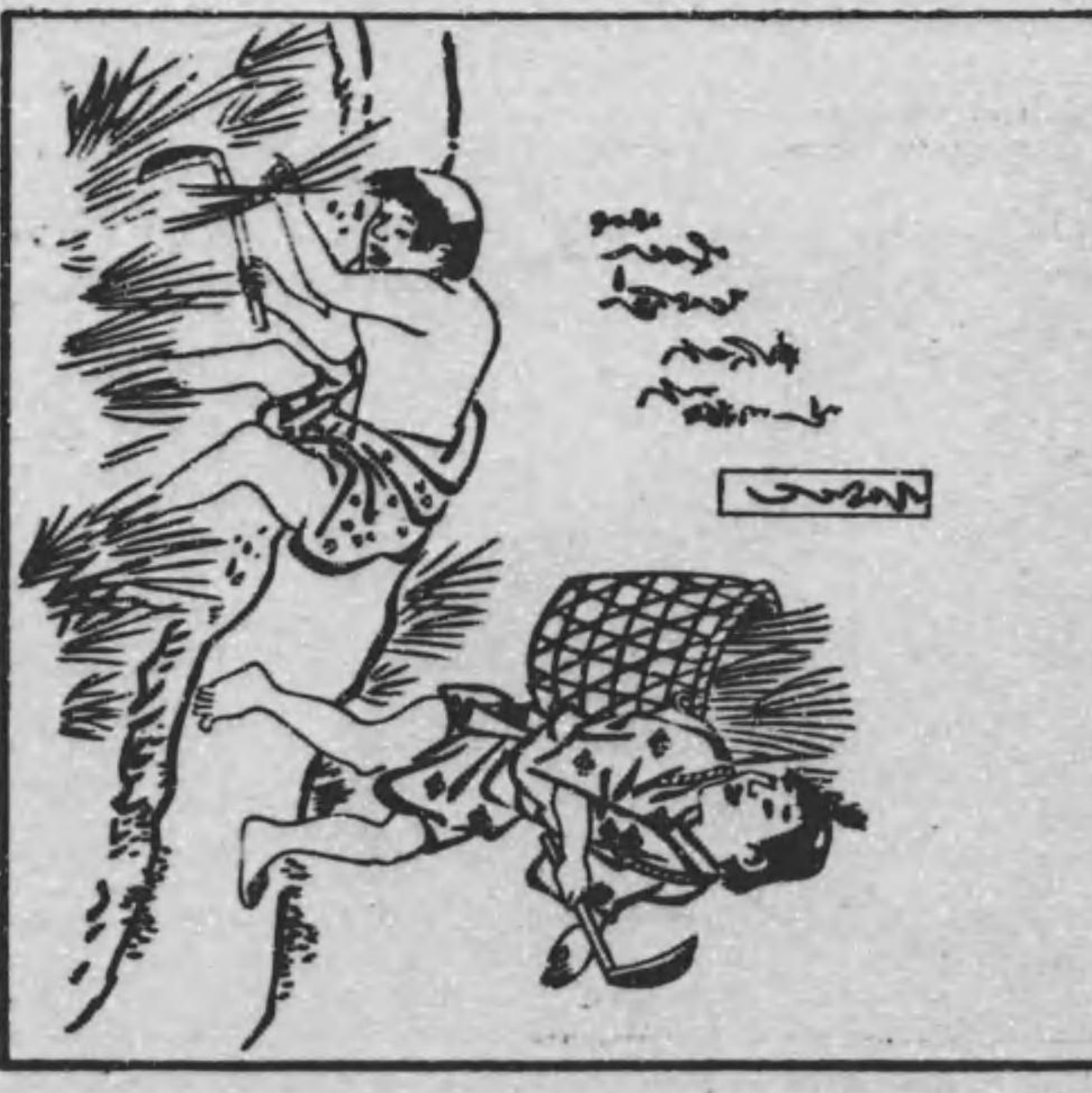


此の世に  
 何事も  
 成るに  
 由りて  
 是の如  
 き事な  
 りと云  
 へば



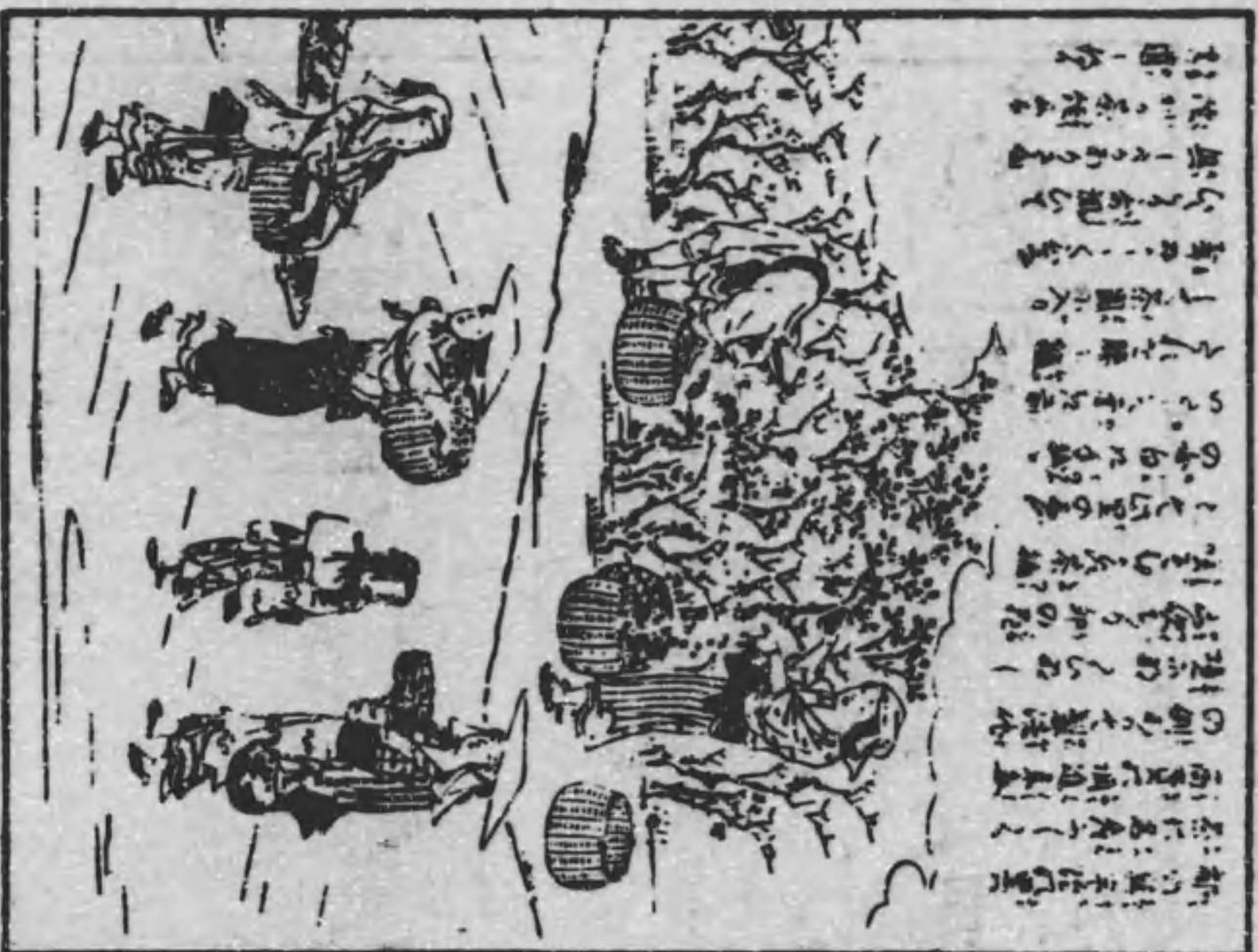
乘 筏

此の世に  
 何事も  
 成るに  
 由りて  
 是の如  
 き事な  
 りと云  
 へば

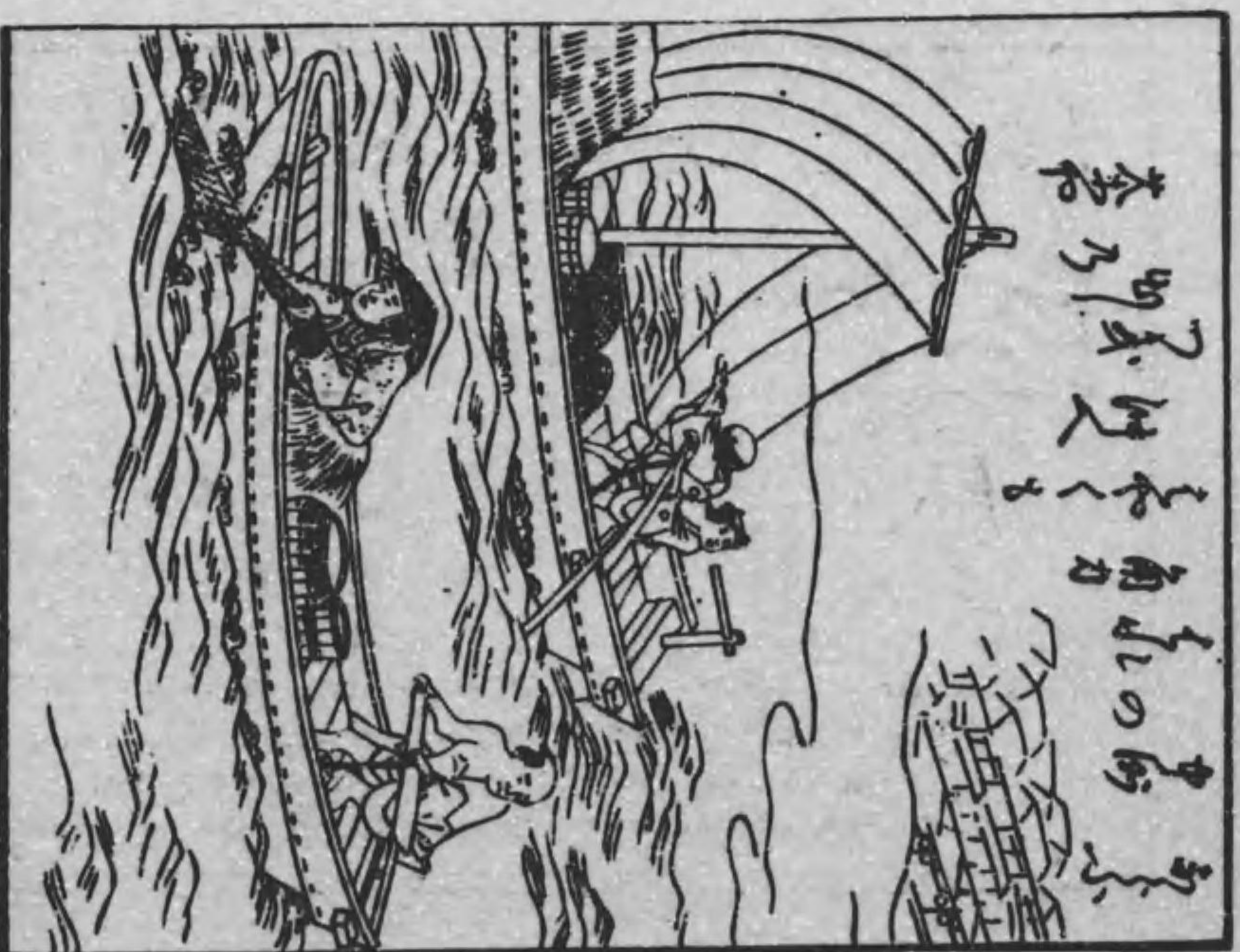








茶の採り



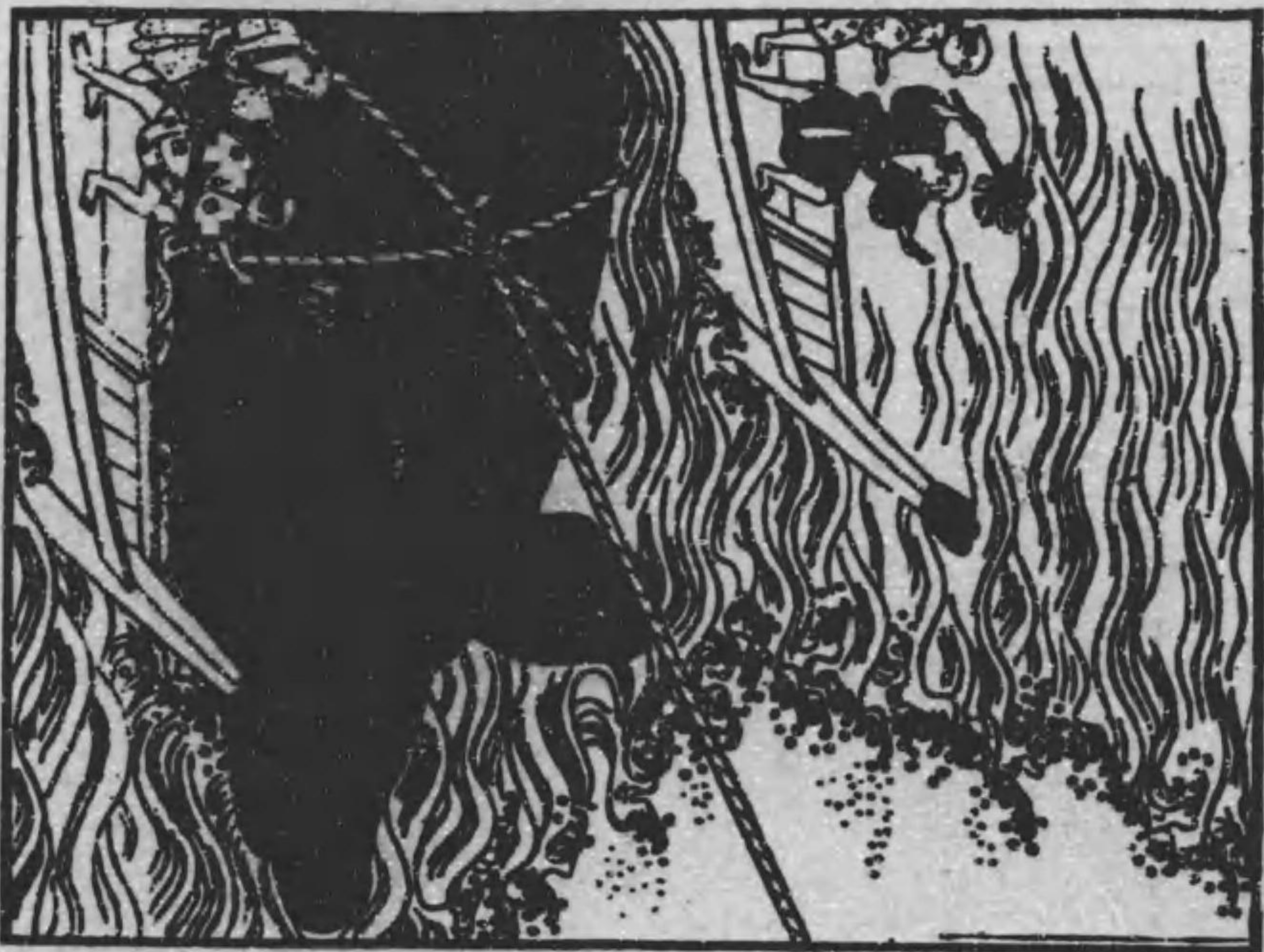
舟の茶



茶園



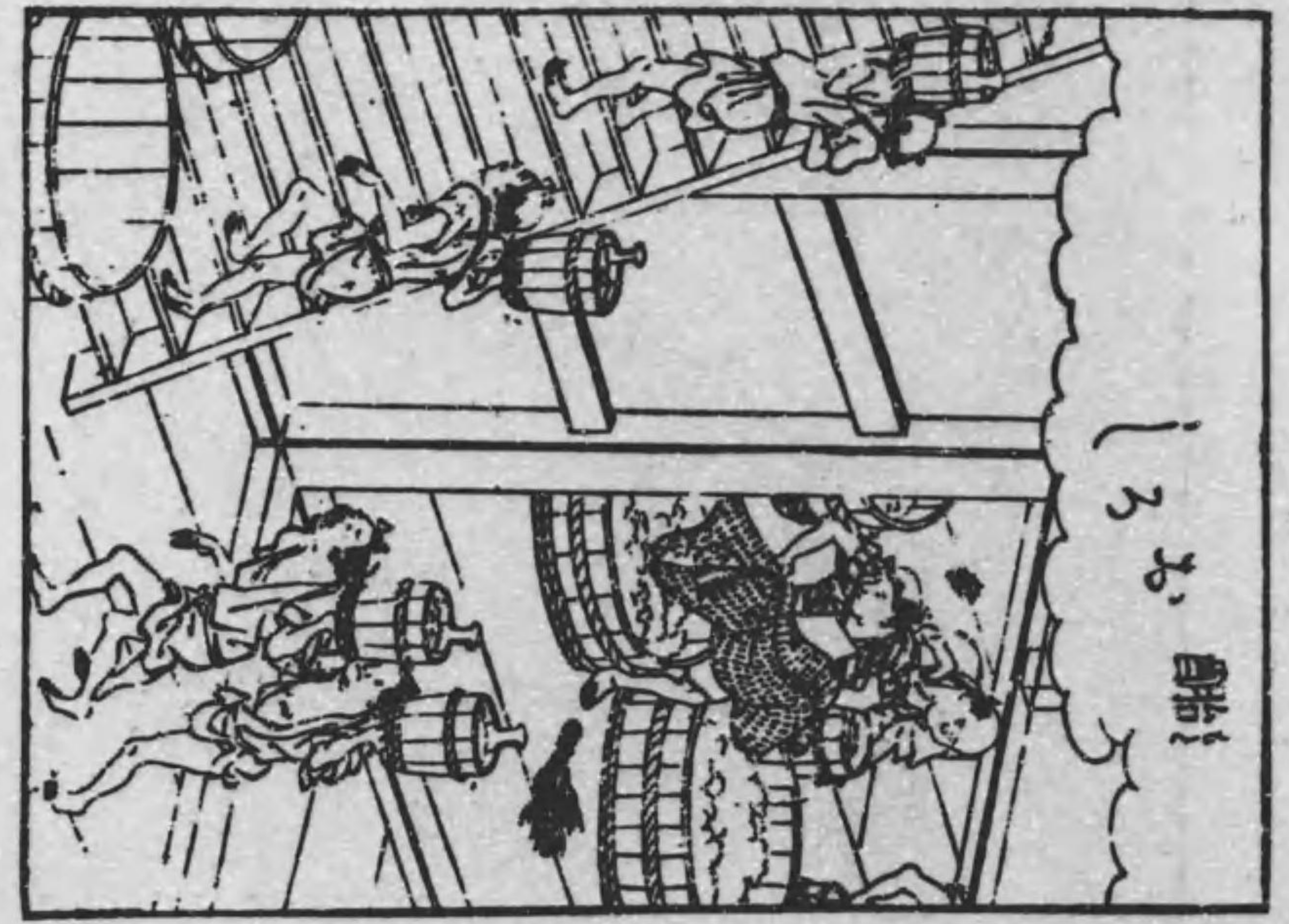
茶の採り、茶園に、茶樹を、剪る、茶葉を、摘み、茶葉を、揉む、茶葉を、炒る、茶葉を、焙じ、茶葉を、篩ひ、茶葉を、包装、茶葉を、運ぶ、茶葉を、売る、茶葉を、飲む。



きひ鮎

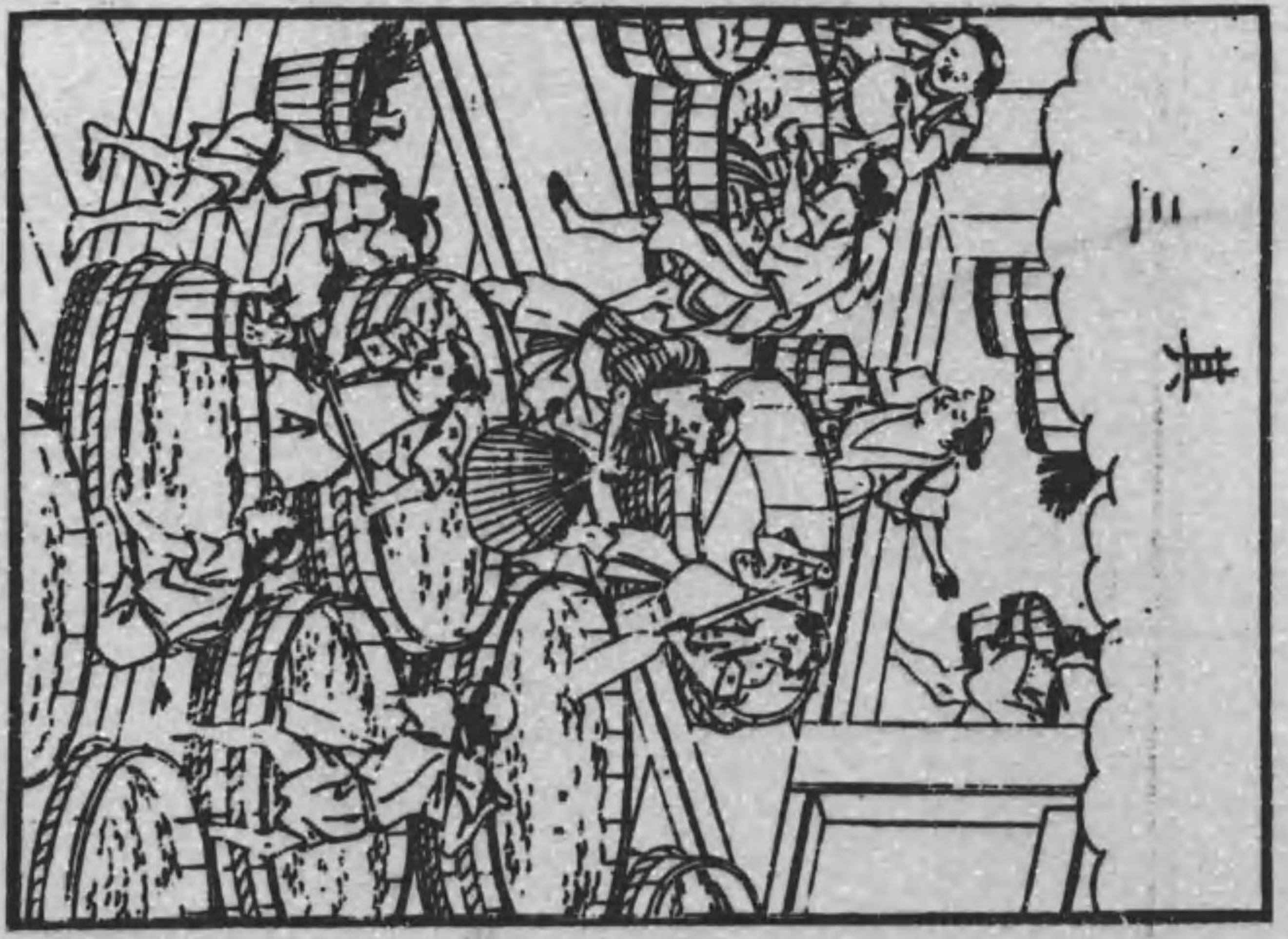


船中にて  
 船長は  
 船員に  
 命を  
 懸けて  
 船を  
 導く  
 船員は  
 船長に  
 従って  
 船を  
 導く



しるお鮎

かぐつ酒



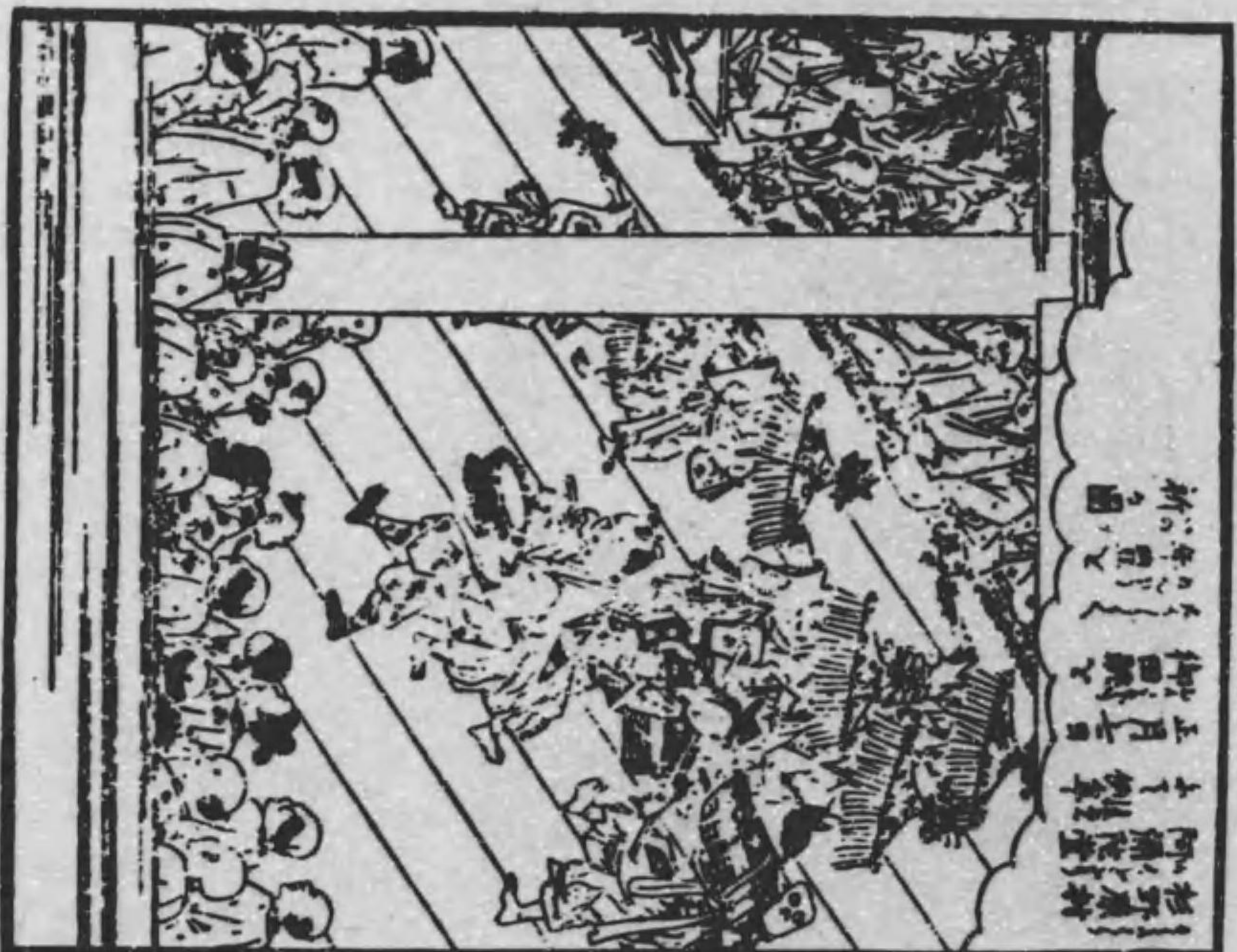
三其



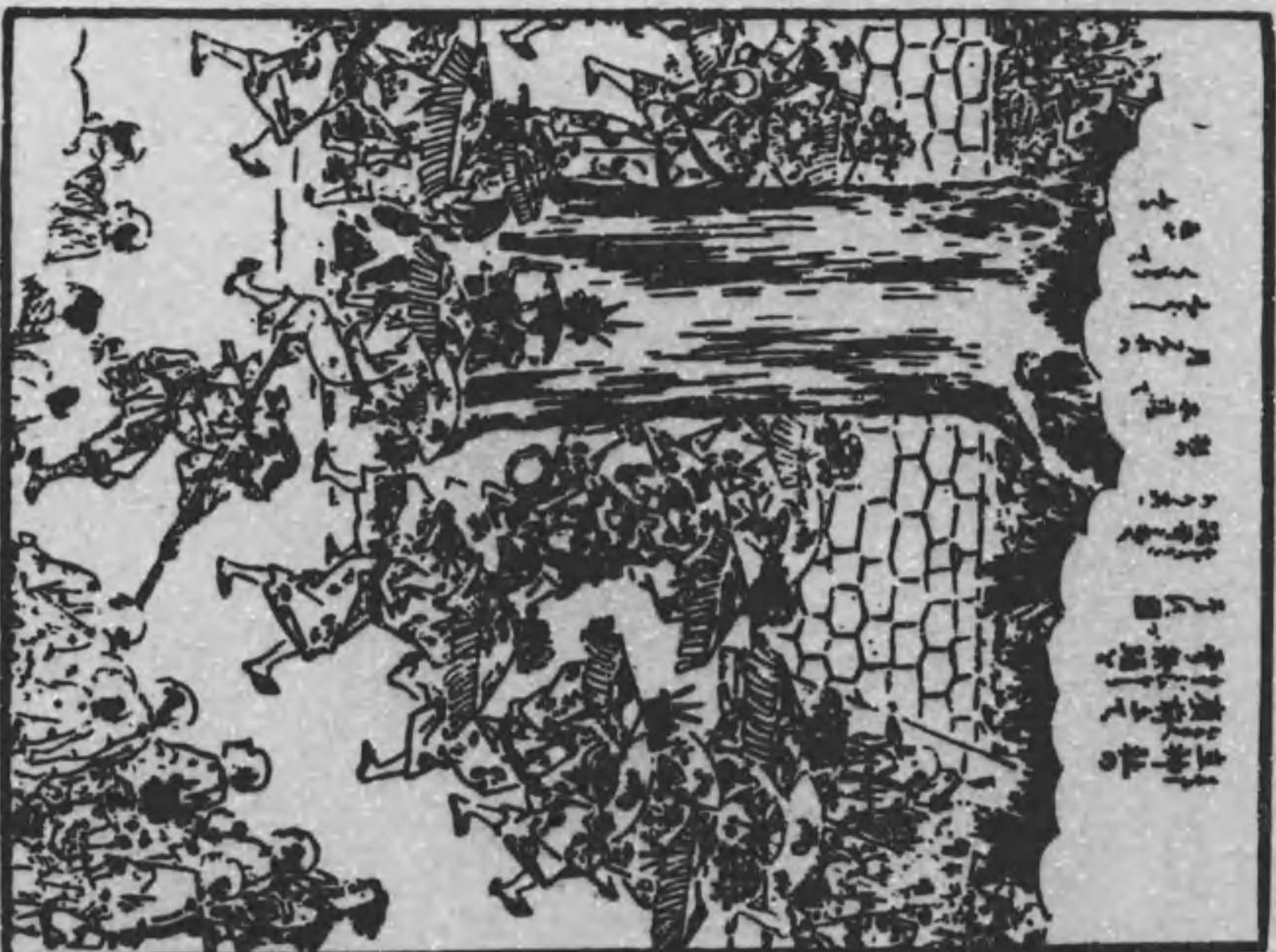
隔ヨリキコ



源十郎



りどを田鶴



りどを乞雨

# 神奥渡御行列の唄

(宮崎神宮)

採譜 藤井清水

(ゆるく)

エ - - - - - 瀬田 - -

- - の - - - か - - - ら - - -

は し オイセ から - - - - -

- - - か - - - - - ね - - - - - ぎ -

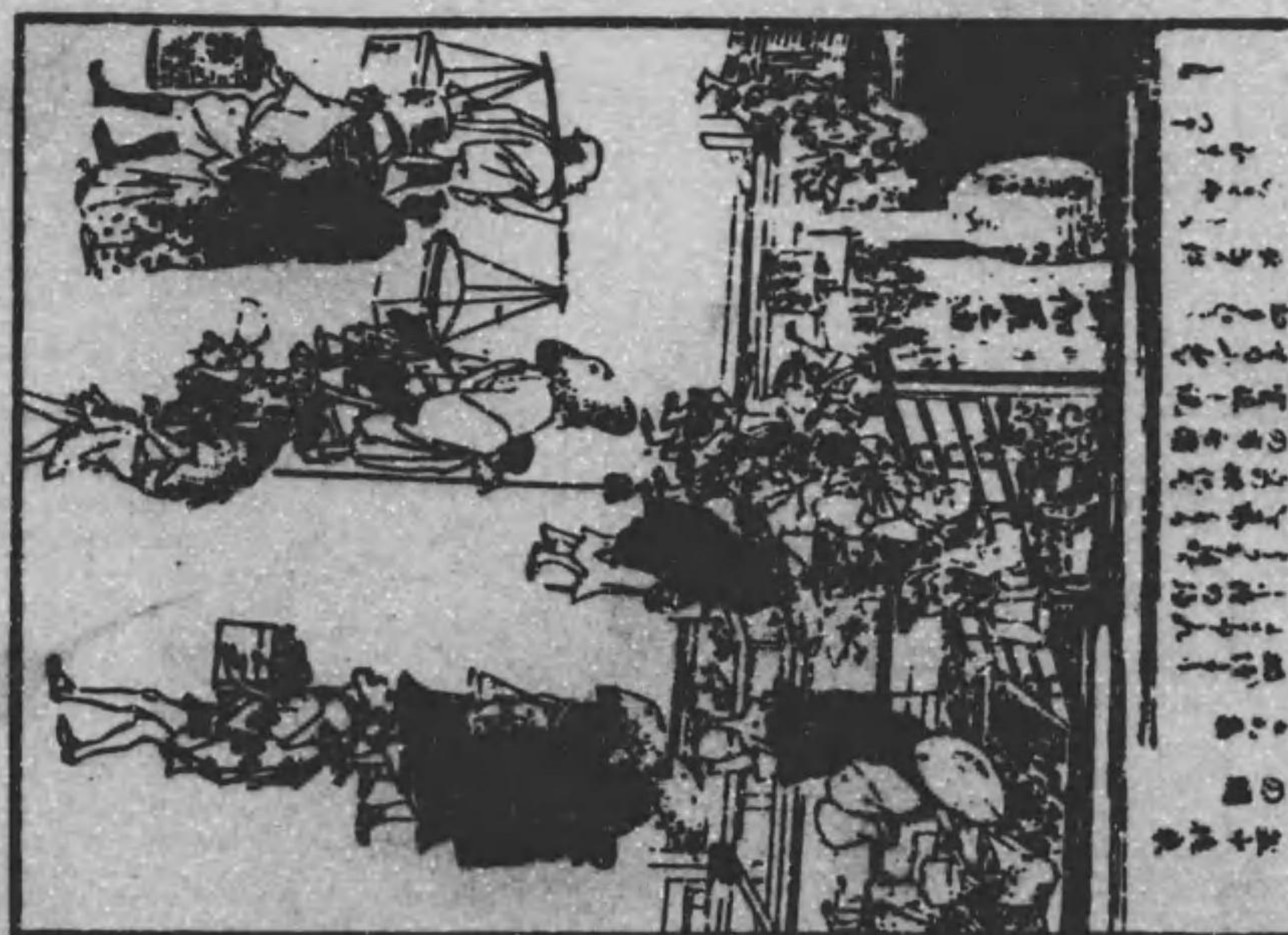
ほ - し - - - ハ - - - セ オイセ

みづ - - - - - に - - - - - ら つ - - -

る - - - - - は - - - ソ - - - レ - - - ハ ぜ -

ぜ ぜ の - - - し - - - - - ろ

歌盆の戸江



祭禮の囃子

採譜 藤井清永

[甲] (稍や速く・威勢よく)

[乙] (速く)

[丙] (ゆるく・具強に)

[丁]

[戊] (ゆるく)

(漸次速く)

# 白石島盆踊歌

♩=80位

藤井清水採譜

(一同)

音頭さま - 音頭さま ハーエヘエ

(一同)

イヤ 出したワ 出したワ - さあ よい - さて

(一同)

ゆるさ - せ - た - せ - へイヤ ヨホイ ヨホイ

(一同)

ヨイヤナ しかには - もみぢや - やなぎ - に  
ひとは - いらだい - 名はま - つ

(一同)

つばめ [アツレナイ] こひに - いつはり けい -  
だいの こひの - つかさは みや -

(一同)

せ - い - に - か - ね [イヤ ヨホイ ヨホイ ヨイヤ  
こ - の - ま - ら - で

(一同)

ナ) その名 - よろづや - すけろ - く と云ふ

(一同)

て [アツレナイ] を - と こ - じま - ん - のホホエ

(一同)

エマ - ヨホホハア ドツコイ ドツコイ や - り

(一同)

ーば なアアアアアハハアアー レイヤ

(一同)

ヨホイ ヨホイ ヨイヤナ のぼす - じ -  
きりやう - より

(一同)

ろは - それし - まばら の [アツレナイ] 遊 - 女  
かも - 名はあ - げまき と きく に

(一同)

- なれども なさ - け - が - ふ - かい [イヤ  
- すけろく 少 - 將 - さ - ま の

(一同)

ヨホイ ヨホイ ヨイヤナ) か く ど - なれ

(一同)

ども - まよひ - はひと つ [アツレナイ] ちうで

(一同)

- しまば - ら - へ - ナ - い - こ - ん - ざ

(一同)

も - のよ - さハイ - タ - タ - ラ ヨ - ツ -

(一同)

ホイヤ ツツヤ 音頭さま - 音頭さま

【備考】「聞くに助六少将さまの」以下の歌詞は楽譜解説に記す  
その後「覚悟すれども」となる

# 田 植 歌

おろし  
少し早く

広島縣新庄高等女學校教諭  
井手口ツル子氏採譜



(さんばい)

エウタイハジメシマヅサニ  
またづなよりかけいまさん  
エニシキベカマヂイマサニ



バ イラ マ イラショウ  
ば いが の いれた  
バ イガ ノ ラレタ



甲乙如

ヤハレマヅサニ  
やはれいまさん  
ヤハレイマサニ



バ イラ マ イラショウ  
ば いが の られた  
バ イガ ノ ラレタ



(さんばい)

エエマヅサニ  
ええいまさん  
エエイマサニ

ゆり歌 親歌



(さんばい)

さんばいはやれどちか



らごさるみやはらから

子歌



甲乙如 みやはらからやれあしげ



のこんまにたづなよりかけ

親歌



(さんばい)

イヤサンバインノゴザルマラ



ツユラコガワケータノ

子歌



甲乙如

ニシキノキヤハンレータ



アヤノコガタキータノ



# 田の草採りの唄

(宮崎縣東臼杵郡)

(ゆるやかに)

藤井清水採譜



さんさ - おしまど - - は [ハ エ



--- ニニ ニ ~~~ ~ ---] さ ち さ が -



ね [ニ ~--- ニ ~ ニ ~~~] ま --- に



な つ - の [\*\*\*] よ - - - で - さ



[ア ハハ ア] よ [\*\*] し - [ヒ --- イ ヒ イ ヒ ヒ]



も [ホ ン \* \*] が - - ん - る

# 田植唄

(廣島縣安藝郡)

(ゆったりと)

藤井清水採譜



しんがえ ばばさん やいたもち - - すきで



- ゆんべここ - のつけ - さ - な - なつ -



しんがえ - - ゆんべここ のつ おほ - くは



な い が - けさの なな - つ が



し - く - す - ぎ た - しんがえ - - -

初摺り唄

(佐賀縣鹿島郡)

藤井清水採譜

(素朴に)

ひすめ 千人もつても - なかやまへん に。  
 や - する - - な あさは めこするめこする  
 - - まち - く だり - - #1  
 こんやのもみすり ど - め 加勢せぬ もの は 。  
 ひねにょく よく せわ - が ある #1 ナ ヲ ジ。

初摺り唄

(長野縣下高井郡)

藤井清水採譜

(成勢よく)

するす ひくに - はかたて がいらぬ---  
 (註記参照)  
 あねさ ちちで - もにぎ ら せろ ショト

雨乞踊 (岐阜縣羽島郡)

あまごひ かけたに あめをく れ - -  
 あまごひ かけたに - あめをく - れ  
 デンゴコタン デンゴコタン デンゴコタン デンカチカチ エッソッ ♪  
 (太鼓の織を叩く音)

# 槽 攪 き 唄

(長野縣・下高井郡)

藤井清水採譜

2 の -- や ぶ -- く -- -- --  
 ら -- -- は -- -- め だ た い  
 ぶ -- く -- -- -- ら -- (コ ラ)  
 2 が -- -- む さ -- り -- -- --  
 ま -- -- ど -- -- (マ レ) ゼ じ  
 す -- だ -- -- -- れ --

# 米 搗 歌

曲切れよく (M.M. ♩=80位)

藤井清水採譜

= こ じ ゃ こ め つ き み な - め - ん -  
 ど ろ - か - □ と き を 知 ら ぬ か  
 う た は - - - ぬ か - □ -

序

藝術や學問は、其のどの部門でも辭典を必要としないものはないが、我が民謡の辭典は今まで世に出なかつた。それは民謡の學術的研究の遅々たる爲めであつた。民謡は長い間、單に歌ふことの喜び、聞くことの喜びを専らとして、時と共に亡びゆく歌の文句を惜しんで、これを書きとめて後世に残すといふことさへ、餘り古くからは行はれなかつたらしい。よし書残した人があつたとしても、不幸にして今に傳はるのが稀なのである。

明治以降、雜誌、風俗畫報、日本歌謡類聚、但謡集、但謡集拾遺、雜誌、郷土研究、雜誌、民俗藝術、日本歌謡集成等々は、續々と廣い範圍に亘つて蒐集に努め、別に一縣一郡の民謡集も近年ポツ／＼と世に出るやうになつた。かくて古民謡の蒐集は、次第に先きへ／＼と進み出る事が出来た。こゝに於て一方、これを整理検討する必要が漸くに生れて來た。本書は實にその機運に導かれて、自然に世に出て來たので、單に私が編纂者の立場に立つたに過ぎぬと見るべきであらう。

民謡は無數に亡びたと云へ、なほ無數に現存し、且つ無數に増加しつゝある。これを一個人が洩れなく見聞することは不可能事である。従つて本書は記載の誤謬も頗る多いであらうと共に、記載洩れは無數無限であるとして見て差支へない。これは一方やむを得ぬ事なので、追つて補遺一卷をまとめた。然しともかく本書は日本の郷土舞踊及び民謡の大半は收め得たと信じて、敢て過言ではあ

炭坑唄(撰奏節)  
(福岡縣田川郡)

藤井清水採譜

(快速に)

かはら だけから みゑる - せば

伊 田の - - - たて こが

ましゝ - - - めん ろくじ - - -

さがり - - - のさま ちーん - が ケイロに (cage)

もたれて - しあ ん - が - ほ

るまいと思ふ。  
なほ本書の出版に就いては、年來の舊知壬生書院富永董氏を煩はす事甚大であつた。こゝに謝意を表しておきたい。

昭和十年十一月

小寺 融吉

### 編纂おぼえ書

- 一、本書は〔本文〕〔附録〕〔索引〕とより成り、これに繪畫と樂譜を加へた。
- 二、〔本文〕に收めた民謡は、地理的には沖繩縣を除いた三府四十二縣に亙り、北海道はアイヌ以外の民謡を採つた。沖繩を除いたのは、沖繩の古い言葉は内地人には外國語同様に難解であり、従つて一字一句にも註釋を必要とし、且つ特殊の歴史や風俗を説かなければならぬ事と、本書の編者の成し得ざる事とから、これを省く事にした。但、古くより鹿兒島に行はれた琉球人ぶし、鹿兒島の館の類は加へた。アイヌの民謡を除いたのも同じ理由からである。  
年代的には最近の新作より、かなり古い時代のものまで收めた。但、最近の新作は無限にあつて、これを網羅する事は不可能なので、手許に材料のあるだけを探つた。新作民謡の生命は、長いも短いもあるが、本書としては目に觸れたものは、なるべく收める方針を採つた。古い時代のもものは、現存の民謡に直接の關係の多いものゝみを選んだ。  
なほ〔本文〕には、音楽上、舞踊上の術語も出來得る限り收めた。郷土童謡は便宜上、一、二より記し得なかつたが、他日補遺一卷を出版の時に、是非收めたいと思つてゐる。郷土童謡は、それに伴ふ遊戯や風俗もあはせて記入すべきなので、今回の間には合はなかつたのである。
- 三、〔本文〕は、一般の辭書に從ひ五十音順とし、正式の假字遣に據らず、檢出に便ならしめる爲め寫音假

字を用ゐる清音濁音半濁音の區別なく頭音順に配列した。また、クワ、グワはカの部に、ヂ、ヅはシ、スの部に、キ、ラはイ、オの部に含め、カウ、ケウ、セウ、クウ、テウ、ワウ等々はコウ、キウ、ソウ、シウ、トウ、チウ、ウ、オウの如くしてそれぞれ其の頭音の部に収めた。即ち

- アヒ、ヅ。 — 會津 …………… アイ、ズ。
- アハ、ラ、ドリ — 阿波藩 …………… アワ、オ、ドリ
- ヂ、ヂウ、ソン — 地藏尊 …………… ジョ、ゾウ、ソン
- アチ、ガ、マル — 青ヶ丸 …………… アオ、ガ、マル
- キタ、ウ、マ、ヒ — 祈禱舞 …………… キト、ウ、マイ
- ニワ、ウ、マ、ヒ — 仁王舞 …………… ニオ、ウ、マイ

四、〔附録〕は本文の一項目に記すには長過ぎるものを載せた。その中には嘗て雑誌に発表したもので、今度書直したのものもある。

五、〔索引〕は五十音順に依る「總索引」と「縣別索引」及び「事物索引」に分けた。但索引は本文にのみ限り、附録の分は見合せた。

〔縣別索引〕には市と郡の名を一々附けたが、附けないものもある。それは宮城縣のサンサ時雨の如く縣全體に行はれるもの及び町村の名が判然しないものゝ二つである。

〔事物索引〕は種類が稍不足のやうだが、今回はこれで御寛恕を乞ひたい。

六、繪畫は、日本青年館より借用の書及び手許の書より選んだ。樂譜は、藤井清水氏の採譜による。日本青年館及び藤井氏に謝意を表す。

### 目次

#### 本文

ア	……………	三	ス	……………	一四
イ	……………	五	セ	……………	一五
ウ	……………	七	ソ	……………	一六
エ	……………	九	タ	……………	一七
オ	……………	一〇	チ	……………	一八
カ	……………	一一	ツ	……………	一九
キ	……………	一二	テ	……………	二〇
ク	……………	一三	ト	……………	二一
ケ	……………	一四	ナ	……………	二二
コ	……………	一五	ニ	……………	二三
サ	……………	一六	ネ	……………	二四
シ	……………	一七	ヌ	……………	二五

フ	.....	二二二
ヘ	.....	二二七
ホ	.....	二二八
マ	.....	二三三
ミ	.....	二三三
ム	.....	二四八
メ	.....	二五二
モ	.....	二五三
ヤ	.....	二五三
ユ	.....	二六二
ヨ	.....	二六三
ラ	.....	二六九
リ	.....	二六九
レ	.....	二七一
ロ	.....	二七一
ワ	.....	二七二

附 録

民謡とは何か	.....	三
民謡の元唄と替唄	.....	五
小町踊と掛踊	.....	七
伊勢踊から伊勢音頭へ	.....	二二
樂譜解説	.....	一七
囃子言葉一覧表	.....	二〇
索 引		
總 索 引	.....	三
縣別索引	.....	三
關東地方	.....	三
東北地方	.....	三
中部地方	.....	三
近畿地方	.....	三

中國地方	.....	四六
四國地方	.....	四九
九州地方(沖縄縣省略)	.....	五〇
北海道	.....	五〇
事物索引	.....	五五
祝言職の歌	.....	五五
家の歌	.....	五五
白の歌	.....	五五
松坂	.....	五五
まだら	.....	五五
節季の歌	.....	五五
祝儀一般(前掲以外)	.....	五六
馬の歌	.....	五七
牛の歌	.....	五七
鯨の歌	.....	五七
茶の歌	.....	五七
機織の歌	.....	五八

獅子舞の歌	.....	五八
酒の歌	.....	五八
盆歌	.....	五八
田植歌	.....	五八
雨乞	.....	五九
はねそ	.....	五九
追分	.....	六〇
おぼこ	.....	六〇
おけさ	.....	六〇
音楽上の言葉	.....	六〇
舞踊上の言葉	.....	六〇
有名文句	.....	六〇
民謡書目	.....	六〇

日本民謡辭典

押 繪

- 一 田打と種まき(大和耕作繪抄―石河流宜書)
- 二 田植(同―同)
- 三 稻刈(同―同)
- 四 稻こき(同―同)
- 五 摺白ひき(同―同)
- 六 綿打と糸とり(和國百女―斐川師宜書)
- 七 機織(大和耕作繪抄―石河流宜書)
- 八 碇打(和國百女―斐川師宜書)
- 九 草刈(和國諸職繪集―斐川師宜書)
- 一〇 杖乘(同―同)
- 一一 餅搗(大和耕作繪抄―石河流宜書)
- 一二 白すり(繪本操節草―鈴木春信書)
- 一三 字治の茶つみ(都名所圖會卷之五)
- 一四 舟唄(繪本駿河舞―喜多川歌麿書)
- 一五 鯛鯛(日本山海名物圖會五)
- 一六 鯨ひき(同)
- 一七 酒つくり(山海名産圖會一)

樂 譜

- 一八 コヤリコ踊(二十四夜順拜圖會卷之三篇中之部)
- 一九 雨乞をどり(紀伊國名所圖會)
- 二〇 御田をどり(同)
- 二一 江戸の盆歌(東都歲事記卷之三秋之部)
- 一 神興渡御の歌(宮崎縣宮崎神宮)
- 二 祭禮囃子(廣島縣安藝郡)
- 三 白石島盆踊歌(岡山縣小田郡)
- 四 田植歌の一(廣島縣山縣郡)
- 五 田植歌の二(廣島縣安藝郡)
- 六 田の草採りの歌(宮崎縣東臼杵郡)
- 七 雨乞歌(岐阜縣羽島郡)
- 八 梨酒歌の一(佐賀縣杵島郡)
- 九 梨酒歌の二(長野縣下高井郡)
- 一〇 米搗歌(和歌山縣東牟婁郡)
- 一一 櫓かき歌(長野縣下高井郡)
- 一二 炭坑歌(關西縣田川郡)





ア

アイカワオンド相川音頭 佐渡の盆踊歌で  
佐渡音頭の中の一つ。御前音頭ともいふ。寛  
文頃が始まり當時は専ら心中物が多く、天保  
頃より現在の調平調が主としたといふ。さて

アイカワオンド相川音頭 佐渡の盆踊歌で  
佐渡音頭の中の一つ。御前音頭ともいふ。寛  
文頃が始まり當時は専ら心中物が多く、天保  
頃より現在の調平調が主としたといふ。さて



アイカワオンド相川音頭 佐渡相川町の唄。  
「止せばよいのに舌切雀、ちよいと嘗めたが  
身のつまり。」佐渡で餅搗きや、越後でなら  
ず、佐渡と越後はひとねばり。

アイカワアイノ

アイコナシ 藍こなし 藍の栽培で名高い徳  
島縣美馬郡に歌はれる。「俚語集」に「鳥は  
バラ／＼夜はほの／＼と、明けりや御寺の鐘  
が鳴るシヨウガエ」。「八栗八島の、ノーホイ  
アイ、大段小段、根来白峯ちこが歌シヨウガ  
エ」。「民謡の旅」には右と異り「椋の三度笠  
ヤレサノ二匁五分、ハイ／＼、それは紐付け  
ヤレサノ三匁、ヤーヤハイハイ」と。

アイズオンド 會津音頭 福島縣會津地方の  
うた。鳴山美雪歌、杵屋彌壽彦曲、峰の白雪  
ほの／＼見えて、山は髯梯、裾野がかすむ、  
芹菜つむ子の姉さん冠り、どれが姉やら妹や  
ら、サア、ヨイ／＼／＼ヤサ。

アイズオンド 會津音頭 福島縣會津地方の  
うた。鳴山美雪歌、杵屋彌壽彦曲、峰の白雪  
ほの／＼見えて、山は髯梯、裾野がかすむ、  
芹菜つむ子の姉さん冠り、どれが姉やら妹や  
ら、サア、ヨイ／＼／＼ヤサ。

庭の三疊松に、鶴が黄金の菓をかける、十二  
の卵を生みなして、十二一度に育てあげ、母  
もろともに立つ時は、銀の盃頂いて、長柄の  
銚子に泉酒、ふけつづの貝を肴とし、この酒頂  
戴致すなら、御壽命永へと末繁昌の如き長  
編とある。此の歌は琉球の鶯の鳥ぶしなぞと  
同じ事を歌った古詩で、ふけつづの貝とは九穴  
の不老貝の事ださうである。

アイノウタ 合の唄 盆踊の時に音頭に構は  
ず踊子が齊唱する短い歌。上州で「搦た／＼  
上踊子が搦た」と云ふ如し。「島根民謡」に、  
「山伏さんの法螺の貝、ぶつと吹出す悪魔を  
拂ふと云ふおやないか、悪魔拂へば此の寺繁  
昌」等を合の歌といふのもそれらしい。或は  
元來は音頭の歌の間のつなぎの意味か。

アイノウタ 合の唄 盆踊の時に音頭に構は  
ず踊子が齊唱する短い歌。上州で「搦た／＼  
上踊子が搦た」と云ふ如し。「島根民謡」に、  
「山伏さんの法螺の貝、ぶつと吹出す悪魔を  
拂ふと云ふおやないか、悪魔拂へば此の寺繁  
昌」等を合の歌といふのもそれらしい。或は  
元來は音頭の歌の間のつなぎの意味か。

は、金剛界の曼荼羅と、胎藏界の曼荼羅に、血脈一つに珠數一過、これが其途の友となる。後に木蘭子の三味線をあしらふ事、(時曲古今大全)に見える。また伊勢の間の山に限らずこの唄を唄つて門口に立つ風習は、近松の「夕霧阿波鳴門」にも見える。

アイブーアサ 相州の三浦半島の鴨居地方に歌はれる「アイ吹け上川風、あがれよすだれ、中のお客の顔見たや」。

アイヤブーアサ あい、あいは嗚子詞。東北各地に行はる。仙臺では祝儀祝宴などの際、さんざ時雨に引續き唄はれる。「アイヤブーアサ、アイヤ茶屋のかい、まで(儉約)なよで粗相だやー、今朝もやー、かんかん、洗はねえで掛けたやー、今殆ど絶えたといふ。宮城郡大澤村にては、節・大鼓入りで酒宴に唄るともいふ。アイヤ茶屋では今朝からお客、アイヤ入り込む神の「東北の民謡」に、青森縣のアイヤ節を記して云ふ。アイヤぶしは、酒盛、あいや節、甚句、道中ぶし、てうしぶしの五つより成るが、終りの二つが早く亡び、三つとなつた。海より此國に入り、故郷より附近各地に流行した。酒盛は古くオン

ドおしともいひ、二上り、進ひたや見たや、花、春は餅で一盛り。アイヤぶしは二上りで「アイヤエ、アイヤ、イヤソレ、煙草の煙、次第々々に薄くなる、アイヤエ、アイヤ長の字、長いと唄むが、なぜに吉の字よしと唄む、「ハローイテア、」又は「ヨイサーヨイサー」とはやす。甚句は近年八戸甚句といはれる本國子もの、響せて下んせ戻りの節は、一夜なりとも鼓浦へ、「小夜の中山ひとりで寂し、一つ音を出せ時鳥、ハットサイサイ」と唄す。道中ぶしは三下り、道中の、先づ登る、上り下りの出掛茶屋、「山やま見れば、雲のエイ掛らぬ山もない。てうしぶしは三下り、伊勢のはしりがね、二十五は限り、今年アサ、あど四年」。

アイヤブーアサ あえやぶし 一名おけさぶし。秋田縣仙北地方の唄。東北各地のアイヤぶしの一つか。「アエヤアエ、船は瀬に住む、鳥は木にとまる、人は情けの下に住む」。

アイヤブーアサ 伊豆新島の盆踊の一つ。青ヶ丸は舟の名か。「ハンヤ我が腹よく、ハ

は唄、泥水のもでも腰は腰、身には菰着て纏帯しても、心にござぬ薄の酒。また、春は櫻の千秋公園、夏は兼持男鹿島よ、秋は田澤か十和田の紅葉、冬は大湯か大湯へ。また、前唄・本唄・後唄と三つに分けて歌ふ事もある。アキオボコ、秋田おぼこ 一に神代おぼことも、仙北おぼことも。共に地名を冠す。山形のおぼこに對して、これは田澤湖附近に發生したものと云ふ。おぼこナア、何處さ行くうしろの小山コさ花コ折るに、キタサカ、サツサイ、キタサカ、サツサイ。「十七なア、おぼこなど、何して花コなど咲かねアとな、キタサカサツサイ、キタサカ、サツサイ。多ク問答體で、前者には「花コ若どて、こだしコ枕に澤なりに」の答がある。花コは、ほ菜コ、炭コとも唄ふ。「こだしコ枕」は、木の根コ枕とも唄ふ。後者の答に、「咲けば實もなる、咲かねば日蔭の花もみち」のほかに、はじめに「おぼこ何ぼになる、この年くらせば十と七つ」の句もつく。他に「おぼこさせれば、飛白の前垂こちよいとたくた、すてもさないでも、親切誠で耐てられぬ」。「おぼこ心持ア、十五夜のお月様まるえ顔、少し曇る

ンヤ我が腹よく、ハンヤ花の小唄に文進へて云々。「民俗叢書」第二巻第七號に歌詞を記す。

アオボコウター 青森小唄 宮城縣のうた。吉田二郎歌及び曲。體の松島、女松が招く、江戸の高尾の女振り、わたしや小萩よ、宮城野育ち、陽にや月影、蟲の聲。「ハンヤ」さんさ時雨が降るわいな」。

アオモリコウター 青森小唄 青森市のうた。小倉三郎歌、奥山貞吉曲。「春は青知鳥の杜からバツと、開れや合浦の花さかり、サツサ鏡くよタクシーバスが、ホンニ青森花の唄」。

アカシオンド 白石音頭 兵庫の播州音頭の一つ。吉川音頭に次いで行はれる。歌詞は「民俗叢書」第一巻第八號に多く記されてゐるが「白石あかいけど、大蔵谷くらい、くらい所にコラ火をととせ、ソラヤットコマカセ、ヨイトマカセ」。

別、石室丸、鼓づくし、勝づくし等のタドクの文句も白石音頭といふものにある。ヤヤッテ、コマカセ。

アカナブーアサ 廣島縣三郷の田舎歌。古調らし。音十七がヤレ掛けたる唄の、ゆすびだれのさ、ゆすびだれなり、早乙

女「ハリヤゆすびだれ、ヤレ掛けたる唄のゆすびだれ」。「民俗叢書」ゆすびだれの意不明ながらシナの良き事であらう。

アガサヤレ上らしやれ 語の意は飲みなされ。山形縣最上郡安樂城村大澤に歌はれ、一に大澤ぶし、あがらしやれ、ねえなや、お前そげたや、お前あがらねば、氣がすまぬ」。

「飲まば飲め、二斗入の白で、それで足らねば大湯で飲め」。

「酒を厭だか、お酌取り厭だか、お酌いやなら代ります。また、大澤三千石、居たくなえちやなえども、コエチヤ、夜飲夜中でナーとこまる」。

「東北の民謡」アガサヤレ上り 廣島縣地方の田舎で午後二時三時頃一度休息する時の歌。「勇め早乙女、勇まにや御酒が、出こぬよ、」

「なんぼ勇んでも出こぬはコレ」。「田酒上」と歌ふ。ヤウエウタ

アガリハカ上り哇 田植の最後の場合をいふ。ハカとは畔の意。ヤウエウタ

アキオボイワケ 秋田浪分 秋田地方の追分。「浮くも沈むも時世と時節キタサノサ、どうせ私は水鏡葉、泥水鏡葉はしてこそ居れど、立つる操は一筋に」。

「大海の水を飲んでも歸

ちゆど、會えたさ見たさの影がさす」。「おぼこ心持ア、池の端の葉のたまり水、少し曇るちゆど、ころ／＼ころ／＼、そま落つる」。

ユイモラスな唄の振もついてゐる。なほ今の秋田おぼこは佐藤貞子といふ美音の婦人が従来のを改めたので、秋田の人も現在のを以て唄としてゐる。貞子の歌はレコードで聞く世間に知られてゐる。

アキオワラー 秋田おわら オワラの唄の一つ。秋田縣に行はれる。野越え山越え深山越え、あの山越えれば紅葉山、紅葉の下には鹿が居る、鹿がホロ／＼泣いてゐる、なぜに鹿さん泣いてゐる、私の泣くのは外ぢやない、遙か向うの木の下に、六尺あまりの狩人が、五尺二寸の鏡筒かつぎ、前に赤毛の犬つれて、後に黒毛の犬つれて、あれに打たれて死んだなら、後に残りし葉や子は、どうして其日を惹るやら、思へば涙がオワラ先きに出る」。

アキオオンド 秋田音頭 縣下の盆唄。早口心地を唄ふ。之を何故に音頭と稱するかは不明だが、常に即興的新作を試みて拍腹絶倒せしめる。民間に行はれるもの更に變化して花柳界にも行はれる。「ヤイトセ、ヨイヤナ、

五

キツカサツサドシ、ドツコイ〜ドンドロ  
コイナ〜式の囃子言葉あつて唄になる。また  
「いづれ是より御免願ひ音頭は無駄を云ふ。  
ソレ〜、皆様お障りあるけれども、サツサ  
と出しかける」などの前口上もある。「秋田名  
物、八森、ハタハタ、男鹿では男鹿ぶりコ、ハ  
アツレソレ能代春慶、槍山納豆、大館曲わッ  
は、ハタ〜は鯛魚と記す魚。「厭だ〜  
は、をなごの癖だよ、誰だら引張つて見れ、  
二寸も引張れば五尺も寄つて来て、それでも  
厭んだから。「マカコフ沈没、ステセル降服  
今度はクロバトキ、東北男児に羽ぶし折ら  
れて、ハルピンでテテツポ〜。踊の振に柔道  
の手があるといふ話も傳はるが、如何なもの  
か。

アキタカワバタコウター秋田川反小唄 秋田  
市のうた。安藤和風歌、大島駒太郎曲。秋田  
よいとこ、お米がよくて、お米で作る酒もよ  
い、ヨイ〜トナノナ。  
アキタコウター秋田小唄 秋田縣のうた。小  
島後藤歌、大島駒太郎曲。日本海からチト抜  
出して、山は島海秋田富士、お山晴れ〜ば氣  
も晴れる」。

アキタジヤン秋田自慢 秋田のうた。花園  
青陽歌、中山晋平曲。春にやお城のナア、春  
にやお城の櫻の花に、バツと心が若返る、ハ  
ヤシヤシ秋田米の國、テサテサテサテ酒の國、  
海と山とのさちの國。なほ同じ人達に供て同  
じ曲節の「酒の秋田」あり、倉に貯する既す  
り唄の、種の子に夜が明けける、秋田米の國  
テサテサテサテ酒の國、汲んで行かんせ一先  
づは」。

つ来て見ても、羽織袴で金しらべ。「今日は  
吉日、日がらもよいし、何かよるづのきを祝  
ひ。「荷方いつくる今月末に、のびて来月二  
日ころ」。荷方は荷をになふ者であらう。一名  
草刈りぶしと云ふ。今日は、一に昔の儀勢唄  
歌として、二に祝儀唄として、三にお山ぶし  
として唄はれる。荷方は新潟かともいふ。東  
北の民謡参照。ヤヤヤヤヤ  
アキタミヨシブシ秋田三吉ぶし 梵天歌、  
やはさぎ節とも云ふ。秋田の民謡。「わたしや  
秋田の三吉の童、人に押負け大きらひ」。伊  
勢へ七たび高野へ入たび、出羽の三吉に月ま  
るり。「太平山の一の鳥居に蛙が登つた、明  
日の天気は雨となる」。節は秋田松坂。秋田市  
の東の太平山に三吉様を祀る。ミヨシ様とも  
サンキチ様ともいふ。これに梵天を奉納する  
時の歌。ヤアキタマツサカ  
アキノター秋の田 鹿兒島縣熊毛郡の豊年唄  
の唄。「秋の田の刈穂の稻を見てからは、一步  
に米が七俵」、その他。【保藤集】  
アタマハライ一葉塵放ひ 凡ての災厄を悪魔  
の所業と見なして踊りつゝ唄ひつゝして、  
家の外、或は村の外に追拂ふこと。その種類

アキタカワバタコウター秋田川反小唄 秋田  
市のうた。安藤和風歌、大島駒太郎曲。秋田  
よいとこ、お米がよくて、お米で作る酒もよ  
い、ヨイ〜トナノナ。  
アキタコウター秋田小唄 秋田縣のうた。小  
島後藤歌、大島駒太郎曲。日本海からチト抜  
出して、山は島海秋田富士、お山晴れ〜ば氣  
も晴れる」。

の。海ぢや大漁、大判小判、網を曳きたびさ  
く〜と、網が取れるぞ、早よ来い〜。  
アサカサ〜唄 下サケツクリノウタ 下タ  
ウエウタ  
アサカサ〜唄 新潟縣西蒲原郡吉田町の  
八月の盆唄は、晝の中に充分に眠つた男女が  
夜になると共に浴衣に花笠の姿で村内各所を  
踊り廻り、深更氏神の境内に来て朝まで踊り  
抜き、吉田の朝唄として名高い。或は朝唄の  
語は古語かも知れぬ。福島縣でも云ふ。  
アサカサ〜唄 新潟二種。共に福  
島縣郡山地方に行はれる。晝は盆唄唄で、宵  
戸に出て見やれ安積の山に、黄金まじりの雲  
がふる。「風の福良にはこりの田面、わしと  
お前は目は赤津」。新は鈴木春太郎歌、藤井清  
水曲、花柳徳之輔唄。朝日昇ればナ、サツテ、  
宇都峯ひかる、西は開盛山、花盛りヨ」の如  
き唄六種。ハヤシ詞は、「あさかよいとこ郡山、  
つきぬ話はたんとある、セナござんしよ、月  
の夜に、ホイサ」。  
アサノデガ〜唄の出がけ 「朝の出がけに出  
て山見れば、雲の勢らぬ山はない」。この文句  
は各地に今も唄はれる。馬子唄、田植唄が始

アキタ〜アサノ



人をアテコスリ、諷刺冷笑する類のものを指すのであらう。  
アトウター後唄 近時、泊分ぶしに前唄・本唄・後唄の組織を作る。追分の一々を見よ。  
ヤオイワケ

アネガイモトノシヤク姉が妹の酌 または妹に酌。此の唄全圖的に行はれる。上の句は「都習ひか、お國の作法か」、又は「港習ひか、お舟の作法か」。下の句は「姉が妹に酌をする」。又は「姉が妹の酌に立つ」。天保年間の「巷談編」の土佐の唄に「豊後の國の習ひかや、姉が妹の酌に出る、豊後の唄を踊るよ」がある。

アネコブシ姉コぶし 秋田の唄。天保より明治に酒宴の席に歌はれたといふ。姉コ山サあんべ、巖コア今盛りだ、酒ヤの本當に良いとこ、一ト腹背負かけて、太郎三太どつちや行つた、白の陰サ隠れた、引きずり出して連れてあべ。アべ、アンべは行かうの義。「東北の民謡」その他。今、仙北郡中川村、西明寺村に残ると。

アネコモチ姉コもさ 鶴巻坂・白岩ぶし・袖の香とも云ひ、秋田縣の歌。名の意は娘に向ひ、お前もと云ふほどらしく、始め慶長の末

より元祿に掛けて、後に文化文政に歌はれたと傳へる。嶺山労働者の歌で、今も踊る時は左足を前に出し、右手でアイゴを押す眞似をするといふ。三十一文字の間答體の歌。姉コもさ誇らば誇れ若いうち、櫻花咲いての後は誰折ろば。「折りたくば尋ねてござれさは雨に、別れるに絲より細く別れます」。「會ひたさよ空飛ぶ鳥に文をやる、この文落してたもな頼みおくれ」。「一代の風切り羽根を落すともこなさんの預り文は落すまい」。また、「白岩の愛宕寺ほどの寺もない、前は川うしろは高い愛宕山」。「東北の民謡」その他。

アネサンナガモチ姉さん長持 ヲシヨウガヲモチノウタ  
アブラシボリノウター油絞りの歌 「全長崎縣歌謡集」に南高来郡の唄を記す。「この矢がさがれば舟はきまると、お舟がきまれば、船頭さんも休んばな」。油を絞るには細長い五六尺の杵(矢)で楳(舟)の蓋を打ち、締めつける(きまる)。締つたら一休みする事をいふ。また、「但馬集」に徳島縣勝浦郡の油絞歌として「油絞がホーエ、大阪女郎見てホーエ、内のかゝ見たらホーエ、千里奥山のホーエ、古い運ち

有するものも多く、播州加東郡上東條の住吉雨は、その經費米百石を要する爲め昔より俗に百石雨と云ふ。廿人の女装した踊子が音頭に合せて踊る。その一つ、忍び踊の一節、何を招くぞ川柳、水の出花を招きする、そさま忍ぶ夜は雨がふる、そさま忍ぶ夜は雨がふる、そさま忍ぶ夜は雨がふる。雨乞踊は年に一定の日にも行に流用する。雨乞踊は年に一定の日にも行ひ、早の時に臨時に行ひもする。古き神事の名残ゆゑ女子は参加せぬのが普通である。三重縣各地のカンコ踊も雨乞に催す事がある。

アマゴイオレオドリ雨乞御禮踊 伊吹山麓の江州坂田郡大原村では、雨乞祈願踊をして願が叶ふ時は、初秋の豊年を迎へて御禮踊をする。参加は男ばかりで、音頭と笛は妻折笠に羽織袴、踊子も同じ笠に大太鼓をつけ、或は鉦を手にして打ちながら踊り、道行。多良川の曲・鳥飛び・御禮本歌・御禮節踊・綾の雨・綾の本歌・徳交しの曲・綾の節・新車・終りの歌・信樂の舞子となる。現存の歌は昔の昔唄らしい。御禮本歌は、「げにや早の物憂さに、見捨て給はぬ恵みにて、雨の数々ありがたや、御禮踊ををどらうよ、打跳む

ヤホーエ」とあるが、右は狂言小唄「人の妻見て」の昔歌である。「但馬集拾遺」の三重縣名賀郡の油絞唄は「油ヤのヤの〜」調の助さん、油足らいて身を絞る」。此の邊では油しめ歌とも云ふ。右の歌は終りを「油足らんで汗たらす」ともいふ。別に「油しめとは名はよいけれど、乞食見たよな、なりをする」と。アブラシメウター油しめ歌 ヲアブラシボリウタ

アマウター海士唄 「但馬集」三重縣の部に、志摩の海士の娘が襦袢を持ち籠を取らうと泳ぎつゝ唄ふ唄として「せぐる、めたかへ編立ておいて、起す心の嬉しさや」。いづくちや〜、飛鳥越えて、どんと着いたら二軒茶屋」。前者のセグロ、メタカは籠の種類をいふ。此唄は一種の新編の歌であらう。また後女等の他の唄として「沙はさげ沙で、手足がやめるノソコリヤ、沙はさげ沙で、だしの風」を記してゐる。

アマタサハイヤブシ天草はいやぶし 肥前天草地方のハイヤぶし ヲハイヤブシ  
アマゴイオドリ雨乞踊 雨乞のためにする雨乞祈願踊、その御禮に踊るを雨乞御禮踊

といふが、普通に雨乞踊と呼ぶのは祈願の方で、その姿や踊の形式も種々に分れ、大太鼓や鉦を鳴らして踊るのは、雷鳴の音に擬して雷神の發動を促すものとされる。また、花笠の中に雨垂れに擬して四手をつけたのを冠りもする。山上で踊り、籠蓋で踊り、特殊の石の上で踊り、また神木をめぐり踊る。雨乞かけたに雨おくれ」とか「あーめたもれ氏神」とかの言葉が無限にくり返し歌ふもあり、次のやうなものもある。「東西静まれ歌おろす、静めて下され歌おろす、撫現様の御利生にて、これほど照る日が早や曇り、西から黒雲さへて来て、雨を降らして下されよ、夕立雨など地雨など、三日三夜その中に、一日一夜を下されば、氏子子供が喜び、直ぐに御禮に参ります、末を申さば長けれど、雨乞踊はこれまでよ」。岐阜縣掛兼郡牛洞地方の歌。「歌おろす」は神おろしの歌を云ふの意、黒雲さへて来て」は、黒雲が日光をさへぎつて出ての意か。所に依り、一日一夜二夜三日と掛けまして、その夜も明けぬに下されば、七層倍の御禮する」云々といふ。好餌を以て神慮を喜ばす事は古風な信仰である。整然たる形式を

有するものも多く、播州加東郡上東條の住吉雨は、その經費米百石を要する爲め昔より俗に百石雨と云ふ。廿人の女装した踊子が音頭に合せて踊る。その一つ、忍び踊の一節、何を招くぞ川柳、水の出花を招きする、そさま忍ぶ夜は雨がふる、そさま忍ぶ夜は雨がふる、そさま忍ぶ夜は雨がふる。雨乞踊は年に一定の日にも行に流用する。雨乞踊は年に一定の日にも行ひ、早の時に臨時に行ひもする。古き神事の名残ゆゑ女子は参加せぬのが普通である。三重縣各地のカンコ踊も雨乞に催す事がある。

アマゴイオレオドリ雨乞御禮踊 伊吹山麓の江州坂田郡大原村では、雨乞祈願踊をして願が叶ふ時は、初秋の豊年を迎へて御禮踊をする。参加は男ばかりで、音頭と笛は妻折笠に羽織袴、踊子も同じ笠に大太鼓をつけ、或は鉦を手にして打ちながら踊り、道行。多良川の曲・鳥飛び・御禮本歌・御禮節踊・綾の雨・綾の本歌・徳交しの曲・綾の節・新車・終りの歌・信樂の舞子となる。現存の歌は昔の昔唄らしい。御禮本歌は、「げにや早の物憂さに、見捨て給はぬ恵みにて、雨の数々ありがたや、御禮踊ををどらうよ、打跳む

れば快き、神の御靈の色見えて、稻穂ゆゑしき豊の秋、御禮をどりををどらうよ、桔梗かかるかや花すゝき、吾木香重をみなめし、御禮の踊をさしもぐさ」。阿波の三好郡井内谷の雨乞の祈願と御禮の踊は、「民族と歴史」の第八巻第五號にくはしい。これは、備前・備後・備前・花子の踊・天竺(鎌倉)四方の娘・孫の方)等に分れる。

サ、纏しめでの花が咲くエートサツサ、エトサツサ。三味線が入る。

アミオコシオンド 網起し音頭 北海道江差町の漁漁に建網を用ゐて取る時、網を手元で引寄せて起しながらの歌。船頭と他とのカケアヒ。ヤースンヨイサ、ヨイソヨイサ、イヨイサ、ヨイソヨイサ、ヨイソヨイサ、ヨイソヨイサ……と早目にいひつゝ網をたぐる。網が重ければ切腹になる。ヤキリゴエオンド

アミオコシキヤリ 網起し木道 ヤキリゴエオンド

アミダガイケボソオドリ 阿彌陀ヶ池盆踊 大阪市西區阿彌陀ヶ池和光寺境内に於て、堀江遊郭の藝妓の行ふ盆踊。昭和五年に始まる。大阪の廓の盆踊として最も古きもの。

アメウリブシ 飴賣ぶし 飴賣が飴を賣りながら太鼓か鉦を打つて歌ふ事は珍しくなく、會津のげんじよぶしも、かくて江戸に弘まると云ふが、現今秋田には飴賣ぶしなるものが残つてゐる。「一にきのとの大日様よ、二に新潟の白山様よ、三に廣岐の金比羅様よ、四に信濃の善光寺様よ、五に五泉の若宮様よ、六

に六角堂の六大地蔵、七つ南無の恐れざんよ八つやわたの入幡様」これに似たもの、石川縣金石町にも行はれる。

アメヤオドリ 飴屋踊 關東地方の高作踊の一名。その歌を飴屋が歌ふので名高いからであらう。ヤマンサクオドリ

アメヤオドリ 雨山踊 大阪府泉南郡熊取村の高峯雨山は後村上天皇の行在所で、こゝに寶篋はか十二種の古樂あり、巨大な太鼓を打つて踊る。近年中絶してゐたのを昭和九年より復活、八期に行ふ事となつた。

アメワフラネド 雨は降らねど 『松の葉』第三巻の産屋ぶしに、「美濃に妻持ち、尾張に住めば、雨は降らねど、みの豊し」とあり、『松の葉』以前の古いものであらう。『落葉集』第四巻にも見える。此の文句、後に「雨はふらぬに袖しぼる」と替り、上の句は土地に依り「潮來出てから牛島までは」とか、「郡上の入幡出てゆく時は」などと歌ふ。

アヤオドリ 舞踊 靜岡縣安倍郡大河内村平野の盆踊の一種。扇子をもちて持つて拍子とりつゝ踊る。男の踊。「京の一條のあやしの娘、波河の町へと嫁入りなされる、嫁入りなされるも

大事はないが、鼓を纏れとの御所産で、鼓も纏らず、鼓も纏らず、かたと殿御にのふ好まれて、空に吹雪かすみに千鳥、簀にあられを纏りつけて」云々。また對馬の島知村島知の盆踊の一種。あやを持ち縦隊二列で踊る。圖は筑前遠賀の村上、年は十九で龜次と申す、それについたる妹がござる、年は十五でおしほと申す」云々のクドヤ。『全長崎縣歌謡集』に記す。筑前大野郡宮村の神代踊の鼓は、輪踊で一本の鼓竹を兩手であしらふ。たんだ舞れ振れヤンノエ、ヤン腰を振れよ、腰を振らねばヨイヤサノセ、向ひ七夕おいとしやないか、川を隔て、戀をめす、あまり踊ればヤレ花がさる、いざよひこやれ此處を」。アマガイオレイオドリ ヤサイコラブシ ヤジソダイオドリ

アヤコアヤコ 『北越温故之葉』第廿三號に見える。永正六年上杉房隆、その臣長尾爲景に攻められ自害し果てた。奥方殿子及び子女を毛利家の當主あはれんで、知行所の山間に隠まつたのが、越後刈羽郡佐藤の庄で、その谷あひの村々、女谷・折居谷に、鼓子の前に始まる古風な舞を傳へて、之をアヤコと呼ぶ

とある。明治初年までは残つたらしい。或は被踊か。

アヤダケハヤシウタ 綾竹囃し唄 長崎縣五島列島の唄。「いつちゆ旦那、よう開きなされトツク、ピツク、シヤツク、おあがりなされ大根皮ひきむいた、横むいた、縦むいた、百姓の由太郎、由太郎女房は、七年このかた、大病々々で、栗のまんば三かき纏つて一寸な縛ぶ、二寸な縛ぶ、おやちばんは、ぶつ／＼腹きやいて拾てくる」。腹きやいては立腹して。『全長崎縣歌謡集』

アヤトリウタ 綾取唄 ヤサンチヨコブシ アユウタ 結歌 東京府下野島村は多磨川に臨んだ村で、こゝで取る結を徳川將軍家の御料理とした。夜半に取つた結を全速力で四谷に運び、出張した者が受取つて城内に運ぶ。新宿遊廓に泊り込んで拂鳴の甲州街道に聞えてくる「結は瀬に住む、鳥は木にとまる、人は情の下に住む」を愛した粹人も多かつたといふ。三田村氏談話、東京朝日。

アユヒキオドリ 結引踊 大阪府泉北郡上神谷村のヨラドリ曲目の一。「わしの殿御は一條河原で結を引く、姫御は都で結を賣る」。二

番は二條河原、三番は三條河原、四番は四條河原と、こゝの文句のみ異なる。

アライオンド 新居音頭 靜岡縣新居町の唄。欣亭吉升歌、梓屋富彌曲の長唄物。

アライコウタ 新井小唄 新潟縣新井町の唄。相馬御風歌、中山晋平曲。御坊の櫻が、ちらちら散つて、アライサノサ、雪の南葉がほんのりと、月もおぼろの新井の町の、夢のあの夜が忘れりよか、ト、ヨイト／＼、ヨイトサノサ。ヤアライジンク

アライジンク 新井甚句 凡て新井小唄に同じ。「春は極樂、經塚山よ、ホケキヨ／＼と、ホケキヨ／＼と鳥もなく、サ、ホイ、サーサヨサキタ、踊れや歌へ」。アライヨイトコブシ 新居よいとこぶし 靜岡縣新居町のうた。欣亭吉升歌。「新居よいとこ音を語る、上り下りの關所あつた」。アラオドリ 荒踊 佐賀縣武雄町川良、朝日村中野の足輕組の獨占のをどり云ふ。三四十人の青年が大袖襦袢の衣裳に前垂をつけ、兩刀を帯して、前モツシヨ二人、後モツシヨ一人の指揮に應じて舞ひ、輪をどり及び行進のをどりがあつた。起原は異説あつて、一に鳥

原の入道仙岩が武雄の後藤貴明を招いて、酒宴に事寄せて討たんとしたのを、貴明は察して臣下の中、豪勇なる者を選んで宴席で之を隔らせ、危難を脱したと云ふ。二に貴明を招いたのは須古の平井常治といふ。三に慶長四年の太閤の朝鮮の役に武雄の領主後藤家信が従軍し、凱旋の折に部下の足輕に舞はしめたとある。以上『青年』に據る。春の初め音に鶯の梅の古木に羽を休む、初音あげんな多の名残り囀りや一聲この小鳥」。

アラタマ 新玉 オサへぶしとも。相州三崎町の歌。「新玉のナオサへ、年の初めに門には門松、門ばやし、ナオその松のナオサへ松の小枝に孔雀の鳥めがナオ羽根休め、ナオ羽翼にはナオ鏡をくみそいや、口には黄金をくはへ、此鳥がナオ二度と留まるなら、末代長者で暮すだろ」。『但語集』 アリマブシ 有馬ぶし 攝州有馬温泉の歌。元禄十二年版の『はやり歌古今集』に、「松になりたや有馬の松に、藤に巻かれて寝とござる、巻かれて藤に、藤に巻かれて寝とござる情けありまの花のまん」。同十六年版の『松の葉』巻三にも有馬として、「藤になりたや袂の

露に、消えぬ浮身のかちくさ、何を種とか我思ひ、「星になりたや七夜の星に、備は紅葉の色深く、かけて願ひの縁のまん。その他有馬ぶしを記すものおびたしく、その流行の度も察せられる。而して有馬ぶしの元明が「松になりたや」であるかは不明であるが、後にはいろ／＼の形式が生じた。「若縁」にも見える。最近では、「上方」の第四・五號にくはしい。

アワオドリ阿波踊 ↓トクシマボンオドリ  
アワオンド阿波音頭 徳島縣勝浦郡小松島町、三好郡各村の盆踊の歌。玉川流、梅の意流等があり、後者が今は流行してゐる。文句は淨るりのまゝ。三味線も太鼓。手拭、團扇又は手踊の輪をどり。また今日、各種の集りや祭禮に拍子木のみを打つて歌ふ改良阿波音頭。同じく小松島で行はる。「めでたさの、初春の梅ヶ枝の、初音をこぼす鶯の、腰も長閑に揚げ雲雀」云々。  
アワコウター阿波小唄 新民謡。「阿波へ」と流るゝ潮は、やがて鳴門のうづとなる」。土佐の山越す薩摩の風は、鳴門みかんの花さかす。

アワジオンド阿波音頭 淡路の新小唄。「淡路よい島、海原うけて、浪もサノサ、神代ながらに、ヤレコノアレワノサ、打寄せる」。アワジモトアワシ淡路洲本よし 淡路の洲本の唄。洲本よいよい向へが大阪神戸、行くさ来るさはヨイトサ、船だより、エヤザン、ソヤザン。「洲本よい／＼先山先光寺まゐり上り下りはヨイトサ、お手引いて、エヤザン、ソヤザン」。

アワズコウター粟津小唄 石川縣の粟津温泉のうた。「粟津温泉、あら山陰の、ソレハマタ、ヤンセ、人も見むかぬ難ばいの中で、櫻さくの何故知らぬ」。アワズアワシ粟津よし 同じく粟津温泉のうた。「粟津湯どころ、ふしぎな所、小島や夜中に、餌を探す」。小島は湯女の唄。  
アワアワシ安房よし 安房の海岸地方に行はれる。太鼓三味線に合せたテンポの早い唄につれ、婆さん達が踊る。一つの唄に、それぞれハヤシ言葉がついてゐる。船とらせて萬祝歌せて、語りやうたい高きへ。萬祝は大漁の時に作る派手な薩摩の法被。右のハヤシ言葉、地金が双金か聞いてくれ、聞いたら地

金と云ふてくれ。又、「伊豆ちや桐取、房州ちや布良上、意気な船頭さんの出るところ」。ハヤシ「来たか長さん、待つてたよ、一文なくともお客だよ、晦日に勸定はチャント」。又、「伊豆ちや七島、四國ちや屋島、房州館山、鹿の島」に「セキ通れば田園道、鳩つかめて、キヤウ／＼と啼かせる。また「房州よいとこ多あたまか、寒に菜種の花が咲く」に、「八間口の土蔵賣つても、いゝ唄持たねば、一生の損だよ」。

アワボンオドリ安房盆踊 千葉縣小湊地方の例。「ハア井戸の蛙とそしらばせしれ、ハヤシ」おつだ、おいねえこつだよ、その意は「誠だ、悪い事だ」。下の句「花もちりくりや、月もさす」、ハヤシ「ハアおらおつか、そいたよと、おつだ、おいねえこつだよ」。意は、我母も左様に云つたこの事。  
アワラアワシ戸原よし 福井縣戸原温泉の歌。實業佳三作歌、作曲。「来ても、チヨイトナ、見やんせ北陸一の、チヨイ／＼、戸原湯どころ、花どころ、花どころオイ花どころ、戸原湯どころ花どころ」、ハヤシ言葉「ほん」と嬉しいわね。

アンジコウオドリ安城踊 鹿兒島縣熊毛郡地方で村人神佛に祈願して、成就した時に踊るもの。元、安城村より起るといふ。之を太鼓を掛けて踊れば掛打太鼓、多勢で踊れば大踊といひ、また鐘太鼓の音からブンチキチンともいふ。唄は、此の城の西と東の山見れば木の葉の上に黄金の花咲く、朝日さす夕日輝くこのもとに、黄金の花が咲きや麗る」。アンババヤシあんば囃子 千葉茨城兩縣の

唄。『俚語集』に、千葉縣香取郡では、春の氏神祭に酒宴を開いて唄ふ、之をアンバ祭歌と云ふとある。ソラ／＼磯邊へ小屋かけて鯛の香人に頼まれた、ヨイ／＼ヤサ」。又、「さつさと佐原のさざれ石、味淋酒、もろはく男山」。「あんべの煎餅、小野饅頭、龍ヶ崎のところてん」。最後の文句に依れば、アンベは地名で、訛つてアンバとなつたやうだ。現にアンバといふ所より起つた唄とも云ひ、佐原に起るとも云ふ。また一説にアンバは網場なりとも云ふ。なほ、『俚語集』の千葉縣香取郡の米搗唄に、「あんばの裏でお江戸を見ればお江戸が焼けて皆小屋かけて」とあり、このあんばの裏が發生地かも知れぬ。茨城縣鹿島

町の祭にも行ふ。「ソラソラ、鹿島のみたらしは、どなたが入つても乳きりだ、ヨイヤサ、ヨイホ、ホイ、ヨイヤサ」と唄ふ。↓イソベバヤシ ↓カシマブシ  
アンマオドリ接摩踊 奈良縣郡山町の盆踊。一に郡山をどりといふ。近年中絶。踊る際に片手を隣の人の肩に掛けるので、接摩踊といふと説く。輪をどりて、中央に樽を立てるをやぐら音頭と呼び、樽の無き場合例へば往來で樽圓形に廻つて踊る折を廻り音頭と呼ぶ。樂器は無く、踊子の團扇を叩く音が響くだけで、踊の振は平易なので、すぐ誰でも加はれるといふ。歌は始め「踊子よう、ホラナンデヤイナ、出た／＼何が出た、東の山から上月が出た、ヤットコセ、ヨイトコセ、踊子よう、ホラナンデヤイナ、なんぢやどころか踊るのぢや、踊子なんぢやのその掛腰を、ヤットコセ、ヨイトコセ」と出て、古い事にはござ候へど、お半が背にと長右衛門、ヤットコセ、ヨイトコセ」の如き歌になる。但し夕

ドキの長い物語唄ではない。『民俗藝術』第五卷第二號にくはしい。  
アンラクオウ安楽坊 大阪のうた。「安楽安

樂世が直る、島の番頭で二十四こゝで、こゝで一杯呑んだらトツルツン」。「材木屋の番頭で、あはてた番頭、柱で頭をトツルツン」。或は拳の歌か。

イイサカオンド飯坂音頭 福島縣飯坂温泉の新民謡。「ハイヤ揃ふた／＼よ、踊子が揃ふた、アリア／＼／＼サ、ハイヤ揃ふて、オワラ皆をどる、ハイヤアリア／＼／＼サ」。  
イイサカオウター飯坂小唄 同じく飯坂温泉のうた。西條八十歌、中山晋平曲。戀の陸奥ナリ、サテ／＼／＼戀の陸奥、人目を借夫アリア、ヤットサノサ、首尾も飯坂、湯のけむり、ハヤシ言葉「ハア寄らんしよ、来らんしよ、廻らんしよ、ササ、サカ／＼飯坂へ」。  
イイヤマコウター飯山小唄 信州飯山町の歌。高野辰之歌、中山晋平曲、藤間静枝振。こゝは飯山スキーのサ、名所、月や花より雪を待つ、ウインタースポーツ、スキーマン」。「行こよ城山、神明ヶ丘へ、雪が晴れた上陽が出

たよ。

イエーイイウタ家説ひの歌 新築の祝に此の家の壽命の長かれと歌ふもの。古くは嫁を迎へても家を新築した。新築の説宴を新築と上古は云ひ、順宗天皇のタツツ舞、允恭天皇と衣通姫の故事が記録に残つてゐる。鹿兒島縣熊毛郡のヨロコンブシは専ら家説ひの歌。 ヲヨロコンブシ

イオウジマノオドリ 薩摩島の踊 薩摩の同島の祭には、島中の婦女が出て踊り、後編の女がない場合は老妻も踊らなければならぬ由【東京地誌協同報告】第十三に見える。

イカダノリウター 筏乗唄 筏を操り川を下る時の唄。栃木縣河内郡藤井村では、以前は鬼怒川に筏を浮べて江戸に物資を送つた。今は水源地の森林濫伐のため、河川は荒廢し、交通機關變遷のため、筏乗の事も無くなつたが元は左の如き唄が唄はれた。「筏出てゆく、女房が送る、豆で行つて来いとヨ、目になみだ。」「筏乗り乗りためたる金を、花のお江戸でヨ、ちやくくちやくに」。名高い鴨綠江ぶしは、元は紀州熊野の筏乗唄ともいふ。

イカダブシ 筏ぶし 秋田の藩政時代に仙北

地方の山村で、御用船として薪を伐り、薪の雪どけを利用して筏に組み、雄物川を下つて流した。上流は流れが急で、下流は緩かになる、その頃に退屈過ぎに唄つたもの。「今ごろは、内でお里がヤマアイ床の上、わたしや筏のヨラ断の上」。また、筏、ぬれてしよだて、宿とれば、宿の姉が出てしほる」。

イカホオンド 伊香保唄 群馬縣伊香保温泉に古くより行はれたが、縣が全國に赴けて公娯止をし、妓樓が亡びると共に絶えたが最近復活。但し歌は古く曲は新しい。伊香保いで湯で子賣もうけ、川といふ字のむつまじさ、ヨイ~~~~~ヤサ。又、誰へ物聞く山なす思ひ、告げよ一聲、ほととぎす。今は新曲伊香保の四季をつけて、扇と手拭を持つて踊る。

イカホブシ 伊香保ぶし 【松の葉】卷三に伊香保ぶしとして、花になりたや、ほんほんど、どつこいしよ、よし~~~~~吉野の花に、いよしほんどへ、咲いて亂れてほんほんど、どつこいしよ、雲々櫻の下露、いよしほんどへ」その他が見えるが、この國の伊香保か分らぬ。或は元唄は別にあ

つたかも知れぬ。

イカリカツナカ 佐渡の民謡に「小木の枝どもは庭か綱か、出舟とめますおそろしや」。この種の文句各地に見える。元唄不明。 ヲイカリワイラヌ

イカリワイラヌ 佐渡はいらぬ「庭はいらぬ、笛や大鼓で舟とめる」の文句は、色里で名高い舟着場に唄はれ、始めに土地々々の名を云ふ。【島根民謡】には「下の關では」と。 ヲイカリカツナカ

イクノオンド 生野音頭 但馬の生野銀山の盆踊のうた。昔から代官の御覽に入れたもので、養太夫の三味線を用ゐ、尺八、太鼓が入る。「生野よいとこ、自慢ぢやないが、土に黄金の花が咲く」。さても見事な、盤の曲は、腰にこがれて火をとます」。

イタラカシチチ 幾ら騒しても「幾ら騒しても海府の者は知れる、白のつどれ帯立て結び」。幾ら騒しても在郷の者は知れる、髪で髪ゆて手鼻かむ」。右は【佐渡の民謡】に見えるが、此の種の歌は全国的に多く、いづれも文化の低い他村の者を諷しむ文句である。

イタダオドリ 池田踊 飛騨の神代踊の曲目

の「一つ。池田小女郎は細布織りやる、横が足らんでまだ織れん、向ひ七夕おいとしやないか、川を隔てゝ戀をめす、あまり聞ればヤレ花が散る、いざよいこやれ此庭を」。 ヲジンダイオドリ

イケノオンド 池野音頭 岐阜縣揖斐郡池野地方の新民謡。「池野名物、藤枝の山車は、姉提冠りの招き猫」。

イケミズオドリ 池水踊 伊豆新島の盆踊の一。「民俗藝術」第二卷第六號に歌詞を記す。「池水が池に反響、こども松、松がこどもまば、つれてこどもまのヨウ」云々。

イサミオドリ 勇み踊 伊豆半島の沼津に近い大瀬神の端の大瀬神社の祭は四月四日で遠近の浦々より満飾をした數十艘の漁船が参詣にくる。その時、舟の中で赫の長襦袢を着た青年が頬冠りしヒョットコの面をつけて踊りぬく。馬鹿踊、ひよつとこ踊ともいふ。【民俗藝術】第三卷第五號にも記してある。

イサミオドリ 勇み踊 奈良縣の民謡。「思ひもよらぬ伊勢土産、姉には帯、妹には五尺手拭、こちや五尺手拭」。同縣下には江戸初期の「五尺手拭」の唄が残つてゐるが、これも

其一例か。

イサミオドリ 勇み田 廣島縣安佐郡の田植歌。勇みぶしと同じか。 ヲイサミブシ

イサミブシ 勇みぶし 廣島縣地方の田植歌の一つ。節を短く歌ひ、勢揃を一齊にさせる。朝に歌ふ。「東かどやく明星ぼしか」と音頭、「聲か」と早乙女、「聲ではない明星ぼし」と音頭、「光りよ」と早乙女がカケアヒに歌ふ。

イサメオドリ 諷刺歌 諷刺の踊。三重縣阿山郡花之木村法花の慶應神社の雨乞踊では竹に五色の短冊を付けて踊る場合をイサメ踊と云ふ。

イサマヤキ いざやまき 山形縣酒田内領の祝儀唄。略してイザヤ。一説に享保の頃、鶴岡の俳人河上亮而の作。元唄はいざやよいと調へても、波の鼓も拍子と揃へて、豊かなる世の嬉しさよ。また、いざやよいと竹調べもて……楽しさよ」とも。昔唄も多く、花のよいと今町、紅葉の新地、松は煮町、置の出町、神を誦むる日和山」は酒田港の廓町づくし。

イサワオンド 贈澤音頭 岩手縣贈澤郡水澤の新小唄。長唄様のもの。

イシアゲマツリノウタ 石上祭の歌 愛知縣丹羽郡池野村の淺間神社は、俗に尾張富士と呼ばれる山で、舊の六月一日が祭禮。前の晩から参詣人が登り、石を頂上に積上げるので石あげ祭といふ。これは隣の本宮山より高さを増すためとも、いろくくに云ふが、此の石をあげる時の歌は、わたしや備前のヨウ、岡山生れヨ、ドンドトイ、米のなる木はまだ知らぬわヨ、チヨイチヨイ。また、富士のお山へ此の石あげりや、はやり病は病みやせまい」。

イシウスウター 石臼歌 白ひき歌と同じ。 ヲウスヒキウタ

イシツキウター 石搗歌 地つきの一種。地つきも石つきも共に建築の始めだが、石を柱の下に突込むのが石搗であらう。京阪は専らこれをし、江戸は松材を埋めると「守貞漫稿」に云ふ。その作法も地つきに變らぬ。けふはめでたや日柄もようて、餅をつかず石をつく、面白や」と吉日を祝ひ、神おろしをし、家ばめをする。 ヲジツキウタ

イシツキオドリ 石搗踊 家の建築に際して厄柱の石搗をする時に行はれる。一種の地固





とも。上州伊勢崎の歌。北原白秋歌、町田嘉章曲。わたしや伊勢崎橋場の青ち、チャツカリン、杖のネ、とんはたテイホロ、聞き暮らす、とんはた聞き暮らす、イヤカラリコリン、チャツカリンノセツセ。他に、「昔や國定長藤並上、今に赤城のカラツ風、赤城のカラツ風」。

イセツコウター伊勢津小唄 津市のうた。西條八十歌、中山晋平曲。伊勢の津の津の津の町みれば、海は白がね、夏は黄金、吹くは五十鈴のエ、吹くは五十鈴の、神の風、サテサテ、シヨウガイナ。

イセナガブシ伊勢長ぶし 「附録」を見よ。イセブシ伊勢ぶし 「附録」を見よ。イソハラコウター磯原小唄 茨城縣磯原町のうた。野口雨情歌、藤井清水曲、島田豊振。「天妃山から東を、ハ、東を見れば、テモヤレコラサ、見えはしなが見えたら、あれはアメリカ、ちよいと合衆國」。イソハラブシ

イソハラブシ磯原ぶし 凡て磯原小唄と同じ。波はどんど小磯に打てど、打つは仇漢香ばかり、風にやささらされ、波には打たれ、

オヤ沖の磯石アひとりぼち。イソブシ磯ぶし。江戸時代に水戸の船業が江戸に通ふ時、水戸の舟なる事を誇らかに舟端を叩いて唄つたもので、始めの曲節は曲の如く、木琴に合せ、明治になつて三味線に合せたといふ。歌は、「船はちやんころでも炭薪や積まぬ。積んだ荷物は米と酒」。

「三十五反の帆を巻きあげて、行く上仙臺石の巻」が古く、他は後に出来たといふ。現在は大洗、新湊を本場とする。明治に東京の落語の寄席で流行し、いろ／＼のハヤシ言葉がついた。例へば、「三十五反の帆をまきあげて最初、漢川口走りこむ、漢水川口イソ走りこむ、テヤ、イサ、カリリン、好かれちやドソ、青菜の性なら萎れてこい、子の性なら轉けてこい、悪者の性なら獲取つてこい、お客の性なら毎晩こい、久しく會はねば、お父さんも御心配、お母さんも御心配共に私もイソ御心配、テヤ、イソ」。

イソブシ磯ぶし。鹿兒島縣博多郡山川町の祝儀歌。大山社ヶ岳多かむんな、うねではなせば、ほんぞ花。「大山女岳男岳に鶴が掛

る、機かと思たら、えんの雲」。三味線に大鼓が入る。イソベシシト機部甚句 上州磯部温泉のうた。親の意見と懸隔の意地を、磯部湯の上に任せたい。

イソベシシト機部甚句 同。磯部温泉のうた。内村俊一歌、町田嘉章曲。「上州名物、磯泉おこし、磯部カルルス懸の味、懸は七彩、妙義も嗜れて、主に見せたや屋敷様」。イソベシシト機部甚句 「信濃集」に、千葉縣香取郡の歌として、ソラ、磯邊に小屋立て、編の番人に頼まれたサノサ、ヨイホイヨイトサ。又、ソラ、津の宮島居河津、潮來の茶屋まで直達だ、ハヤシ宿路。佐原町の佐原磯子中の磯邊磯子は、をととひ昨日お手紙を、御返事如何とお待ちかね、ヨイヤサヨイホイ、ヨイヤサ。この方は茨城の鹿島町のアンバ磯子に類似する。イソベシシト機部甚句

イタコ潮來 元は常陸の利根川の水海、潮來より出た歌。「山家鳥島歌」の常陸の部に、「潮來出島の上れまこも、殿に刈らせて我れ捧ぐ、サツサオセ、潮來出てから牛島

までは、雨も降らぬに袖しぼる、サツサオセオセ」が見える。他に、磯上鹿島に神あるならば、助け給へや要石、同じ上の句で下の句は「遠はせたまへや今一度」なぞが古風で、今は田植に歌はれる。此の町で最近まで遊廓で歌はれたものはシヨウガエとはやし、サツサオセ、てはない。サツサオセ、が最古の磯子言葉ならば、舟唄として發生したかも知れぬ。利根川の船頭の唄、乃至は遊女の神の歌の類であらう。名高い「潮來出島の眞菰のなかに、あやめ咲くとはしほらしや」の文句は、いつからかは不明である。潮來では女郎を獲揚げにすると聞つて見せ、藝妓が地を勧め、始め二上りのシヨウガエ、次に本調子の潮來甚句をやり、合せてあやめ唄といふ。前者は藝妓が、潮來出島のごんざらまこもアリヤサ、誰が刈るやら薄くなる。シヨウガエ」と歌ひ、調子として「薄くなる、誰が刈るやら薄くなるシヨウガエ」。甚句は、藝妓、猶た猶たよ、足拍子手拍子、秋の出廻りヤンレよくそらた、ヨイ／＼／＼ヤサ。いろ／＼のはやしが入る。こゝは神崎森の下、舵をよく取れ船頭どの、「潮來通ひの船なれば、津の

イタコイタコ

宮前から帆をさげて、濱町の河岸へと乗込め乗込め。潮來は潮來ぶしとも云ひ、こゝの遊里の繁昌につれて津國に知られ、種々の替唄、替ぶしも出た。「木曾路名所圖會」五に、かの川竹の唄、風ふを聞けば」として引用したのは、民謡調でなく、スマヨ／＼と云ふ潮來での方言、磯上といふ意味のものを取入れただけの話である。前述の「磯上鹿島に神あるならば、遠はせ給へや今一度」は、新潟縣堀の内有名な屋敷ばやしの歌にもある。新潟縣では潮來ぶし、板子ぶしなぞと記し、直江津あたりを本場とも云ひ、蝦夷や松前、やらすの雨が、七日七夜も降ればよい」なぞと歌ふ。「信濃集」に依れば、三重の員辨郡では地掛の時の音頭風ものを潮來と稱し、別に常陸のそれと關係ない歌を記し、また熊本の本郷郡では祝儀歌として、めでたい文句づくしの潮來歌をあげてゐる。

イタコブシ板子ぶし 「全長崎縣歌謡集」に記す。南松浦郡崎山地方の唄。長短いろ／＼ある。名所々々、白濱名所、濱にさがれば大納屋村、向う見渡す山見小屋、高いところから見下せば、大きな船が立ちこんで、今こそ白

濱これ名所」。イタガワジウゴニチノウター一月十五日の唄。對馬では床詰唄をうたふ。此日早朝門松を焼き、前日神前に供へたコツバラで倉庫戸閉、果樹を叩き、實入れ、と云ひつゝ、「今年の後は下詰に、去年の後は上詰に、鏡も金も涌く涌く」と唄ふ。コツバラの事、全長崎縣歌謡集」には詳しい。なほ對馬でも豊崎村は十四日早朝に唄ふ。次の項も合せ見られ

イタガワジウゴニチノウター一月十五日の唄。此日を鹿兒島縣熊毛郡地方では作の説ひと云ひ、木の枝に切餅を貫き家の四隅を門に挿す。少年群各戸を訪問し、一月十四日の唄の如きものを唄ひ、禮として餅をもらふ。同じく豊崎である。くはしくは「信濃集」。イタガワジウゴニチノウター一月十四日の唄。此日の朝、鹿兒島縣熊毛郡では團子用の餅をつき、米も籠もぶらぶら、栗栗の籠もぶらぶら、唐半はごとごと、ぶんどーささげは、ぼつとせいと唄ひ、之を籠栗焼と云ふ。また同地方では同夜、民家を訪問し、一人座敷に上つて舞ひ、他は庭に立つて歌ふ事がある。





をいふ。  
 イロハトドキーいろは口説 宮崎縣、大分縣の盆踊唄。宮崎縣佐土原の大光寺四十二代の住職古月禪師は、寛文七年に生れたが、當時の盆踊唄が卑猥であつたので、いろはがるた式に、いろは四十八字を頭につけたくどきを作つた。今日まで行はれる。今日は始めに、「國を申さば日向の國の、古月和尚の作りしくどき、四十八字のいろはのくどき」の文句をつける。尤も村々に依り多少ちがふ。本文は、「いとけなきをば愛して通せ、老を敬ひ無禮をするな、腹が立つても過言は言ふな」。かくてエヒモセスまで行き、「京も田舎もみな押しなべて、上下貴賤の隔てをするな、一に神明諸佛を守れ、二世の旅出に赴くならば、三世諸佛の誓を受けて」云々と二三四五づくしになり、「十方世界を離なく通れ、千秋萬歳」で終る。或は右のものは後人の附加かも知れぬ。エヒモセスの「末の世までも形見に残す、財が文せしいろはのくどき」と終るのがあるが、それが原文かも知れぬ。『島根民謡』に依れば同縣簸川郡の盆踊にも唄はれる。  
 イワイウタ 祝ひ歌 ↓シユウギウタ

イワイメテタノ 祝ひめてたの 『松の葉』巻一早舟に、祝ひめてたのう、講しめてたのう、若枝も榮ゆるのう、葉もしげるとあり今日「祝ひめてたの若松様上枝も榮えりや葉もしげる」と唄ふ所が多い。『島根民謡』に餅搗唄として、祝ひめてたの若松様は、枝も榮えて葉も茂る、技が榮えて葉が茂るなら、おろせ小松の一の枝、一の枝より二の枝よりも三の小枝がかげをする」と。この三百の續きおひ如何にも自然で、松ばやし古風がある所を見ると、始めの一首のみと云ふのは、後世の崩れかも知れぬ。同書地搗唄に、「うれしめてたの若松様は、枝が榮えて葉が茂る、枝が榮えて葉が茂るなら、命長かれ末繁昌、及びタ、ラ歌に、松を植まます吉野の里へ、講しめてたの若松様へ、講しめてたの若松様は技が榮える葉が茂る、枝が榮えて葉が茂るかば、命長かれ短小松」。↓メデタメデタ  
 イワイキブシ 磐城ぶし 福島縣赤井嶽邊の新民謡。赤井嶽から東を見れば、アラヤツタネ石城七瀨目の下によ、アラヤツタネ。「赤井嶽嶽師が二度盛るならよ、アラヤツタネ、わしもゆきたい二人づれよ、アラヤツタネ」。

イワイキマツサカ 磐城松坂 假に磐城と冠する。福島縣石城郡泉村地方は婚禮に松坂を歌ふ。樂器なしうめてたくと重なる時は、この座敷も押開く、おか〜。  
 イワタニオンド 岩國音頭 山口縣御庄村の唄。元は岩國に起るが、物語の唄で、一段づつに「アリアサ、コリヤサ、ドッコイトナール」と囃す。  
 イワテドウツキウタ 岩手縣突歌 岩手縣の突歌。種々あり。龜の子胸突は、首原「サン今日などは、ハヤシヨイトコナ〜」の如く、本文は「天氣も良いし、月の内でも、吉日なるぞ、この家お場所へ、七福神は、集まりて、蓬萊山を、飾り立て、竹に鶴龜、五葉の松」と七字々々になつてゐる。七之助音頭は、盛岡の名所は石朝櫻、ドッコイサツテ、磐城の公園で岩手富士だ、ヨイノ、ヤレサノ、ヨイサ、ヨシヤラサノ、ヤール、ヤレコノサエ、ヤンエー、コレハサ、エヤエーヤレ。また木遣音頭は「ヨイワイヤイヤレヨイ、朝日輝く八幡祭り、飾り出す岩手原、ヨイ〜ヨイサン、ヤンサ、ヤンサヤエー」を一句とし、人の爲めには水火もいとほぬ、飛込む、

は組の勇み肌、轟く車の音を聞け、揃ふ心のしめどころ」と讀く。  
 イワチノモリオカ 岩手の盛岡 盛岡市のうた。馬場孤蝶歌、下總院一曲。奥の細道ほそくとも、黄金花さく、黄金花さく、國みちのくの、鬼は不來方福土館、ヨイサ〜、ハ〜よい町〜、岩手の盛岡」。

イワチフジ 岩手富士 岩手縣の新民謡。野口雨情歌。岩手片富士、あの山陰で、なじよな心で、あねこよ、暮らすやら」。

イワムロコウタ 岩室小唄 新潟縣岩室町の唄。金子憲太郎歌、山内俊次曲。「花の岩室、春風ふけば、咲く上柳の八重一重、咲くも花なら、見るのも花よ、人が歌へば、アリア鳥もなく」。

イワムロジンタ 岩室甚句 同じく岩室町の唄。おらが若い時、彌彦参りしたればナ、なじよが見て、寄りなれと云ふたども、講が居たれば返事がならぬ。またおらが若い時かかあとふたりで」とも、彌彦が見つけて」ともいふ。ダイロヤダイロ、角出せダイロ、出さぬと曾根の代官所へ、申上ぐるが良かダイロ」。ダイロは蝸牛のこと。囃子言葉「アヨシ

イワヤドウコウタ 岩谷堂小唄 岩手縣江刺郡岩谷堂町のうた。佐藤孝七歌、武田忠一郎曲。「京の都の姿を装ふ、奥の岩谷堂賣田光る、チヨイト増澤、チヨイト増澤、江刺のお米ネ雲井はるかに幸り、アレ幸り、キタサトゴザ〜ヨ岩谷堂へ、サツト岩谷堂へ」。

ウ

ウエタウタ 裁田歌 田植歌と同じ。或は右の如く記して田植歌と讀ますか。↓タウエウタ  
 ウエノコウタ 上野小唄 伊賀の上野の唄。野口雨情歌、中山晋平曲。「伊賀の水月、健屋の辻はヨ、義理のしがらみ、乗掛けお馬、荒木武勇で名がひびく、ハ、チャンチャカ〜、チャンリン、チャカラカ、チャラコロ〜、ドツサイサイ」。

ウグイスガガレ 鶯流れ 鳥根縣遼東郡の田植歌。鶯の歌といふほどの意味であらうか。「梅に鶯は面白いもの、ヤレをがけどもな、梅に鶯」。↓ウノハナナガレ ↓クリナガレ ↓タウエウタ

ウクシマブシ 宇久島ぶし 『全長崎縣歌讀

集」所載、北後浦宇久島の唄。宇久島をなごは、シン沙カン風にフン吹カレンれて、お色シロが黒ゴンござる、そんなちや、インいとやせぬ。意は宇久島の女は汐風に吹かれて色が黒いが、そんな事いとはぬと云ふ。「あねさんあなばちや、ナンく何の歳、ワソわたシンシカイ、あなたをノン乗セマンます、午のトン歳よ、そんなちや、インいとやせぬ。ウシオウシウター牛追唄 牛を追ふ唄。ウウシカタブシ ヨオイカケブシ

ウシオンドー宇治音頭 京都府久世郡宇治町の歌。酒井良夫歌、中山晋平曲。宇治のなア茶音頭、お茶の木知、ヨイトサノサ、ちらり見た日が、なつかしや、サアサ、チャツトキナ、チャく／＼、チャツトナ。

ウシカタブシ牛方よし 岩手縣九戸郡江刈村地方に現存の牛追唄。往時南部領より秋田の鹿角方面に荷物を運ぶため、一人の牛方が各六七頭の南部の牡牛を追ひ、二晩三晩を野宿して山路を行つた。その時に各村落を唄ひ流したもので、牛方の風俗は菅笠の縁のついたのを冠り、前に下げた胸當を背の小鏡で押へ、その小鏡が意氣なものとされた。鞭を持つ

ウシゴメコウター牛込小唄 東京市牛込神樂坂の新興小唄。胸のハンドル、スピード出して懸のネ、懸の自動車のぼり坂、どうぞ明日も忘れずに、牛込へく。

ウシチヤツミウター宇治茶摘唄 京都府宇治の茶摘唄。最近流行するをミキヤブシといひこれ以前のをナゲブシといふ。前者は近世的に明るい旋律を有し、後者は古風に陰鬱な節である。ナゲブシで名高い唄は、「御代も治まるごもつまつまる、なほも上様、末繁昌」。右のゴモツは朝廷並びに徳川氏に奉る茶煮で、

「御物も語るし、即ち献上もすんだの意味と解するのと、ゴモツは格式高き茶師を云ひ、貴族共に摘む意味と解するのとある。また「宇治の橋には名所がござる、お茶の水くむ、これ名所」。これは豊太閤が宇治橋の三の間の水を汲ませて茶をのんだ故事に依るといふ。終りに「歌はこれぎり、かしくとめて、千秋樂とはおめでたい」と唄ふ。高貴の台覽にはナゲブシを唄つて茶を摘むといふ。一つを唄ふに三分かゝる。ナゲブシは江戸初期の投節に近いからであらう。ミキヤブシは味氣屋といふ茶師が唄ひ出したといふ。一つを唄ふに一分かゝる。大和山城、河内に丹波、知らぬお方とお茶の縁。この下の句を二度唄ふ。「君と別れて、いつ又逢ほぞ、明けて五月の茶摘どき」。宇治はよいと西北はれて、東山風をよそよと。「今年これぎり、又来年は八十八夜のお茶で逢ふ」。宇治は茶どころ、茶は茶どころ、娘やりたや、婿ほしや。最近では、お玉といふ婆さんが有名な唄ひ手と知られた。

ウシワカ牛若 牛若の物語を歌ふこと。彌鼓唄、常の盆唄に多い。徳島的那賀郡の盆唄

の例、牛若殿の寺入りは、日本一で鞍馬山、堂はお寺で學問なされ、夜は見かけのお太刀打。『無語集』に見えるは、他に三重縣飯南郡の盆唄、廣島縣比婆郡の田植歌、大分縣西國東郡の盆唄等。また三重縣鈴鹿郡高津瀬村の彌鼓唄にもあり。

ウスイワイ白祝ひ ヨウスオコシ  
ウスイオコシ白祝ひ 白祝ひとも、白鳩始めとも。元日早朝、白の祝物に向つて左の唄を三唱し、杵を取つて搗く眞似をし、その白に祝つてある餅を買つて去ること、『無語集』の鹿兒島縣熊毛郡の項に見える。高砂の尾上の松で白切つて、その枝々で杵切つて、千穂々、萬穂々。

ウスイウター白摺歌 摺白で摺る時の歌。摺白は唐臼ともいひ、小規模の物は竹で編んだ筒の様なものを土で埋めて二つ作り、上下合せて、上の孔に紐を入れ、上の白に附けた把手を持つて白を廻すと、上下で摩擦し皮は破れて米が出る。白摺歌、摺摺歌は名は違つても實は同じである。但し此の方法は最近是用ゐられぬ。他の白の作業歌と同じく、白の重たさ、また「摺白ひきや樂だ」と見せて樂で

つ。唄も「さても見事だなアエ、牛方の浴衣、肩に籠角、裾こぶち、コラサンサヤイ」。澤内三千石なアエ、お米の出どこ、つけて納める、お蔵ごめ、コラサンサヤイ、「大志田、森の中なアエ、貝澤、野畑、まして鬼原は獄の中、コラサンサヤイ」。東京及び大阪の郷土舞踊と民謡の會の各第一回に紹介されて有名である。「東北の民謡」には以上を澤内牛追唄とし、九戸郡の牛追唄は放牧の歌であるとして、江刈萬巻、牛方の出所、いつも春出て、秋もどる」等を記す。然し前者は九戸郡江刈村でも實際に歌ふ。

ウシゴメコウター牛込小唄 東京市牛込神樂坂の新興小唄。胸のハンドル、スピード出して懸のネ、懸の自動車のぼり坂、どうぞ明日も忘れずに、牛込へく。

ウシチヤツミウター宇治茶摘唄 京都府宇治の茶摘唄。最近流行するをミキヤブシといひこれ以前のをナゲブシといふ。前者は近世的に明るい旋律を有し、後者は古風に陰鬱な節である。ナゲブシで名高い唄は、「御代も治まるごもつまつまる、なほも上様、末繁昌」。右のゴモツは朝廷並びに徳川氏に奉る茶煮で、

ない、なに仕事にや、仕事に樂があればこそ、また、白すりやおながへるよ、かかさ夜食をたいてくれ」と歌ふ。協力の歌だけにカケアヒの例は、「出羽の新庄の、サ、さかさ川、淀の川瀬の水車、いつもどんどんと、サ、廻るがよい、小石疊で波まくら、コエく」と山形の最上で歌ふ。また徳島縣勝浦郡には萩摺ぶしといふカケアヒがある。男、逢ふたる事も見た事も、ヨイ／＼、ない様さんと今晩はヨ／＼／＼、ナ、お肩並べが有難い、ヤツト有難い／＼、女、初對面の殿さんに、ヨイ／＼、程か知らねども、どうか御許し願ひます／＼、男、それやなお互ちや腰ととも、破れ手拭類冠り、これも無禮であるなれど、どうか御容赦たのみます／＼。『無語集』に豊富に例がある。

ウスタイコ白太鼓 ヨウスダイコオドリ  
ウスタイコオドリ 白太鼓唄 熊本縣球磨郡の各地にも行はれ、大きな太鼓を胸につける者、頭が一人、脇が二人、脇が二人。頭は角の、脇は楯形の、脇は鹿の角の兜を冠り、股引・脚絆・草鞋で太鼓を打ちつゝ踊り、之に

少年の鉦打が五人附屬し、別に轆を負ひ太鼓を胸につける者も加はる。唄四人、唄地と云ふ所で輪の中に入り、お蔵の景を見てやれば七匹馬に駒立て、おなかにたちたるしのくろ、お、これほどの御嘉例を、おくにがまえればいたらふむ、關よりこなたに、よもあらじ、ひいてのもの夜明けには、夜明けがたの横曇り」といふ唄を唄ふ。道行・頭の庭入り・脇の庭入り・關の庭入り・唄地・ナカゼキ・ゼリアイ・引上といふ順序で、三十分ほどを要する。

ウスタイコオドリ 白太鼓唄 九州各地に現存。大なる太鼓を胸につけて、打ちつゝ踊る。宮崎縣兒湯郡上穂北村のは、氏神祭や雨乞に踊り、白鉢巻・白袴・手甲・脚絆・からじ、背に丈餘の紙と布の織の約五貫目の重さのものを負つて踊り、白太鼓十八人、陣笠の鉦打四人が入亂れて陣形を變化させつゝ踊る。列の外に音頭が居て歌ふ。あそ、五條、四節、小野の曲目がある。小野の歌詞、小野の小町に忍ぶ夜は、七里山道夜越えて、(小唄) オートリヤ誠、七里山道夜越えて、(小野小町はきよ、よく者よ、行こか戻るか返せよと、(小唄)

オソソリヤ誠、行こか戻るか返せよと。小野小町に末あらば、松のおこえはいつもある。(小唄)オソソリヤ誠、松のおこえはいつもある。此の村に行はれたのは、享和元年以後といふ。

ウスツキウタ 白濁歌 白つきは、今は電氣の動力に依り、餅つき以外に白の使用される事は無くなり、多くの白つき歌は次第に亡びつゝある。 ↓カラウスウタ ↓コムツキウタ ↓ムギツキウタ ↓モチツキウタ

ウスツキハジメ 白濁初め ↓ウスオコシ ウスヒキウタ 白濁歌 圓筒形に似た石臼の上に、ほど同じ大きさの石臼をのせ、把手を持つて上のを廻して麥なぞを粉にし、麵類や團子を作る。上の石に孔をあけ、碎くべき麥を順次に入れ、碎かれたものは上下の臼の合ふ所に刻まれた部分から出てくる。ウスヒキウタ、ヒキウスウタ、粉ひき歌は凡て同じである。この作業も今は電氣の動力で行ひ、従つて歌は亡びつゝある。白ひきは土地に依り婦人のみ、乃至は男女混合で、多くは夜間に行ふ。庭のしまひは遅ござる、百姓の庭に夜なべせんもの鶏ぢや。歌の種類は白をほめる

もの、「この白はどの山から切り出したやら出るが、むけるが實白」。労働の辛さをいふもの、「白ひけば肩もやめるし、腕もやめる、四十四節の骨やめる」、「おら白、重たい白だ、山に三年、川原に二年、庭の隅にも寝た白だ」、「人の粉ひき今日居れど、今にひかせる身分となるよ」、「お石臼ひきに頼まれて、ひくも厭、ひかぬも義理の悪さよ」。次に協力者の技術のすぐれてゐる事や、戀人同士の楽しみも歌ふ。「白の軽さよ相手のよさよ、相手かはるな、明日の夜も」、「今夜白ひき遊びにござれ

白が重いかと云ふてござれ」、「白ひけばこそ肩と肩、間にやまた見る計、お塵聞計。また疲勞が重なる時の語氣荒い歌がある。「白をひく時や、ねむり目でひきやる、團子食ふ時や狼まなこ」、「石臼ひくには片手は邪魔だ、女衆乳でも揺らせろ」。また、「嬉しや一番びき出来た、あとの二番びき夜食びき」、「一番ひきが今をへた、お若い衆たのむよ、二番挽きまで」、「これが今宵のしまひ白、煙草一服吸ふがよい」、「しまひの白や、白に神樂をあげてくれ」の如きものもある。また種々の歌を轉用しても歌ふ。「俚語集」二巻に収める所が

多し。ウスマイ舞舞「年中行事大成」に、京都貴船神社正月十七日の五反田の儀式に舞舞を舞ふ事が記されてゐる。新年の意味である。ウタアゲ歌揚げ 音頭を取つて歌ひ出す事また音頭取の事。歌あげますぞ、おつけあれその歌を知らなきや、恥のつきあげ。右の歌をあげる事より出た言葉か。あけるとは高麗に云ふ意味を含むらし。ウタオアダル歌を揚げる 歌を歌ひ出すこと。

ウタオツケル歌を附ける 上の句に對して下の句を、問の歌に對して答の歌を歌ふ事。神樂歌の本末と同じ。歌あげますぞ、おつけあれ、その歌を知らなきや恥のつきあげ。ウタカガイ歌かどひ ↓ウタガキウタガキ歌垣 歌垣は垣即ち列を作り歌を歌ひかはそのことで、歌かどひと同じく、歌かかひのカドヒは、カクレアヒから出て歌を歌ひかはその意である。萬葉集卷十二の「海石橋市の八十の巷に立ちならし、續びし紐をとかまく惜しも」の立ちならしは列を作り並んだ様を示してゐる。歌垣は一時的の亂交を目的

として以て年の豊作を祈るので既婚未婚を問はず、山遊びの日、或は祭禮の夜に行はれ、樂しむに歌舞を以てした。今日なほ祭禮の夜の亂交は諸國に現存して黙許の形だが、この爲に歌舞する例は既婚者は交へず未婚者の男女といふのが近世の傾向で、ヒヨドリ踊は其一例である(↓ヒヨドリオドリ)。世上屢々盆踊を以て歌垣の名残とするが、盆踊は神送りを専ら目的とし、共通點ありとしても出發點がちがふ。

ウタグラー歌ぐら 三州地方の神事で神樂歌の意に用ゐる。歌を歌ふ神樂として、歌の無い神樂に對するか。

ウタゲンカ歌喧嘩 ↓ゲンジョブシ

ウタダイモク歌題目 京都の題目踊の一節。一代諸親の中に、此の法華は最後第一、南無妙法蓮華經云々と法華の功徳を歌ふ。

↓マツガサキダイモクオドリ

ウタダイモク歌題目 「俚語集」の千葉縣市原郡の項に二首を記す。その一の「村田の權の」は、濱野日泰様へ、村田の權のが月參り、うしろには草産を背負ひ、前には重箱叩いて親すこす、皆人は、村田の權のは馬鹿だ

とおしやるが、馬鹿ではござらぬ、今の浮世は親さへ過せば、馬鹿ではござらぬ。他は、「中山のお頭師の前で」といふ鹿島踊の特唄やうのもので、同じく法華の事を唄ふ。或は法華太鼓を打ちながら題目を囃して唄ふ唄か。ウタツマ歌つま 單に歌と云ふ事。若衆は聞くか、歌つまおろして踊らせませうにこれほど静かにめでたいさ、イヨお寺へ参りて御門を見れば云々。三重縣鈴鹿郡の盆踊歌として「俚語集」に記す。右は或は井田川村のカンコ踊の事であらう。

ウタヂヤル歌でやる 「俚語集」の鹿兒島縣熊毛郡の唄に、とろり／＼な、さても此舟は瀬戸内海漕ぎ送りか、ヤレ、漕ではやらじで歌でやる。他國にもいふ。歌を歌ひつゝ舟をやる意味。

ウタノタビ唄の旅 昭和八年シンフォニー樂譜出版社刊、同社編輯部編、俗語民謡合せて五十四曲の樂譜を記す。

ウタノバ歌の場 歌うたふ所、即ち共同の労働で昔より歌を伴ふ場合の所。白ひき唄の例の如し。伊豫の妻たき唄に、歌の場に出

て歌はぬ人は、歌に上手か、お自慢か。

ウタマクラー歌まくら 遠州・三州の念佛踊に云ふ歌念佛を歌まくら念佛といふ。我親を野邊の送りに出て見れば、我親を千載駢に横込みて、立つ上煙が白雲となる云々。また ↓エンシウウダイネブツ

ウタンジ歌地 熊本縣人吉の白太鼓踊の場合の如く、囃子だけで踊られて後、音頭の歌が歌はれる所を歌地、歌入と云ふ。ウチグミオドリ打組踊 琉球で男と女が組んで踊ることを男女打組踊といふ。ウチコム打込む 踊の團體が踊るべき場所に、踊りつゝ入り来る事を云ふ。打込んでくると俗に云ふ。舞込むと同じ。ウタテラうつたて 意義不明。長州玉江の浦の大漁踊天狗拍子の舞に、初め惠比壽と大黒の舞あり、次に天狗拍子に移る、初めの二つの舞をウツタテといふ。「入江森名所圖會」ウツノミヤブシ宇都宮ぶし 文政五年版の「浮かれ草」にある。なんぼエ、長者でも、徳次郎にや勝てぬ、寺の寄進に練をあげたエ。何かの諷刺らしい。徳次郎は街道筋の部落で宿場女郎の居た所である。人の名ではないらしいが、こゝでは人の名らしくもある。

ウツミオンド内海音頭 愛知縣内海町の新尾崎。山崎傳史歌。尾張内海はヨリヤサ、南知多て名所、春にや山寺花見にお出でや櫻ねヨイ、櫻見よとてサ、よい櫻ね、ヨイトサ、ハトヨイヨイ、横瀬上戸の櫻色かお、ヨイヨイヨイ、チンチリガンノヨイヤサ。ウネマブシ采女ぶし 岡崎市に行はれる。昭和年代の作か。あさか山、影さへ見ゆるの故事に依り、采女ぶしと云ふ。背戸に出て見りや、あさかの山に、黄金まじりの霧がふる、オサ、霧がふる。「けさも通るは錦の手綱、じやこつ参りの金の牛、オサ金の牛」。采女かあいや涙の雨に、山はかすんで日は暮れる、オサ日が暮れる。

ウツミオンドイカミガ 門司市大里の盆踊。大里に馬寄と云ふ部落があつて、神功皇后三韓の役に九州の軍馬を集めて訓練したので、馬寄といひ、その時、土地の者が踊つて皇后の台覽に供したともいふ。以前は盆踊以外、酒宴・宮踊り・雨乞ひ等にも踊り、一に馬寄踊と呼んだ。樽や桶を打つたが、今は太鼓を打ち、昔は年頃の娘は、桃割れに豆絞りの手拭の類冠り、浴衣に白足袋、カッポン下駄を揃へたが、今は夏で夏装もある。音頭の樽を取巻いて、六動作の手踊で輪になつて廻る。音頭はタドキで、石重丸・鈴木主水・忠兵衛・能行等々、枕にふんな若イ衆、お女中方も、アラサコラサの囃子を頼む、囃子なければ、くどかれませぬ。そして囃子言葉は、ヤットコマカセー、ヤットエー、シヨレ、シヨレ、シヨイトコシヨイシヨイ。「わかかき」昭和五年八月號に依る。

ウツミオンドイカミガ 鹿兒島縣給良郡西園分村の初午祭に行はれる。馬を飾り立て、奉詣にきて踊らせる牛馬繁昌の祈りで、首に種々の色の布を下げ、胸に鈴を、足に藁香を穿かせて、数ヶ月かゝつて仕込んだ踊を踊らせる。首を振らせ足踏みをさせ、その後を人がをどつてゆく。昭和三年は二十八頭をどつたが、大正十一年には七十二頭をどつた。歌は、いさても見事な八幡馬場よ、鳥居にお鳩が菓をかける、花は舞鳥たばこは國分、燃えてあがるは櫻島。樂器はない。「民俗藝術」第二巻第五號にくはしい。

ウツミオンドイカミガ 鹿兒島縣給良郡西園分村の初午祭に行はれる。馬を飾り立て、奉詣にきて踊らせる牛馬繁昌の祈りで、首に種々の色の布を下げ、胸に鈴を、足に藁香を穿かせて、数ヶ月かゝつて仕込んだ踊を踊らせる。首を振らせ足踏みをさせ、その後を人がをどつてゆく。昭和三年は二十八頭をどつたが、大正十一年には七十二頭をどつた。歌は、いさても見事な八幡馬場よ、鳥居にお鳩が菓をかける、花は舞鳥たばこは國分、燃えてあがるは櫻島。樂器はない。「民俗藝術」第二巻第五號にくはしい。

ある。海が鳴る鳴る、海が鳴る、潮結の沖で海が鳴る、沖のがわやで海が鳴る、海が鳴つても唸つても、がわやの間の見ても、小舟に乗つて漁に出る、ささや雲丹や伊勢えびや、赤きあらかび白き鯛、乙姫様のお土産。ウメノキノサガリシエダ梅の木の下りし枝有名な民謡。十七八は眠いもの、梅の木の下りし枝を枕に。これを色々に部分的に唄ひなまる。「落穂集」卷二の柴刈風流その他に、ウラシマブシ浦島ぶし 丹後本庄濱、浦島太郎の故郷の海岸の歌。丹後浦島、鳥ぢやと云へど、鳥ぢやござらぬ、田の中ぢや、「今宵一夜は、浦島さまの、明けてくやしき、玉手箱」。「民謡の旅」

ウツミオンドイカミガ 岩手縣上閉伊郡のもの。お正月の事なれば、三ばうたての祝酒三杯飲んだ心持や、何より以て嬉しきや、嬉しき舞と囃さうぞ云々。正月の祝儀の舞か。ウレシノハナ嬉しの花 「舞謡集」の福岡縣

ウツミオンドイカミガ 岩手縣上閉伊郡のもの。お正月の事なれば、三ばうたての祝酒三杯飲んだ心持や、何より以て嬉しきや、嬉しき舞と囃さうぞ云々。正月の祝儀の舞か。ウレシノハナ嬉しの花 「舞謡集」の福岡縣

ウツミオンドイカミガ 岩手縣上閉伊郡のもの。お正月の事なれば、三ばうたての祝酒三杯飲んだ心持や、何より以て嬉しきや、嬉しき舞と囃さうぞ云々。正月の祝儀の舞か。ウレシノハナ嬉しの花 「舞謡集」の福岡縣

ウツミイカミガ



ると記し、明治四十三年版の森野小桃著『江  
差と松前追分』には、天保年間、座頭佐の市  
がケンリヨブシを創作し、新文句を考へてゐ  
たが、江差の一藝妓が計らず客の胤を宿して  
舌に病んでゐるのを見て、「色の道にも追分あ  
らば、こんな迷ひはせまいもの」と唄つた、  
これ江差追分の起原である。此の二説に依  
れば、天明と天保の差はあるが、座頭佐の一  
が始めた事になる。但しケンリヨブシは佐の  
一の創作ではなく、内地からの輸入である。  
これが江差に流行した事は、文句集に「あや  
子よければ、座敷がもめる、もめる座敷は、  
けんりよぶし」の唄があるので分る。こゝで  
あや子と云ふのは、海岸に建てられた假設の  
丸太小屋で舟乗相手に春を賣る女をあや子と  
呼んだのである。村田彌六は、大正五年に六  
十八歳、江差の人で追分の唄ひ手として聞え  
た。『忍路、高島、及びもないが、せめて歌集  
磯谷まで』。北海道は往時は神威崎より以東に  
婦人の渡航を禁じた爲め、せめて許された範  
圍まで伴はれたの意を寓する。「帯も十勝で  
そのまゝ根室、落石なみだは幌泉。」「待夜の  
長さを四五尺つめて、逢ふた其の夜で延した

い。」「板一枚の、底は地獄のあの舟よりも、  
舌の二枚が恐ろしや。」「ぬしの情けは丈にも  
餘る、なげに厚司がゆきたらぬ。」「花の松前  
紅葉の江差、ひらく函館菊の紋。」「松前のず  
つと向うの磯地が江差、朝の別れがないさう  
だ。」「ハヤシ言葉もある、なすび畑の南瓜め、  
赤くなるまで待つてくれ。」「一足四文のくつ  
穿いて、スタバタするなよ此の畜生。」「江差の  
五月は江戸にもない、呑んだ盆こち寄こせ。」「  
今は前唄と本唄と二通りの唄ひかたがある。  
例、前唄「江差の五月は江戸にもないとヤンサ  
ノエー、誇る鯉の春の海、海士が刈取る昆布を  
乾せばネー、蝦夷の濱邊の夏げしき。」「本唄  
夷も秋には錦を飾る、鹿の鹿さへ哀れなり、  
霜と雪とに萎れはすれどネー、わたしや蝦夷  
赤色かへぬ。」「或は更に、前唄「本唄後唄、乃  
至は前唄「本唄、送りの三つにも分ける。  
エシマブシ「江島ぶし 紀州海草郡の有田川  
畔の蜜柑取の歌。お後傳兵衛の猿廻しの歌の  
ふしの出所といふ。沖の暗いのに白帆が見ゆ  
るあれは紀の國蜜柑舟。」「蜜柑舟なら急いで  
おいで、江戸で賣子が待つて居る。」「江戸で賣  
子が待せねやせねど、内て仕切の金を待つて。

【郷土研究】第一巻第八號に見える。別に云  
ふ江島ぶしとは、江島某が里人に此の歌を教  
へた爲め、かく稱すると。  
エシマブシ「島ぶし 高知縣佐川町の盆踊  
歌。唄は陸月の末つかた、春めきながら牙え  
返る、袖のつらゝの時しらず、常盤御前の常  
磐木の、ヨイヤサ／＼、かくて續くタドキの  
歌。他に石重丸等がある。島ぶしの唄は繪  
島唄ともいひ、土佐でも土地に依り土儀を築  
き、その上に花盛なるものを置き、これに音  
頭や囃子が居て、取巻いて踊り、唄が終ると  
土儀で角力を取るといふ。  
エセンザカ「鐘鏡坂 ヲアホコモサ  
エセンブシ「えせん節 宮城縣本吉郡の唄。  
「雨は降る、ヤエ、船場に笠を忘れてきた、  
ア、トエ、笠も笠、お江戸で流行る伊達笠、  
ア、トエ、ハ、ヨイトコラ、サア、イトナ、  
ヘヤアン「ヤン。」「日本歌謡類聚」下巻には  
これを「ドヤぶし」と云ふ。別に「氣仙沼  
に名も無い島が一番ひ、朝起きて舟子出せ、  
溜げとさやぶる。」「  
エチゴオイワケ「越後追分 越後地方の追分  
だが、常の追分と大差ない。人に依り前歌を

本唄につける。或は前唄と送りの二つに分け  
る。蝦夷や松前、やらすの雨が、七日七夜も  
降ればよい。」「流れ／＼と着いたる先きは、  
黄金花咲く佐渡ヶ島。」「ヨイワケ  
エチゴオイワケ「越後おけさ 越後のおけさ。  
中心地不明。舟は二艇聯て港へ急ぐヨ、囃り  
や妻子のヤン／＼笑ひ顔。」「  
エチゴサンシ「タブシ「越後三宿ぶし 越後  
三宿の唄。追分に似る。わたしや三宿湊貝育  
ち、米のなる木はまだ知らぬ。」「碓氷峠で鳥  
が鳴けば、妻の身もちが氣にかゝる。」「  
エチゴジンク「越後甚句 佐渡に唄はる。」「花  
咲きや實なる、實なら合點なら、殿ごんし。」「  
ごんしは、ござれであらう。」「来た夜のしるし、  
唄でもさせ井戸端に。」「又、見送りませうと涙  
まで出たが、泣けてさらばが云へなんだ。」「  
エチゼンブシ「越前ぶし 文政五年の『浮か  
れ草』に、「アノヤ三國は、北國一の船着きな  
れど、じよなめく女郎さの、湯文字がびらし  
やら、昔や白かつたが、いま栗色だ、そだや  
れ／＼、そだじつだ。」「  
エツサツサオドリ「えつさつさ踊 岐阜縣益  
田郡小坂町の盆踊。小坂觀音堂の銀杏の木覆

の木、ドッコイシヨ、鳥の宿らぬ夜さはない  
ヨイヤサノ／＼エツサツサ。」「でかい物よな  
大層なものよ、ドッコイシヨ、小坂觀音堂の  
銀杏の木は、ヨイヤサノ／＼エツサツサ。」「今  
夜お出でりや持つてきておくれ、ドッコイシ  
ヨ、小坂觀音堂の銀杏の葉を、ヨイヤサノヨ  
イヤサノエツサツサ。」「  
エノシマコウター「江の島小唄 相州の江の島  
の歌。日本三辨財天の一つ。小寺融吉歌、中  
山晋平曲、清水和歌振。島の四月はヨ初巳の  
まつり、サノヨイトサノサ、富士も緑の相模  
灘、ひろふ濱邊の櫻貝、さくら貝、ハイノ／＼  
ハイノヨイシヨ／＼ナ、ハイノ／＼／＼ヨイ  
シヨ／＼ナ。大きな輪が廻ると共に二人づつ  
が入代り／＼廻る踊。  
エノシマノハヤシ「江の島のはやし 相州江  
の島の七月十三日より三日間の天王祭に、島  
の若衆が特殊の囃子の行列を仕立てる。曰く  
通り囃子の、かん松ばやし、唐人囃子、かん  
ばやし、熊神ばやし、點を打つものは古來名  
高く、ラツバ、チャルメラなどが入るのが珍  
しい。他に、笛太鼓・鉦・銅鑼・三味線・豆太鼓。  
歌は無い。【島】の第一巻第五號に詳しい。

エビスオクリウター「恵比壽送り歌 熊本縣球  
磨郡大畑町の恵比壽様は、舊の大晦日に宮を  
出て民家に遷座し、舊正月三日夜、宮に歸ら  
れる。お歸りの時に村民が歩きつゝ歌ふ歌。  
「花を求めて小車にのせて、春の山路もエー  
ヨサエーサラ／＼と、引かば躍きやれ、ノホ  
ンホ、ン、思ひに籠る、こひしはたれをや  
つれそふるよの、エーエーヨサ。」「歌意は直接  
えびす様と關係がない。何かの縁で歌はれ出  
したのであらう。  
エビスダラウター「恵比壽儀唄 秋田縣雄勝郡  
西馬音内附近の祭禮には、米俵を美しく飾り  
オカメの面をつけ、棒につけて若衆一同が遊  
ぎ神社に練込み奉納し、法螺貝を吹いて景氣  
をつける。此の時の唄うめでた／＼の若衆様  
よ、枝も榮えて葉も茂る。」「さても美し、お  
恵比壽だらを、村中繁昌と納め置く。」「  
エビスマイ「夷舞 夷に扮して舞ふこと。神  
樂その他に行はれ、面を着け、また磨けず、  
釣竿を持つて出て釣をし、遂に鯛を釣上げる。  
本來漁村の新年豫祝の舞踊であらう。エンブ  
リ(ヤエンブリ)の中の恵比壽舞は面なし、囃  
子をあしらつて自ら歌ひつゝ舞ふ。始め釣り





田の水口に、植ゑたる松は何松、次郎と太郎の若松、一なる枝には鏡はなる、二なる枝には金なる、三のあがりの小枝に、黄金の花は九つ、一つ取れや八つになる、朝日の長者と呼ばれた、呼びも呼んだし呼ばれた、朝日の長者と呼ばれた。なほエンブリに就いて「民俗藝術」第一巻第四號に中道等氏の長文の解説がある。ヤニビスマイ

オ

オイカケブシ 追掛節 鳥取縣東伯西伯兩郡及び出雲に歌はれる牛追唄。傳説では秀吉が大坂築城の折、大坂の伯樂孫四郎が唄ひ出したに始まるといふ。その後、伯耆大山の牛馬市場の賣買に、牛方は之を唄つて牛の前途を祝し、また常の牛を追ふ道中唄としても唄ふ。今日は衰へた。今日こなたに納まる牛は、角顔ようて氣がまと、所はじりうのたゝらどて、五歳の年まで育て上げ、五歳の年のその際、大和や河内に上る時、左にのうたをもがいた、赤ねを三尺まきつけて、背ほそびき

で巻き立て、大和に結んで高々と、兩黄のゆたんをほわと掛け、大和や河内に上る時、牛の手本とほめられた。伯耆大山目に立つものは、金の鳥居に金の馬、蓮の蓮華の手水鉢、下から水が涌上る、どこのどなたの御寄遣か、東伯耆は瀬戸村の、苗字が竹信、名が左衛門、お山で代々名を継ぎ、大神山となあられたかな、少し下りて伯樂座で、杉の木、檜のその中で、伯耆や因幡の伯樂衆が、袖の下から値をきめて、お手手叩いて何百兩、これで伯樂がやめらりよか。唄のふしは頗る悠々たるものがある。

オイセオドリ 伊勢踊 伊豫多郡地方の皇大神宮を祀る宮で、十人ほどの人が集り、神歌を歌ひ御幣を振り、太鼓や手拍子に和して踊るものをいふ。民俗藝術第一巻第七號に見える。『俚語集』の廣島縣豊田郡の項にも記す。お伊勢踊は伊勢踊であらう。ヤイセオドリ  
オイセザカブシ 伊勢坂ぶし ヤイセザカブシ  
オイセブシ 伊勢ぶし 『全長崎縣歌謡集』に南長崎郡北魚目村の唄として、思たこちや

ヤア、叶ふた世のヨサア、ヨイヤナ、末はヤア神に參れば、ヨイヤサ、御利生が、ヤゴさる世のヨサ、ヨイヤサ、ヤア、親のお蔭かヤア先祖のヤア蔭か、ヨイオササ、日本は一ぢやいな、また一ぢやいな、これも日本の御蔭かなハイヤオイ。また、神に大願、神に小願、悪事災難、鶴が舞ふ舞ふ、日本の上に、日本繁昌、扇ならかなめ、日本廣がる、日本ひろがる、めでたいな(難し言葉省略)がある。お蔭踊の一種と思はれる。  
オイセマイリ 伊勢参り 伊勢参りの道中唄 ヤイセオドリ  
オイトコト 秋田縣のうた。「正月門に門松、二月初午、三月おひなの節句、四月釋迦の御誕生、五月轡り、おまけに登巻團子、六月祇園祭で七月七夕、おまけに盆ぢやさうな、八月月見で九月は菊どき、十月神無月よ霜月煤はき、師走は餅つき、おまけに掛取さんよ。『秋田ふき』に據る。

オイトコトウチ 秋田縣のうた。『正月門に門松、二月初午、三月おひなの節句、四月釋迦の御誕生、五月轡り、おまけに登巻團子、六月祇園祭で七月七夕、おまけに盆ぢやさうな、八月月見で九月は菊どき、十月神無月よ霜月煤はき、師走は餅つき、おまけに掛取さんよ。『秋田ふき』に據る。  
オイトコトウチ 秋田縣のうた。『正月門に門松、二月初午、三月おひなの節句、四月釋迦の御誕生、五月轡り、おまけに登巻團子、六月祇園祭で七月七夕、おまけに盆ぢやさうな、八月月見で九月は菊どき、十月神無月よ霜月煤はき、師走は餅つき、おまけに掛取さんよ。『秋田ふき』に據る。

松粉屋の、粉屋の娘は、なるほど良い子だ、あの子と添ふなら、三度一度は手鍋も下げましよ、おまんまも焼ましよ、おつけも仕掛けましよ、それで粉箱置いて、飯間のはづれから、鏡子のはづれまで、粉よしよしとナ賣らばなるまい。あたりが元の形らしい。後に何故か仙臺地方に流行した。『小唄傳説集』に、オイトコトウチは天保年間の印旛沼開墾の時に人夫が唄ひ、江戸まで普及した。女主人公の郷里は、千葉縣山武郡千代田村大里區白旗であると記してある。  
オイトブシ おいとぶし ヤオエトブシ  
オイヤナブシ おいやなぶし 兵庫縣城崎郡餘部村の歌。山野の仕事の時に歌ふ。歌を歌ふなら張りあげてシャンと、歌も仕事の花ぢやものオイヤナ。

馬士唄が追分ぶしとなつた。追分五町ある宿だ、歌で通れば二町もない。『追分辨形』の茶屋で、ほろと泣いたを、いつ忘りよ。この歌は信州の二字を冠せもするが、冠せないのが古い。辨形の茶屋は今も残る大きな宿屋で、遊女の數も多かつた。追分、香掛、輕井澤、この三宿で留めて留らぬ客はない。『碓氷峠の権現様は、わしが爲めには守り神』、小路出て見りや津間の山に、けさも三筋の煙立つ。『餅は大福、娘はお福、なぜか繁昌の峠茶屋』。  
「一に追分、二に輕井澤、三に坂本ま、ならぬ。『碓氷峠で坂本見れば、女郎が化粧して客待ちる。』津間山から鬼やケツ出して、鎌でかツ切るよな尻を垂れた。これは爆發の音を云ふらしい。馬子は歌が終ると、ア、百に三升の豆ばか食やがつて、尻ばか垂れやがつて、どしばたすかい、歩めやい、ハイ、ハイ」と馬を叱つたといふ。  
右の追分は、後に他と區別して信濃追分といふ。信濃追分は越後に入つて越後追分となり船唄となつて北海道に入り、江差追分、松前追分となつた。出雲の出雲追分の年代は不明。こゝに疑はしきは小室ぶしとの關係で、小室

は小諸が本來で、小路出て見りや津間の山にけさも三筋の煙立つが古いらしい。小室ぶしは近松の淨り丹波興作にも出た。文政五年版『浮かれ草』には追分ぶしとして、津間山では、わしやなけれど、胸に煙が絶えやせぬ。ヤコムロブシ ヤシマオンドブシ  
オウマゾロイ 御馬揃ひ 萬歳が武家乃至は馬持ちの農家に祝儀にゆき、馬の爲めに歌ふもの。『俚語集』所載の廣島縣甲奴郡のそれと同じ目的のものらしい。  
オエサシマイ 御師差舞 萬歳の中の鳥刺の事。ヤイトリサシ  
オエドオドリ 秋田縣のうた。『俚語集』に三重縣一志郡の盆踊の一つとして記す。お江戸の城を拜見すれば、四方は石垣御影石、光り輝くやら見事。次に東西南北の櫓に昇りて景色を望み、終り毎に、やら見事と云ふ。  
オエトブシ 秋田縣仙北郡中川村の唄。おえとくと勝負がならぬ、勝負分らぬ西東。おえとくと勝負と見えた、勝負分らぬ夜明けまで。おいとを詠りおえとと云ふらしい。拳の唄。  
オオイトミナト 大分港 大分の新小唄。「昔

こひしい南蠻船の、しのお面影、神宮寺、ソ  
 リヤハッヂヤ〜、ソ〜ヂヤアナー」。

オオウー大歌 山口の阿武郡の田植歌。ひ  
 るまは出来たが、箸を削れ殿原、さんらりさ  
 らりと箸を削れ。『俚語集』、ヤエウタ

オオウー大歌 『俚語集拾遺』の、山口縣阿  
 武郡、主として漁業者間の祝儀歌として、此  
 盆に花が咲く、お、かちの花が七重咲く、さ  
 りあげ、さりとる、さるは八重も咲く、伊勢  
 て手くてがぶ〜飲まばや、お泊なれば此宿  
 に、今もお床にも圓札を積みそろへた、どう  
 て此家は仕合せは良かる、イヨハヨカオイ。  
 オオウー大歌 三重縣志摩郡鏡浦村大字  
 浦村の舊六月十四日の天王祭に、大小の鼓に  
 笛を入れて、謡曲舞々の「老いせぬや葉の名  
 をも」云々、百萬の「彌陀娘む人は雨夜の」  
 云々を歌ひ、大謡と稱する。

オオウー大内踊 三重縣安濃郡明合  
 村で明治四十三年まで踊る。花の都の平安城  
 と申するは、代々帝の御座所、先づ南門は楡  
 皮葺き、築殿と申するは、神拜即位の御殿  
 なり。云々と御所の有様を述べる。

オオエヤマ大江山 『俚語集』に、三重縣安  
 濃郡の祇園踊歌を記す中に見える。大江山の  
 鬼神は、都へ出てて騒動なす、高い低いの  
 隔てもなし、数多の人々つかみ取り、源の頼  
 光は三社の神に祈誓を掛け、中略、残らず鬼  
 神を平らげん、神の御利生か有難い。本來は  
 大江山に因む山鉾を曳く時の歌か。

オオウー大踊 大群衆の踊の意。また  
 規模大きく經費を要する爲め、數年目に本式  
 にするを大踊、毎年略式にするを小踊ともい  
 ふ。或は毎年やりても淡路の阿萬のそれの如  
 く、二組の踊ある場合、規模大なるを大踊、  
 小なるを小踊といふ。ヤフリウウオドリ

オオウー大踊 『全長崎歌謡集』に、  
 北松浦郡慶島(古く竹島)に雨乞の折にのみ行  
 ふ大踊ありとして、歌詞十章を記してある。  
 「思ふ方より文もろて、手に持ちながら忍ぶ  
 かな、そなたならでは、文見る人は如何にせ  
 ん。」「思ひは捨て上情けはノウ、夜すがらに  
 眺むる月のはかなさや、よしないの〜」。ま  
 たうめでたや御代の始めより、圖重りて御代  
 久しかれ〜。これはスエ踊や六調子にもい  
 ふ。ヤスコオドリ、ヤロクチャウシ、いは  
 ば北松浦郡の大舞な踊である。

オオウー大踊 島根縣邑智郡の盆踊の  
 一つ。『俚語集』に、「お前の庭に踊が参る、  
 黄金の門を押開き、一の門開き、二の門開き  
 三〜ろえて押開き、三〜ろえて開いて見  
 れば、あら美しのまりの庭、まりなる庭へ泉  
 が涌いて、釣瓶で酌めど盡きもせん、釣瓶の  
 水で茶を立てさせて、飲まばや伊勢のそめつ  
 けの」。備考、この歌は各自歌をつりて拍子  
 にあはせ、且つうたひ且つをどる時に用ふ  
 とあり。恐らく伊勢踊であらう。

オオウー大踊 『俚語集』に廣島縣安佐  
 郡の大踊として、座めき、ゆき、ふみ、ゆり、  
 ゆきふみかへりの各節に分ちて歌詞を記す。  
 また同郡の大奇木大踊として、御庭入り、一番  
 右ねち、二番内かむき、三番外かむき、四番左  
 ねちとして、それ〜の歌詞を記す。神事の  
 舞らしい。前者のさめきの歌詞の一例、今年  
 の稲の葉色のよさよ、黄金の玉が露にふる。  
 また長篇もあり。後者の右ねちの一例、テン  
 カカカ〜、十五夜の月に朝日が指しそふて、  
 日本舞く有難や、シャン〜。

オオウー大踊 三重縣南牟婁郡阿田和  
 町の盆踊に大踊と云ふものあり、その歌を大

踊ふし。鶴龜・雁は鶯・鯉船等。雁は鶯は、  
 「又出たよエ、イエイ、雁は鶯、身は鳩羽色、  
 ハリヤリヤイ、髪は鳩の濡れ羽色、しよんが  
 いな、ア〜ぬれ羽色、髪は鳩の濡れ羽色、し  
 よんがいな」。

オオウー大垣音頭 大垣市の唄。野  
 口雨情歌、藤井清水曲。思ひ出してはヤツコ  
 ラサ、水門川のソコドツサイ、橋の上から川  
 しも眺め、水に洗さず、又おいで、ハヤシ〜ハ、  
 かうなりや見せましと大垣の、水で磨いた玉  
 の肌」。

オオウー大木戸音頭 東京四谷區大  
 木戸花街の新小唄。竹島操二歌、柏庄太郎曲。  
 長唄式の文句ゆき省略。同じ人々の作に大木  
 戸メロデイあり。大木戸よいとこ、やさしの  
 里よ、箱根原見るやうに、涼しい御苑に月  
 が出りや、戀の關守誰がする、ナンヂヤモン  
 チヤ、コンガラガツテ、ワカラナイ」。

オオウー大木道 石川縣金石町の船唄。  
 音頭「ホーランエー、今日は吉日ヤンエー」、他  
 「ヤツトヨセー、ヨ〜イヤナー」、音頭、今日は  
 吉日、日柄も良いてヨ〜イトナー」、他「ホー  
 ラ、ソ〜レハ、アラドツコイシヨ、ヨ〜イト

コ〜、ナー」。また、白歯がよいか、染歯がよ  
 いか、につこり笑ふたら染歯もよかる」。

オオウー大久保踊 淡路の三原郡八  
 木村大久保に、雨乞や盆に行はれ、その特色  
 は踊子が隔りつゝ、観客の前を通り過ぎてゆく  
 ことで、大太鼓と拍子木を打ち、音頭が歌を  
 歌ふが、それは單に拍子を取る程度の交渉で  
 ある。男のみのもの、男女が果と與右衛門、  
 源藏と千代に舞して机や鎌や刀を持つて立廻  
 るものを道具踊と云ふ。音頭は、切音頭、クド  
 キ音頭、五尺ぶし、都ぶしがあがるが、普通は廿  
 六字の歌を歌ふ。大久保踊の名は新しく、以  
 前は盆の手踊とのみ云ふと。

オオウー大澤ぶし ヤガラシヤレ  
 オオウー大島甚句 世に大島甚句と  
 誤まつて云ふものは大島ぶしの事で、土地で  
 は甚句と云はぬ。ヤオオシマブシ

オオウー大島ぶし 伊豆大島の唄。伊  
 豆七島共通の島ぶしが、大島ぶしの名に依て  
 東京に知られる。わたしや大島、御神火育ち  
 胸に煙は絶えやせぬ」が名高いが、これは替  
 唄である。御神火は噴火山三原山の煙の意。  
 「千ヶ崎沖まぢや見送りまじしが、それから

オオウー大踊 先きは神だのみは、元村、或は岡田村よ  
 出帆して横濱方面へ向ふ船を、島はづれまで  
 見送る風俗をいふ唄。相模灘をば兩手で拜め  
 可愛い旦那ツ子の乗るうちには、囃子言葉はハ  
 イノハイ又はガツシヤ〜と云ふ。島の者は  
 男女朝夕に唄つて、往々新作して所懐を陳ず  
 る。ヤシマブシ、ヤミオクリノウタ

オオウー奥州ぶし 文政五年版『浮  
 かれ草』の國々田舎唄の部にある。漢字をあ  
 けると「わしを大根畑へ、おツころばしてそ  
 して、女房になれでは厭よと泣く、眞實だ  
 ばなけれども、衣裳コ痛ましさに、侮辱で  
 す、やです〜と云はねえもんです」。何に據  
 つたかは不明。

オオウー大背美 大背美郡の略。鯉の大漁  
 の時の祝ひ歌。長崎では三味線入りで花舞界  
 にも行はれる。うめでたい物で祝ふなら、鶴は  
 千年龜萬年、東方朔は九千年、浦島太郎は八  
 千年、チト賑に上らんせ、旦那百まで、わし  
 や九十九まで、共に白髪の生えるまで、それ  
 もさうかいな、實々さうぢやいな、さてもめ  
 てたい〜よいやさ〜五三の桐よ、何處の  
 染屋が〜よいやさ〜エーサ染めたやら、



いふ。往來の人が食を恵むからである。慶應年間には諸國に天より伊勢神宮の神札が降りその結果諸國よりエヂヤナイカ〜と云ひつゝ参宮の者が殺到した。お蔭をどりは、お蔭おしと同じく、その時の道中歌で、今も酒宴などに歌ふ。お蔭ありやこそ世間の人は、怨を離れて施行する。

オカサオカサ 伊勢に唄はれる。京都より参宮の道中の唄、扱けました、今年世がよてお蔭で参る、神の恵みて手を引かる、日本國中みなお蔭、オイスアヨイソラ……と始まる。

オカサオカサ 熊本唄。元は参宮の唄らしい。お山名所は、胸突き雁木に櫻馬場、石の玉垣、手水鉢、名代は茶飯の田楽屋、お蔭とせ、扱けたとサ。また、おまや百まで、わしや九十九まで、辛抱して、共に白髪が生えるまで、あかざの杖を突いて、お寺詣り、お蔭とせ、扱けたとサ。

オカサオカサ 土佐の歌。「思ひ立つ日を、わしや吉日と定めます、かいぎよ一つで國を出で、あらい箱根の御番所を、お蔭でサ、扱けたとサ。やはり参宮の歌である。の唄により異なる。

オカサオカサ

オカサオカサ 岡崎 岡崎女郎唄は寛永の頃より流行つたらしく、筆の蹟も残つてゐる。近年筆の手ほどきに用ゐる短松小松は、之を少し直したもので文句は替唄である。始めは「岡崎女郎唄、岡崎女郎唄、岡崎女郎唄はよい女郎唄、よい女郎唄」と歌ひ、之に種々の作りかへがある、今日各地の神楽や獅子舞の囃子に岡崎といふ曲の行はれるのが、その名残らしい。なほ岡崎唄とは、右の「岡崎女郎唄」を唄ひつゝ踊る事らしく、「渡魂紙料」に岡崎を踏み柴垣を打つといふ事が見える。踏むとは足を踏む事を専らにするからであらう。

この短い文句をくり返し／＼踊ると見える。古くから各種の岡崎があるが、右に掲げた筆の手ほどきは平調子。オカサオカサ 岡崎小唄 岡崎市の唄。野口雨情歌、中山晋平曲。「花は櫻木、人なら武士よイヤサノサ、武士と云やれば、武士と云やればイヤサノサ、三河武士よイヤサノサ、可愛がれなら可愛がる、通りが／＼にや寄りやしやんせ」。後の可愛がれ云々は、本文の唄により異なる。

のて一にソラランと云ふ。本文は、儼くるかと稻荷に聞けば、どこの稻荷もコンと鳴くチヨイ。「沖の鷗に汐どき聞けば、わたしや水鳥、浪に聞けチヨイ。「沖の鷗が物いふならば、便り聞いたり聞かせたりチヨイ。オキエマツリおきえ祭 「三國名勝園會」に藤原持府郡山川大山村の海岸で、不漁の時漁人が佐多御崎權現を勧請して行ふ祈禱の歌舞。多羅王・馬水王・雲之王・八大龍王・御崎御前・后王・色幣王、各一役づつを禱宜が舞ひ、次に豊玉王と云ひ、鹿を射る少年と内侍の舞、次に彦火々出見尊の舞、次に沖津得尾丁舞、舞・舟歌・くどきと續いて終る。最後は浦人廿餘人が舞ひ、酒になり歌になる。オキエ祭の名義は不詳。

オキエマツリおきえ祭 「三國名勝園會」に藤原持府郡山川大山村の海岸で、不漁の時漁人が佐多御崎權現を勧請して行ふ祈禱の歌舞。多羅王・馬水王・雲之王・八大龍王・御崎御前・后王・色幣王、各一役づつを禱宜が舞ひ、次に豊玉王と云ひ、鹿を射る少年と内侍の舞、次に彦火々出見尊の舞、次に沖津得尾丁舞、舞・舟歌・くどきと續いて終る。最後は浦人廿餘人が舞ひ、酒になり歌になる。オキエ祭の名義は不詳。

オキエマツリおきえ祭 「三國名勝園會」に藤原持府郡山川大山村の海岸で、不漁の時漁人が佐多御崎權現を勧請して行ふ祈禱の歌舞。多羅王・馬水王・雲之王・八大龍王・御崎御前・后王・色幣王、各一役づつを禱宜が舞ひ、次に豊玉王と云ひ、鹿を射る少年と内侍の舞、次に彦火々出見尊の舞、次に沖津得尾丁舞、舞・舟歌・くどきと續いて終る。最後は浦人廿餘人が舞ひ、酒になり歌になる。オキエ祭の名義は不詳。

オキエマツリおきえ祭 「三國名勝園會」に藤原持府郡山川大山村の海岸で、不漁の時漁人が佐多御崎權現を勧請して行ふ祈禱の歌舞。多羅王・馬水王・雲之王・八大龍王・御崎御前・后王・色幣王、各一役づつを禱宜が舞ひ、次に豊玉王と云ひ、鹿を射る少年と内侍の舞、次に彦火々出見尊の舞、次に沖津得尾丁舞、舞・舟歌・くどきと續いて終る。最後は浦人廿餘人が舞ひ、酒になり歌になる。オキエ祭の名義は不詳。

オキエマツリおきえ祭 「三國名勝園會」に藤原持府郡山川大山村の海岸で、不漁の時漁人が佐多御崎權現を勧請して行ふ祈禱の歌舞。多羅王・馬水王・雲之王・八大龍王・御崎御前・后王・色幣王、各一役づつを禱宜が舞ひ、次に豊玉王と云ひ、鹿を射る少年と内侍の舞、次に彦火々出見尊の舞、次に沖津得尾丁舞、舞・舟歌・くどきと續いて終る。最後は浦人廿餘人が舞ひ、酒になり歌になる。オキエ祭の名義は不詳。

オキエマツリおきえ祭 「三國名勝園會」に藤原持府郡山川大山村の海岸で、不漁の時漁人が佐多御崎權現を勧請して行ふ祈禱の歌舞。多羅王・馬水王・雲之王・八大龍王・御崎御前・后王・色幣王、各一役づつを禱宜が舞ひ、次に豊玉王と云ひ、鹿を射る少年と内侍の舞、次に彦火々出見尊の舞、次に沖津得尾丁舞、舞・舟歌・くどきと續いて終る。最後は浦人廿餘人が舞ひ、酒になり歌になる。オキエ祭の名義は不詳。

オキエマツリおきえ祭 「三國名勝園會」に藤原持府郡山川大山村の海岸で、不漁の時漁人が佐多御崎權現を勧請して行ふ祈禱の歌舞。多羅王・馬水王・雲之王・八大龍王・御崎御前・后王・色幣王、各一役づつを禱宜が舞ひ、次に豊玉王と云ひ、鹿を射る少年と内侍の舞、次に彦火々出見尊の舞、次に沖津得尾丁舞、舞・舟歌・くどきと續いて終る。最後は浦人廿餘人が舞ひ、酒になり歌になる。オキエ祭の名義は不詳。

オカサオカサ

オカサオカサ 小笠原島の歌 明治年代の新聞切抜に見える。ミネといふ女の作が二つある。「月夜蘭夜と云はずにおじやれ、いつもバナ、の下は蘭」。山へおじやろか背負籠背負つては、月が出てぞも知らぬだら」後の歌はミネの情人が主人に厩使され夜も山へ獲ぎにゆく事を嘆くものといふ。また、おがな思ひをどさくさ積んで、浪にもませる兵庫丸。おがな思ひは我思ひで、兵庫丸は月一回る日本郵船の汽船。また、おはや日も暮れ夕雲さがる、今日の十五鐘も占めたもの。厩使される勞働者が、夕方となつて勞働より解放される喜びを歌つたもの。

オカサオカサ 可美し岡山 岡山の唄。佐藤天岳歌、原田比古士良曲。「をかし岡山御存じか、城は黒くて名は鳥城」。同じ人々に「岡山萬歳」の作あり。

オカサオカサ 房州の歌。乞食の娘お勝の美を歌ふ。お勝〜と名は高けれど、親は相續てヨシヤラマカノセイ乞食する、ヤヤレ〜。「たとへお勝が乞食の子でも、わたしや吉野の花と見る」、「花と見られて咲かぬもくやし、咲いて見せまじよ、咲かせま

文明年間に肥前須古の浪人法義が福重村桑原に住み、大サツマといふ踊を教へたのが、今の沖田踊で、幕府時代は領内の祭や慶事に用はれたといふ。歌は凡て閑房の事を云ふ。「寢た寢んな、枕こそ知る、閑枕に聞はばや」。打叩き、物を問へども、閑枕は物を云はばや。「來ば來いよ、來ずは投げさい、閑來ちや來うて、その夜が明けぬか」。來も來たり待ちも待ちたり、閑たぶさに、露のうくほど。文字の並びと問答體が面白い。他に記す。今は一定の日に行はず、行ふ時は笛太鼓を鳴す。他の歌詞に、「こちころべ、あいのしやくは、ちやおよれば、かたのいたえん、ひけ〜き、まわりこちやこで、すやはんばと、おろせこばのちや」。

オキノカモメ 沖の鷗 「ひなのひとふし」に飽田ぶりとして、海のおかさをちどりとへば、わしはうき鳥、浪に問へ。これが次第に變化して、沖の鷗に汐どき問へば、なぞとなつた。汐どきと云へば大した意味がない。海の深さは心の眞實の深さを指してゐる。オキノクニシ 陸鼓の唄。陸鼓の名物ドツサリ積んで、歌を流して船

オキノカモメ 沖の鷗 「ひなのひとふし」に飽田ぶりとして、海のおかさをちどりとへば、わしはうき鳥、浪に問へ。これが次第に變化して、沖の鷗に汐どき問へば、なぞとなつた。汐どきと云へば大した意味がない。海の深さは心の眞實の深さを指してゐる。オキノクニシ 陸鼓の唄。陸鼓の名物ドツサリ積んで、歌を流して船

オキノカモメ 沖の鷗 「ひなのひとふし」に飽田ぶりとして、海のおかさをちどりとへば、わしはうき鳥、浪に問へ。これが次第に變化して、沖の鷗に汐どき問へば、なぞとなつた。汐どきと云へば大した意味がない。海の深さは心の眞實の深さを指してゐる。オキノクニシ 陸鼓の唄。陸鼓の名物ドツサリ積んで、歌を流して船

オキノカモメ 沖の鷗 「ひなのひとふし」に飽田ぶりとして、海のおかさをちどりとへば、わしはうき鳥、浪に問へ。これが次第に變化して、沖の鷗に汐どき問へば、なぞとなつた。汐どきと云へば大した意味がない。海の深さは心の眞實の深さを指してゐる。オキノクニシ 陸鼓の唄。陸鼓の名物ドツサリ積んで、歌を流して船

はゆく。「元弘の昔しのか黒木の御所に、浪が寄せます、ザワ／＼と。」見島高徳櫻を削り、赤き心を巻いて置く。現行のものに古い歌は見えぬ。↓ドツサリブシ

オサタマヨササブシ 奥多摩よささ節 東京府奥多摩地方の唄。野口雨情歌、中山晋平曲。「青梅青梅とエ、シヨコ／＼、青梅の町はヨ、帯の長さもエ、シヨコ／＼、ヨササノサ、あゝるものをヨ。」

オサトネシンチウ 奥利根新調 上州奥利根地方の温泉のためのうた。十鼓善慶歌、町田嘉京曲。「利根は奥利根、さつと来た／＼、青葉涼しく七湯が沸いて、立つは小波あてすがた。ハヤシヨ、奥利根湯どころ、奥利根名どころ、溪の流れが、さつとさら／＼。」

オサリ送り 江差追分や秋田追分は前唄と本唄と後唄に分れる。越後追分は二つに分けて前唄と本唄、或は本唄と送りと云ふ。また長い歌の最後の一行の文句をオサリと云ふ。↓オモイズクシ

オサリオドリ送り唄 迎へ唄に對する言葉。即ち盆踊の最後の場合の唄をいふ。送り火と同義。對馬に残つた言葉。「旅と傳説、第八巻

オサエブシおさへぶし ↓アラタマ

オサキオドリ御先踊 祭禮で各種の踊が出る中、一番先に出るものをいふ。↓オオモンオドリ ↓サキオドリ

オサマジンクおさま甚句 愛知縣北設樂郡地方の盆踊唄、オッサマとも。「おさま甚句は何處から流行た、三州振草オサマ下田から。」

「お出でましたか、待ちかねました、草鞋お紐はわしがとく。草鞋お紐はとかでもよいが、早く床取れ寝て話す。」

オサヤブシ大踊ぶし 熊太縣八代郡鏡町地方の唄。文化文政の頃、肥後藩が野津手永沖に土木工事を起した時の唄。給仕女お菊の美を讃へた唄なぞ残つてゐる。名所々々と大踊が名所、大踊名所にや水がない。「水がないなら名所た云はぬ、水がないなら片名所。」また「大踊には掛りとがないが、お菊見たさに汐が／＼り。大踊お菊を花壇にすまて、花と見比べ見とごさる。」↓シンチブシ

オシマヨおしまよ 青森縣下北郡田名部町を中心とする盆踊。南部藩廿八世重直が七月十五日に老若を代官所に集めて踊らせた時、

第七巻に記す。

オサリビウシ送り拍子 胸に大太鼓を附ける者一列に並ぶ。一方の端の者三本の撥を先づ持つて、我が太鼓を打つてから一本を隣に渡す、かくて順々に渡すを云ふ。藤州の藤子田に行はれる。↓ハヤシダ

オサアライウサ補洗ひうた ↓サケツクリウタ

オケサおけさ 新潟縣の代表的民謡。その起原に諸説あつて、一に、新潟の藩が伺主の窮乏を救はん爲め、藩政となつて歌ひ出したと云ふ。これは「おけさ正直なら傍にも難しよが、おけさ猫の性でじやれたがる」の歌に因むらしい。二に、佐藤信忠の母尼となり、奥州より越後に出て来た時、平家滅亡のしらせを聞き、袈裟を着た僧喜して踊つたに依るといふ。おけさを御袈裟と解したので或は此の唄が以前は念佛踊より脱化した事を傳へるのかも知れぬ。三に、新潟の某家の娘おけさ、戀人が佐渡に歸つたのを嘆いて歌ひ出したと云ふ。「来いとゆたとて」に因む話らしい。四に、上方より越後小千谷に来て遊女おけさと名乗つた者が歌ふと。或はオケサは

おしまと云ふ美人の美音が評判となり、その唄が弘く行はれる基となつたといふ。田名部おしまこの音頭とる聲は大安寺柳の柳の聲」といふ歌まで残つた。昔は八戸を中心に三戸郡一帯に流行したもので、今は土地に依り、ウシマコとも云ふ。今の八戸の白銀地方のオシマコの唄には「摘た／＼、雨子の衣裳は、どこの染屋が染めそへた。」「唄をどるも昨日今日ばかり、明日は山々草取りに」等がある。始めに「なにやとやれ、なにやとなされたちやい、なにやとやれ」を唄ふ。元は樂器なく、今は太鼓を打つ。頬冠り、白足袋はだして踊る。振は十二手の手踊で、「民俗藝術」第五巻第四號に木田安次氏の記述がある。

オシカマイお舞舞 地蔵舞等の一種と見える。舞に扮しての座敷舞の一つ。山形縣最上郡の歌謡「俚語集」に見える。六千世界は「カケ舞、浮世ぢやな」「皆教へは我ならで」カケ天にも地にも我一人、「心の迷ひ打過て悪といふ字を追拂ひ、カケあらた也」お舞のばけは出たわえな、カケササ拜ましやれ、「あら有難や」。

オシウオトシ和尚落し くはしくは、九

十七の如く鐘を意味するか。又は支女おし其の他の例の如く人名より出たか。長野縣南安曇郡では結婚歌に「おけさ、それ／＼前座や落ちるよ、落ちどくされど二度目にや掛けぬ、ソレ／＼」と歌ふと「俚語集」に見えるのも参考になる。また佐渡おけさは元はハンヤぶしと稱したと云ふのが眞實ならば、西國のハンヤぶしと何等かの關係あるべく、又、東北各地のアイヤぶし、アエヤぶしとも交渉あるらし。越後一國では先づ出雲崎に起り、今の柏崎オケサがその面影を残すと云ふ。事物索引「おけさの項を見よ。」

オケサゾメおけさぞめき 佐渡おけさの前身は佐渡の花婿界に行はれるオケサゾメキなりといふ。

オケンケブシおけんけぶし 熊本の唄。「長いもあれば短いも、あるはお侍の腰の物、オケンケケン、オケンケ喧嘩ぢや、出らしやんせ、早う早うちうたい、エーコツシヨ、手が廻らん、棒持つてこい。」

オコシコウタ起小唄 愛知縣起町の唄。「おこし櫻の堤の盛り、流刺髪の花ふとき、あの子戀しや風うらめしや、可愛いあの子の髪み

州赤間ヶ關和尚落し。小間物屋の娘お杉(お染とも)が、寺の和尚をくどき落して破戒させる物語。各地に今も盆踊に踊られる。

オスガタブシお姿ぶし 徳島縣那賀郡地方の奏鳴唄、奏踏うた。「お姿吉野の」。會ハハヨイヨイナ、「糸櫻一枝折らうと思へども、ハハヨイヨイナ、殿の物なら折られまい」、合唱「あれさうぢや、折られまい」。その他「俚語集」。また、同書拾遺に同縣勝浦郡の記す。「泉につるべが懸をする、それ見て君を思ひ出す、サンサヨホーヤ、水鏡」。近年「民俗學」第三卷第十二號に精しい記事が見える。「晝は涼目でお姿を、見て楽しんで草を取る。夜は嬉しや側の花が元唄かとある。ハヤシは前述と多少ちがひ、私の病は戀病、ハハヨイ／＼知らぬ父上母様は、ヨイナ／＼、物怪の故かと思ひこみ、ヨイ／＼、山伏さんや先達をヨイナ／＼、呼んで私をみせの花、ヤツトサノサ」。

オスギオタマお杉お玉 伊勢の間の山の間路傍で三味線を弾く女を云ふ。參詣の者が顔を目掛けて錢を投げると撥で受ける。旅人の着物に依り、綺さん紺さん中乗りさん、やてか

オサエーオコシ





ら、こはいてならぬ、夜明けがらすの渡るま  
で。『民俗藝術』第二巻第七號。  
オドリオツブス踊を演ず 盆踊なぞで出来  
た輪が崩れること。信州諏訪ぶしに「踊りつ  
ぶすな、小若イ衆ども、おらが踊るは盆ばか  
り。踊をこはすと云ふも同じ。踊を立てるに  
對する言葉。

オドリオドリ踊をどらば 「をどり踊らば  
しなよく踊れ、しなのよいのを縁にとる」の  
歌。全国に行はれる。「ひなのひとふし」に  
サンサ踊の歌として「サンサ踊らばしなよく  
踊れ、秋がきたらば縁にとるサンサ」とある。  
上の句にも下の句にもシナヨク、シナノヨイ  
を云ふのはシツコイ。サンサ踊の方が言外に  
意を含んで風情がある。

オドリカサ踊 踊に用ゐる笠。恐らく勞  
働には適せぬ一時的の物であらう。新潟市附  
近の龜田町の盆踊では、神社境内の踊場の傍  
で踊笠を賣る。

オドリカサ踊 盆踊は神送りの一つであ  
るため、送られる亡者を盆神、又は踊神とも  
いふ。琉球では獅子舞の獅子を踊神と云ふ。  
オドリカサ踊口説 盆踊にクドキを歌ふ

場合をいふ。クドキはクドキぶしで、これが  
盆踊として用ゐられたのは遅くも萬治六年以  
前で「友南流踊くどき」(萬葉論所載)、及び  
「古今役者物がたり」の踊口説あたりが文献で  
は古い。或は踊くどきは、先づ歌舞伎に起つ  
て一般の盆踊にも入つたかも知れぬ。

オドリコをどり子 踊る者を男女を問はず  
云ふ。一方、舞子踊子の名は元祿頃より大都  
會に行はれ、それは娘に限り、酒席にも侍し  
たが、舞士舞踊方面では關係がない。をどり  
子と子の字をつけたのは、若衆や娘の如く、  
村の古老から見ても子供同然の年少者が多くの  
場合の神事に、指定されて踊つたのに基くら  
しい。

オドリタンゴ踊丹後 踊浴衣と同じ。盆踊  
に着る浴衣。「盆が来たとして、なに嬉しがる、  
踊丹後も買ふてくれぬ」の歌。各地にあり。  
或は丹後編の浴衣か。

オドリテンマ踊傳馬 ヲカイテンマ  
オドリネブツ踊念佛 念佛踊と同じ。ヲネ  
ンブツオドリ  
オドリヤグサ踊椿 萬葉縣養老郡宮岡地方  
の言葉。盆踊に音頭取りが乗る椿の意味らし

く、他村の獅子舞と同義であらう。

オドリヤグサ踊屋敷 江戸初期の祭禮には  
飾屋敷と云ひ六尺に九尺のものに破風作り、  
四本柱をつけて總無蓋、草花や人形の飾りも  
のを入れて撥いで歩いたが、享保六年に禁ぜ  
られ、三十年後の寶暦年間に踊屋敷として復  
活する。正面に毛氈を掛けた腰掛を置き、女  
が三人彈語りし、その陰で舞子方が囃し、そ  
の前で踊子が踊る。舞子方は乗るとも乗らぬ  
とも説があるが、とにかく手で早いで歩き然  
るべき所に来て留めて踊る。踊屋敷は山鉦よ  
り變じたもので、山鉦の上では踊るべき面積  
が小さいから其の短を補つた。江戸では山鉦  
と踊屋敷は別々で、秋田の角館の如きは兩者  
が一つになつてゐる。江戸の踊屋敷は祭禮の  
花で、良家の子女も出て踊り、一躍小町娘と  
歌はれて錦繪にまで描かれた。底抜屋敷は踊  
屋敷から出て、凡て徒歩になる。

オドリヤグサ踊 祭禮に奴の姿で踊るこ  
と各地に現存し、福岡縣鞍手郡中村では九月  
二十五日の天満宮の祭に、七八歳より十三四  
歳の子供が萬年願で勤める。  
オナリおなり おなりどとも。田植に豊飯

を運ぶ女を云ふ。ヲタウエウタ

オニマイ鬼舞 千葉縣地方で鬼舞と俗にい  
ふものは、鬼の面をつけて亡者を苛責する一  
種の古劇。盆に行ふ。『民俗藝術』第四巻第三  
號にくはしい。

オニワオドリお庭踊 庭ほめの歌を歌ふを  
どり。『俚語集』に、徳島縣那賀郡の盆踊歌を  
記す。お庭入踊とも云ふ。獅子舞の庭入りも  
同義。ヲニワイリ

オネオミデネンブツおねおみで念佛 肥前  
五島の七月十五日の盆の夜、先づ領主の墓前、  
次に各戸に招かれて墓前にて行ふ念佛踊。廿  
歳前後の青年十人以上廿人以下一組、笠の頂  
に作り花を飾り新調の襦袢に浦の腰巻やうの  
物をつけ、胸に羯鼓式の物をあて、兩手の撥  
で打ちつゝ踊る。年長者二三人袴姿で鉦を鳴  
らし佛歌を歌ふと。『風俗叢報』第八號。オミ  
オデ念佛と同じ。

オノダジク小野田甚句。宮城縣加美郡小  
野田の唄。酒宴に唄はれる。「さうさ出た出た  
もろこし船よ、浪にゆられて岸に寄る」。この  
唄東北東海岸に唄はれる。「甚句さなかに誰  
が茄子投げた、茄子の刺やら手にさゝる」。

オノブシ小野ぶし そよぎ謡とも。秋田の  
藩主佐竹義隆が南秋田郡飯田川の休所を引上  
げる時、同所の氏神を鎮守の社に合祀し、そ  
の例祭には懸ぎ山といふ飾山を曳けと命じ、  
曳く時の歌を作つて村民に興へたのが今日に  
残る。「鶴龜はく、池の汀に菓をくんで、君  
代君代をと守らんと、君代君代をと守らん  
と」。「秋の田のく、そよぎやく」と總に出  
る、君代君代。以下同じ。

オノミチヨウタ尾道小唄 尾道市のうた。  
野口雨情歌、中山晋平曲。「わたしや備後の尾  
道の道生れヨ、曇表が出るところヨ」。また「女  
心と尾の道瀬戸はヨ、のぼりつめたら狭いも  
のヨ」。

オノミチヨシコノ尾道よしこの 尾道市の  
よしこのぶし。「風呂へ行くのも世間の手前、  
一人一人の二人づれ」。「蛇に身體を任せてお  
いて、けんもほろろにはじく雄子」。

オバコおばこ おばこは東北で娘の事を云  
ひ、秋田山形兩縣下に、各種の何々おばこと  
いふ民謡がある。文政五年版の『浮かれ草』  
に出羽ぶしとして、おばこ来るかやと、田圃  
のはしこまで出て見れば、おばこ来もせで、

笠の蟲コなんぞが、飛んでくる、見たこと聞  
いたこと、しやべねども、しやべるにがつち  
や叱られる」とある。福島縣にはオバコぶし  
として「おばこ幾つにならしやんす、この年  
くらせば、チョイト十七だ、コチャレ」  
と云ふのが豊葉・伊達・耶麻各郡に、また「お  
ばこなせこねや、雪しろ水が出て舟とまつた」  
と耶麻郡に、また大沼郡にも唄はれる事、『俚  
語集』に見える。「事物索引」にて各地のオバ  
コを見よ。

オハナオドリお花踊 奈良縣吉野郡の盆踊  
歌。「我等の殿御は春咲く花よと打見えたり、  
花ざく花に品々ござる、梅に櫻に入重菊(中  
略)、お花踊もこれまでよ」。

オババドコユクお婆何處行く 『島根民謡』  
に餅搗唄として「お婆どこへ行きやる、三升  
樽に、べん／＼でん／＼の誤植か)太鼓に笙  
の笛に、踊を三／＼んさげて、嫁の在所へ孫抱  
きに」。美濃では「お婆どこ行きやる、三升樽  
さげてナ、嫁の在所に孫抱きに」。又は「お  
婆どこ行きやるナ、(くり返し)三升樽さげて  
ソンドワエ、ア浮いてきた／＼、嫁の在所へ  
ナ、嫁の在所へナ、初孫抱きに、ソンドワ

エ、ア浮いてきたく、瀬川へ渡込んで、  
 底から先きへ浮いてきた。  
 オハラシヨウスケサン小原庄助さん 俗語。  
 「お月様さへ夜遊びなさる、わしが夜遊び何  
 故とめる」。ハヤシエツサツサ、小原庄助さん、  
 なぞ身上漬した、朝酒、朝酒、朝酒が大好き  
 で、それで身上つぷした。また、「平井權八吉  
 原通ひ、いつも心は小紫」。はやしは同じ。即  
 ち此の頃は、子言葉が主のやうなものだ。  
 オヒタイヘイオドリ 飯肥太平 宮崎縣  
 肥では、藩政時代に十五歳より卅五歳までの  
 藩士の子弟が、藩公の菩提寺の庭で、藩公上  
 覽の盆踊をした。編笠、淺黄のしめの着流し、  
 脇差に印籠の姿で、「千代の初めの一踊、浦坂  
 越えてヤサリ」といふ歌で、これがすむと町  
 人達が太平踊を踊った。その歌詞は、明治十  
 五年に八十六歳で歿した門川加世子の作る所  
 といふ。日露戦役後復活した。「日向郷土志資  
 料」第四に依る。  
 オビムスビノウカタ 帯結びの歌 【俚語集拾  
 遺】の長野縣南佐久郡の唄に、子の父が先づ  
 「二人結んだ簾から出来て、嬉し此子の帯結  
 ひ」。來客が「めでたくの若松様よ、親に似  
 てさへよい器量」。  
 オフクノオドリ 徳島縣阿波郡の正月の物もら  
 ひ。お福の面を冠り唄ふ。ヤレ奥さん御免な  
 され、西の宮のお福女郎でござります」と始  
 め、「トコマカシテ、シワリトナ、妻よし米よ  
 し實りよし、ことしは明けての福の年、ホー  
 ホー」と終る。【俚語集】  
 オフクノオドリ 伊豆新島の盆踊  
 の一つ。ヒンヨお福を連れて花見にゆけば、  
 お福も花も見もわかぬ、ヒンヨお福も花も見  
 も分かぬ、アノヤお福はよりん(邪淫?)の  
 性で、こちへくと袖をひき候、襟を引き候」  
 云々。【民俗藝術】第二卷第六號に歌詞を記す。  
 オフナオロシ 御舟歌 藩主が乗船する時に限  
 り水夫等が歌ふ祝言の歌。航海の無事を祈る  
 もの。また正月の舟下しにも歌ふ。  
 オフナオロシ 御舟歌 生保内地方に行はれる。  
 オボナイジンク 生保内節 生保内ぶしと  
 も。秋田縣の南部の生保内地方に行はれる。  
 「吹けや生保内東風、七日も八日も、吹けば  
 實風、ノウ稻みのる」。なんぼ隠しても、生  
 保内衆知れる、葉を髪ゆてノウ編笠で。「來  
 たり來ぬだり夏堰の水、いつそ來ねだらノウ  
 來ねと云へ」。【俚語集】のばり、どう云ふて昇  
 る、身上あがれとノウ云ふて登る」。最初の歌  
 は毎日駒形山から吹きおろす風を讀へたもの  
 で元唄である。今は木調子の三味線を弾く。  
 【東北の民謡】参照。  
 オボナイジンク 生保内節 生保内ぶしと  
 オマエヒヤクマデ 御前百まで 現在も各地  
 に唄はれる結婚の祝儀唄。お前百まで、わし  
 や九十九まで、共に白髪のはゆるまで。【山  
 家鳥島歌】には、「こなた百まで……髪に白髪  
 の」と多少の相違がある。  
 オマンサマーおまん様 上總勝浦の歌。一ツ  
 トセにて、勝浦の城主正木の息女おまんが  
 家康に仕へて、紀州の頼宣の母となり、後に  
 身延山で遷化するまでの物語歌。このおまん  
 は城没落の時、繩懸に布をさらして、滑つて  
 逃げのび、「おまんかあいや布さらす」と唄は  
 れたと、此の地方では唄ふ女主人公である。  
 「一ツとせ、人も知つたるお萬さま、生れ  
 は上總の勝浦で、城主正木の息女なり、二ツ  
 とせ、再び見られぬ勝浦の、城は没落その  
 時は、おん年わづかに十四歳」云々。  
 オミオデネンブツ 御前念佛 肥前五島

諸島の盆踊。二十歳前後の青年二十名ほどを  
 一組とし、新調の派手な袴に蒲の袴、胸に  
 太鼓をかけて打つて踊る。組毎に四五十歳の  
 男が袴姿に響を持つて交はる。傳説では平家  
 の落人此の所に流れついたといふので、子孫  
 がそれを弔ふ踊と云ふ。オネオミデ念佛と同  
 じ。  
 オミガワオンド 小見川音頭 千葉縣の小見  
 川町は利根川にのぞみ、常陸の息栖に對して  
 昔より船着き場で榮える。小見川お酌は蒲か  
 網か、のぼり下りの客とめる」と歌はれる。  
 こゝの踊をお女郎をどりと云ふ。まづ立ち姿  
 を見せ、あるく姿を見せ、笑顔を見せ、流し  
 目を見せ、うしろ姿、前姿、乳房のふくらみ、  
 腰の曲線、等々を自由奔放に見せて、而もそ  
 れが生れたまゝの姿であり、野人であつて、  
 而も獲髪でない、そこに小見川音頭の強味が  
 あるのだ」と、平山蘆江氏は評してゐる。  
 オミガワコウター 小見川小唄 同じく利根川  
 畔の小見川町の新民謡。小見川よいとこ城山  
 松にヨ、咲いた櫻の花ふぶき、鹿島灘まで會  
 ひにゆく。  
 オミヤイリ 御宮入り 踊が神社境内に來て  
 踊り、宮ほめをする場合を指す。三重縣飯南  
 郡の盆踊の御宮入りの歌詞を【俚語集】に記す。  
 オミヤサマ 御宮様 御宮入りと同じ。三重  
 縣飯南郡の盆踊の御宮様の歌を【俚語集】に  
 記す。オミヤイリ  
 オマデタフシ おめでた節 下ドンドメク  
 オモイダシマス 思ひ出します 一例、思ひ  
 出します、お吉の聲を、磯の千鳥の啼音にも。  
 下田で唐人お吉を唄ふ唄。最近新作のお吉の  
 唄に採入れられた。「思ひ出します」と云ふ文  
 句は相應に古いらしい。  
 オモイダヨリ 思ひ便り 香川縣木田郡庵治  
 村地方の唄。船は出てゆく屋島の沖へ、又と  
 逢ふやら逢へぬやら。「津田の松原、吹きあ  
 げ小砂、松や柳の葉にとまる」。元唄は、「思ひ  
 便りがなげぞえ様よ、思ふ便りは汝れ様よ」  
 らしい。東讃地方に田の草取りの歌として以  
 前は行はれたと云ふ。  
 オモイツクシ 思ひ盡し 志摩の鵜方村の八  
 月の盆踊唄の一つ。思ひ思ふて仲よいけれど  
 思ひ暮らすも年月かけて、思ひ思ふた二人の  
 仲を、思ひ暮らすは無理ではないか」云々。  
 始めに必ず「思ふ」或は「思ひ」と云ふ。最  
 後にオクリとして「思ふ世帯が送りたい」。  
 オモウミナトエ 思ふ港へ 船唄の終りに云  
 ふ文句。「思ふ港にそよ〜と」。思つた港に  
 とも。  
 オモシロヤブシ 面白やぶし 遊賀縣水口町  
 の祝儀歌。めでたく〜が三つ重なりて、鶴が  
 御前に菓を掛けた、面白やいヨノヒヨータ  
 エシ。  
 オモトブシ おもとし 下ソウマニヘンガ  
 エシ  
 オヤウター 親歌 廣島縣地方の田植歌は、先  
 づ音頭出し即ち音頭取が、「栗の花やら白う咲  
 いたやの」の如く初句を歌ふを親歌といひ、  
 續いて早乙女が、「ならう、ならじは花に問ひ  
 給へ」と歌ふを子歌、次に全員齊唱して、「栗  
 の花やら、白う山を照らした」と云ふをオロ  
 シと云ひ、三段に變化する。但しオロシの分  
 を齊唱せず、その前半を音頭が、後半を早乙  
 女が取る事もある。  
 オヤカタ 御屋敷形 下オヤシキ  
 オヤシキ 御屋敷 御屋敷踊の略稱。御館踊  
 と云ふも同じく、神事の舞で人の屋敷ばめを  
 歌ひ踊るもの。【俚語集】に、徳島縣名東郡の

益神廟の例を記す。イヤこなたの屋敷は長い  
屋敷、イヤ東表に敷七つ」云々。

オヤマオドリ御山踊 雪山をほめる歌のを  
どり。大阪府上神谷村のユラドリに、「これか  
ら見れば上山のお山、さても珍しみやまの石  
楠花、あれこそ若衆の土産にしよ」。

オヤマカチヤンリンおやまかちやんりん  
どこの歌か不明。或は熊本か、おやまかちや  
んりん云つて備けた金は、おやまに取られて  
もうなちやんりん。「おやまかちやんりん  
云つて、はつてこちやないか、こゝを照る日  
は上も照る」。オヤマは遊女の意味か。此の  
文句と親馬鹿ちやんりんとは何か關係があら  
う。 ↓オヤマコゴシ

オヤマコゴシおやまこごし おやまこ頃とも  
いふ。秋田縣仙北地方の頃。三里々々を合せ  
て六里、今の流行りは天保錢が八里。「風の  
横暴で分れてゐても、末に結ばる糸柳」。「お  
山越えれば、また山ごさる、いつか我家に歸  
るやら」。天保頃より唄はれたといふ傳もある。  
お山コシヤンリン何處から流行る、秋田  
の仙北角館」が元明ならば、オヤマカチヤン  
リンと同一かも知れぬ。 ↓オヤマカチヤン

オヤマバヤシ御山獅子 秋田縣角館町の神  
明社の舊八月六日の祭に、高さ数丈の御山が  
出来て、百人の壯丁が擔いで歩き、山の上で  
舞し、また踊る。神明社に詣るのを上りやま  
と云ひ、本獅子の盛んな音楽。踊りを下り山  
一名道中ばやしと云ひ、三下りの軽快なもの  
を舞し、踊は二本竹、等ばやしは歌無く、秋田  
甚句、秋田おぼこ等は歌がある。樂器は、大  
太鼓、小太鼓、鼓、鉦、笛に三味線、日本民俗  
術大觀」第一巻は、全部これを記して、樂器、  
踊の手、飾山の構造、衣裳を記してゐる。山車  
の音楽、舞踊として一つの代表的なもの。

オヤマブシお山ぶし 秋田縣仙北郡神代村  
の大風山の觀音の敷日に、馬の守護を祈る者  
が遠近より集り、舞け唄をする時に唄ふもの  
で、秋田縣坂を早く高く唄ふ。 ↓アキタマツ  
チカ ↓カケウタ  
オヨビナケレド及びなけれど 加藤清正が  
名古屋城普請の時、萬松寺に滞在し、その寺  
に櫻の名木と美貌の小姓が居たので、これを  
木やりの唄にし、「及びなけれど萬松寺の花を  
折りて一枝歌しうござる」と老若が唄つたの  
り

が有名である。然し、「及びなけれど」の文句  
は、これが始めか否かは分らぬ(オヨビモナ  
ナイガ)。また鹿島踊にも、「金の三合は及びご  
ざらぬ、米の三合まかふよ」がある。 ↓カシ  
マオドリ  
オヨビモナイガ及びもないが この文句で  
最も有名なのは江差道分の「忍路高島及びも  
ないが、せめて歌葉磯谷まで」。佐渡には「四  
國西國及びもないが、せめて七日の佐渡通路」  
といふ。田植の後に老若の婦女が鳥の寺を廻  
る事を歌つたもの。「及びなけれど」の近世化  
であらう(オヨビナケレド)。山形縣では、  
「酒田本間様には及びもないが、せめてなり  
たや殿様」。酒田港の商家本間家の巨富を云  
ふ。

オラガワカイトキおらが若い時 「小歌吾聞  
久爲志」に正保の頃の寫本を引き、江戸の歌  
舞伎の奴唄に、「おらが若い時は蟻編からでも  
ツン呑んだ、今も一二つヤンゴ舞」。お  
らが若い時は、岩の身をもつつかいた、また  
戸壁はアング舞」とある。また、はましの  
誤記であらう。「銀鬚集」の岩手縣江刺郡の奴  
唄に、「我等も若い時、粉糰奴子も振つて見た、

今は年寄、年寄テンと倒された、イヤスツス  
ノス、辨慶だんべ」とある。新潟の方では  
「おらが若い時や、酒田まで通ふた、道の小  
草も踏かせた」と歌ふ。 ↓イワムロジツタ

オランダオドリオランダ踊 高見島縣川邊  
郡知覚町に何かめでたき儲ある時に行ふ。樂  
器なし。重、龍の山椒の木、百舌が囀る、何  
と囀る、立寄り聞けば、君の、きんくりく  
くりくめんたかりんとのさ、しりめんたか、  
すつべんするとも、くりくめんたかりんと  
のさ、わすけみやうどく、くるわの中の、  
わんにやうどのささ、びつくりががつくり、し  
よんぎり、しよんがら、ひとすつとこどつこ  
い、じんと囀る百舌の聲。「いれてつんほ  
はか」とろ、おもこんじやう、ふいふわいら  
ん、かつぶらる、ちーやる、ふいこもさ、さ  
つぶる、しゆくくけしくけいら、らぶとら  
つば、らつばつば、つるうい、はいらうい」。

オランダガクタイオランダ樂隊 千葉縣香  
取郡で有名な香取神宮千年四月の神幸軍神祭  
に神輿を御座船に安置して、利根川を行く時  
古例に依り新島村同島の青年が曳船をしその  
折に演奏する引船神樂で、大太鼓、小太鼓、笛

オランーオワラ

で囀して歌詞は無く、曲目は並足、速足、驅足、  
夙夜に分れる。

オヨビヒメオドリ織姫をどり 足利市の唄。  
長田舞歌、松平信博曲。「織り場育ちの十六  
娘、色は黒くても氣は朗ら、主と私は日と影、  
はなれまいぞえ、もつれ草」。

オヤマセブシおりやせぶし ↓ハチオウジ  
オヤマセブシ  
オヤマセブシおりやんこ 熊本市を中心の唄。  
「春日名物、ぼうぶらわい」と、ふれます  
けれど、間にや大根もござります、げんばく長  
茄子、オリアンコ、リヤンコ、リウケガニ  
ヤ」。ぼうぶらは南瓜。春日は熊本市の近くの  
古來からの蔬菜の産地で、右の唄もいろく  
字句の異同がある。オリアンコは多く各地の  
名物を唄ふ。「法華坂名物、わんく理が、ソ  
ラ出た、もう出た、かまさんがお手引いて通  
れば、ちつとも危なうない」。右の法華坂は、  
新町から熊本城に登る坂で、樹木茂つて晝な  
ほ寂しい事を唄つたもの。

オロシおろし ↓オヤウタ  
オワセブシ屋鴛節 紀州尾鷲港の歌。尾鷲  
長濱、長六のかでヨイソレ、泣いて別れた

こともある、ノンノコサイく、ヤサホラエ  
ー、オツチヨコマンコノケレ。別に、「尾鷲よい  
とこ、朝日をうけて、浦で五丈の網をひく」。  
「まゝになるなら、あの八鬼山を、餅でなら  
して通はする」。主として二月一日より八日ま  
での氏神祭に歌ふ。なほ前の歌は長濱ぶしと  
しても歌ふ。 ↓ナガハマブシ ↓ノンノコ  
ブシ

オワラ大薬 暖鼓の唄。「今年や世が良うて  
種に種が咲いて、たけが六尺、オワラ種が二  
尺」。「延べ上綱、廻れ上車、溜まれ爪抜、オ  
ワラ夜が更ける」。爪抜とは絲の溜る所で、綿  
をつむいで絲にした時代の唄と云ふ。オワラ  
或はオハラなるもの國々にある。大薬と字を  
充つべきか否かは不明。

オワラブシ小原ぶし 富山縣八尾町の唄。  
大正年代に東京にも流行する。起原不明。明  
治初年に江尻半兵衛といふ美音の者が修正し  
大薬ぶしと呼び、いつか小原ぶしとなる。大  
正二年の富山の共進會に出演の時、唄の振も  
改められたといふ。以上「週刊朝日」に依る。  
八尾では九月一日に町を擧げて、小原節を唄  
ひ流し踊り流す。一説に昔この町に凶作のあ





て終る。掛け歌は去女ぶして歌喧嘩といふのと同じである(ヤオヤマブシ)。歌を掛ける風俗は古への歌垣もそれ、各地の悪口祭も概がある。

カケウチダイコト掛打太鼓 ヲアソジョウウオドリ

カケオドリ掛扇 舞臺で踊の行列を仕立てて一方の村境より他方の村境にゆくこと。これに依て神を送る。善神厄神たるを問はず、自分の村に残さず急いで他村に送るので、これを踊を掛けると云ふ。甲の村の者が踊を掛けて乙の村境までくると、乙の村は丙の村へ掛ける、かくて神が長き宿次ぎで旅行する事、伊勢踊その他に見える古い風俗である。踊の事を風流と云つた時代には、風流を掛けるとも云つた。また「風流が流る」と、どこから流る、甲斐や駿河の國から流る」の歌は前に記した宿次ぎの意味を示してゐる。掛扇は次第に子供の遊戯ともなつて、盆歌には、少年少女の群が互ひに組を作り、踊を掛け合ふ。これは悪態祭とも交渉があり、争つて勝たなければ縁起が悪い。小町踊はその好例である。掛扇は俄の踊でもある。何となれば、

神の宿次ぎは多くの場合豊期できぬから俄の思ひ立ちである。この俄が藝術化して祭禮の俄となり座敷狂言の俄となつた。三重縣北牟婁郡赤羽村の瀬益の踊の一つにカケ踊といふもの現存する。歌に曰く、「踊が流る、どれから流る、尾張八組伊勢十二組、我身のせりよ皆流らせよ、信濃川小馬に、小金をつけて参らせよ、橋に出て居らしやれよ、蔵の鍵取は、蔵の出口に晝寝して、鏡をくはへて、米を枕に、白鷺は松の古木に巢を掛けそめて、縁はへて、池を眺むる、一の門開いて二の門あけて、三の門開いて、御庭を見れば、ヤレよい庭ぢや、見事な庭ぢやこのよな庭で、踊ろが爲めに、白菅笠は破れよとまよ、おいとしゃ、お姫子に、買つては買はず、流つては買はず」。

カケガワオドリ掛川小歌 遠州掛川の歌。松尾城南歌。秋の夜は、ふしも床しきアノ蟲の聲、月の牙えゆく城の山、ぬしを待つぞえ古城ばし。また若杉雄三郎作のものは、音頭ナリ、取るなら掛川音頭、踊りや心も、サツサツサ、サツサヨイヤサ、うきくと。カケガワコウタ掛川小歌 同じ掛川町の歌。

杉山登歌、大石進一曲。花の掛川、櫻の下で見染められたか見染めたか、實ホントニネ、御幸通りの柳の蔭に、けふもくるく紅日傘。カコガワブシ加古川ぶし 兵庫縣加古郡加古川町の唄。佐久羊村歌、近藤十九二曲。播州加古川来て見やしやんせ、丹波はなれて野山を越えて、色も香もある流れ水、サササ、ヨイ、オチヨマカ、チヨイ。

カゴシマオハラ鹿兒島おはら 鹿兒島市外の伊勢原良より起ると云ふ。伊勢原良の巻揚の髪は、髪をゆたなら、オハラハ、まだ良かるの唄がある。伊勢原良の姉女子の粗末な髪結び方を唄つたもので、下の句は鬘にゆたならともいふ。また此の節は日向の都城市外の安久村の安久ぶしが傳はつたものともいふ。やつさぶしなら尻高こつぶれ、前の半田田が、オハラハ深ござるの唄がある。別に、花は舞鳥、煙草は園分、もえてあがるはオハラハ舞鳥。もえてのぼる」ともいふ。又オハラハのハを云はぬ所もある。鹿兒島オハラは土地に依り唄ひ方を異にし、踊りかたを異にする。最近新橋の喜代三が此の唄で賣出した。他の唄、貴方と私こや太鼓

三味擔るて、どこも日が照る、オハラハ一月も出る。永良部島から様が事思ふて、詰めた煙草もオハラハのまじ来た。「可愛がられて寝た夜もござる、泣いて明かしたオハラハ一夜もござる。別になつて離れ言葉がある。良かならおじやんせ、来やんせしやんせ親の譲りもんぢや、買たもんぢやござる。今来た青年どん、良か青年どん、相談かけたら私こそな青年どん」。

カゴシマコウタ鹿兒島小唄 鹿兒島の唄。

西條八十歌、中山晋平曲。ほのくと、兵兒の語から藤原は明けて、燃える朝日の櫻島、

「櫻島、山は城山、男は西郷、風は南風、薩摩海、ハヤシサテ、薩摩の鹿兒島よかとこソイヤ〜ガツツイ、ソイヤナア」。

カゴシマサンサガリ鹿兒島三下り ヲサツマサンサガリ

カゴシマノヤカタ鹿兒島の館 ヲリユウキウウジンプシ

カゴシマヨサコイ鹿兒島よさこい 鹿兒島の唄。「鹿兒島言葉で、鐵瓶茶瓶、いつべこつべ歩つましたや、スツタイ疲れました、ヨサコイ〜。おごじよコラ〜、おまん宿ど

こや、行けば左手の角屋敷、ヨサコイ〜。鹿兒島去つても、夢路に通ふ、磯の濱風櫻島ヨサコイ〜。右のヨサコイ〜のふしは土佐のそれと同じである。

カサイネンブツ高西念佛 ヲホウサイネン

カサイバヤシ高西雛子 東京市葛飾の高西町に行はれる祭禮の雛子。一説に享保年代に葛西金町の鎮守香取明神の神職能勢環が、和歌雛子の名で人に傳へ、やがて馬鹿雛子と變つたともいふ。山王祭、神田祭に出演して葛西雛子の名が聞えた。今日も盛んに行はれる。馬鹿雛子の名はヒョットコの面をつけて舞ふ事がある故か。

カサオカサワキ笠岡騒ぎ 岡山縣笠岡港の唄。笠岡騒ぎらし、お座敷騒ぎ、エツチヤサノ、誰にさしませう盃を、受けておくれよ、エツチヤサノ、エツチヤサノ。三下り物。

カサオサメ笠納め 凡て事の終るをいふ。旅行より歸る時、或は祭事や盆踊が終つて道具類を保管者に返す時等の祝ひを云ふ。一に脚絆脱ぎと云ふ。笠納へに對する言葉。

カサオドリ笠踊 笠を冠つて踊るもの、

總稱。冠らずに持つて踊るもの指す。笠が花笠であれば、特に花笠踊といふ。

カサオドリ笠踊 福井縣大野郡の別天地五ヶ村の小池その他の笠踊。男子女装、女子男装などが笠を冠り踊る。カサコオドリ

カサオドリ傘踊 ヲカタカサオドリ

カサオワスレタ笠を忘れた「笠を忘れた、教習の茶屋へ、雨のふるたび思ひ出す。この教習は福井縣のそれか否か。能本の十六日唄では、傘を忘れた免田の茶屋へ、空が曇れば思ひ出す。東京の木やりの酒田といふのに、

「笠を忘れた、神の茶屋で、空が曇りて思ひ出す。かさは傘でなくて笠であらう。旅人は傘は持たぬし、この歌は旅人の歌だからである。本来は神の茶屋であつたのが、それ、地名がついたのであらう。

カサキコウタ笠置小唄 奈良の笠置の新小唄。昔思へば小袖もぬれる、行宮遺蹟に鳴るは松風、ヨイトサノナンデモ」。

カサソロイ笠揃ひ をどりの旅行に云ふ。また廣島縣の花田植でも前日に早乙女が集り植まかたや歌の稽古をする時にもいふ。昔笠花笠の縁であらう。をどりの旅行を足揃ひと

いふ事もある。

カシマオドリ笠に木の葉「松の葉」巻二の鎌倉八景の一節に、「嵐木枯さつと吹け、笠にや木の葉がはらはらと、ほりいよ／＼はらはらと」あるが、笠に木の葉の上の句は別にあつたのであらう。今は木曾ぶしに「心細いよ木曾路の旅は、笠に木の葉が、はら／＼と」なぞと歌ふ。

カシマオドリ笠取唄 宮城縣の舟唄。民俗詩として面白い。出舟して夜はなんどきと空見れば、夜は夜ふけ、十五夜月が空の中。「まがき島、腰打かけて沖見れば、眞帆片帆寄せくる舟は数しれぬ」。「東北の民謡」に、「賣太郎節の一種で、やはり鏡唄の變體である」と記す。 ↓サイタロウブシ

カシマオドリ火事の歌 大分の臼杵地方では火事の時山に登つて太鼓を打ち、その打方で現場を知らせるので、百姓達は數里の道を草鞋穿きで驅つける。太鼓は夜は火事ではないかと、胸に血汐の波が立つ。「聞いてゆく身も辛いから、叩く太鼓番する身も辛ござろ」。國の殿様、なさけが深い、少しの草鞋に水くれた。

カシマオドリ鹿島歌 ↓カシマオドリ

カシマオドリ鹿島歌 常陸の鹿島神宮の信仰に起つた踊、鹿島歌、みろく歌、みろく踊等にも云ふ。常陸下總より伊豆相模遠江へと行はれる。「利根川國誌」に、鹿島地方では、祝ひごと祈りごと老妻が舞り、太鼓に合せて歌つて踊るとして、世の中は萬ご末代、彌初、舟が渡いた、ともへには伊勢と春日、中は鹿島のお社、有難や息酒おもりは黄金社壇、打てば舞く、うしろにはひよき神連、前は女親男親、ござ舟かんとりは四十お社、音に聞くも舞や、ひとたびは参り申して、金の三合まかふよ、金の三合は及びござらぬ、米の三合まかふよ、何事も叶へ給へ、常陸鹿島の神々。女親男親は息酒神社の名物として有名である。なほ種々の歌がある。印旛沼附近の本野村中根の鳥見神社では、四月廿八日の例祭に氏子の男が出て之を踊る、その近くの雷公神社の掛け歌(ヤササゲウタ)も鹿島歌である。相州足柄下郡の片浦では六月十四日十五日の氏神祭に、伊豆の熱海では七月十六日の來宮神社の祭に行はれる。熱海より、伊東へかけての漁村には至る處にある。静岡縣島田町の四年

はれる(ヤアンババヤシ)。この鹿島は常陸の鹿島神宮所在地で、雄術で名高かつた。

カシマオドリ鹿島歌 常陸の鹿島神宮の信仰に起つた踊、鹿島歌、みろく歌、みろく踊等にも云ふ。常陸下總より伊豆相模遠江へと行はれる。「利根川國誌」に、鹿島地方では、祝ひごと祈りごと老妻が舞り、太鼓に合せて歌つて踊るとして、世の中は萬ご末代、彌初、舟が渡いた、ともへには伊勢と春日、中は鹿島のお社、有難や息酒おもりは黄金社壇、打てば舞く、うしろにはひよき神連、前は女親男親、ござ舟かんとりは四十お社、音に聞くも舞や、ひとたびは参り申して、金の三合まかふよ、金の三合は及びござらぬ、米の三合まかふよ、何事も叶へ給へ、常陸鹿島の神々。女親男親は息酒神社の名物として有名である。なほ種々の歌がある。印旛沼附近の本野村中根の鳥見神社では、四月廿八日の例祭に氏子の男が出て之を踊る、その近くの雷公神社の掛け歌(ヤササゲウタ)も鹿島歌である。相州足柄下郡の片浦では六月十四日十五日の氏神祭に、伊豆の熱海では七月十六日の來宮神社の祭に行はれる。熱海より、伊東へかけての漁村には至る處にある。静岡縣島田町の四年

カシマオドリ鹿島歌 常陸の鹿島神宮の信仰に起つた踊、鹿島歌、みろく歌、みろく踊等にも云ふ。常陸下總より伊豆相模遠江へと行はれる。「利根川國誌」に、鹿島地方では、祝ひごと祈りごと老妻が舞り、太鼓に合せて歌つて踊るとして、世の中は萬ご末代、彌初、舟が渡いた、ともへには伊勢と春日、中は鹿島のお社、有難や息酒おもりは黄金社壇、打てば舞く、うしろにはひよき神連、前は女親男親、ござ舟かんとりは四十お社、音に聞くも舞や、ひとたびは参り申して、金の三合まかふよ、金の三合は及びござらぬ、米の三合まかふよ、何事も叶へ給へ、常陸鹿島の神々。女親男親は息酒神社の名物として有名である。なほ種々の歌がある。印旛沼附近の本野村中根の鳥見神社では、四月廿八日の例祭に氏子の男が出て之を踊る、その近くの雷公神社の掛け歌(ヤササゲウタ)も鹿島歌である。相州足柄下郡の片浦では六月十四日十五日の氏神祭に、伊豆の熱海では七月十六日の來宮神社の祭に行はれる。熱海より、伊東へかけての漁村には至る處にある。静岡縣島田町の四年

氣が勇む。「朝日さすよた娘を持つてば、夕日さすよた娘ほしや」。 ↓オケサ

カシマオドリ鹿島歌 常陸の鹿島神宮の信仰に起つた踊、鹿島歌、みろく歌、みろく踊等にも云ふ。常陸下總より伊豆相模遠江へと行はれる。「利根川國誌」に、鹿島地方では、祝ひごと祈りごと老妻が舞り、太鼓に合せて歌つて踊るとして、世の中は萬ご末代、彌初、舟が渡いた、ともへには伊勢と春日、中は鹿島のお社、有難や息酒おもりは黄金社壇、打てば舞く、うしろにはひよき神連、前は女親男親、ござ舟かんとりは四十お社、音に聞くも舞や、ひとたびは参り申して、金の三合まかふよ、金の三合は及びござらぬ、米の三合まかふよ、何事も叶へ給へ、常陸鹿島の神々。女親男親は息酒神社の名物として有名である。なほ種々の歌がある。印旛沼附近の本野村中根の鳥見神社では、四月廿八日の例祭に氏子の男が出て之を踊る、その近くの雷公神社の掛け歌(ヤササゲウタ)も鹿島歌である。相州足柄下郡の片浦では六月十四日十五日の氏神祭に、伊豆の熱海では七月十六日の來宮神社の祭に行はれる。熱海より、伊東へかけての漁村には至る處にある。静岡縣島田町の四年

カシマオドリ鹿島歌 常陸の鹿島神宮の信仰に起つた踊、鹿島歌、みろく歌、みろく踊等にも云ふ。常陸下總より伊豆相模遠江へと行はれる。「利根川國誌」に、鹿島地方では、祝ひごと祈りごと老妻が舞り、太鼓に合せて歌つて踊るとして、世の中は萬ご末代、彌初、舟が渡いた、ともへには伊勢と春日、中は鹿島のお社、有難や息酒おもりは黄金社壇、打てば舞く、うしろにはひよき神連、前は女親男親、ござ舟かんとりは四十お社、音に聞くも舞や、ひとたびは参り申して、金の三合まかふよ、金の三合は及びござらぬ、米の三合まかふよ、何事も叶へ給へ、常陸鹿島の神々。女親男親は息酒神社の名物として有名である。なほ種々の歌がある。印旛沼附近の本野村中根の鳥見神社では、四月廿八日の例祭に氏子の男が出て之を踊る、その近くの雷公神社の掛け歌(ヤササゲウタ)も鹿島歌である。相州足柄下郡の片浦では六月十四日十五日の氏神祭に、伊豆の熱海では七月十六日の來宮神社の祭に行はれる。熱海より、伊東へかけての漁村には至る處にある。静岡縣島田町の四年

知られた信州柏原のおけさ。笛太鼓入りで盆に踊る。おけさ正直なら傍にも寝しよが、木の根、葛の葉で這ひかゝる、葛の葉で木の根、木の根、葛の葉で這ひかゝる。越後では此の下の句を「おけさ猫の性でじやれたがる」と云ふ。早く盆にして問屋の庭で、殿さ音頭で踊りたい。

カシマオドリ鹿島歌 常陸の鹿島神宮の信仰に起つた踊、鹿島歌、みろく歌、みろく踊等にも云ふ。常陸下總より伊豆相模遠江へと行はれる。「利根川國誌」に、鹿島地方では、祝ひごと祈りごと老妻が舞り、太鼓に合せて歌つて踊るとして、世の中は萬ご末代、彌初、舟が渡いた、ともへには伊勢と春日、中は鹿島のお社、有難や息酒おもりは黄金社壇、打てば舞く、うしろにはひよき神連、前は女親男親、ござ舟かんとりは四十お社、音に聞くも舞や、ひとたびは参り申して、金の三合まかふよ、金の三合は及びござらぬ、米の三合まかふよ、何事も叶へ給へ、常陸鹿島の神々。女親男親は息酒神社の名物として有名である。なほ種々の歌がある。印旛沼附近の本野村中根の鳥見神社では、四月廿八日の例祭に氏子の男が出て之を踊る、その近くの雷公神社の掛け歌(ヤササゲウタ)も鹿島歌である。相州足柄下郡の片浦では六月十四日十五日の氏神祭に、伊豆の熱海では七月十六日の來宮神社の祭に行はれる。熱海より、伊東へかけての漁村には至る處にある。静岡縣島田町の四年

カシマオドリ鹿島歌 常陸の鹿島神宮の信仰に起つた踊、鹿島歌、みろく歌、みろく踊等にも云ふ。常陸下總より伊豆相模遠江へと行はれる。「利根川國誌」に、鹿島地方では、祝ひごと祈りごと老妻が舞り、太鼓に合せて歌つて踊るとして、世の中は萬ご末代、彌初、舟が渡いた、ともへには伊勢と春日、中は鹿島のお社、有難や息酒おもりは黄金社壇、打てば舞く、うしろにはひよき神連、前は女親男親、ござ舟かんとりは四十お社、音に聞くも舞や、ひとたびは参り申して、金の三合まかふよ、金の三合は及びござらぬ、米の三合まかふよ、何事も叶へ給へ、常陸鹿島の神々。女親男親は息酒神社の名物として有名である。なほ種々の歌がある。印旛沼附近の本野村中根の鳥見神社では、四月廿八日の例祭に氏子の男が出て之を踊る、その近くの雷公神社の掛け歌(ヤササゲウタ)も鹿島歌である。相州足柄下郡の片浦では六月十四日十五日の氏神祭に、伊豆の熱海では七月十六日の來宮神社の祭に行はれる。熱海より、伊東へかけての漁村には至る處にある。静岡縣島田町の四年





カマウタカツマ歌 廣島根雨縣に歌はれる田植歌。さげ即ち音頭が「さげ様の腰の休めに、かつまでざんざと植え出さう」と歌へば、早乙女が「ソリヤかつまでざんざと植え出さう」と取る。但し早乙女が前の句を返すとは限らず。かつま、かつま歌、同じものであらう。音頭のふしの樂なものであらう。

カマオドリ 寛尾音頭 信州坂城町の唄。佐二木千原歌、竹屋喜兵衛、喜太郎曲、松島金昇振。山おや葛尾、川では千曲、ヨイヤサ踊りや音頭に止めさす、ソリヤマタニギワイ、ヨイヤサ。

カトウオドリ 賀當踊 奈良縣添上郡大柳生村大字大柳生、マワリ明神の八月十七日夜の祭に行ふ。社家方と禰宜方の二派が年々交代で動め、前者に七曲、後者に八曲の踊がある。大太鼓一人、太鼓四人。また中踊八人、これは重さ一貫、長さ一間の幣束を負ふ。以上を巡つてカワをどりの老若が無数に采を持つて踊る。具足踊、山伏踊、鎌倉踊、等々。忍び踊の一例、我を忍ばば御門の脇でお待ちやれ、若し現はれて人間は、御門の番ちやと御答やれ、チャンキリキ、トントンン、チャ

カマオドリ 鎌倉をどり ヌイネカリオドリ ヌボウオドリ

カマトラ 鎌倉 鎌倉、或は鎌倉踊と云ふもの多く、大體は次の「鎌倉の御所の」の歌である。 ヌオンカタオンカタ ヌガトウオドリ カマトラノゴシノ 鎌倉の御所の この次の文句は、「お庭で、十五小女郎が酌を取る、

ソノ、ボロボンノボン云々。【民族と歴史】第六巻第四號にくはしい。

カマオドリ 門田の歌 門の前の田に田植する時の歌。くろどりがヤハレ、門田の早稲に葉をかけて、ヤハレ葉をかけて、ヤハレ葉をかけて、ヤハレ七かな寄せて七ところ。田植は植える所々に依り、歌の文句を異にするもの。【俚語集】

カマオドリ 門開き 元日に各戸を訪れる祝言の歌。【俚語集】の廣島縣比婆郡、賀茂郡の項に見える。門を開いて福を招する祝言。

カマオドリ 伊勢の獅子が農家を歴訪する時、その門前に簡単に舞ふのを門舞といひ正式に舞ふ場合を本舞と云ふ。但し門舞は鳥居掛りと同じく、また中門口の舞と同じく、門の前で舞つて、其家に敬意を表する舞にも解される。

カナサシオンド 金指音頭 遠州引佐郡金指町の唄。金指よいと、名代の市場、昔ながらに商賣繁昌、三味と太鼓の音が絶えぬ、サノサ、オイデンカ。

カナサワコウタ 金澤小唄 金澤市の歌。野

カマオドリ 金山小唄 岐阜縣武儀郡金山町の唄。高野辰之歌、高折宮次曲。「春の金山、世の中櫻、外に二度咲く花もある、チヨト鐘守の花もある」。夏の金山、河には河鹿、空にや鳴きます時鳥、チヨト四郡の時鳥。

カナヤマブシ 金山ぶし ヌカラメブシ カナヤマブシ 金山ぶし 鹿兒島縣熊毛郡の歌。ことしや殿様の、金山がござる、天氣もよけれ、ふく金もよけれ、大阪の町でねもよけれ、「殿の金山が一年あれば、蔵を立ちよもの、金ぐらを」。【俚語集】

カナダイコ 鐘大鼓 廣島縣比婆郡、神石郡で刈入れが終つた後、適當の日を選び、大きな鐘と太鼓を棒につるし、これを打ちつゝ部落を練つて歩く。昔は盛んであつたが今は不振といふ。【青年】

カネノナルキブシ 金のなる木ぶし 鹿兒島

縣熊毛郡で家祝、舟祝、網祝、その他の祝儀の席上で最初にこれを唄ひ、次に必ずマダラぶしを唄ふといふ。金のなる木を、ひととと欲し、植えてヨイ、育て、標にあげう。「屋久の御嶽を愚かにや思ふな、かねのヨイヨイ蔵よりなほ賣」。

カマオシコウタ 釜石小唄 岩手縣釜石港のうた。川崎白水歌、武田忠一詞曲。「演で名に咲く釜石港、舟はどん／＼繁昌する、アリヤ繁昌する、ハードントコイ、ドントキテドントサタ波の花、アレ波の花」。

カマオシハマジンタ 釜石濱甚句 同じく釜石港の唄。田舎なれども釜石薬師、出舟入舟、目の下に。「時化のやうだら尾崎様ばアテに早く歸らんせ無理せず」。尾崎神社を目あてに歸れの意。

カマオドリ 鎌倉をどり ヌイネカリオドリ ヌボウオドリ

カマトラ 鎌倉 鎌倉、或は鎌倉踊と云ふもの多く、大體は次の「鎌倉の御所の」の歌である。 ヌオンカタオンカタ ヌガトウオドリ カマトラノゴシノ 鎌倉の御所の この次の文句は、「お庭で、十五小女郎が酌を取る、

酒よりも肴よりも、十五小女郎が目について、目につかば、つれてござれよ、お江戸品川のはてまでも。有名な唄で、扇れて各地に唄はれる。【俚語集】では、靜岡縣田方郡の鹿島踊の唄に記し、神奈川縣久良岐郡の木やり唄にも見える。【龍の慶】に、武州新倉川越附近で女の元服する時、三方に盃をのせ、女はかいどりして大小をさし、丹前風の如く様どりして、鎌倉の御所のお庭で、十三の小女郎が酌をとる、目につかば、連れてござれよ、江戸品川の濱までも」と唄ひ、之をホソリと稱すとある(ユボソリ)。【落葉集】卷三の成相の目頭にも、「鎌倉の御所のお庭で、十七小女郎が酌を取る、えいそりや十七小女郎が酌を取る」とある。【俚語集拾遺】の兵庫縣多可郡の田植唄には、「鎌倉の御所のお庭で、十七小女郎が酌を取る、酒よりも肴よりも、あの子目につく酌とり」。また同書茨城縣の木道にも此の唄が見え、伊豆の麥搗唄にも見える。要するに鎌倉を中心のものであらう。連れてござれや」は後世の附加物であらう。鎌倉に関する歌は、鎌倉時代、即ち鎌倉が日本の中心地であつた時代のものらしい。 ヌアゲヤブシ

カマトラ 鎌倉ぶし 神奈川縣三浦三崎の一月十五日の神事舞の一つ。蝶々の舞といふ。十七が忍ぶ細道、小藤が終んで忍ばれぬ、この藤をきり、と巻いて重ねて、小夜あかす。その他、輪を作つて舞ふ(ユボソリ)。 ヌホンチヨニチヨウメ ヌミヤコタイリヨウブシ

カマトラカブセ 釜煮被せ 【俚語集】の佐賀縣西松浦郡に就きて記す。花嫁が婿家に初めて行き、臺所より上らうとすると、花婿の友人達が引止めて、その中の一人が釜の蓋を右に高く持つて花嫁をおほひ、左で花嫁の背や帯にふれて、次の口上を述べる。「あれござつたる花嫁様、お手引き婆さんも持ちなんせ、靜かにござんせ嫁御さん、私、江戸の者、長崎通りがけの者でござんすが、一寸こなたに

立寄りましたれば、此家荒神様より釜蓋かぶせに覆はれまして、私名は何と申すかなればほさき又五郎と申します、又五郎は初めての事なれば、どちら様が嫁御さんやら、お手引き婆さんや知らねども、備前のおあんばい、べにおはぐろのつけあんばい、帯はずつかいすいたけなば、腰の模様は鼠だけ、道は七ふみ四ふ六ぶと踏分けて、お通りなされるおん方を、花嫁さんに見受けまして、私釜蓋被せる道知らねども、あさぎでざらいつとつかふせませす。これより花嫁が此の家に永く留まる事を希望する文句を永々といひ、「下手の長口上仕れば、今夜御婚儀お客の妨げ」と云ふと、一同で、「君の恵みぞありがたき、君のめぐみぞありがたき」と和して歌ふ。この風俗は恐らく古風であらう。而して文句は時代と共に變り、最後にこんな風になつたと見える。

カマツツリノウタ 釜蓋の歌 京都にて本紅染屋、絲練屋、絹練屋、ふかし物屋の如く大釜を使用する家々は、年の暮れに籠つきと稱して、つき直しといふを行ひ、正月三日に釜蓋を行ふ。釜に供物をし店員一同前に坐して神職の歌ひの後、一同に、「めでたし〜今年も

忙がしく、沸いて〜湯返れ」と云ひ、次に長い竹に覆を突刺したのを持つて曲取りをしつゝ踊る。踊りつゝ、「御得意昌々、御用は富士より山なし釜はどん〜黄出し、めでたい〜釜たきめでたい〜」と、くり返し繰返し歌ふ。終つて常の無禮講となる。『風俗叢書』第三百三十二號。

カマヤセブシ かもやせぶし 「こちや構やせぬが秋田縣に入り、替唄が出来、雨の振もついで酒宴の興に行はれる。短い袖の袖口をつかみ、小首ひねつて構やせぬと云ふ表情をする。三味線は本調子。姉さん袂で構やせぬ、なんと鳴く、白歯でお身持おいとしや、コチヤ白歯でお身持おいとしや、コチヤかまやせの、オイキタコラサツサ、かまやせの。他に、「お前と知らず戸をしめて、口惜しかつた、軒端の露に打たれ通し。まさか嘘とは思へども、山吹の、實のなりさうな動めぶり。かまやせぬを」と詠る。

カミオカミ 神送り 目に見えぬ神をそのまゝに、或は人形に寓して村境へ送り出すこと。かくて疫病より免れたりする。善神にも悪霊にも此の事があり、歌舞を以てする場合を辨

カミオドリ 神送り 越後龜田町の盆踊。大群衆で数日間、夜明けまで踊るので名高い。『ア』宵の明星サ、夜明けだと思ふ、ヤツチヨ〜、殿さ歸して今悔し。『花の盛りに、しんとめられて、二度と咲くやら咲かぬやら』。假裝も出る。歌は踊子が云ふ。型は『民俗藝術』第二巻第七號に見える。桶冠りの布と踊笠を特に踊場で賣り、十数日前より積古踊と稱して踊り、當日は本踊と云ふ。

カメノコドウツキ 龜の子飼突 ヌイツテドウツキウタ

カモイジシタ 鴨居甚句 相州三浦郡鴨居に行はれる。↓カノンジシタ

カモツツサカ 加茂松坂 新潟縣加茂町の盆踊うた。松坂の一。↓マツザカ

カヤカリウタ 刈刈唄 重を刈る時の唄。日向高千穂地方の唄。もはや日暮れちや、追々暮れるヨ、駒上歸るぞ、まぐさ負へ。『履根は重ぶき重難なれど、昔ながらの千木を置く』。カヤカリウタ 刈刈唄 茅を刈る時の唄。

三州北設楽地方の唄が『民俗學』第一巻第一號に見える。好かぬ野郎めが、草刈りうせた、手切れ足切れ、馬ころべ。うせたは来た。五

くされ舞、また行先きも紙すき。『厭だら厭を初手に云へ、禰子の帯、あはせておいて厭とは』。前者は諸種の勢儀に就いて唄はれる。

↓カゾウチウタ

カミノオドリ 神の踊 徳島縣那賀郡見能林村に八月より九月の間に行はれる。太鼓に合せて歌ふ。大入葉踊(入端踊)に御の字をつけ、更に大の字にしたらしい。の文句は、頗る伊勢踊、辨踊の實況を忍ばす。曰く、「これの御庭へ雨が参る、どれから参る、京より雨の伊勢から参る、一の門あけよ、二の門あけよ、三の門越えて門ひらき、皆一様にお並びあれよ、御門踊はひとをどり〜」云々。以下は家響めに移る。おつはり踊は、鎌倉の庄屋の娘が妊娠して月毎の欲しき物が變るを歌つたもの。↓ミニナイチ

カミマイ 神舞 神舞は能の能能の中の舞にもあるが、神事舞即ち祭禮の舞をも意味し、紀州伊都の御船神社の盆踊は神舞と云ふ。

カメサキブシ 龜崎節 愛知縣龜崎港の唄。

伊勢門水歌 けふは龜崎、汐干の祭り、ヨイヨイ、山車で埋めた、ヨイトコ海の底、龜崎萬歳ヨイトコサ。

カメダボンオドリ 龜田盆踊 越後龜田町の盆踊。大群衆で数日間、夜明けまで踊るので名高い。『ア』宵の明星サ、夜明けだと思ふ、ヤツチヨ〜、殿さ歸して今悔し。『花の盛りに、しんとめられて、二度と咲くやら咲かぬやら』。假裝も出る。歌は踊子が云ふ。型は『民俗藝術』第二巻第七號に見える。桶冠りの布と踊笠を特に踊場で賣り、十数日前より積古踊と稱して踊り、當日は本踊と云ふ。

カメノコドウツキ 龜の子飼突 ヌイツテドウツキウタ

カモイジシタ 鴨居甚句 相州三浦郡鴨居に行はれる。↓カノンジシタ

カモツツサカ 加茂松坂 新潟縣加茂町の盆踊うた。松坂の一。↓マツザカ

カヤカリウタ 刈刈唄 重を刈る時の唄。日向高千穂地方の唄。もはや日暮れちや、追々暮れるヨ、駒上歸るぞ、まぐさ負へ。『履根は重ぶき重難なれど、昔ながらの千木を置く』。カヤカリウタ 刈刈唄 茅を刈る時の唄。

三州北設楽地方の唄が『民俗學』第一巻第一號に見える。好かぬ野郎めが、草刈りうせた、手切れ足切れ、馬ころべ。うせたは来た。五

月五日に草刈りをめて、日陰紅葉のつはるまで。つはるは終る意味。東京府西多摩郡檜原地方では一に山歌といふ。茅を刈る時と履根甚き完成の酒宴に唄ふ。『大嶽山の百合の花、今朝見れば、牡丹の花に飽く似た、ヤレコノ』。カラウスウタ 唐臼歌 唐臼に乗つて杵の尾を踏んで米を搗く時の歌。即ち踏臼の時の歌。踏む者は一人の時も数人の時もある。『俚語集』の宮崎の歌に、「米踏の米は歌好き、歌はにやはげん、歌へ歌ふなら早よはげた。』とろりとろりと今踏む米は、酒につくりて和泉酒」。神奈川には古調がある。曰く、「から白廻れ米も噛め、噛まずとも早や出る、土のからうす」。京都の愛宕郡に、「なんぼ踏んでも此米は踏めん、これも百姓の涙米」。

カラカサオドリ 傘をどり 傘を持つ踊。『落葉集』巻四にも「傘踊」がある。鈴木春信の繪にも若い娘が兩手に小さな傘を持つて踊る事がある。最近の各地の一本の傘で、ひろげたりつぼめたりして踊る。

カラコオドリ 唐子踊 岡山縣牛久津港で今日も行はれる。十二三歳の子供が唐子に扮し、「サーチャーアーハンエー」云々の歌で踊る。



とやらして物とやら、物とやらして何とやら」  
 二が乗合、乗る人もドッコイセ、乗せたる人も順に行く、道とは知れど行く事の、心に乘らぬ人ばかり。三は送り、それ、それにはあらで之は又、ドッコイセ、乗合舟のおきざうす、浮かれて遊ぶ心。四は花、花の都や祇園晴れ、地主の櫻は眞盛り、山玉の櫻の盛りに、狼が三百三十三匹さがつた、まさるめでたや、小猿めでたやドッコイセ、うしろ姿を見てもらひ、日和見てる猿廻し。五は、やらん、やらんめでたや、やらんめでたや、千両萬兩の身請客が参つて、この大黒舞を見さいな徳若に御儀、チヨイ、年立ちかはるあしたより、君も若や我等も若や、誠にめでたう候ひける、はやす後に事願の、あとから刺げる鱈ばかり。六が蟲、蟲も焦る、思ひ草、浮世凌ぐの頼冠り、取ればばちびん作り鬘、毛槍を取り先きのける、インヤイ御先を拂ふてアーレワサ、インヤイありやんりやインヤイこりやんりや、アーイーデーサーヨイ、行列崩さずばう立てろ、行くもヤレサて踊るもドッコイセ、忍ぶの亂れ我里の、花も眺めん投げかけゆりかけ、シトントントン、

トシトントン、ヨイヤ、シトントントン、トシトントン、しだれ舞インイ、ドッコイセ、ノーそれしだれくる獅子の帯、きりりとしやんヨイヤ、きりりとしやん、結び下げたはヤレサチナヤ、花の盛りに踊の振も面白や、よいやくと賞められて、かやつり草も夜が明けた。七は上げ、朝日、朝日さすてふ波の山、心々に乗合は、ドッコイセ、これから何處へ散りてゆく、チン、言葉の花の世の習ひ、い他生の縁ともも、治まる御代のエ、さらばくで代るなり。右は、俚語集拾遺にも見えるが特に記す。度會郡二見濱郷、四郷、御園、神社、大湊、宮本、宇治山田を通じて、早きは六月の二見の興玉祭に始まり、九月の精霊會まで踊られ、百番に近い音頭の數があると云ふ。曰く、放下僧、京羽二重、道成寺、乗合歪、歪萬歳、豊年萬代、女郎八景、松風村雨、班女、浮世舞、放し鳥、反魂香、夢の枕、花角力、花燈籠……等々。

カワサキコウタ山崎小唄 川崎市のうちた。佐藤惣之助歌、町田嘉章曲。工業地帯はエイホ男の舞臺、伊達に火花は散らしやせぬ、タシタロントト、散らしやせぬ。

カワサキコウタ山崎小唄 岐阜縣加茂郡田原村の盆踊った。これで川崎お十六調子、足で九つ手で七つ、手で七つ、足で九つ、手で七つ。川崎といふからには川崎音頭かと思はれる。之で川崎とは、前の踊の終りに例へば、餘り一つこと皆様お倦き、あいの川崎でやろまいか」と音頭が歌ひ、踊が川崎に變り切つた所で歌ふ文句。あいの最初、最後以外に行ふものを次ぎ、云ふ意味らし。

カワチオンド河内音頭 大阪府下の盆踊。明治二十六年に岩井梅吉が江州音頭を改良して歌ひ出し、時好に投じたが始まりで、今は早口・流し・改良・平……等々十二種ほどの歌ひかたがある。貝と鑼杖を江州音頭より除いて大太鼓を入れる。今は結婚式、披露式にも行ふ。題目は淨るり物が多い。さては一座の皆様に、ヤレコラセ、ドッコイシヨ、申上げます段の儀は、アーヤレトコサエコラ、ドッコイサノセ」と本文に入る。本文の一例、コレ、駒澤次郎左衛門と申する侍は、この川お越えなさつたか、早く聞かしたも、え、キョト、しい何ちやい、その侍今の先き越しやした、なれども俄の大雨で、川が溜まつ

た、溜まりました、なか、えらい洪水になつてきたと、云ふて船頭乗きり、別れて歸りをつた、いや何ちや川が溜つたと、前後不覺に泣き叫ぶ。

カワチオンド河内音頭 信州川中島の唄。北原白秋歌、町田嘉章曲、花柳徳次振。信州アア信濃の川中島は、厚と千曲のおひの島、聖が曇れば雨となり、冠着あがれば晴れとなる、ヤレ、ソレ、ヤントナ。

カワチオンド河内音頭 長崎市の諏訪祭の練物、船を引いて市中を廻り、最後に馬場に達した時に唄ふ。諏訪のお庭に舟引上げて、屋形ひらいて踊をあぐる。諏訪に森崎、住吉さまよ、祭りめでたや氏子も繁昌。

カワチオンド河内音頭 岐阜縣本巢郡下大須の盆踊うた。川原ばねそが習ひたけりやござれ、金の四五兩も、持てござれ、ヨイサ持てござれ。金の四五兩も持て来たなればいかなはねそも習ひ込む、ヨイサ習ひ込む。ハネソの一種と見える。ハネソ

カンガラオドリかんがら踊 ヨムシャオドリカンカラマチかんがら町 遠州掛川町の祭禮に出る獅子舞の事。神瓦町の者が奉仕するので神瓦町と呼び、今は右の如く詠る。

カンゴオドリかんげ踊 かんげは願化、勸化の類か。秋田縣西馬音内町の盆踊は、初め地口の音頭に合せて踊り、終りに甚句に合せて踊る。終りの時は産三頭巾と稱して黒い長いきれを以て顔と頭をおほひ、兩眼の所に穴をあけて亡者の姿に象るといふ。一に亡者踊といふ。カンゴ踊つて知られて居たば、夜明鳥がサ、阿呆といふた。

カンゴオドリ神迎踊 この字は冠字らしい。獨鼓か諷鼓の踊であらう。石川縣能美郡白峰村に七月十八日の白山の開山祭、九月十八日の閉山祭に行はれる。此の式の時は男女十數名、揃ひの白衣に白足袋、男は白鉢巻、空色の袴、藍色の袴、女は紅い袴だか、別に大勢の老若和する時は手拭か扇を持つて輪をどりになり、一をどり廿五分を要するといふ。歌は、河内の谷は朝寒いとこちや、御前の風が吹きおろす、加賀の白山しらやまなれど、雨はふるまい六月は、雨はは雪はであらうか。

カワチオンド河内音頭 伊勢の彌盆の踊。南伊勢はシヤゲマを冠り、十五以上二十八歳までの青年が白黒段染の筒袖、腹に白木綿を巻き、香の腰巻、手甲、脚絆、胸に太鼓をつけて四五十人、鐘太鼓、法螺に合せて夜間に廣い場所を篝火を圍んで踊る。一名シヤゲマ踊。歌の一例、これより東中池で、十七姫御が音を刈る、何にせうやと音を刈る、簀にせうやと音を刈る、簀になるまい笠に縫て、大坂殿御に縫ふて着せて、坂井の町で踊らうよ、今ゆく道は山道女郎衆、小芝に小草に露うちかけて、十七姫御が出て参る、山田の稻の葉

色の良さよ、葉色が良ければ、あぜより掛る京で一番調子の娘、白足袋穿いて、綾を織る手もいとほしくないか、みな若い衆」。

カンコドリ・瑞鼓踊 ● 伊勢鈴鹿郡高津瀬村地方では舊六月の天王祭、七月の氏神祭に十六歳より廿五歳までの青年が出て踊る。花笠を冠り巴の紋の模様の白の浴衣の着流し、大きな太鼓を胸につけ、ゆるやかな音頭の唄につれて夜間にをどる。庭入踊・牛若踊・舞踊(うちあげ)・お宮ぼめ・四季庄屋ぼめ・御寺・念佛踊等。牛若踊の一節、牛若様は幼少なれど、七つの年から鞍馬の寺へ、晝は一日學問なされる、夜は鞍馬の僧正ヶ谷で、お天狗様とは早拍子よ、早拍子よは明らかに、さらば手並を見せよとて、五條の橋へ進み出て、千人斬をなさるとて、九百九十九人は打たれ、一人足らいてお待ちある」。

次に南北を通じての各町村のカンコ踊の曲目を記す。鈴鹿郡神邊村の七月廿、十月十五日の祭禮には、御宮踊・樂師踊・お寺踊。同郡深伊瀬村の盆、夏祭、秋祭には、牛若踊・世の中踊・御宮踊・四季踊・観音踊・姫御踊・山伏踊。同郡井田川村では九月四日、十月十五、六日に踊り、昔は盆も、お庭入り、お宮入り、牛若、お寺、駒引き、百足、姫子、手鞠、四季、陣役、練り。同書生村は八月二十四、二十五日、十月十日で、四季の踊・山伏踊・扇役踊。安濃郡藤永村は八月中旬より九月始めに及び、曲目多く、一志郡高茶屋村は八月下旬、お伊勢踊・世の中踊・源平踊・牛若踊・山入踊。かるかや踊・数へ踊・花見踊・吉野踊。同郡戸太村も九月十月で祝踊その他。同郡倭村も同じく、池の踊その他。同郡中原村は八月下旬。同郡家城村は八月盆で、鹿鹿踊・お寺踊・入れ音頭・お宮踊。世のしく踊・世の中踊・かたがら踊。飯前郡大河内村は七月と八月の十五日、世古入り長唄。數び踊・世の中踊・神樂踊・陣立踊・梅若踊・關白踊・陣役踊・松島踊・鐘巻踊・極樂踊・姫子踊・川持踊・長崎踊・御多喜踊・御寺踊・綾踊。多氣郡佐奈村では一に火振り踊と云ひ、舊盆の十四、五日に、約二間の長さの松明の兩端に點火したのを振つて踊る。度會郡中島村では舊盆十五日の精霊祭、舊八月十三日の豊年祭に踊り、陣立踊・世の中踊・おつはり踊・頼治踊・燕踊・お太閤踊・京山伏踊・仙松踊・お伊勢山伏・菊輪踊・遠州國・筑紫奉行・お船踊・帷子踊。阿

山都東柘植村では一に太鼓踊、主として兩乞に行ひ、宿入練込歌・御宮踊・若君踊・小願遊踊・八幡踊・堀踊・浦松踊。以上の歌詞の若干は『俚語集拾遺』にも見える。

カンコドリ・かんこ踊 ● 福井縣大野郡の別天地五ヶ村打鼓、櫻久保地方の九月一日より三日間の盆踊。明治初期迄は女は白無垢、男は風折烏帽子に鹿差といふ。今は常の着流し、青年は胸に太鼓をつるし(それをカンコと云ふか)、他に扇持つ男女、心こそ通へ、身が通はりよか、あの奥山の一つ家へ、あの奥の山の人ならずや、えんやと引けば手が切れる、えんやと引けば手が切れる。「歌ふて舞ふてよう踊れ、歌ふて舞ふてよう踊られよ」云々。輪をどりで頗る古色に富む(大阪朝日)「カサオドリ」

カンコドリ・練鼓踊 ● 山口縣熊毛郡勝間村に、五年目毎に氏神祭に行はれる。拍子木一人、坊主(總指揮)一人、尼一人、旗持兼法螺吹一人、棒二人、太鼓鉦四人、唐團扇二人。一説に大内義隆凱旋の時に始まり大内踊といふ。一説に豐太閤朝鮮の役の時の歡迎式に始まるといふ。『郷土研究』第三卷第四號に見える。



カンチヨロブシ・かんちよろぶし 伊豆大島元村の三原神社の正月十五、六日の祭の踊歌。「カンチヨロぶしは何處から流行るノウ、江戸のサンチヨロリンコ、吉原のヤイノノサ、女郎の唄の、ジョーサ、酒屋のジョーサ、長い煙管に長崎たんばこの長く、サンチヨロリンコ、呑め殿ヤイ、ノノノサエ、色たんばこの、ジョーサ、酒屋のジョーサ、サンチヨロリンコ、松だかこへてしのおり若衆、エンエン」。

カンニンブシ・かんんにぶし 恐らく願人坊主の願人ぶしてあらう。宮城縣宮城郡大澤村で生れたともいふので、一に大澤がんにんと云ふ。今は大澤にすたれて仙臺以北の酒宴の興に踊られる。空也念佛の崩れで、一種の願念佛。切れ目く、にナモイダと云ふ。「奥州仙臺鹽竈様よ、かけし所願が叶ふなら、銀の燈籠も七燈籠、眞鍮の燈籠も七燈籠、唐金燈籠も七燈籠、合せて三七二十一燈籠、それでも所願叶はずば、綾と錦の幕をあげ、それでも未だく足らざれば、黒と縹子の幕を上げ、それでも御所願叶はずば、七里四方の竹藪を鎌で刈つたる其上に、裸ではだして七ころび

八起きに起きても足らざれば、前なるお池に身をすてる。他に、八百屋お七、熊谷教盛の歌もある。二上りの三味線に、大太鼓と太鼓をカケアヒに打ち、笛に雙盤が入り、十分に踊れるもので、八木ぶし、江州音頭式のタドキの祭文である。一に伊勢音頭ともいふのは願人坊主が踊つたからであらう。

カンネンブツノウタ・寒念佛の歌 山形縣鶴岡地方では僧侶以外に俗人の男女が三人五人と組んで寒夜鐘や太鼓を鳴らし各戸を訪うて香捨を乞うた。但し此の事は維新前に亡びたらしい。寒念佛の歌、稻荷様の鳥居の動化よ我々からになりませぬ、どうぞ志お手のうちナムアミダ、題目の歌、哀れなるかな石童丸、草を分けつゝ巖に登り、父を尋ねて高野の山に、南無妙法蓮華經々々。『風俗實報』第百三十二號。

カンノンジンク・観音甚句 相州浦賀の近くに燈臺で知られた観音崎がある。昔こゝに観音堂があつて、東京灣をゆく船乗に信仰された。同時に此處に清水が涌いたので、多くの船が立寄つて水を汲み、又南風の烈しい時は多くの船が風待ちをしたが、その爲め二軒の料理屋が繁昌して鼓歌踊きならひ吹かして江戸船寄せて、便り聞いたり聞かせたり、ならひ吹かせて田戸船呼んで、矢の津お丸の顔見たい、観音お吉に矢の津のお丸、お力や渡場とどめさす」と歌ひ、観音甚句と呼んだが、明治十三年に砲臺が出来たので、観音堂も茶屋も附近の鴨居に移轉し、鴨居甚句の名で同地に行はれるやうになつた。三味線も入る。また、富士の山から通はせおいて、今ぢや釣瓶の遺落し。「今宵一夜は浦島太郎よ明けてくやしや玉手箱」。

カンリキブシ・かんりきぶし 鳥取縣の盆踊歌、わしの殿御は船越山の、松の若芽を見たよな殿御。「可愛がらんせ、お前をたより、知らぬ他人のなかに立つ」。



横なれば、我が行先も明らかに、朝日輝く夕日夕づく、夕だもとは、北には大連大しようごん様の、御所造りを始めたり」の歌が歌はれる。清淨の木を伐る時の歌か。

キソヤマノウタニ祇園會の歌 【俚語集拾遺】の長野市の歌として、絹の袴に鹿の子帯、御名は得申すまじ、しゃんとさせられたまらせと、さてそなたは小鼓か、しめつゆるめつイヤ音のよさ。下の句は狂言小唄より出てる。祇園會の歌は神輿渡御にも歌ひ得る。次に記す祇園會の歌も同じである。

キソヤマノウタニ祇園會の歌 三重縣安濃郡の歌。津島祇園を、こゝに遷して勸請申す、悪事運れうと伏拜む、お庭の境内眺むれば、名木いろく植まませて、先づは見事なお庭かな」云々。【俚語集】北伊勢では祇園の祭に羯鼓踊を行ふ。↓カンコオドリ

キソヤマノウタニ祇園會の歌 京の祇園の山鉾を曳く時の唄子で、鉾に依り多少異なる。歌なくて樂器は笛太鼓に鉦。各地に行はれて次第に變化し、三味線も歌も附くやうになつた。徳島縣那賀郡立江町では太鉦を用ゐ、義太夫の三十三間堂の木遣に合せる。兵庫縣明石郡平

野村では祭の夜に各戸を囃し廻り、御祝儀をもらふ祇園囃子もあり、松の春越に明石の月は、千歳ふるとも變るまい、今年や豊年穂に穂がさがる、餅でまどろし笑て置る」と歌ふ。従つて各地の祇園囃子は今は内容必ずしも一様ならず。なほ岡山縣小田郡神島、神島神社舊八月十六・七日の祭の祇園囃子には、「梅の丸から吹来る風は、外浦繁昌と吹下す」と歌ふ。

キカイアブシ機織ぶし 機織で絲を引く時の唄。【俚語集拾遺】の兵庫縣の水上、養父郡に見える。「むこの山見りや木の葉が赤い、あれが落ちたら雪がふる」。且那さんも云はれる人が、水仕女に手をかける。「機織工女と雪持つ笹は、人目榮そて身は辛い」。

キグサモナビク木草も靡く また草木或は木草も靡くと云ふ唄、全国的に行はれる。【山家鳥龜歌】備後の部に、江戸へくと木草も靡く、江戸には花咲く實もなりて。【乘州志】に、「廣瀬殿の御出と云は地もゆるげ、木草も靡け、所領も靡け」を田植唄として記す。廣瀬殿とは吉城の廣瀬の城主らしい。即ち、木草も靡くは、威勢に靡くのと、床しななつか

等の曲があつたといふ。この名を見れば現在の乘州の神代傳(ヤジンダイオドリ)が、當時の木曾踊そのまゝでなくとも、當時に近いのである。現在の木曾踊は古いものではなく、「木曾の御嶽さん」の唄が、この踊の元唄でもなくなる。現在の唄のふしは古風ではない。【奇勝録】には、「御代はめでたや思ふ事叶ふ、末に鶴龜五葉の松」、「これの御家はめでたいお家、いつも絶えぬ歌の聲」、「えびす大黒なによして遊ぶ、黄金たすきで鏡上計る」等がある。扇を持つて踊りもした。古い俳句の木曾をどり、例へば、「信濃路や、月に朝まで木曾をどり(重増)」、「名にめでて更級布や木曾をどり(吉屋)」等は、當時のものを歌つたもので、今のものではない。今日、木曾をどりとして最も名高いのは福島町九月一日のそれ、町では木曾踊の免状などを出してゐる。但し最近では八月十五日の盆にも踊る。福島の現在の踊の振は明治初年に美濃の中津の踊を移したと【信濃民謡集】に見える。現在の唄、「木曾のナア、ナカノリサン、木曾の御嶽さん、ナンヂヤラホイ、夏でも寒い、ヨイ、ヨイ、拾ナア、ナカノリサン、拾やりたや、

しさに靡くのと二通りの唄がある。今は、相馬々々と木草も靡く、靡く木草に花が咲く」なぞと唄ふ。

キタトキキウチ菊と桔梗 無理かいな節ともいふ。山形縣西村山郡地方で祝儀の席に、謡曲の次に歌ふもの。菊と桔梗は、どちらが妹、同じ衣裳に野の鶴、いづれ劣らぬ同い年思ふて見しやんせ、めでたいな。「春の初めに初夢見たか、船に寶を積むと見た、綾と錦の帆をあげて、上のは鶴上下に鶴、思ふて見しやんせ、めでたいな」。善唄では終りの「めでたいな」を「無理かいな」と云ふ。【東北の民謡】

キコリウタニ機織唄 ↓コビキウタ

キソヤマノウタニ機織唄 千葉縣木更津町の唄。ア、木更津照るとも、東京は曇れ、かはい男が、ヤツサイ、モツサイ、ヤレコラドツコイ、コリヤコリヤ日に焼ける。「ア」沖の洲崎に茶屋町を立て、上り下りの船を待つ。「ア」沖をながめて、ほろりと涙、空とぶ陽が恨めしい。

争の頃、義士踊となつて復活し、女子供も忠臣藏の義士に扮して輪を作つて踊る。播州赤穂の四十七士、仇討木曾とげられて」と云ふやうな唄を唄ふ。義士討入に假裝して踊ること他にも例がある。

キシカワブシ岸川ぶし 佐賀縣三養基郡の唄。「岸川萬五郎さんな、腰にこんこつさげてなう、足のといこのふしや、垢だらけの、サ一サゼツテコイ、ゼリマケヤセンタン」。

キソヤマノウタニ機織唄 ↓ヤマダ

キズキキ杵築 大分縣西國東郡杵築町に起つた盆踊。團扇を持つ輪踊。唄はクドキ。キソヤマノウタニ機織唄 木曾踊は【信濃奇勝録】の文、最も讀むに足る。當時は、婚禮祝ひ・家祝ひ・佛事供養に踊り、特に六月十三日の御嶽里宮建立の日の黒澤の祭の夜と、盆の踊を大踊といふ。手拍子以外何もはやさず、村々に依り異同あつて、福島の奥の西野、末川は特に古風で手も振らず、扇もせず、至つて静かであると云ふ。當時は、おやま・君がた・まじま・八幡・はねそ・五尺手拭・三拍子・白首・盤・池田・やむら・きそく・横手・あまくさ、等

ナンヂヤラホイ、足袋そへて、ヨイ、ヨイ、右のナカノリサンとは木曾川の筏乗を指すと云ふ。別に中乗とは一頭の馬の鞍に席をつけて横に三人乗る時、中央に居る者を中乗ともいふ。【落葉集】卷二の近江八景、卷四の彌之介踊を見ると、「火桶やりたや炭をへて」といふ流行唄があつた。この上の句は「山家鳥龜歌」の讀鼓の部の「みすじふろが谷朝寒むござる」か否かは不明だが、拾やりたやに縁故もある。現在の他の唄は、「拾ばかりもやられはせまい、羽織仕立て、足袋そへて」、「心細いよ木曾路の旅は、笠に木の葉が舞ひかゝる」。また下の句を、川の鳴瀬と鹿の鹿ともいふ。「ぬしの心と御嶽山の、峯の氷はいつとける」。「木曾へくと皆ゆきたがる、木曾に木山があればこそ」。踊は右廻りの輪をどりで、持物は無い。なほ【俚語集】の廣島、島根兩縣の田植歌に、「大山坂本さぞ寒からう、拾の小袖も着せて拾れかせの」。「大山のお山は寒かるぞよなあ、拾の小袖も着てよかる」がある。キソヤマノウタニ機織唄 ↓ヤマダ

キソヤマノウタニ機織唄 文政五年版の【浮かれ草】







網で鯉を取る時、鯉の乗りが多くて網が重い時に、船頭が歌ふもの。一に網起し木遣と云ふ。「ヤリエーこたへたも道理」と云へば、全負「ヤートコセーヨイヤナー」と云ふ。こたへたも道理、千両萬兩の金ぢやものヨイトナリ。また和して「ソリヤートハリーヤ、ハリヤリヤ、ドッコイヨイトコ、ヨイトコナ」と云ふ。こたへるとは網を起すのに手こたへある事。後に網起しや舟乗の酒宴にも歌ふ。

キリコオドリ切子踊 廣島縣安佐郡飯室村地方の盆踊。天保以來、豊年の年に燈籠を戴き踊る。始めに「庭しめし」を唄ふ。こなたの殿は今よの盛り、八つ棟作りがお建てあるお建てある等のほめ歌があり、次に本歌「から梅を〜、一つたもれや、わがなる里の土産に〜」、安田姫御の召す笠は、昔は京着、唐の絲の如き古風なもの。【俚語集】

キリコウシ切拍子 廣島縣比婆郡の田植歌にあり。オダ、イヨ盃の廻らんう、廻らせや鏡子こそ、早乙女、イヨ鏡子こそ廻らんう廻せや鏡子こそ。【俚語集】

キリビコウシ切拍子 【俚語集】の埼玉の獅子舞の歌に、越越しに立寄り開けば面白や、

都で流行る切拍子よな。お庭のおしだれ柳、一枝とめて腰を休めろ、太鼓の胴をきりりとしめて、撃てや拍子ときりをこまかに。右の「きりをこまかに」は長唄の越後獅子にも見える。笛を吹くのに幾つにも息を切つて吹くことか。

キリコウオドリ桐生音頭 上州桐生市のうた。北原白秋歌、山田耕作曲。ハア機ひの起りはヨイヨイ、白龍姫にヨイ〜、姫は機神、チャチャツカ、チャツチャカ、キリハタトン〜、置詞に絲とり、機織り教へた、セセツセツセト、キリハタトン〜。市が立つ〜桐生の市が、市で逢ひまじしよ、桐生の市で、チャチャツカ、チャツチャカ、キリハタトン〜。市が立つ〜以下はハヤシ言葉。

キリコウオドリ桐生機織唄 上州桐生地方では、昔は機を織りつゝ即興作を唄つたといふ。機が織れない、機神様よ、どうぞ此の手のおがるように。「かあい男は仁田山通ひ、小倉峠がさびしがる。」「絲は千本切れてもつなく、ぬしと切れてはつながれぬ。桐生市外仁田山の白龍神社を機神様といふ。また桐生と仁田山の間を小倉峠といふ。

キリンマイ賦調舞 鳥取市神樂神社の獅子頭を二にキリンと云ふため、此の名が出た。キンカサンオンドー金華山音頭 宮城縣金華山のうた。松村義人歌、大村龍章曲。波の花さく六里の濱邊、島に輝やく黄金の光、ハヤシ音頭「サツサ景氣は金華山から、金銀財寶福の神」。

キンキョクココンダイゼン山吟古今大全 享保期の歌謡集。【近代歌謡集】に掲載。

キンキラキン〜さんきらさん 熊本唄。肥後の熊本、キンキラキンな御法度、そらキンキラキン、キンキラキンを唄へば首がない、それもさうかい、キンキラキン。また、しんととろりと見とれる殿御、殿御バイ、そらキンキラキン、殿は伊達者の上い男、それもさうかい、キンキラキン。前者に依れば、キンキラキンは何か切支丹の類にも取れる。或は爲政家の恐れた諷刺が此の元唄にあつたかも知れぬ。

キンダイカヨウシウ〜【近代歌謡集】 校註 日本文學類従の一書。昭和四年版、藤田徳太郎編著。陸奥小歌、女歌舞妓調歌、秋の葉、落葉集、吟曲古今大全、幾通塵、小歌吾聞久爲志願

音頭集を載せ、他に編者の近代歌謡史略を掲載。

キンニヨムニヨ〜きんによむによ 熊本唄。「片山日陰の、きんによむによ、みね時鳥ネ、こがれて鳴く聲、きんによむによ、聞かせたい、きくらか、ちやかほこ、ちよいと、きなよ」。また、「佐渡の民謡」に、高い山からキンニヨモニヨ、谷底見ればネ、瓜や茄子のキンニヨモニヨ、花盛り、キタラカ、チャカラカ、チャカラカ、ポン。或は熊本より佐渡へ移つたか。

キンノウブシ〜金王ぶし 東京市澁谷區の新小唄。澁谷全國日本一の、町のひろさを來て見やれ。

ク

クイウチウタ〜枕打唄 棒つき唄と同じ。徳島縣撫養町の例、「いざや讃州金比羅へゆくもやよひの旅衣、それ坂本を見渡せば、姿も揃ふた昔の笠、笠のしめよがヤレサノ、殿ならよかる、しめよとたるみよとヤレサノ我儘に

ヨウ親方酒手は、どうぢやい〜」。クガツココノカノウタ〜九月九日の唄 此日を節句の祝儀として踊る習慣があり、鹿児島縣熊毛郡では山口踊といふのを踊ること。【俚語集】に見える。「土佐から船が三艘ほど参る先なは錢よ、中なは金よ、後なは土佐のわさ米よ、わさ米ならば箕でひて手で量れ、斗かきは置いて手で計れ」。

クサイモン〜さいもん 下ナナクサノウタ クサカリウタ〜草刈歌 馬の飼ひばの爲め山に行き草を刈る時、刈つた草を馬の背にのせての道すがら歌ふもの。朝ゆく事が多いので「朝草刈れば殿やせる、朝草を刈るやうな、小野郎置きたい、朝草刈れば殿やせる、鎌切れろ、刈らずにたまれ、寄れ草、朝草に桔梗と黄金刈りませた、旦那様殿が黄金で輝く、わしと行かぬか、朝草刈りに、草のな

クサツウコウタ〜草津小唄 上州草津温泉の新小唄。「朝の湯けむり、夕べの湯もや、ヨイトサノサ、草津ア湯の町、サノサヨイトサノ夢の町、ヤレ揉んだ〜、ヨイトコリヤセ」。揉むとは熱湯を掻きまぜて微温にする事。又は、朝の湯煙ヨイホホホイ、ゆうべの湯もやヨ、ヨイ〜、草津湯の町ヨイホホホイ夢の町トカヨ」。

クサツウシ〜草津ぶし 下クサツウニモミウタ クサツウニモミウタ〜草津湯揉み唄 群馬縣草津町の草津温泉は、共同浴場に名高い時間湯といふ事があり、浴客一同が長い板で湯を掻き、三分間を熱湯に浴して病氣を直すのだがその折の湯もみ唄の最近代のもの。草津ぶしとも稱し、昭和初年に廣く世に行はれた。歌詞は替唄が多いが、草津照る照る、観井澤曇る、ドッコイシヨ、間の嬌態、コリヤ雨とな

るヨ、チヨイナ〜。また、草津よいとこ一度はおいて、お湯の中にも花がさく。お膳者さんでも草津の湯でも、戀の病ひは（惚れた病ひはとも）直りやせぬ。『民俗藝術』第一巻第一號に藤井清水氏の採譜あり。ドッコイシヨとチヨイナ〜とは、多勢が和して歌ひコリヤは文句の續きとして音頭が歌ふ。草津よいとこ、里への土産、袖に湯花の香が残る。草津よいとこ白根の麓、暑さ知らずの風が吹く。の二つは平井晩村作と言はれる。夕サトリウタ草取歌 田の草取の歌の略。

【俚語集】の京都府愛宕郡に、盆にや踊らう正月にや寝よう、長の夏ぢうに草取らう。靜岡縣賀茂郡に、田では田の草、畑では莠、夜は夜裏で身をやつすとある如く、田植終了後の田の草を取るのに一番草、二番草、三番草と時期に依り名がつく。一番草とり二番草とりて、三番草には早や元ばらみ、秋の出穂さへ待たれるといふ。三番草の時期は炎熱候が如く、三番草に獲せた、殿は夏山の木に獲せた」と佐渡で歌ふ。夏山の木の如くこの意味。また、石川縣の鹿島郡で、草の三番取りや嫁出そ〜と、苗をこきあげて、へを

たておいて、早稲の出がほに見て笑ふ」と云ふのは、姑が嫁を憎む心を歌つたもの。また「田の草取りに頼まれて、行くも厭、行かぬも義理の悪さよ。田の草取るも苦にやならぬ、秋作が當れば銀の響。田の草取りが厭だから、田のない國へ行きたい。」

タジハマオンド久慈演音頭 茨城縣久慈演のうた。秋村又一歌。備等久慈演、荒浪育ちアドントナ、浪も荒けりや、アリヤサノサ、浪も荒けりや氣も荒い。ハヤシ音頭、ア、ドント、ドント散れ、ドント散れ散れ、ドントナ。タシモトブシ串本ぶし 紀州串本港の歌。元、オチャヤレブシと云ふと。こゝは串本、向ひは大島、なかを取持つ巡航船。潮の解に燈臺あれど、戀の闇路は照らしやせぬ、ハヤシ、アラヨイシヨヨイシヨ。また、ヨイシヨを五度くり返してオチャヤレともコラシヨともいふ。串本港は前は太平洋、左右と後は山に圍まれて、汽船だけで外と交渉する町だが、この頃で名を知られるやうになつた。『民俗の旅』には、本来の串本ぶしは本文の次のハヤシが、「えぢやないか〜、ないか、お茶やれ」と云ふので、土地では今もかく云ふと記して

ある。

タジウブン郡上ぶし 岐阜縣郡上郡八幡の盆踊。舊藩時代に藩主が奨励した爲め榮えた。輪をどりて、音頭郡上のナア八幡、出てゆく時は、馬子アソソレンセ、音頭もふらぬに袖しぼる、馬子袖しぼるノウウ袖しぼる、音アソソレンセ、音頭もふらぬに袖しぼる」と云ふ風に掛合に歌ふ。三味線入り。天のお月様、ツン丸こて丸て、丸て角無て添ひよかる。心中したげな宗門橋で、小歌良才兵衛と酒樽と。村ぢや一番お庄屋さまの、小町娘の器量の上さ。搦た〜と馬子が搦た、二番すぐりの麻の上に。嫁をおくれよ戒佛薬師、小歌良三里にない嫁を。この中、郡上の八幡出てゆく時は」の下の句は、雨も降らぬに美濃戀し」が古いらしい。古く飛騨の白引唄にも唄ふ。此の文句は郡上の人情美を讃ふとも云ひ、郡上の馬市に諸國から集る者が遊女と名残を惜しむ唄ともいふ。

タジラウタ草取歌 山口縣大津郡の唄。初め歌、祝ひめでたの若松様よ、枝も榮える葉も茂る、竹になりたや、みやまの竹に、旦那榮えるしるし竹、納屋の續纏に綱くり掛けて、

大背美巻くのやひまもない、子持巻くのやひまもない、とかく川尻仕合せよ、三國一ぢや、あみにあしたいあさかけしよ、ハヨカオイ。申歌は、戀しくは尋ねござれよ川尻に打見れば昔人かやなつかしや、姿こそ鳥の姪子に似たるとも、心は花の都なり、「沖より寄せてくる大背美様は、川尻組に行末までも祝ひをこめてサヨイヤサー」その他、次に積り歌、年の始めの門の松、年の始めの門の松、鶴は千年歳老いて、鶴は千年歳老いて、鶴は千年歳老いて、鶴は千年歳老いて、これは鶴の大漁を獲祝する歌であらう。『俚語集』

タジラオドリ鯨踊 長崎縣の福江島の崎山に昔九郎と云ふ者が、鯨組即ち鯨取りの爲めの共同の社を作り大漁をしたが、或夜の夢にセミといふ大鯨が現れ、我は龍宮の使ひで玉の浦村大寶寺へ親展状を持参するから、必ず取るなと告げた。然し九郎は意とせず捕獲したところ、腹中に親展状があつたので驚いて埋葬し、その肉は食はなかつたが、それより毎年不漁となり、巨萬の富の紋九郎が破産して、供養の爲めに出来た唄と『俚語集』

に記す。此の供養とは紋九郎の爲めでなく、年々とられる鯨の事らしい。祝ひめでたのオホ氏神様よ、氏神様かいよ、崎山上郷の氏子榮えて村繁昌、サンヨカロヒヤ、オセビは世にかゝる」等の祝ひめでたが九首、神佛に捧げられ、次に、何とこの何と刺いたよ、シテンカラリン、シンカラリン、カラホロ〜ノリン、はざ〜羽差衆は。羽差は鯨にモリを打つ者。せびの出を見てなげく、せびやコノヤ、コラ〜シンヤ〜コラノ〜等々。

タジラグミシウウウタ鯨組祝儀歌 『全長崎縣歌謡集』所載。五島列島の捕鯨船出漁祝の歌。西海鯨は誰が掛けそめた、組の旦那のかけ初めた、納屋の續纏に綱くりかけて、大せみまくのにひまもなや、三國一ぢや、綱に今年は大掛しよ、はいやよい。右を最初に歌ひ、次に申うたとして、さても見事なお組の綱よ、せみの子持が寄りかゝる、いよ〜今宵祝ふて明日せみ掛けよ、之も祝ひの御利生か、いよ〜。あと積り歌、あさかけしよ、さ〜かけしよ」各一首あり。

タジラグミウウタ鯨組の歌 長崎縣西彼杵郡江ノ島村の祝宴の歌。太鼓に合せて歌ふと云ふ。

ある。

タジウブン郡上ぶし 岐阜縣郡上郡八幡の盆踊。舊藩時代に藩主が奨励した爲め榮えた。輪をどりて、音頭郡上のナア八幡、出てゆく時は、馬子アソソレンセ、音頭もふらぬに袖しぼる、馬子袖しぼるノウウ袖しぼる、音アソソレンセ、音頭もふらぬに袖しぼる」と云ふ風に掛合に歌ふ。三味線入り。天のお月様、ツン丸こて丸て、丸て角無て添ひよかる。心中したげな宗門橋で、小歌良才兵衛と酒樽と。村ぢや一番お庄屋さまの、小町娘の器量の上さ。搦た〜と馬子が搦た、二番すぐりの麻の上に。嫁をおくれよ戒佛薬師、小歌良三里にない嫁を。この中、郡上の八幡出てゆく時は」の下の句は、雨も降らぬに美濃戀し」が古いらしい。古く飛騨の白引唄にも唄ふ。此の文句は郡上の人情美を讃ふとも云ひ、郡上の馬市に諸國から集る者が遊女と名残を惜しむ唄ともいふ。

タジラウタ草取歌 山口縣大津郡の唄。初め歌、祝ひめでたの若松様よ、枝も榮える葉も茂る、竹になりたや、みやまの竹に、旦那榮えるしるし竹、納屋の續纏に綱くり掛けて、

云ふ。今年は仕合せ、思ふ事叶た、末に鶴龜五葉の松。今年は一ぢや一ぢや、また一ぢやいの一、お祝ひ通りすまうぞ。後の句は此の歌特有らしいが不詳。鯨取中の歌。

タジラヒキノウタ鯨引の唄 長崎市の諏訪祭の續物の鯨の汐吹きを引く時の唄。祝ひめでたや〜、ヨイヤサー〜、エイヨ、若松様よ、ヨイヤサー〜。次に、枝も榮える枝も榮える、葉もしげる、つ〜じ棒は〜、野山を照らす、せびの子持は〜、納屋です〜と、囃子言葉前の如く云ひ、終りに、大せびよ〜、明日も大きな大せびよ、ヤツシリヨイヤサー」と云ふ。せびはせび鯨の略。

タスハラオドリ捕原踊 門司市は七百年前に城下町で、楠原郷を名乗つてゐたが、永正の頃、大内氏の領となり、その頃氏神用宗八幡の神職、大内義興に従ひ上洛して、堂上某の作歌を得て雨乞の踊を取立てたといふ。明治六年頃まで續き、近年復興、十題の歌と九番の狂言の組合せになつてゐた。八幡宮の歌の一つ、めでたきごの始めには〜、利生の雨がしくれきて、しらげよねふる、やらめでた。単人の歌の一つ、小倉山々、麓の春の花

すまき、ほの見えそめし秋の夕ぐれ。常世の歌、薬師の前の色よき椿、あの色持ちし妻が欲しごさる、今宵の一夜に、お泊りやれあきらど、加賀越前の船ぞ着き候。ばんばの歌の一つ、春の田をく、人に任せて我はたど、花に心を作るころかな。

グソクオドリ具足踊 甲冑武器の類をほめそやす歌の踊。大阪府上神谷のコソドリ、徳島縣那賀郡の盆踊等に見える。兜は何と好ませた、三枚鏡に四方しまだれふきかへず、大小鏡形おとしたく、の如し。神事の舞に用ゐる。ヤガトウオドリ

クダリウタ下り歌 鳥根地方の田植歌。晝飯の次の休みが終つたあとの仕事の歌らし。下り歌はのぼり歌に對照する。『俚語集』には京鎌倉の有様を述べるのが多い。京鎌倉に行つた土産話と見える。鎌倉のヤハレ御所の前にある墓は、ヤハレある墓はヤハレ、

「ある墓はヤハレ、巴のかいた墓がある」。クダリウタ下り山 山鉾が神社に詣つて下山する時の囃子。オヤマ囃子では今は囃子だけだが、元は、『東北の民謡』に依ると囃子方の前に青年が立つて、扇をかざして踊つたと。

その歌は、色こそ黒い味がよい、大和のさんど柿。『惜いのは狐、逃げりや後を見る而情い。』オヤマバヤシ

クドキ口説 クドキは早く平家琵琶に見え、謡曲にも見える。泣くが如く訴ふるが如く歌ふもので、説教ぶし卑劣るりにも聞かれる。民謡に入つてはクドキは即ちクドキバシで、

盆踊に用ゐるのを口説といひ(オドリクドキ)、曹女などが彈語りで一篇の物語をするのは、昔の歌念佛がササラをすつて歌つたもの、俗化とも見られる。勿論近世も四竹を打つたり團扇太鼓の類を打つて歌ふクドキもある。クドキは云はゞ歌物語であり、日本歌謡史の重要な系統を成してゐる。

クドサンオンド九度山音頭 眞田幸村が住んだ高野山の麓、九度山の盆踊うた。トコサソデモ一シメセ、マカセ、マカシマセウ、盆と正月一しよに來たら、炬燵背負ふて踊るのに。盆にや踊るとて、笠まで買ふたが、兄貴や庄屋して止められた。『民謡の旅』クビキジンクノ城其句 新潟縣頸城地方の唄。甚句にやせまいか、甚句こまかで面白や。『甚句だど誰が名をつけた、お江戸登りの大

工業が。

クマノナダブシ熊野投節 和歌山縣熊野地方の歌。ひとり取るかよ五反田の草を、こゝろ長とれ、なぎの草。『熊野民謡集』クマノブシ熊野おし 兵庫口説の中にある種々の唄ひ方の一。

クマノミンヨウシユウ熊野民謡集 松本芳夫著、大正十一年刊、徳邊書齋の中。和歌山縣東牟婁郡太田川を中心に採集した民謡を記す。クマモトジンク熊本甚句 おてもやんの事

クミオンド組音頭 秋田縣仙北郡中川村の二人一組の組踊で二上り物。第兵衛なる老人が野菜を取りに毎日山に登るのをからかつた歌より始るといふ。第兵衛とどとど、どちやどどとど、船岡山ササミ採りに、みじても取らねば、まゝ食はれない。『東北の民謡』に依る。

クモスケブシ雲助おし 遠州日坂地方の昔の雲助の歌。長持唄として、小夜の中山、夜更けちやおよし、鹿の友呼ぶ聲がする。『見たか聞いたか日坂宿の、茶屋の娘と雲助』。馬方おしとして、寒や北風、今日は南風、明日

は浮名のかつみ風。右を連稱して雲助おしといふ。

クヨウオドリ供養踊 盆踊の一名。亡者を供養するためにいふ。大分縣などで云ふ。三

重縣度會郡南海村でも、盆踊を供養踊と云ふ。クリアゲオンド上音頭 淡路の太野、廣田の村々の夏祭に歌ふ。よいぞよそろよ、いやならよそろ、わごりよもおれも、いやでそよ。『民謡の旅』

クリナガレ栗流れ 田植に苗代に栗の木、卯の花を並べて田の神を勧請する、その栗に就いて歌ふ歌。『俚語集』鳥根縣の部に、奥山に咲き揃ふたる花の何花か、卯の花ませり栗の花。栗の花やら、白う咲いたはな、ならならじは花に問ひたまへ。ヤウグイスナガレ ヌウノハナナガレ

クリノサムライオドリ栗野武士踊 加世田の武士踊と共に鹿兒島縣の名物として、ときほし踊ともいふ。『三國名勝圖繪』にも見え、明治の末に大正天皇東宮の頃に台覽に供したるもの。文祿年間島津義弘が朝鮮に出陣の折に起るといふ。以後毎年七月に舉行、先づ御條齋朗讀の後、四番の歌あつて抜刀して踊る。

次に二才踊となる。前者の一番の歌は、若衆若衆、待夜の油火は、細く長かれ、ちよこを添ひ上げれ、即ち狂言小唄に酷似。四番目、我はや備前の鎧刀、思ひ廻せば、とき欲しや、ほつくとく。右は女歌舞妓の歌である。二才踊の歌は、小娘に征矢差添へて、城をめぐるは松千代様よ。帷子に巴をつけて、召すは遊谷の三五郎様よ。『歌舞音曲』第八號にも見える。

クレガタノウタ暮方の歌 夕歌と同じ。田植歌の一。『俚語集』鳥根縣仁多郡の例に、七つからはヤハレ西山見れば恐ろしや、ヤハレ恐ろしや、ヤハレ、恐ろしや、ヤハレ、日輪様のお入りかや。七つは午後四時を云ふ。ユウウタ

クレコウタ吳小唄 吳市のうた。野口雨情の歌、藤井清水曲。金の降る風どこから吹きやるヨ、トコドツコイシヨ、吳の軍港のサ、トコドツコイシヨ、波止場から、ハヤシ音楽、ヤンサノホイ、ソリヤ、潮の流れもいそいと。クロダブシ黒田おし 福岡の黒田領の唄。酒は呑め、呑むならば、日本一の此の

箱を。『呑みとるほどに呑むならば、これが誠の黒田武士』。男子が宴席で齊唱するもの。いはゆる今様の節で歌ふ爲めに、一に今様と云ふ。

クロマルオドリ黒丸踊 長崎縣東彼杵郡竹松村黒丸郷に現存。天明十二年に歿した法養の教へたものといふ。法養は此の地に歿し地名に名を残し、墓もある。大太鼓を胸につけて打ちながら踊る者、鉦を鳴らしながら踊る者がある。入羽の唄、今年よりして舞動どし、金の斗櫃に黄金餅、白銀俵に米量る、御所に参りて御門を見れば、白銀御門に黄金の扉、やら見事。次に小踊二首、曇らば曇れ、かしまさき、晴れたとて、くしきが見ゆるてなし、十四五六は寝頃よし、梅の木の下りし枝を枕に。次に三味線踊、そなた思へば身が細る、三味線の絲より身が細る、様は源家の白木の弓よ、ソレサンサへ、張りが強くて放されぬ、ソレサンサへ、そなた思ひて身が細る、三味線の絲より身が細る。樂器は、笛、三味線、大太鼓、太鼓、鉦。今は舊大村藩の縁故で大村神社の祭日、及び臨時のめでたき折に行ふ。

クワイエーハジメイワイ一級入初め説「俚語集」に横濱市の記す。あきの方から出うなひ男が参つた、一級さつくりこ、二級さつくりこ、三級目の級先きに、金銀茶釜を掲出した、おかみさんが銭勘定、旦那さまが金勘定。正月の儀式と思はれる。

クワガサキブシ一級ケ崎ぶし 岩手縣宮古港の唄。江戸ぢや吉原、南部ぢや宮古、都まさりの級ケ崎。「級ケ崎、沖にチラ／＼航海ランプ、あれは宮古の岩手丸」。級ケ崎は宮古の遊廓の所在地。

クワツミウタ一級摘唄 桑をつむ時の唄。山形縣北村山郡では、一でかつこ花、二で杜若三で下り藤、四で獅子牡丹、五つ山の手木、六つ紫いろよく桑また、七つ南天、八つ入重櫻、九つ小櫻のつらしをつけて、十で殿様のおもたやうにそまた。「俚語集」但し此の文句は各地で手種唄その他に唄はれる。同書拾遺の、長野縣下水内郡地方の唄、桑は摘みたし梢は高し、誰に負はれてつんで取る。「花はあれどもアリヤ木が高い、どうせ私の手折れぬ」。同書に、山梨縣東八代郡の桑もぎ唄として、「おさんどんでも色に持ちや可愛

い、晩のお雑炊のてんこ盛り」。クワナノトノサマ一級桑名の殿様 三重縣桑名のうた。三味線物。桑名の殿さんヤンレ、ヤツトコセ、ヨイヤナ、桑名の殿さん時雨で茶々漬、ヨイヤナ、アレハアリア、リヤンリヤン、ヨイトコ／＼ナ」。

ケ

ケイコオドリ一級古踊 新潟市の近くの沼垂や龜田では盆に先立つ十数日より踊り始め、これを稽古踊と云ひ、當日の本踊と云ふ。ケイトウラケ一級舞臺 飛騨一般の神事舞。俗に鳥毛打、カンカコカンともいふ。鳥の羽根をつけた笠を冠り、紅と太鼓を打つ輪をどり。大野郡宮村の水無神社のは紅打百人、その長を紅大将といふ。太鼓打十五六人。曲目種々あり、歌は無し、打鳴らしつゝ踊る。仰ぎ俯し左右に飛んで鶏の圓ふ如き形して踊るといふ。「民俗藝術」第二巻第九號に詳しくいふ。大規模なるを大鳥毛、小規模なるを小鳥毛ともいふ。

ケイバイ一級いばい、舞舞 明治二十三年版の「向鶴」に、陸奥の風俗を記して、舊盆の頃一組二十三人の隊を作つた農民が、鶏の糞のものを冠り、槍・蓑刀・鉾を持ち、拍子につれて、打合つたり、圓形に廻つて舞ひ、これをケイバイと云ひ、鶏舞の字を宛てるが、傾盃樂の轉化したものといふ。今日は三戸郡階上村の盆會に墓前で踊られ、墓念佛ともトリ舞ともいふ。豊年祭、八戸の盆や三社祭にも踊る。唄は長きも短きもある。「七月は物の哀れな月なれや、野にも山にも、かぶら火焚くもの、なむあみだ」。かぶら火は迎へ火の事。また、戀しき人の墓見れば、見るより早くなみだ流れる。長きは和讃式の歌、前の御施餓鬼位牌の梵字を讀んで見る、讀むに讀まれぬ涙流れる」。

ケサジ一級ウタ一級装束女の歌 熊本縣志名郡大野村の歌。「向う通るは装束女ぢやないか、昔の小笠に竹の杖、昔の小笠が装束女であらば、お伊勢下りは皆装束女、装束女々々と昔には打てど、寄せて見たなら皆装束女」。恐らく元は都の歌であらう。装束は古傳説の女主人公であらう。「向う通るは清十郎ぢやないか」

の同類の歌である。

ゲッキン一級月琴ぶし 長崎に行はれる。月琴及び三味線を弾く。春風に庭にほころぶ梅の花も、驚とまれ此の枝にホーカイ、そちが囀りや梅が物いふ心地する、ホケキヨ／＼。方言で、「おんだいそんげんしなすな馬鹿しつとつたい、どうゆこんなんなよそはしかもんぢやろかいホーカイ、おんがあをもちやほかにある、ほかにある、あんだすかばい」。ケヒョウ一級オドリけひよん踊 鹿嶋と宛字をするが、ケホン、キヨヒョウと凡て鹿嶋を叩く音を云ふ。和歌山縣の御坊、切目岡庄の小竹八幡に現存。鉢叩きの遺風で俗に空也の作と云はれる鉢叩きの歌を歌ふ。始め御書と云ひ「それ人間に四恩あり、四恩とは天地の恩、父母の恩、國王の恩、衆生の恩也、凡そ人間たる者は」云々と讀む。之は天明四年の物である。歌となつて念佛も唱へ、ともかくにも月の夜すがらいざ踊ろ、奢侈榮華は是皆春の花、名利の心を止めて急いで淨土を願ふべし、南無不可思議密陀波若多」と終る。ケホン一級オドリけほん踊 ヲケヒョウ一級オドリケン一級 拳に合せる唄や囃子も多い。秋田

クワッキーケンシ

縣角館のオヤマ囃子の一つ拳ばやしは、歌はないが、元來拳の爲めのものであらう。安來ぶしも拳に用ゐる、その時は安來拳と云ふ。ケンガカリ一級餅がかり 獅子舞の曲目の一。獅子が餅を咬へて舞ふ。太刀掛りとも云ふ。ダンジ一級オドリ源氏踊 伊豆熱海温泉の村社今宮神社の十月二十日の祭禮に、氏子の和田區の青年團員に依て踊られる。手踊の輪をどり、盆踊式のもの。和田の、和田の今宮さんは壽命の守り、君が玉の緒つぎどころ、ヨイトコナー、ヨイヤサ。此のあとに多勢がイヨコラシヨと附ける。他の歌詞、「熱海、熱海よいとこ日の丸立て、御本丸へとお湯が行く」。清水わかされた和田山峠、君は源氏の御曹子。これに二上りの三味線、笛太鼓を入れる。「民俗藝術」第一巻第十號に詳しい。ダンジ一級オドリ一級支女ぶし、支如ぶし 福島縣會津地方に唄はれる。一説に、會津東山の天寧寺に支如といふ華貌の小姓が居て、里の女達が戀ひ慕つて唄ひ始めたとも、別に支女といふ美人に、若い者達が思ひを寄せて唄ひ始めたとも云ひ、げんじよ見たさに、朝水くめば、げんじよ隠しの雲がふるを元唄とする。

寛政年間に江戸に流行し、同九年に十返舎一九が黄表紙「げんじよぶし」を、壽亭主人が、「源女物語」を書き、同十年十一月の中村座の顔見世狂言「花三升吉野深雪」の四建目淨るり、錦清戀山守(作者福森久助)の文句の中にも、「思ふて通ふに、おさんどなア、眠るの誠、ねごいのか、ぢらすのか、げんぢよめ／＼今げんぢよ節は、どこから流行るノ、のぶとさんの間の、名代のお杉とお玉が、友綱とると唄ひますの、げんぢよめ／＼」とある。尤も江戸に来ると、なんでも江戸化されてしまふが、江戸に當時流行したげんじよぶしは、館屋が流行させたと云ふ。樂器はなく、蕭のみ清のまゝで、素手で踊る。動作は七動作。唄喧嘩と云つて、互ひにカケアヒに唄ひ又は通歌と云つて、一つの題に就いて即興的新作を唄ひ、唄ひつかへた者負けとする。明治四十年十月の「歌舞音曲」第七號の記事にその頃ある人が、東山の温泉に入浴してゐると、男の湯場で腰自慢が、げんじよ節を唄ひ出した。すると忽ち女の湯場から唄ひ返してこゝに唄喧嘩が始まり、凡そ一時半、兩方で唄ひつゞけたと云ふ。勿論、同一の文句は反

覆しないのである。維新前、瀬澤村におとめと云ふ即興の名人が居て、聲もよく誰も負け

に行はれる。鬼面を被り刀を抜いて踊る。曲目二十数種、笛に太鼓に銅拍子を打ち、念佛

コイコイコジョロウ、来い来い小女郎、廣島市の八月の盆唄。今は無いが、町内の小娘が

似た文句がある。本来海上の歌らしいが、何處を指したかは分らない。また長崎縣五島列

證誕生の祝ひの式歌とされる。秋田縣仙北では戸澤唄と稱すといふ。『東北の民謡』

藁音頭と呼び、夏以外に座敷で踊るのを、座敷音頭と呼ぶ。始め音頭取が「エ、皆さま頼

コウズシマコオドリ 伊豆神津島に正月や盆に行ふ。三百八十年前に島の主が上洛して覺えて歸ると傳ふ。元は娘が求婚を目的とするといひ、一定の京都風の姿で踊ると傳へる。五十歳以上の老人四五人で歌ひ樂器は無く、縦に三回、横に一回、二十人位の娘が踊る。始めシテイナアぶし、次に中タイぶし、逢ふは別れと兼ねては知れど、けさの後朝いつより辛い、ソレー逢はぬ昔がましぢやもの、シテイナア、君に貰ふた尺なし帯は、帯にや短し帯にや長し、ソレー參る

薬師の鐘の緒にヨイヤナア、シテイナア、色々あつて、七つ拍子が所望ぢやが合點か、おーさーて合點ぢや、ソレシヨ。歌いろ／＼あつて、次に十六拍子を所望して終る。次の中奏節は、お江戸浅草浅いとおしやる、中タイナア、さぞや深川深からう、さぞや深川深からう、中タイナア、ソレー。コウター小歌、小唄 昔は朝廷で制定して歌ふ歌を大歌といひ、俗に歌ふのを小歌と云ふ。五節の舞にも小歌が現はれた。此の俗に歌ふを小歌、小唄と云ふ例は永く傳はつて室町時代に狂言小唄があり、江戸時代に入つて陸連

の小唄、各地の小唄が出来、幕末より現代に掛けて端唄から轉じた小唄も發達した。別に短い文句を長く引張つて歌ふ長歌に對して、短い文句を短く歌ふものを小唄と云ふ事も郷土舞踊の中に見える。最近各地方に新編諸が出来て、何々音頭と稱し何々小唄と稱する。その用法は何々ぶしと稱しても差支へない場合は音頭と云ひ小唄と云ふ。尤も短い文句には限られ、行住座臥に口ずさむにも適してゐる。

コウター小歌 廣島縣比婆郡の田植歌にある。「日が暮れりや坊主が、鐘をゴンとついたげな」式の短いもの、及び長いものもあるが、短く歌ふのであらう。山口の阿武郡の田植歌にも見える。大歌歌ふて小歌歌はにや、尾のない鳥が立つやうな、尾もない羽もない鳥、今朝立つ鳥の羽音え、立つ鳥は羽てこそなう、けさ立つ鳥の羽音よ。『櫻葉集』  
コウター子歌 ヌオヤウタ ヌタウエウタ  
コウターゴモクスシ小歌吾閑久爲志 天保四年に小寺玉晃の集めた歌謡集。「近代歌謡集」に收む。  
コウター小歌舞 短い歌を歌ひ、扇を取

つて舞ふこと。「ひなのひとふし」に岩手縣瀨田郡西根山地方の舞臺に、左に杯をとり、右の手に扇をひらきもて、小歌舞といふ事をせりそのさうかに曰。さうかは明歌である。文句は「酒はもろはく、おさく(御酌)はお玉おさかなには西根の池の舞臺、さしたきかたはあまたなり、さしたきかたは唯ひとり」。原文は「とて、つとゆくりなうさしつ、その人のみて、又盃をも二人にさすとき、しか唄ふなり、ことにふりたり」とある。この「つとゆくりなうさしつ」のさしつが盃を差すのか扇を取つて一差し舞ふのかは不明だが、本來は立つて舞つたものであらう。

コウチコウター高知小唄 高知の新編諸、鹿の園路もテラホラと、室戸岬の灯に、見ませ見せましよ、浦戸を開けて、粹な高知の伊達姿、高知戀しや紅珊瑚。  
コウチマツガハナ高知松ヶ鼻 土佐の唄。「高知の松ヶ鼻香所を西へ行く農人町菜園場新堀魚の棚掛屋町、種崎町打越して、京町行くと早會所が立つて居る、程なく使者屋を打越して、堺町本町入丁通します、そこから辨形本丁つき抜け観音堂」。

コウホニヨミンヨウサツ 小稿本伊豫民謡集「愛媛縣教育會、社會教育部門編、昭和九年廣島發行、五十種の歌を收む。コウヨウヘン(荻葉集)「荻葉集古義」の著者鹿持雅澄が土佐の唱歌の類を集めたもの。天保六年の自記。「日本歌謡集」巻七に收む。コウロギウターかうろぎ唄 『ひなのひとふし』に、出羽國久保田のかうろぎ唄として、吹上澤といふ處より來る女のかたるら、木の皮の假面などかけ、鮑貝の鳴るを杖として、是をほうしにつきて、むつきのいはひに田歌をうたふふり、ことにおもしろし。原註に、阿倍家の臣が亂を避けて山藪に逃れ、その子女が活計を知らず、夜る／＼忍び出て物を乞ふて歩いたが、いつか乞食となつたとある。ほうしにつきては拍子を取ることにらしい。その歌は、「苗の中の鶯、何を何と囀る、鏡倉金倉、黄金倉、秋田繁昌と囀る」、「今日の田の田ぬしは、果報な人と打見る、俵千俵に腰かけて黄金の葉齒をくはへけり」等々。カウロギ唄の名の意味は不明。

コウホニヨミンヨウサツ 鹿兒島縣の飯島の唄。上飯村の平良の港より生れたらしい。大

山芳郎氏の文で知られた。又もおざれよ平良の港に、波は立ちても名は立たぬ。「鳥ちや御葉ぶし、串木野ちや六七調、名所鹿兒島はしよんがぶし」。また舟の夫と鳥の妻との歌がある。「あをいの段から、小じろ灘見れば、みじよか夫どが、豊釣る姿」。「小じろ灘から、あをいの段見れば、みじよか嫁どが、百合揃る姿」。「手では豊つる、足では豊つる、口ぢや餌切る面白さ」。「手では百合とる、足では葛とる、口ぢや葛むく面白さ」。御葉ぶしの名は、「御葉おざれば、今添はずとも、やがて二十五の厄で添ふ」等の唄より出たらしい。

コウホニヨミンヨウサツ 全長崎縣歌謡集に、南松浦郡三井榮村に主として唄はれる。「御葉ぶし」は、又あひませうで、御葉ないなら暇乞ひ、「わしを思はば線香杖して燈心の緒を立て、豆腐下駄して、通へ様」を記す。福江島の一邑の唄。●と同じか。  
コオドリ小唄 大唄に對していふ。大唄は規模大きく經費多額故に何年目かに行ひ、毎年小規模にしてすますのを小唄といふ。或は青年の踊に對して少年の踊をも云ふか。ヤクロマルオドリ ヤコウズシマコオドリ

コオドリこをどり 大阪府泉北郡上神谷村の國神社の祭の神事舞。赤の投頭巾に唐團扇を持つ新設意の口上で一々の踊が始まり、踊子は左に袴太鼓、右に撥を持つ者八人、銅拍子三人、扇振數名が半圓形となり、中央に中踊として四人の假面の者がゐる。他に音頭がゐる。デントツ拍子・四つ拍子・車拍子・二つ拍子・六つ拍子・八つ拍子・十六拍子に分れ、歌は道歌・若衆踊・四季踊・船形踊・鏡倉踊・具足踊・鮎引踊・館踊・御山踊がある。又、「民俗藝術」第三卷第三號に高知縣高岡郡原村の、吉祥寺の法會に於ける小唄の古記録がある。「荻葉集」には、土佐郡神田村の小唄、吉川郡森山村の小唄、幡多郡井田村の小唄を記す。

コオリヤマオドリ郡山踊 ヌアンマオドリ コオリヤマコウター郡山小唄 福島縣郡山市に行はれる。鈴木善太郎歌、藤井清水曲、花柳徳之輔振。廣い桑ばた、せばめた昭和、アヲトントロリ、月は出て入る屋根の波、屋根の波、トントロリ。  
ゴカネンブツ五家念佛 熊本縣八代郡五家ノ莊の念佛踊。去年までは他人の上よと思へども、今年になればまさる我が上、イヨサ、

なむあみだぶつ。時鳥げに極楽の鳥ならば親の行衛を語り聞かせよ、イヨサ、なむあみだぶつ。【俚語集】

コキリコウター清初めの唄 【全長崎縣歌謡集】所載、南松浦郡の唄。船に申し申し、船の拵へはようござりまするか、オット船の拵へはようござりまするか、本年は天気日柄、萬吉日もようござります、見ればりゆうせんだてもまこさうにござります、めい、共も拵へて一番には金ヶ崎、二番には金銀蓬萊の山を積み参らうではござらんか、三番には、ふくふく、どまりから、惠美須が浦へ思ふ費を積み廻らうではござらんか、オットそれもようござらう、然らば鐘に赴きませう、ヤンゾエ、取舵、ヤンゾエ、おも舵、ヤンゾエ、取舵、取舵にはとりかへ鳥、おも舵には辨天鳥、よう取らう今の舵。右の中、りゆうせんだての意は不明である。まこさうには帆を巻いて出帆しさうの意である。

コキリコウター 静岡縣安部郡大河内村平野の盆踊。七寸ほどの小竹の兩端に房をつけたのを二本持つて踊る。女の踊。三年以前

にお金が變る、お金變れば百姓は難儀、三年先の先き三月に、ごふしあげたかかなはな

コキリコウターこきりこ踊 寛政十三年版の『三州志』卷一に越中五ヶ山のコキリコ踊を「北國巡杖記」を引用して記す。「毎年中秋の比、コキリコ踊をなす。笛太鼓、鍬金にて是を囃し、筑子竹のうちやう、七五三五五三也、女竹の長さ五寸五分、丸竹二本あり、之をコキリコの二つの竹と呼ぶ。其語は、思ひと戀と藤舟に乗せりや、思ひは沈む戀は浮く。波の八島を連れきて、薪こるてふ深山邊に、鳥帽子狩衣ぬぎすて、今は越路の袖やかた。また、五ヶ山に邑數七十二あり、爰に古へより神樂踊コキリコ踊と囃す者あり、女は恒に白絹のかつらひもを頭にかけて後ろへ結び、白絹の石の帯をかけて人に見するなり、踊る時も同じ、平家の餘類遺匿して村民となる、末孫も今有て官名を名のるありと。明治四十二年の『富山縣紀要』には、平家踊と記す。近くは『郷土研究』第一卷第三號に、「三州志」の誤りを訂正し、五寸五分はムギヤぶしの四竹でコキリコは長さ七寸五分、指頭大の丸竹二本

で、歌にも「コキリコの小竹は七寸五分上、長いは袖にからかふぞ」といふ。囃しは笛太鼓鍬金ササラの四つ、昔は盆會に踊り近くは神社佛閣の立柱式、上様式に行つたといふ。なほ、『旅と傳説』昭和三年十二月號に、備後甲奴郡吉野村小堀の小切子踊のくはしい記事があるが、コキリコの竹は使はぬらしい。コキリコウター古澤よし 鹿兒島縣櫻井郡頭桂村盆踊の唄。十五歳の娘が十六人で踊る。歌詞の一、やい女房、ごじん様に参るぞ、急ぎや、急ぎますわいノウ、道のへんも遠きに依て、小唄の一つもやらうではないか、そなたやらさんせいノウ、松になりたよ、オイ尾上の松に、松は千代経で、オイ空ゆく久し、わしとそなたは、オイめうとでないか、輕いお瘡を、オイ子供にたもる、千人萬人、オイごじん様のおかけ。或は痘瘡の踊かも知れぬ。【民俗藝術】第二卷第十號に橋本龍行氏の記事あり。ヤホウソウオドリ

いふ。見さいなく、コリヤ拵取舞とは見さいな、一番目の大黒さん、一石一斗一細まで、金の金拵で、黒金のとつかき拵で、ジロリ、ジロリと、とうかきかけるもこくだんよ、こくだん舞と置らんせ、見さいなく、拵取舞とは見さいな。同文句で二番目の大黒は二石二斗二細、三番目は三石三斗三細とふえてゆく。大黒舞に附随したもの。【東北の民謡】に見える。

ゴクラター極楽 ヤエンシニウダイネブツ

コクラブシ小倉ぶし 小倉市のうた。野口雨情歌、藤井清水曲。小倉西へ行きや筑前博多、思ひ出したらハ、ソコヤントサ、又おいて。

ゴゴノウター午後の歌 田植歌の一。晝寝の後の勞働で、暮方の歌以前のもの。【俚語集】島根縣仁多郡の部に、おなりどがヤハレ吾妻の山で晝寝して、ヤハレ枕してヤハレ枕してヤハレ、吾妻の殿御、夢に見る。別に、滑稽な、田植に直接關係なき歌もある。ゴサオリウター菓産織唄 岡山縣都窪郡の唄。「内が若い時や、あさんどなれや、おひなに髪ゆて、だんだらかけもの、絲房かんざし、

黄八の着物に本ネル下着に、縮珍の帯して、一葉羽織で白足袋はいて、いちやのせきどてさしたけかたいで、ドッコイ、ドコイヨで菓産織りなされ、それに迷はぬ人はなし。【俚語集】

コサカジンター小坂甚句 秋田縣小坂鑛山の唄。鹿角甚句と同じ。ヤカズノジンク

コサタラ小櫻 東京府下の府中町附近の説儀歌。アノヤ小櫻をナ、ヨイ、アノヤ小櫻をナ、オーサイ折らうとしたなら背中なる寝んねこさんがナ邪魔になるならなヨイ、邪魔になるならオーサイ、前へと廻してお乳でも吞ませたら黙るだらうオサヤレヤレ。別に、有名な鎌倉の御所の御庭の文句も歌ふ。

ゴサトウオドリ小座頭踊 ヤキツネオドリゴサブネウター御座船謡 伊豫で藩主乗船の時に唄つたもの。小督・歌枕・神崎・たんべ・かすり・端歌、等々、長短種々の唄がある。【俚語集拾遺】各地で御座船謡と云ふに同じ。ヤオフナウダ

よより、おれにくりよより宿におけ、「宿がイヨコノよければ、宿がよければ名が立たぬ」。右の三首は續いてゐるが、他は一首づゝ獨立の唄。イヨコノぶしとしても知られる。五尺手拭の意は不明。或は五尺の字が誤字かも知れぬ。手拭を與へる事は禊を與へる事と同じく、男女が求婚の承諾を示すもの。奈良縣、兵庫縣に残る。ゴシヤクテヌグイ 五尺手拭の歌を云ふ。ヤゴシヤクテヌグイ

通常に警女唄と云ふのは江戸時代中期以後に、警女が三味線を弾いて唄つた俗曲を指す。常磐津の田舎警女は今も曲も振も残つて往時を偲ばす。タドキ唄、座敷用の踊唄その他を含む。ゴゼンオンド御前音頭 佐渡では舊幕府時相川の奉行所で、毎度相川音頭の盆踊をやり奉行の前といふので上品な「諸百番くづし」を踊り、之を御前音頭と稱した。ヤアイカワオンド

ゴセンキヌノオビ五泉帛の帯 新潟縣五泉町の盆唄。帛のソレ帯して錦を着よと、アリヤリヤン、思ひのナツハア、ハナバま





ちすいじまん、ヤ一帯には彌十郎、だくところく。古語の崩れらしい。

コバコオドリこばこ踊 『全長崎縣歌謡集』

所載、五島列島の女島の慶神社の祭の踊。女島踊、薙刀踊とも云ふ。鉢巻に袴、筒袖に踏込袴、脚絆わらち、數十人の男子が木製の薙刀を持ち、それに鬨紙を付けて舞とする。費用は郷で出すと云ふ。古く廢絶して、黒瀬と小島の猿踊として残り、それも近年絶えたといふ。こばこえて、こぞがなこちに、こちやのこば、まはるこちやこよ、しようばんば。

「未だ夜は明けんか、へけくと、殺せくよ、こちやのこて。」あの山の、さんごくみやまの、つじの花は二枝なり、一枝は釋迦に參らす、また一枝は我身のために。「寢て起きて、鬨を振上げて、やしまが沖に鬨釣りに鬨は釣らずに磯邊の女郎の、目についた。こばの意不明。

コハマブシ小濱ぶし 長崎縣南高來郡の唄。「俺達がエン父たちや、石屋が濱沖で、ヨトサホイ、波にゆられて手探綱ひく、ヨイヨイ、小濱よいとこ、不思議な所、ヨトサホイ、海の中からお湯がわく、ヨイヨ

イ。ハヤシ女上籠持つてこい。海中に温泉がわく所である。

コビキウター木挽歌 山中に假小屋を作り、

別世界の境涯で大鋸の音を友として木を伐つて世を送る木挽の歌には、自嘲自笑の皮肉が多い。また大鋸の音を擬音化してハヤシ言葉に用ゐる。而して諸國に共通の歌も多い。木挽女房になるなや妹」といふ上の句に對して鳥根では、「しんの野山にたど一人」、「思ふ仲でも引分ける」、「花の盛りを山奥に」等以下の句を歌ひ、ザイくと囃す。この最後の文句は更に上の句を違へて各地に歌はれる。「なんの因果で木挽を習ひ」等を上の句に云ふ。『俚語集』の三重縣三重郡に、木挽や山なかの山小屋に住めど、ソトモく、手やごもくのまままたべん、ドシコメく、アードシコメく命と細びき長いがよござる、ソトモく、ひけどしやくれど此木は挽けぬ、ソトモく、どここの野中の松ぢややら、ドシコメく、アードシコメく、木挽と風はひかねば食はれぬ、ソトモく、がある。福岡や熊本にはジートコ、バートコと云ふ囃しもある。本文は、「持ちかへく持ちかへたりや、せんの繰

のよな繰はない」、「木挽山中の山小屋に居れど、小判並べて女郎ば買ふ。いづれも山中労働者の孤獨を表はしてゐる。福岡の八女郡の「鍋で餅つく廣島の木挽、人がちよいとくりや鍋隠す」は、木挽職に諸國を渡る人々の姿も見せてゐる。伊豆大島の木挽ぶしは今も歌はれぬが、頗る古調である。然しこれらは木挽に履はれて諸國を歩く人ではない。歌に「ゆくも旅、また行末も旅なれば、空ゆく雲の定めなきもの」、「お身はたが子、たが娘、日蓮屋の鹽師の娘、何はなくとも鹽でもてなす」、「差木地をゆきく君に逢ひに出て、契り知の露のおなさけ」。一説に、卅一字の終りの句ごとに、斧を打込むと。差木地は大島の地名で、此の歌が大島で作られた證據になる。なほ山口の都濃郡の、われは山鳥、子にやこそ迷ふ、立ちもかねてや此山は」も、木挽歌としては古語である。

コビキウター木挽舞 東北地方に於ける座敷の舞の一つ。木挽の眞似をする。くはしくは「秋田の郷土藝術」にあり。コビキウター小拍子 廣島縣三郡の田植歌。大拍子に對する。太鼓の打方の名か。音頭「マ

一レ辨慶は、生れはどこよと尋ねた、ハ一生れはどこよと、早乙女「ヤ一ハイ尋ねた、生れはどこよと」、音「ヤ一レ辨慶は生れは出雲と答へた、生れは出雲と」、早「ヤ一ハイハイ答へた、生れは出雲と」。

コヒルノアガリ小晝の上り 廣島縣地方の田植で午前九時頃を云ふ。朝からの勞働を一段落つける。「酒は酒屋に看は裏から」、「通ふた」、「酒は出て来た看は何よと」、「問はれた」と音頭と早乙女がカケアヒに歌ふ。この酒を飲む時の歌を酒歌ともいふ。↓タウエウタ

コヒルノデガケ小晝の出がけ 廣島縣地方の田植で、午前九時頃、一休みして、十時頃また田に出て働く時の歌。田さばエ植まいて大盃なら、「よう取る」、「大盃をば見るめの殿に」、「やらいで」、「御酒が良いやら念なう殿が」、「勇んだ」と、音頭と早乙女がカケアヒに歌ふ。↓タウエウタ

コマオドリ駒踊 馬の首の造物を腹につけ馬の尾の部分の背後につけ、人がさながら馬に乗る如く手綱を取つて歩いて踊るもの。神事に行はれる。郷土の舞踊としては、岩手縣南部地方の南部駒踊が名高い。今は上北郡に

残る。陣笠に陣羽織、馬乗袴に前の如くして十二人、附舞と稱して、刀、薙刀、棒、杵の四つ舞、太鼓、笛、鉦の三拍子が加はる。庭入り直り駒、引返し駒、休み駒、進み駒、三寶荒神(後駒とも)、乗違ひ、廻しの駒、庭引き等の曲があり、放牧した二才駒を野取りする如き動作といふ。北は青森縣鮫港に、南は秋田縣北秋田郡荒瀬地方にも現存。秋田のその歌詞が、「東北の民謡」に見える。「いなはいない、十五七ははい、既になははい、たてたるはいない、鹿毛の駒はい、心なはい、知らないではいないはい、乗りかねてはい、男なはい、いづでもはいないはい、名を流すはい」。なほ、此の種の駒踊は春駒から出たとも思はれよう。日本のみならずイギリスにもある。青森の駒踊は明治四年頃北海道茅部郡白尻村板木に傳へられ、今も盛んに行はれる。蕭流し、白襟、白足袋、鈴を付けた化粧木馬に乗り、音頭に合して陣陣を作る。杵二人、棒二人、大太刀二人、小太刀二人、薙刀二人を以て一組とする。歌に、「甚句踊の始まる時は、はたの子供も皆出て踊れ、シツチヨイくくサ」。

コマキオンド小牧音頭 愛知縣小牧地方の

のよな繰はない、「木挽山中の山小屋に居れど、小判並べて女郎ば買ふ。いづれも山中労働者の孤獨を表はしてゐる。福岡の八女郡の「鍋で餅つく廣島の木挽、人がちよいとくりや鍋隠す」は、木挽職に諸國を渡る人々の姿も見せてゐる。伊豆大島の木挽ぶしは今も歌はれぬが、頗る古調である。然しこれらは木挽に履はれて諸國を歩く人ではない。歌に「ゆくも旅、また行末も旅なれば、空ゆく雲の定めなきもの」、「お身はたが子、たが娘、日蓮屋の鹽師の娘、何はなくとも鹽でもてなす」、「差木地をゆきく君に逢ひに出て、契り知の露のおなさけ」。一説に、卅一字の終りの句ごとに、斧を打込むと。差木地は大島の地名で、此の歌が大島で作られた證據になる。なほ山口の都濃郡の、われは山鳥、子にやこそ迷ふ、立ちもかねてや此山は」も、木挽歌としては古語である。

コマチオドリ小町踊 「附録」を見よ。コマチコウター小町小唄 愛知縣笠寺の唄。齊藤南柳、内藤香邦歌。鳴海紋りか笠寺小町、ちよいと蕭流し目で招く。「雨の笠寺、身のぬれ衣、晴れて夫婦と鳴海渦」。コマチオドリ 下コマオドリ

コマチオドリ小町踊 「附録」を見よ。コマチコウター小町小唄 愛知縣笠寺の唄。齊藤南柳、内藤香邦歌。鳴海紋りか笠寺小町、ちよいと蕭流し目で招く。「雨の笠寺、身のぬれ衣、晴れて夫婦と鳴海渦」。コマチオドリ 下コマオドリ

縣川邊郡萬世町小湊の十月十五日の香木八幡神社の祭禮に行ふもの。中打四人の中、二人は男の役で腰鼓、二人は少年の女裝で鉦を打ち、他に青年二十三人、平打と稱し、背に銅三本を立て色紙を切つた四手や山鳥の尾を垂らした物を負ひ、白鉢巻して胸に太鼓を吊し、腰巾、武者草鞋の姿で踊る。歌は、「空ゆく雲は何處に行くか、日本に行くか、日本に行くなら文をやる。」「諏訪御室の景色を見て居れば、鶴と龜と兼養して、黄金の餅で米量る。」

コムロブシ小室節 【歴曲類纂】五に、「其始並に名義とも知るべからず、今も諸侯御入府の節は、御馬前に立てうたふとかや、其曲節を傳ふる家、今も武州豊島郡三河島に残りてあり、三河島に残る事は、三河より來る人の子孫とかや」云々。吉原でも流行した。俗語に「馬子衆の癖か高聲で、鈴をたよりに小室ぶし。吉田ナア通れば二階から招く」などいふ。小室は小路、即ち信濃追分の附近の町を云ふかも知れぬ。然らば信濃追分になるらしいが、まだ分らぬ。【信濃民謡集】に南佐久郡小海村親澤區に昔から唄はれるといふ親澤追分を記す。親澤の若衆が追分の宿場女郎に通つた時の唄で、追分が崩れたものであらうといふが、「小もろ出て見りや淺間の山に、けさも煙が三筋立つ、オーサヨイヨイ」とある。或は小室節(小室節)は、やはり追分の宿場から出た信濃追分の一つで、追分より先きに名を知られたものであらうか。

コメアライウタ米洗歌 米とき歌と同じく毎日のそれだけでなく酒を造る場合を指す。サケツクリノウタ

コメツキウタ米搗歌 精米の爲めの米つきは、酒を造る爲めにもなる。【信濃集】に、千葉の香取郡の記して、「かぶらきのナヨヨイ酒屋のナヨヨイ、饗の饗言には、この米つかずに酒になればよい。愛知の西春日井郡では「コン」米つけや、お米が砕ける、旦那様御機嫌悪きはよ、「ぼん」米つけや、お米が砕ける、内の旦那さまの、お顔の悪さはよ。米の搗き方は六づかしの、その勢苦を述べたのもある。搗けどこづけど此の米やもえぬ、どこのお倉の底積か。また多勢の協力の爲め、今夜の米つきや、みなめん鳥か、歌を知らぬか歌はぬか」と云ひ、「米をつくには五人こそよけれ、調子揃へてとろ」つけば、

コメノナルキ米なる木 「わたしや備前の岡山育ち、米のなる木をまだ知らぬ。【郷土研究】第一巻第三號に岡山地方の傳説を記し或る女囚が姫姫のまゝ獄に下り、「女を生む、その娘も永く獄中に居て外界を知らぬ事を嘆

いてうたつたといふが如何。同じ岡山の唄、「讃岐十三郡、備前様八郡、備前八郡が廣ござる」と共に岡山の大藩を誇つた歌であらうと説いてゐる。

コメフミウタ米踏歌 ↓カラウスウタ なのは、「ひなのひとふし」には、これにも早且朝飯後、晝飯後、晩及暮の歌を擧げてゐる。

コモリウタ子守歌 子守歌は古くより歌はれたとしても、文獻には見えぬ。古くは「寝んねんよう」をくり返し云ふ程度であらう。生活の各方面に歌はれる歌が、次第に歌らしくなつた頃に生れたのが、「里の土産になにもろた」の長篇物であらう。【落葉集】の市野原に、「京の土産に何々もろた、蒔繪の差櫛」云々があるが、此の種のもは、もう少し古いてあらう。子守歌のふしは全國に異同はあつても、和讃の影響の深い所を見ると、和讃が一般に行はれた時代より遅れることであらう。最も全國的な歌詞は、「ねんねんよう、こらりりよう」式な文句に續く本文とも云ふべきものが、「ねんねのお守はどこいた、山を越えて里へいた、里の土産になにもろた、でんでん太鼓に笙の笛」で、これは未だ言葉を選

解しない幼児に、未來の幸福を豫想させて、寝たらば、寝て目がさめたら——幸福になるであらうと説くので、やはり民間信仰の傳説的なものを残してゐる。今の歌は「でん」太鼓に笙の笛、起きたら叩かしよ、笛吹かしよ」と續けても續けずとも同じである。また「ねん」小山のお唄は、何故にお耳が長ござる、お母さんのおなかにゐた時に、椎の實かやの實たべたので、それでお耳が長ござる。これは動植物に共通の、それ／＼の肉體的特色を示す歌の一つで、兎は幼児を思はせるほど可憐なので、特に喜んで子守歌に用ゐられたのであらう。次に、それからそれと止め度なく種々の歌を歌ひつゞける例もある。かくて子守娘といふ少女労働者が給金をもらつて働くやうになつてから子守歌は文學的に長足の進出をした。而して近代に起つた二十六字詩を好んで歌ひ、同聲聞き傳へて未知の歌を知り、且つ古きもの、替唄を作り、新しい即興作を作るやうにもなつた。以前の傳統をついだものは、早く寝る子をほめ、寝ぬ子をいふ類で、「寝んねした子に羽子板と羽根と、寝んねせん子に羽ばかり、寝んねする子に

赤いべと着せて、起きて泣く子にや綿のべと綿のべと」と歌ふ。これが次第に職業的に事務的に奉公してゐる子守の露骨な心の現れとなり、「ねんね可愛いや、寝る子は可愛い、起きて泣く子はつら可愛い」、「こちの子は今寝る盛り、誰も阿呆ぢやとゆてくれな」と歌ふ。次に子守の勞働苦を述懐する歌が出てくる。「守と云ふのは淺ましものよ、道や街道で日を暮らす」、「守よ／＼と澤山さうに、守がありやこそ子が育つ」、「守よ／＼よ、なぜ子を泣かす、お乳足らんで泣きなさる」、「守を置くならんば置きやれ、歩きたんびに子をゆする」、「こんな泣く子の守するならば、おひま下され、わしもいく」、「いやぢや、きらひぢや、泣く子の守は、叩くつめると思はれる」、「旦那よう聞け守子の歌を、守にきつすりや子に當る」。終りに近代的な長いものを一つあげる。「ねんねの守はどこへいた、あの山越えて佐渡へいた、佐渡は四十五里波の上雨風吹いても宿がない、人の軒端で日を暮すかはいや／＼蛙の子、にくや／＼餅の子、泣いたら波の中へ入れられう、起きたらお馬に蹴られよう、ねんねこ坊ぢやん、龜の子坊ぢ



練となるならば、天の村雲が練となる。始めの歌は、「しら茶に」、「知らぬ旅路に」とも云ふ。『俚語集』に見える。こんな歌を籠の中や馬の上で聞く嫁御家の身に誰もなつて見たい。然し歌の文句は全く良く出来てゐる。姑を奉制し、嫁に力をつける。それを皮肉に諷刺的に云ふのが面白い。さて行列が往來をゆくと、兩側の人だかりから一行に歌を所望する。これが第三者としての義務であり好意である。そこで雲助は答へて歌ふ。「ア一所望とナ一ヨ、ア一所望だと、ア一道やはかどらぬ、ア一先きのナ一御亭主はア一待受けるナ一エー」と、うまく答へる。或は所望する見物人は、歌で所望もする。花の雲助さんは、皆めんどうりよ、歌で御器量はさがりやせぬ」と云つた歌を歌ふ。また雲助の方で群衆に歌の所望もする。「ア一所望とナ一ヨ、ア一所望だと、ア一道やはかどらぬ、又も所望ならア一そなたからエー」と。すると見物人が聲に應じて、「軍筒長持や七掉八掉、中の御衣裳は限りない」とか、「軍筒長持や奇麗なものだ、中の御衣裳はまだ良かる」とか賞めて歌ふ。また道中に伊勢音頭を歌ふ例も多いが、これは道中

歌と云ふ義からだ。 ●やがて、一行は鞆の家に着く。「何處か」と思ふて来たが、あれが殿御の館かい、「嫁は来ましたか何處だ、嫁は納戸で待つ心」と、雲助の方から來意を告げる。すると待受けた連中は、「ア一揃ふたナ一ヨ、ア一揃ふた、ア一雲助さんがナ一ヨ、ア一そなた御遠方から御出てさうして御苦勞でござる、わたしや居ながら待受ける」と迎へる。軍筒長持や、こなたに納む、あとの嫁さん頼みます」と荷を渡すと、「先きの軍筒は受取りますが、あとの長持やまだ早か」と云ふ。ゆつくり渡せの意。やがて受取り終り、軍筒床の間に長持や納戸に、あとの嫁女は早よござれ」と歌ふ。かくて人足達は、「お渡し申すぞ、此の長持を、二度と返さぬふるさとへ」と歌ひ、どんづき木やりを歌つて立歸る(ヤドドンズキヤリ)。或は、「これの長持お渡しします、二度とかつがぬ其の覺悟」、「これの長持、受取るからは、二度と返さぬその覺悟」と問答體の歌もある。これを「その覺悟」を特に略しする。また行列が嫁家に着くと、家をほめ庭をほめ、戸主

をほめもする。門に立ちたる三がい小松、かかる白雲みな小松、「これの御庭に白雲植えて、よもの雲をまき寄せる」、「こちの旦那様いつ来て見ても、僕かされて、にこ〜と」なぞである。さて轎帽子を冠つた花嫁が現れると、笠蓋かぶせといふ事をする土地もある(ヤカマフタカブセ)。いづれにしても嫁ほめの歌が出る。婆ちや出て見る、今夜の嫁御、目ほそ鼻高、櫻色、「これさまの嫁様の御衣裳なぞを見申せば、京染めか都染めか、御座の中が輝く」とある。 ●次に座敷に一同着座すると、「こなた御座敷や祝ひの御座よ、鶴と龜とが舞遊ぶ」と歌が出て、三々九度の盃となり、「嫁様の〜、花付御膳に鶴すまで、あなたこなたとりかはす、面白や」と歌ふ。娘を嫁にやる親は、「嫁上花よと育てた娘、今宵あなたに上げますほどに、末はよろしく頼みます」と歌へば、婿の親は、「嫁上花よと育てた娘、今宵こちらに下さるほどに、さぞやおあとが淋しかる」、「もらひ受けたる花嫁様は、そゝそにしませぬ大事にします、氣づかひなさるな親御さま」。嫁の親は更に婿の近所の人に頼む、「あなた御近所お隣さうな、梅の

若木を植ゑおきました、萬事よろしく頼みます」と。客達は、「これの御家に入りくる嫁は黄金枕に錦の蒲團、末代長者と祝はんせ」、「玉のやうなる息子を持つてば、夕日輝く嫁とりすまで、さぞや親様、お喜び」。また馳走ほめとして、「これさまへ参り申して、いろ〜御馳走頂きて、宿元へ歸り申して、三日三夜の物語」その他、かくて種々の歌となり、「ア一千秋ナ一ヨ、ア一萬歳、ア一萬々歳ナ一エー」の歌で宴が終る。以上の歌は『俚語集』二巻、「島根民謡」、「全長崎縣歌謡集」より取つた。一々出所を記さぬは、大體に於て各地に共通してゐるからである。横濱市の婿取りの歌、「これさまの御婿さまは、お手かきと見えそろ、京親や京巻筆で、空飛ぶ小鳥をかきとめた」、「これさまの御婿さまは、どなた様の世話なさる、暮れにきて、秋は實となる種となる」。また埼玉地方では高砂といふ歌がある。高砂曲高砂を世話に碎いたもの(ヤタカサゴ)。諸曲高砂を歌ふのは因より早く足利後期、遅く徳川時代以來である。以上あげた問答體の歌は、問答の風俗そのものが古式である如く古風である。たゞ時世につれて、お前、あ

なたと變るだけで、聲言を歌で取りかはすのも歌垣式である。また誓ひの意味はないが、めでたい歌を婚禮と云はず何と云はずに歌ひもする。調島宮城のさんさ時雨(ヤサンサシグレ)や、九州のよいやな(ヨイヤナ)の如くである。和歌山地方では新郎の親戚の既婚の男が新しい摺古木を持ち、新婦の親戚の既婚の女が新しい摺鉢を持ち、歌に合せて卑猥の身ぶりをし、歌が終ると共に鉢が破られるを合圖に、新郎新婦は座を退き、嚴肅に坐つてゐた人達は、くつろいで賑やかに騒ぐ風俗が最近まであつた。最近では上方の端唄の「香に迷ふ」を歌つたが、以前は他の歌であつたに相違ない。婚禮の歌は字句は新しくとも、その傳説は古い。 ↓コレサマ ↓ハツウセ ↓ハツセウ ↓ヤストコ

サアノヤ〜のや 京都市の登唄。娘達が唄つて歩く。さゝのやの縁、盆には何も忙がしや、東のお茶屋の門口に、赤前垂に鬘子の帯、チョイト寄らんせ、はいらんせ、巾着に金の無いのは、お一辛氣、こ一辛氣」。 サイガドリ、雜賀踊 和歌の浦の祭の練物の一つ。織田信長が和歌山の本願寺を攻めさせ、將に陥らんとする時、本能寺の變が知れて寄手は引返したので、寺の者は喜んで傷いた足を引きすつて踊つたのが起原で、一にチンパ踊といふ。甲冑姿の練物。雜賀踊の名は往時の門徒の姓に依る。 サイゴウタ〜在郷唄 在郷唄は田舎の唄の意味だが、主として労働の場合の指すらしい。歌舞伎の合方にも見える。「隣り柿の木を十六七かと思たら、しほらしや」云々と歌ふ。この文句、産屋道満の淨りにも見える。 サイコノブ〜さいこのぶし 【松の葉】卷三に、さいこのぶしとして「佐渡とな、佐渡と

越後はさいこのさいよ、訪向ひ、それはへ、橋をな、橋をかきよやれ、さいこのさいよ、いよ船橋を、それはへ。

サイコラブシーさいこらぶし 福島縣相馬郡 眞野村の日吉神社、十三年目の遷宮式に、オツラ馬と稱して、飾り立てた馬に萬歳、五色金襴の蒲團をのせ、その上に脚六をすまて特殊の馬ひき唄を唄つて往來を練る。昔、北島氏の一族が、靈山の鎮守山王權現の御神體を、こゝに移した時の形を模倣すると云ふので、これに従ふ唄を、アヤオドリ、カバオドリ、ホーサイ唄、唄をサイコラブシといふ。

「殿様お立ち、お供もお立ち、めでた〜の若殿様は、天下御役で繁昌する」云々をオツラと云ひ、馬ひき唄、梅の若ご葉、今ならずとも、サイコラサ、長い月日に末はなる、サイコラ〜、サ、エーエー、コレワイ〜、サ、スツト〜、サ、エーエー、コレワイ〜、サをサイコラ節といふ。別に、「君の寢姿、窓から見れば、五月野に咲く百合の花」。「惠比壽大黒、車にのせて、鶴と龜とに引かせたい。」唄は種々に假裝する。

郡の唄。サイ〜クロオテ、アラお笑ひなさるな、御風戻うけたる其恩は、錦の灘よりまだ深い、大せん山よりなほ高い、御風戻願みます、アラサイ〜踏音がた。『俚語集』サイイブシーさいいぶし。『ひなの一ふし』の越後の國の唄に、「朝日、十五日、廿八日、桶ごしがながと投て、こわしてたもるなや、スツトサイ〜、ナメトコスンバイ」。原註に、桶ごしは單に桶のこと、消滅はすはひ桃の實の名所たるよし。原註に、酒宴などで唄ふとある。

サイトウバヤシ祭頭ばやし 茨城縣鹿島町の鹿島神社三月九日の祭に、當番の村二つより七八歳の少年に麗姿をさせ祭頭シンボチと名づけ、之に武裝した豊國の者、お供が多勢ついて参拜し、鐘を振り棒を打合つてはやす。「イヤ豊國餘儀さ、アイヤレコラおしやらく目の毒、豊國餘儀エー、イヤトホーホーサ鹿島の豊竹、豊國餘儀エー」と叫ぶ。歌ふといふほどでない。別に、「鹿島の豊竹」、「鹿島の豊竹今年は大漁だ」、「鹿島の豊竹、若衆たのむぞ」、「鹿島の豊竹、三日月細山」。一ヤトヨエ、トヨトサアと云ふ。

サイトリサシ刺鳥刺 鳥刺が餌差半を持ち鳥を刺す眞似の唄。春の初めの祝言の一つ。萬歳の曲目にあり。「さい鳥刺を見さいな」と云ふ。「見さいな」の一編。

サイノカワラ賽の河原 賽の河原の物語は今もクドキの盆唄に唄られる。元は和讃。岡山縣の白石島の例にすれば「それ世の中のソレサイ、定め難きは無常の嵐、ヨイホイ〜ヨイヤナ、散りて先立つ習ひといへど、ソレサイ、わけて哀れは冥途と装裝の、ヨイホイ〜ヨイヤナ、賽の河原でサンヨホホ、サイイブシーさいいぶし。 廣島縣雙三ウタイコミ

ハドツコイドツコイ、止めたり、ヨイホイ〜ヨイヤナ」云々。

サイバラ 催馬樂 「俚語集」長崎縣西彼杵郡の盆唄歌に催馬樂と稱するもの十三首ある。「高雄紅葉は散るか散らぬか間にこそ知る、宇治の登は飛ぶか飛ばぬか、月にこそ知る」等て、昔の催馬樂の曲節を多少つたへたのかも知れぬ。

サイモンオドリ祭文唄 奈良縣吉野郡地方の盆唄。『稿本奈良地方俗語集』に冒頭の句のみ見える。片假名は踊子の掛離らしい。あゝこれわい、どつこいしよ、アコレワイ、ドッコイセイ、あどつこいさんやなは大きな聲で頼む、チヨイトオシヤンセ、ドッコイシヨ、あゝやあれさい祭文唄と云ふものはな、手拍子足拍子、腰の拍子、三拍子揃へて踊るなら見てゐるとなとも嬉しから、チヨイトオシヤンセ、ドッコイシヨ、あゝやれ祭文唄子さんへ廻りこさんよ、コラサイ、これからいよ〜文句に掛らう、踊子さんへな、しと〜頼むチヨイトオシヤンセ、ドッコイシヨ、あゝやれさい扱も一座の皆様よ、コラサイ。『俚語集』にも見える。祭文唄も要するに祭文音頭

と同義である。兵庫縣城崎郡港村にもサイモン唄(一にナラシ唄)がある。賽の河原の和讃などを歌ふ。美方郡小代村地方にも祭文唄あり。三重縣飯南郡森村の割盆の唄を祭文唄と云ふ。

サイモンオドリ祭文音頭 京都市及び愛宕相樂郡の盆唄歌。西行・八鳥・追かけ・俊寛・別れ山・草紙洗小町その他の歌詞を『俚語集』に記す。歌詞優美して長短がある。西行は、それ西行の古へは、佐藤兵衛兼清と、北面の武士にてありけるが、諸國修行に出でられて、或る山中を通られて、折しも田圃が花盛り、上には鶴が三羽舞ひ、西行これを御覽して、一首の歌をよみ給ふ、それたんぼが花のつゞみにそやされて、上には鶴が三番舞ふ。京都郊外は今江州音頭全盛だが、その江州音頭の前身は即ちかうしたものである。江州音頭も祭文から出てる。ヤゴウシユウオン

サイモンマツサカ祭文松坂 祭文が山形縣に入り松坂ぶしと混じて、三味線に合せて語るもの。萬の葉の物語等がある。蘆屋道満大内蔵、こゝに萬の葉子別れ話、夫に別れ子に

サオトメウター早乙女歌 初春の祝言の一。『俚語集』に、福島縣大沼郡及び南北會津郡の歌詞を収める。舊正月十四日に、太鼓三味線で囃し立て各戸を訪ふ。舞ひこんだ〜、早乙女衆が舞ひこんだ〜云々に始まる。恐らく早乙女衆であらう。本年の豊作を豫祝するもの。或はソウトメウタと云ふか。

お船、エンヤラサササ、エンヤラササ、  
アリヤサ、故は菊桐、あれは太政官の御紋、  
エンヤラサササ、エンヤラササ。

サカサキコウター坂出小唄 香川縣坂出町の唄。  
西條八十歌、中山晋平曲。讃州坂出ヨヤ  
サノサ、讃州坂出朝まく時は、涙盡りの讃岐  
富士、ヤンレサカサカ坂出上、サカヨヤサノ  
サ。

サカサキオンド坂城音頭 信州坂城町の唄。  
鳥塞左衛門歌、清元豊後太夫曲。坂城よいと  
信州一上、雪のふるのに花が咲く、ヨイ／＼  
ヨイ／＼ヨイトサ、ヨイトナ。

サカサキオドリ佐ヶ坂唄 岐阜縣武儀郡洲  
原村の盆踊。佐ヶ坂は長良川沿岸の部落。サ  
アヨイ、踊ろまいかよ金比羅様の前で、か  
どの二つに割れるほど、サア割れるほど、か  
どの二つに割れるほど。かどの意不明。サア  
ヨイ、坊主頭をシラミが昇る、えらい坂ぢ  
やと云ふて昇る、サア云ふて昇る、えらい坂  
ぢやと云ふて昇る。

サカタオイワケ酒田追分 山形縣酒田港の  
追分。越後及び北海道の海より来た追分が、  
最上川の船唄となつたもの。船が千くる萬く

る中に、思ふた船頭が唯一人、ヨイコラサ、  
船も新し船頭さんも若いナ、川はあら川初の  
ぼりスイスイ、ハヤシすいこ、あぶらこ、蟹  
かすべ、函館かすべが、ぼつたばた、トコド  
ツコイ、ドーシタネット。凡て魚の名。『東北  
の民謡』

サカタオバコ酒田おぼこ 山形縣酒田港を  
中心のおぼこぶし。おぼこ来たかやと、田圃  
のはづれまで出て待たば、コバイチャ／＼  
おぼこ来もせて、用のない煙草賣りなど觸れ  
てくる、ア、コバイチャ／＼。他に「おぼこ  
此中みえぬ、風でも引いたかやと案じられ風  
もひかねど、親たちやキンびしくて籠の鳥」  
「最上山形で絲屋の娘が黄金とて、すがた七兩  
二分、腰もと三兩二分、五兩目もと」。「おぼ  
こ約束は、月山の雪消えてもかはるまい、な  
んでかはらばや、最上川水、湯になつても」  
「おぼこ居たかやと、裏の小窓からのぞい  
て見たれば、おぼこ居もせて用のない、隣の  
婆さま来て縁よつてた」。「おぼこ浴衣染め、  
どこ町築屋で染めただ、町は五日町、三軒  
目の三右衛門どで染めたやな」。凡て問答體、  
及びそれより出たらしき連歌になつてゐる。

酒の文句あるか。  
サガリハ下り端 能樂ではシテヤツレが舞  
ひつゝ現れる時、狸々、西王母、嵐山等に囃  
す囃子を云ふが、長崎縣北松浦郡田平村では  
イリハで踊子が踊場に入り、出ハで踊り終つ  
て引き、サガリハで最後の退場をする云ふ。  
實際を見ないので判然しないが、出ハは一々  
の踊の引込、サガリハは最後の全員の引込で  
あらう。琉球では出てくる時をイリハと  
をイリハと云ふ。然し出てくる時をイリハと  
云ふ例は多い。サガリハは退場の意味なる事  
當然である。↓イリハ ↓デハ

「歌へ／＼とサー／＼、ドーカイココイ  
望まれまする、歌ふまいとは思へども、肥後の  
小藩の好きならば、何のてには合ひませう  
と、箱より出づる三味線も、坂田小夜の演サ  
／＼、ドーカイココイ米なら良から、  
上の小さいしよにたすと、このつませました  
よな」。「わしがとさも小間物賣で、剃刀や  
小刀、紅や針、綿や木綿にや茶や煙草、まだ  
もござる上黄楊の櫛、賣りませうと愛嬌めす、  
この買うてたもれとな。また、ゆうべ見てき  
た酒屋のつゝじ、朝は開いて夜寝む。『俚語  
集』

サカナブシ者ぶし 『俚語集』千葉縣の項に、  
文政年間以来の中流以下の紐解き祝ひの宴席  
に歌はれるとして、者々と望まれて、何を肴  
に致しませう、沖のいなだに根の鮑、これを肴  
看にみつまるる。此の後に賞め詞を云ふ。

サカヤブシ酒屋ぶし 『俚語集』廣島縣三  
郡の田植歌として記す。田植の時に酒が出る  
場合に歌ふか。昔頭、ハヤレめでたや今日や  
これのわさうま、ハッソレソレ、ハッソレソレ  
これの、早乙女、ハッソレソレ、ハッソレソレ  
日や、これの。酒に就いて云はぬ。或は他の

サカタオドリ

人に依て、酒田おぼこはコバエチヤと云はず  
コバエテだと云ふ。一に莊内おぼこと云ふ。  
この邊を莊内と云ふ爲め。

サカタサムライオドリ坂田武士唄 鹿兒島  
縣揖保郡揖保町の唄。坂田出る時や涙で出た  
が、今は坂田の風もいやく。諸國諸大名は  
弓矢で殺す、茶屋のおまへんにや目で殺す。  
サカタブシ酒田ぶし 山形縣酒田港の唄。  
「酒田興屋のホーイ、濱米ならよかる、西の  
ハ、ヨイサ、エーイ、船頭衆にや、ハッたど  
積ませう。『東北の民謡』

サカタブシさかたぶし 相州三崎港の祝儀  
歌。その中の鳥帽子屋を記す。花にまさりし  
鳥帽子屋の娘、五郎太夫の娘にて儀の短とは  
我事也、商賣なれば鳥帽子折、折まほしに立  
まほし、しなかけまほしもござります、折りて  
めでたの左緒の、掛緒の紐がもろ結び、惚れ  
た／＼上相惚れに、こゝにまた源氏の大將左  
馬頭、義朝公の三男に鞍馬の山に在します、  
思ふ殿御の牛若に、着せて面影見とござる。  
「みさき」同じ三浦半島の鴨居でも歌ふ。一  
句づつカケアヒに歌ふ。後にほめ詞が附く。  
サカタブシ坂田ぶし 鹿兒島縣熊毛郡の唄。

は近松の丹波與作の淨るりに引用され、更に  
種々の物にも引かれ多くの替唄も出来た。こ  
の歌の解釋に就いては、麓の坂道は晴天で、頂  
上の鈴鹿峠は曇りであるのに、中間の土山は  
雨が降つてゐる、即ち高山は氣象の變化が平  
地と異なる事を歌つたのであると普通に云ふが  
土山は實は峠より二里も先きで地理的に一致  
せぬと疑問を抱く人が多かつたが、昭和十年  
八月の『歴史公論』に山本勝太郎氏が、上り下  
りの歌詞に就いてを題して新説を出された。  
即ち寛文年間に鈴鹿の坂が切り開かれた時、  
坂下村は人夫と私娼が入込んで繁昌した。そ  
れを照る／＼と云つた。あひの土山は新道と  
元の細道の間の辻になつてゐる辻山で、いつ  
も雫が落ちて馬の水呑場になつてゐた。而し  
て雨が降るとは繁昌するの反對で、新開地氣  
分の坂下に入氣を奪はれたを意味する。そし  
て辻山附近を以前は鈴鹿山と云つた。と。

サカタオドリ先唄 長崎縣南高來郡の唄。島  
原藩の神事に行ひ町人の青少年數十名、木刀  
を佩び采を持ち踊る。島原の亂の頃、凱旋踊  
として起つたらしく、他の踊より先きにす  
るので先き踊といふ。以前は古町に専ら行はれ

た。入野松の千年を。宮居に占めて。確と。ヨイソレサー鎮まる大神の。霊の丘とて。その名も高き。仰ぎし恵みこそ。里の榮えと。幾千代までも。祝ふ。心をしろしめせ」と各句交代に歌ひ、終りに、「神も勇みし大踊」と掛。次に、萬國の礎。定めし君を。齋き祭りし靈の丘。千代の秋とて。五穀も實り。民も豊に腹鼓。そよぐ神風。勇める人氣。築ひ賑ふ大祭り。終りに、いつも變らぬ松の屋と掛。次に、月神の御靈に。ア、捧げしものは。先づ活花よ。オ、ソレ／＼水揚げすまして床の上。相撲や、ア、勝負がつかぬ。試合は弓張月よ。オ、ソレ／＼、顔を隠して居合腰。「若いお方は氣も鼓ひ馬。オ、ソレソレ駒も勇みてよかり聲、夜は。ア、しかけておいてサ、ヤリ枕の夢の。オ、ソレ／＼もゆる思ひを揚花火。「芝居狂言能番組と。オ、ソレ／＼數の中にも大神。「千秋萬歳めでたさや。【俚語集】 また、【全長崎縣歌謡集】に、同郡南有馬村の氏神祭の先き踊の歌詞を記す。「君が代は。ハヤシのせ／＼。八千代の千代の、千代の八千代の玉椿。ハヤシ朝日輝く花の里、さあ見事等。↓オサキオドリ

サキチヨウバヤシ左義長巖子 福井縣勝山町に行はれる。上花よの寝ね、まだ乳のむか、乳首隆せ、乳首々々。↓ドンドバヤシ

サキツコウター崎津小唄 熊本縣崎津港の新小唄。「戀の崎津で裸になろとヨ、サノヨイトコラサ、歸りや情が身にしみる、雨の波瀾が出船の朝の、ぬれた目元が目に残る、ホンニ崎津は、ヨカバイノバイ。

サギマイ舞 光信筆の祇園祭の圖に、頭上に鷲の長い首を頂き、肩に大きな羽根をつけ、着物も括り袴も凡て白づくめ、穿物だけは白でないが、白の太刀を佩びたのが二人舞つてゐる所が描いてある。今は京都の祇園會に此の事はないが、古く山口市の祇園會で京都から習ひ傳へた。【周防風土記】、【山口名勝】、【説書】卷一に記してある。シヤグマを冠り、シモト持つ者二人、腰鼓打つ少年二人と共に之を追ひ、他の者笛で囃したと云ふ。神社が高嶺に在つた頃は、先づ樓門の前で、次に太神宮の直會殿の前で舞ひ、舞ひ終つて巖岩の上に鷲の頭と翼を脱いだと云ふ。鷲の舞と稱したのだが、今日は略式で、舞ふ事は

ないと云ふ。島根縣鹿足郡津和野町の祇園社は、今は彌樂神社と改めたが、天文十一年に山口より此の舞を移し、中絶して正保元年に京都より直接に移したと云ふ。今日唯一の現存のものらしい。昔は六月七日、今は七月二十日の祭に行ふ。序曲二分間半、舞三分間半の短いものだが、極めて特殊の舞で、雄雄の鷲がさながら地上に下りて舞つてゐる如くに見える。之にシヤグマを冠つた様振と、胸に鷲鼓をつけた二人も加はる。他に笛に鼓に太鼓が入る。橋の上の、おりた鳥はなんどり、かはさぎの／＼、ヤアかはさぎの、鷲が橋を渡した、鷲が橋を渡した、時雨の雨に、ぬれとほり、とほり」といふ歌が歌はれる。曲調は多少狂言小唄に似て、室町の時代を思はしめる。【民俗藝術】第三卷第十一號に詳しい。鷲舞の依て生じた事は、祇園會その他の祭の傘鉾に鷲がある事や、田植祭の歌に、鷲の見えるのを吉兆とする事などが參考に考へられる。能樂の鷲は、この種の神舞を、平家物語に依て、藝術的に結びつけたものである。

サキオドリ作踊 ● 豊作踊の義。秋田縣山本郡鶴川地方の盆踊に云ふ。

サキオドリ作踊 ● 【全長崎縣歌謡集】に、南高來郡南有馬、北有馬の村の踊として記す。袖のある襦袢、鉢巻、帯、前掛をつけて踊る。振込(道行)の唄六つ。例、嶽の白雪朝日とける、とけて洗れて田に落ちる。又、み嶽祈りしその日の霞、やがて降りくる雨の足。入端の唄五つ。「風もそよが降る雨ぬれて、神も喜ぶ民の前」、「浪の音する荒神かけて、神を諷める里神樂」。出端一つ。續け喜べ、めでたの御代は、國も穩か民ゆたか。

サキシマボンオドリ佐久島盆踊 愛知縣幡豆郡、駿河灣の佐久島の盆踊。「ヤラめでたや、おめでたや、めでた／＼の若松様よ、枝も榮ゆる葉も茂る、今年や世がよて、穂に穂が咲いた、樹で入らぬ、笑ではかれ、めでためでたが三つ重なりて、鶴と龜とが舞をする、おめでたや、毎年々々この踊りヨ、ヤツトセ／＼氏子揃ふて當所の御神様へと奉納いたす、帝國萬歳々々、五穀成就、村中繁昌と上げ奉る、踊子は合點か、お、それ合點ちや」。明治初年までは武士の姿で踊つたと云ふ。一時中絶、近年復活。

サクララドキ櫻くどき 最近放送された物

は千葉縣館山町北條の歌で、古くは里見家の御座船謡、後に徳川家齊が隅田川に謀略丸を浮べた時も歌はせたと云ふ。今は八月一日より三日間の祭禮に明神丸と稱する御座船模様の船屋敷を曳き、唄奉行の指揮の下に唄ふ者が乗ると云ふ。始め、めでたいな、御代はめでたのエンそれ若枝もエンさかえよのエイホの葉も」と。次に本歌に入る。本歌の文句は、【日本歌謡類聚】下巻所載、和歌山の祭禮歌と同一である。左に兩者を校合する。「ヤンレ鷲の聲に引かれて皆の見し、エー花なりけりや初櫻、来る／＼春に咲き出づる、花の錦の糸櫻、彼岸櫻に青賢象、エンみのりの花とも云ひつべし、泰山府君に薄櫻、エン色よき花の枝々に、重ね櫻に入重櫻、花を嵐の吹くと、とちて散らすな櫻櫻」云々。北條のは本歌の次に仲上あり、「ヤンレ遊戯の櫻は散るか散らぬか見たかのえ」と奉行獨吟、散るやら散らぬやら嵐こそ知れ、花のふ／＼やまエンとさま花は折りたし木は若木、離れ難なのサン／＼木のもとさいよ」と齊唱。右の仲上に當るものと和歌山に見えず。

サクララブシーさくらぶし ↓キヨブシ

サクリウター坐繰唄 絲を取る時に坐して左手で絲車を廻し、右の指先で鍋の中で踊る鍋の絲口を引出すのを坐繰といひ、その時の歌だが、昔の形式だけに今は落となつた。近年前橋市の工場から放送があつた。「絲ちや前橋、お機ちや桐生、中の伊勢崎や太織績カネ」。早く年期あけ、アノ山越えて、娘きたかと云はれたいカネ。

サグーさげ 田植の時の音頭取を云ふ。↓タウエウタ

サケウター酒歌 ↓コヒルノアガリ

サケウターノウター酒造りの歌 酒の醸造は仕事々々に歌がある。こゝに一括して記す。先づ米が取れて寒い風が吹出す頃に仕事は始まり、第一に精米に着手する。米と煮・米洗ひ・米蒸等々で、今日はプロペラの洗米機も用ゐられる。【山家鳥農歌】の播磨の歌に、「いつか鴻池米踏みしまひ、播磨灘をば船でやろ」がある。岩手の米ときは、例へば甲が、始まり、にんにく山椒、椎茸ごんぼ、むきだけ納豆、山芋こんにやく、豆腐で渡した」と歌へば、乙が、十で切つたか、十二でしめた、三十四、五十六、なんなつとうはい、十九はた

やまとんだ」と受ける。廣島縣賀茂郡西條町の米洗ひ歌、猶ふた／＼で足拍子手拍子、カセが揃ふたらなほ良から、猶ふたらカセがのう、カセが揃ふたらなほ良から、ヨヤレヨイヨイヨウ、安藝の西條に今研ぐ米は、酒に造つて江戸にやる、造つて酒にのう、酒に造つて江戸にやる、ヨヤレヨイヨイヨウ」と歌ふ。かくて純白の米が出来ると一方に備洗ひが始まる。三十三石、三十四石の大桶をササヲを掛けて洗ひ、熱湯を注いで去年のアクを取る湯ごもり、杓子で湯をかける湯あての作業が續き、風と日光にさらされた桶は去年の酒の氣が完全に抜かれる。桶洗ひは戸外の作業で、灘では「アー寒や北風、アーかうつめとては」と一人が云へば、「長の多ぢゆが動まろか」と他が和す。越後では、「今朝のヤー洗ひ香はどなたにどなた、かあい男の歌の聲、かあいヤー男の洗ひ香の時は、水は湯となれ風吹くな」。さて醸造に従事する者は、その季節に入つて出稼ぎにくる連中で、土着の者ではなく、之を總稱して職人と云ひ、灘で百日といふ。十二月より三月まで百日間の労働だからで、越前丹波備後より五百人からの出稼ぎがある。百日の職制は先づ三役の杜氏、頭、番門。次に役人として既廻り、道具廻り。その下に上人、中人、下人、飯焚、或は釜屋などとも稱する者、一職に二十人から居る。杜氏は一にオヤヂとも稱し、酒屋杜氏ともいひ、能登では杜氏がしがある。曰く、加賀の金澤、銘酒の出どころ、能登の松波杜氏の出どころ。杜氏は全體の監督をし、歌の長さに依て時の経過を計るといふ。次にモトを作る。モトは既、酒母と書き、白米を蒸し水と麹を加へ置きまぜて貯へて數日、泡を盛上げるとモトと云ひ、更に日を定めて白米の蒸飯と水と麹を加へること三度、以上をソへと云ひ、その間に置き廻して桶に盛つてしほつて作ると【言海】に見える。モトを作るのを武州川越ではモト取りといふ。お江戸出てから板橋越えて、江戸田の渡しを朝の間に、「戸田の渡しで今朝見た鳥田、お男泣かせの殺鳥田」等の道中歌がある。兵庫の御影ではモト造りと云ふ。めでた／＼の若松様よ、枝も榮えて葉もしげる、めでた／＼の重なる時は、鶴が御門に葉をかける、鶴は御門に葉をかける、鳥は庭で舞を舞ふ。倉の中で糶でかき廻しつゝ歌ふ。次にモトを小桶に移し糶でかき廻し、もとすり歌を歌ふ。西條の歌、鶯が梅のヨイホイ、小枝にヨイホイ、一寸ひる寝してヨイホイ、花のヨイホイ、ちるとこのヨイホイ、夢を見たヨイ、ヤレサノセ、シヨイガエ。東北には「酒屋モトすり始まる時はへらも杓子も手につかぬ、背にモトすり、夜中にこして、朝の夜明けに酒つくる」。千葉の利根川べりでは「とろり／＼と今するモトは、酒に造りて江戸へ出す」といふ。土地に依り種々の名稱もある。灘で朝の歌といふのは午前四時頃、醗に糶を入れる時に歌ひ、一人が「起きてナ、いにやしや東が赤い」、他が和して「やかた／＼の鳥が鳴く」。一人、「やかたナ、やかたの鳥が鳴いてしまや」、他が和して「明けりやお寺の鐘が鳴る」と云ふ。同所のモトすり歌には「ヨヤレ、山おろしの二種があり、前者は本来丹波の白すり歌であつたといふ。一人が「やかた入瀬さんなぞ川の下」と云へば、他が「水の流れちや是非もない」と和し、参道中の長篇がある。山おろしは、一人が「めでた／＼のヨイナ」と云へば、他が「よい／＼」、また「若松様よナ」

と一人で云へば、他が「枝も榮えるヨイナ葉もしげる」と云ふ。山おろしの意味は不明だが、前の西條にもある「あなた川上、わしや川下よ、書いて洗しやれ懸の文、書いて洗すはいと易けれど、濡れて破れて讀まりやせぬ、終りに「ヨヤレヨイヨイ」と嘆す。山おろし小ずりの唄といふのは、酒はよいもの氣を勇ましてヨ、飲めばお顔が櫻色ヨイホイヨイ／＼」。モトに更に蒸米、麹、水を加へてモロミを造り、之を糶で突くの醗突歌といふ。それに川越地方では香糶、ころ突きがある。香糶は「伊勢の本社は八棟づくり」等、内宮外宮の歌「御寮所はこけらぶき」等、内宮外宮の歌が多い。ころ突きは「猶ふた揃ひました、ころ二ころ三ころ突きが揃ひました、なかに二三本もよく揃ひました。岡山ではモロミ糶入れ歌と云ひ、魚はヨ、瀬戸から、酒は玉島でヤレ、うんとつけこむヨ、帆船船。モロミ仕込歌とも云ふ土地がある。岩手では「さアよんせ／＼、猶たナ、ハイ出廻りよりや、若イ衆が揃たエ、秋のナ、ハイ出廻りよりや、なほ揃た」と歌ふ。ころ突きに對して「三ころ歌」が越後にある。「猶ふた揃へましたノ、ヤ、一ころ二ころ三ころつきそろた、中に二三本もノ、ヤよくそろた」。灘では糶すりすましたモトを初夜と夜中に更にすり、モトかき歌を歌ふ。一人、「夜中起きてモトかく時は、和して、親の家での事思ふ、一人、「ヤレソ、モトかく時は、和して、親の家での事おもふ。また、親の家での朝寢の前で、今は朝起き夜なか起き」。灘ではモロミ仕込の糶入れは三段に分れ、初めに風呂上りの歌を歌ふ。一人、酒の酔ひざめ御風呂の上り、和して、ヤレいつも心がなごやかに」が元歌で、此の名が出来たらしい。他に「酒と煙草と一度にのめば、思ひ出した忘れたり」。風呂上りを一に「いづも御佳例」とも名づけるらしい。灘では此の歌でかき廻しをやり、次に三本糶と云ひ三人四人が交互で働き参道中を歌ふ。下の句を和すので、「しやん／＼馬に鈴さげて、春はござれ伊勢様へ」。お伊勢参りて何とゆて拜む、とかく殿様まめなよに、「伊勢の津の津の津のなかほどに、咲いた梅の色よさ、他に比してテンボの早い歌、はやし言葉はな。次は朝の作業で留といひ、留のうたひ物仕舞の歌などと云ふ。同じくテンボや早く

下の句を和す。お日が暮れたらあかりをつけ、親の名づけの妻が待つ、親の名づけの妻さへあれば、わしも此の上に身をすてぬ」。参道中は他國でも歌ふ。「俚語集」熊本縣阿蘇郡の酒造歌は、ハヤシ言葉の入れ工合が變つてゐる。松の葉、ハリスコヂヤイ、葉色とハヨイサヨイ／＼、月ソレ日の出しほ、ハヨイヤナ、ハソレまとむかヨイトサノヨイヨイ、しは世はか、アイナソレ、はらねどかはソレりやす、ヨイサノヨイ／＼、いはただひ、ヨイヤナ、と心、トコセノヨイヤセノヨイヤナ。これが今年の初めのソへよ、ソへに神樂の舞ひ始め、面白や、「これが今年の二度目のソへよ、此酒熟成すれやほうめい酒」。酒造りの歌は全國に共通したものがあつて、歌の順序次第も一定し、これに依て時の経過を知るといふ。伊勢参宮の如き長篇が歌はれるのも、長時間を要する歌が必要だからだが、長篇と云つても同じ節の一首一首の反覆である。而して歌は概してゆるやかなテンポで、従つて他の華やかな踊歌を利用する事も出来ぬ。これ古風な酒造り歌が今日に残つた所以で、灘の鷺尾家では自家の杜氏



述にレコードに歌を吹込ませてゐる。杜氏は百日の勞働で最近で五百圓より千圓を得るだけに、昔から人氣者であつたと見え、廣島縣安佐郡の歌にも「酒屋の〜杜氏は、六尺男が晝はな、晝は纏帯纏だすき、晩にや〜輪子の上、みへぐりよ」と歌ふ。みへぐりは三重の帯か。杜氏に次いで頭は二三百圓、以下は二三十圓づつさがるといふ。かくて百日の勞働終り、舊正月の頃には今年の新酒が世に出るのである。なほ「民俗藝術」第一卷第十二號、太田陸郎氏の「攝州舞五舞、酒造業者の歌」を見よ。

サケワサカニ酒は酒屋に 『落葉集』卷七に、二上り、「酒は酒屋に、茶は茶屋に、女郎は木辻の鳴川に」。奈良の木辻の遊廓の北を鳴川といふ。この歌の昔頃各地に行はれ、めいめいの遊里の名にあてはめて歌ふ。  
サコスタイ舞魚すくひ また舞魚すくひ、舞魚すくひともいふ。山形縣最上郡地方の踊。手拭で頬冠りして、魚籠を下げて踊り、舞魚をすくふ眞似をする。大漁新語のをどり。明の方から舞魚すくひが参つたとヤ、囃してたんもれ皆の衆、シユツ〜、ゴ〜、ど

つから揃つたらよからべ、あそこから揃つたらよからべ、シユツシユ、すつくり上げて見れば、がえろくだア(お玉杓子)のぐんにやぐにや〜(略)これほどのおん座に、何から何がらないほどに、なんにもかんにも差しおいて、舞魚すくひとも囃してたんもれ、シユツシユ、ゴ〜、これほどの皆様よ、さつこす舞は見さいな、一番目のかけどころ、どうこちらが良ワからよ、こつこつほうどが良ワからよ、七五三でやつて見る、シユツシユ、ゴ〜(略)すつくり上げて見たれば、かゝりがつた奴が嬉しい、大鯛小鯛めでたいものよ、千秋萬歳ところも繁昌、且那様も御繁昌、めでたい物を且那様に納めおく、即ち夷舞(ヤエビスマイ)の文句に似てゐる。安來ぶしのドジョウすくひも此の類のもの。  
サコスタイ舞魚すくひ舞 ↓ザコスタイササオドリ舞 笠を持つて踊る事各地にある。豊橋市の吉田の豊川牛頭天王の笠踊は「東海道名所圖繪」で名高い。笠笠、覆面、陣羽織、籠手すねあて大太鼓一人、小太鼓二人が打ちつゝ踊り、音頭は編笠に浴衣、笠に提燈をつけたのを持つ者數十人。天王といふ人

は、何佛にてまします、日本一の荒神、あらは橋本屋見坂、名所々々の花を見さいな」と囃ふ。  
ササカカリ舞 獅子舞の曲目の一。舞ふ場所四隅に竹を建て、注連を張る。その竹にたはむれて舞ふ。  
ササグーささげ 『ひなのひとふし』に「おもひ出しては死ぬほどくやし、ならぬささげに手をくれて」。手は延びる裏に興へる竹の枝なぞを指す。裏は竹に落んで實がなるが、こゝでは女が一度信じて許した男の裏切りを憤る心を寓してゐる。なる、ならぬは交りを許す許さぬ、また婚姻する、しないの意味である。「十六で、ささげの歳でなりごろも」と云ふ風の歌も多い。三重縣三重郡保々村の粉ひき歌に「年は十六、ささげのつるき、からみついたが男竹」とある。 ↓アイカワタルワヅメキ ↓ナルカナラヌカ  
ササグーささげ歌 千葉縣印旛郡本野村大字荒野では、毎年十月十五日の雷公神社の祭には、その年の新節新婦は特に盛装して、次の捧げ歌を拜殿の中で歌ひ、續いて安樂院といふ寺に、昔は續いて庄屋を訪れても歌つた。

みろくうたの一種で、現存の風俗である。歌詞は二三の書に出てゐるが、次のが現場に於て聞き取つたので正しい。男相傳、誠やら鹿島港へ彌勒がな、よき輪廻には伊勢春日、中は鹿島の大社、世の中はいつも正月、男が水汲む、女が頂く、其水を上げ下し見申せば、手持金がな〜九つ、二つを宿におき候、七つで倉を建て候、十七は澤へ下り候、黄金柄杓で水を汲んで、裾ぬれまさは、禪かけさせ、十七、紅やぬれど色増さは、禪はづさせ十七、天然の雲のあひから、十三姫がな〜米をまく米まけば只もまけかし、みろく續けと米をまきし、ゆき候や、歸り候や、お名残をしくもお暇立ち。女相傳、東西や、おなり候と、花見の様子をお聞きやれ、柳枝へ木綿四手つけて、我身の汚れを打拂ひ、みな氏子に揃へ申して、神を誂める竹葉葉渡、當村のうぶすな神、天にごさす神なれば、七難を拂ひ申して、村へ米を下すべし、當年何とし、何の歳にて候(例へば、大正四年乙卯の歳で候)、世は滿作年で候、めでたいな、五穀上りて浮世の人が喜ぶ、ゆき候や、かへり候や、うしろへ彌勒が續いた〜。 ↓カシマオドリ ↓

ミロクウタ  
ササバヤシ〜さ〜囃子 京都府中郡五ヶ村に十月十日前後に行ふもの。小太鼓を打つ。乾の隅左三又履の實、履の實はならいで織がなる。  
ササヤマオンド〜嶽山音頭 丹波篠山町のうた。所がら大江山物語などがある。頃はいつよと尋ねたら、年號は六十二代にて、そのころ天下の弓取は、清和天皇七代の孫、多田の満仲の勅使にて、源頼光と申す人、大江山の鬼退治」云々。  
ササラ舞、一作 竹の先きを割つたものをササラの竹と云ひ右に持ち、竹に鋸の目のやうなギザギザのついたものをササラのコと云ひ左に持ち、兩者を摩擦して音を出し、歌の伴奏とする。廣島の囃子田、及び各地の獅子舞に用ゐる。ササラの竹(削竹)は三十六に割つて三十六實を表はし、ササラのコは左右十二宛に刻んで十二時と十二月を表はし、兩端に時に五色の紙の房をつけるのは五行を表はすといふ古傳説もある。ササラは特殊の者が作つて賣り、その人々をササラ者と蔑しんだ時代もあつた。またササラをすつて山村を巡り

歌ひ説經をした者をササラ摺りとも云ふ。能樂の自然居士、東岸居士、花月に見える。ピンザサラ、即ち拍板をササラと略稱して兩者混合されるが、拍板は小さな板を澤山つなぎ、兩端の柄を持つて風琴の如く伸縮させ、板と板と打ち合つて音を立てるもので、田樂舞に用ゐる。いづれにせよササラの語は昔から出たのであらう。  
ササラウタ舞歌 ササラに合せて歌ふ歌。特に獅子舞の場合を指すらし。『俚語集』埼玉縣北足立郡の項に見える。  
ササラオドリ舞踊 舞を打合ふをどり。伊勢の間の山もその一例。又獅子舞の一名。また、『淡路名所圖繪』に記すは、小槻村府中八幡宮の八月十四日の祭に、童子十二人、太鼓打二人、ササラを摺つて踊るものをササラ踊といふ。秋の田を刈りあげ行けば露しげり下葉のおんつゆに我ぬれる〜。この祭には回鼓坊と云ふのが出る。  
ササラオドリ舞踊 伊豆新島の盆踊の一。『民俗藝術』第二卷第六號に歌詞を記す。ササラ揃ひのやう〜此のササラ、善くも悪しくもお聞きあれ、今年若衆で節が揃はぬ〜

云々。節とはサラリ／＼とする竹の節の音。  
 サツマラサマ 獅子舞にて節を摺る者。多  
 く少年、或は少女、乃至は少年が女装し、花  
 笠を冠り美しき着物を着る。  
 サツマラサマ 節を摺りつゝ歌ふ歌。  
 志摩のささらおしと云ふもの【俚語集】にあ  
 り。昔の間の山の流れと見ゆ。  
 サツマラサマ 節を摺るのに合せるをど  
 り。獅子舞の一名。

サツマラサマ 狂言小唄に、ざざんざ  
 濱松の音は、ざざんざとあり、【俚語集】奈  
 良縣生駒郡に、婚禮の時に歌はれるざざんざ  
 節として、濱松の音はざざんざ、打ちませう  
 シヤン／＼、も一つせ、シヤン／＼、祝ふて  
 三度、オシヤシヤノシヤン。同書三重縣阿山  
 郡の項に、酒宴たけなはの時、祝ひとして、  
 「アシヤンシヤン、ア、も一つせ、ア、シ  
 ヤンシヤン、祝ふて三度、オシヤシヤンノシ  
 ヤン」とやり、それより酒興に入り、やがて  
 主人に姿勢を正して大杯を勧める、此の時に  
 謡曲を歌ひ、謡ふ入なき時は、略して「ざざ  
 んざ、濱松の音はざざんざ」と合唱すると記  
 す。能狂言では酒宴の場面に常に歌ふ。本来

「ざざんざ、濱松の音はざざんざ」だけのも  
 のか、乃至は他の文句があつたかは不明。  
 サツマラサマ 一定の曲目の順序があ  
 るをどりの中に、臨時に他の節を加へること。  
 即ち挿入れる意味らしい。  
 サツマラサマ 座敷歌 【俚語集】の山形縣最上  
 郡の項に、座敷歌として、正直・お輝舞・座  
 頭舞を記す。座頭の舞らし。輝舞となり座頭  
 となつて舞ふ。

サツマラサマ 座敷音頭 江州音頭を夏以外  
 の時、屋内でやる場合を云ふ。  
 サツマラサマ 棧敷ばやし 秋田縣能代港の  
 祭に棧敷を設けて人形を飾り、傍に寶篋の  
 薬子場で舞するもの。はやし山の出る時の薬子  
 二番ふし三番ふし。四番ふし。戻りふし等の  
 曲目がある。【秋田の郷土藝術】  
 サツマラサマ 座敷舞 ヲシヤンノマイ  
 サツマラサマ 佐世保小唄 長崎縣佐世保港  
 の唄。野口雨情歌、藤井清水曲。佐世保みな  
 とを出て行く船はホ、可愛や佐世保に呼びか  
 けて、来い／＼だよ、ついてきな、うしろ見  
 返り又ながめソーレ、波を押し分けアリアどん  
 どんと。

サツマラサマ 鯉魚すぐり唄 ヲシヤンノ  
 タイ  
 サツマラサマ さつてもぶし 越後十日町の  
 唄。永井白洲歌、中山音平曲。娘ざかりを、な  
 じよして暮らす、雪にうまれて機仕事、花の  
 咲くまで小半年、テモサツテモ、ソヂヤナイ  
 カ、テモソヂヤナイカ。  
 サツマラサマ 津山お龜女は、津山の山の  
 古狐、眉毛ぬらして掛るべい、こや／＼こ  
 なんとかな、一貫三百四十四まい、これ／＼こ  
 出してせねいか、やせはたけのほうふやは  
 てうどならぬにきわまつた、こや／＼こ  
 ちこいな、こそせい／＼。明治になつて津  
 山の事を薩摩踊とも云つた。昔の薩摩踊、薩摩  
 ぶしは年代に依り種々あつたと見える。

サツマラサマ 長崎市諏訪祭の奉  
 納踊の一。大薩摩と小薩摩とあつて、前者は  
 六人の少年が母衣を負ひ、大きな太鼓を胸に  
 掛け、高い指物(山とも)を負ひ、大鉦小鉦と  
 唄に合せて踊り、小薩摩は山の規模を小さく  
 して十人出る。唄は後日の部、小鉦、かめのを  
 の山の松が枝に」大鉦、果をくむ鶴の千代かけ  
 がて、手わざ。  
 サツマラサマ 佐渡金堀節 ヲシヤンノ  
 サツマラサマ 佐渡小唄 佐渡の唄。大村主計  
 歌、豊田義一。佐渡は荒海、船路は遠い、  
 島はしぶきの波の音、佐渡の戻り船、大鉦  
 小鉦、大漁は、荒むしろ。  
 サツマラサマ 佐渡各地の甚句。兩  
 津甚句と相川甚句とが最も知られてゐる。↓  
 アイカワジツク ↓リョウワジツク  
 サツマラサマ 佐渡の民謡 昭和五年、  
 山本修之助著、佐渡の古民謡を集めて註釋を  
 施したもの。著者は佐渡の舊家に人となつた  
 だけ行届いた著述である。  
 サツマラサマ 眞田組の唄 眞田組を  
 組む時の唄。【俚語集】に岡山縣小田郡の唄を  
 記す。眞田組み／＼ぬしさんの事を、思ひつ  
 めます薬の敷、眞田組み／＼話した事は、懐  
 梅すまいぞ別れても。  
 サツマラサマ 田植終了後の財勢の祝  
 宴。關東、東北の語か。この時に田植歌を歌  
 ひ、田植踊をする。宵のさなぶり内祝ひ、内  
 ぢや鯉鯛鯛ひらめ。  
 サツマラサマ 讀枝御船節 昔、高松の

て、よはひ重ぬる鶴の子は、千代よろづ代、  
 小鉦、松と竹との深みどり、大鉦、かはらぬ色を  
 友として、つきせぬためしよろづ代を、神と  
 君が代。  
 サツマラサマ 奈良縣吉野郡の盆  
 踊歌として、【俚語集】に收む。丸くなれ／＼  
 まん丸くなれ、十五夜お月より丸くなれ。か  
 くになれ／＼、まつかくなれ、太政官の御  
 判のやうに、まつ角になれ。

サツマラサマ 淡路の岩屋の浦の  
 盆踊。天正年間に淡路の人、薩摩より移すと  
 云ふ。男子のみの盆踊。一に御屋敷踊と云ふ  
 と。明治廿六年版【淡路名所圖繪】巻一。  
 サツマラサマ 鹿兒島の唄。  
 三味線物。からかさの、糸はきれても、紙は  
 破れても、通はせたもるが、わしや嬉し。ま  
 た、麻裏草履の鼻緒でさへも、切れて心地の  
 よいものか。鹿兒島三下りともいふ。  
 サツマラサマ 文政五年版の【浮か  
 れ草】に見える。さつま／＼と急いで押せば、  
 いやな薩摩に金山、しよんがえ。元禄十六年  
 版の【松の葉】巻三に、「親は他國に子は島原に  
 櫻花かやちりんに、お江戸出てから戸塚

は泊り、駒を始めて薩摩へ」。  
 サツマラサマ 座頭舞 ヲシヤンノマイ  
 サツマラサマ 砂瀬廻り歌 よんごぶし  
 に同じ。↓ヨシゴブシ  
 サツマラサマ 佐渡おけさ オケサの一種で最  
 も有名。佐渡の相川町の鎮山祭や盆踊に唄は  
 れる。ハ、佐渡へアリアサ、佐渡へと草木も  
 賑くヨ、アリア／＼、サ、佐渡は居よいか  
 住みよいか。また、佐渡と越後は竿さしや屈  
 くヨ、橋を架けたや船橋を、佐渡の三崎の四  
 所御所櫻、枝は越後に根は佐渡に。新作とし  
 て、鳴いてくれるな、都が戀し、鳴くな入幡  
 の時鳥。右は順徳院の御製に依るもの。雪の  
 新潟吹雪に暮れて、佐渡は寝たかよ灯も見え  
 ぬ。近年レコードで喧傳され、村田文蔵、松  
 本丈一の名が聞える。踊の手は十六足が有名  
 だが、實際は十八動作である。↓オケサ ↓  
 ハンヤブシ

サツマラサマ 佐渡音頭 佐渡に於ける各種の  
 音頭 ↓アイカワオンド ↓ゼンオンド  
 サツマラサマ 佐渡金堀唄 文政五年版  
 の【浮かれ草】に見える。せめいばろ着て湯た  
 らし、日の影見ずからしやるか、黄金堀るの

サツマラサマ 越後十日町の  
 唄。永井白洲歌、中山音平曲。娘ざかりを、な  
 じよして暮らす、雪にうまれて機仕事、花の  
 咲くまで小半年、テモサツテモ、ソヂヤナイ  
 カ、テモソヂヤナイカ。  
 サツマラサマ 津山お龜女は、津山の山の  
 古狐、眉毛ぬらして掛るべい、こや／＼こ  
 なんとかな、一貫三百四十四まい、これ／＼こ  
 出してせねいか、やせはたけのほうふやは  
 てうどならぬにきわまつた、こや／＼こ  
 ちこいな、こそせい／＼。明治になつて津  
 山の事を薩摩踊とも云つた。昔の薩摩踊、薩摩  
 ぶしは年代に依り種々あつたと見える。

藩主が江戸に出府の折に祝ふ歌。今は引田町では秋祭の神輿の渡御に歌ふ。ヤイヤめでたいな、御代はめでたのエイソリヤ若枝も榮えんこの葉も。いつ見ても變らぬものは雀の葉よ、二葉の松とうまで、君と我が仲は癒しめだのエイソリヤ若枝も榮えん、この葉も。

サマキイイサマ 猿踊唄「アール丸くなれ丸くなれ、一寸丸くなれ、コレセ、十五夜のアノ月のやうに」。「アール角になれ角になれ一寸角になれ、コレセ、一升辨のアノ底のやうに」。

【集】また、【民俗藝術】第二巻第七號にも見える。「讃岐佛生山は何と書く様よ、チヨイト佛が生れたナー山と書く、サアヨイホイヨイホイ、ヨイヤナ、ケンカラホケキヨ」。

サノコウター佐野小唄 栃木縣佐野町の歌。永井白洲歌、中山晋平曲、梅の鉢の木、折り笑く柴にヨ、アリヤサ、かへてもてなす心のあつさ、ヨイヨイ、昔語りをそのままに、佐野はよいとこ、なさけの町よ、ヤール、サノサノ、ヨイトサツサ」。

サノマフシさのまぶし 八丈島の唄。「下田

青出し夜中に三宅、明けれや八丈の藤を越す」。「末吉、洞輪澤は南無阿彌深い、三根女は色深い、三根女はいろはを習ふ、はの字忘れて、いろばかり」。「郷土研究第一巻第十一號に見える。

サマウリさまらり 鹿見島縣狹山町の歌。「嬉しヨイヨイ、嬉しめでたのナ、いしなもんざう、エーエン、サン、アレハコレハネ、若松の枝も榮える葉も茂る、ハラ、ハ、ハ」。

サマヤン様やん 様やんは戀人同志の敬語。熊本阿蘇郡の正五九の廿三夜待に、夜の長さに話も盡きた頃、うたひ出す。「様はよう来た此のくらやみに、燈もとぼさで、とぼ、とぼ、とぼ、枕屏風に風そよくと、きたかと思へば南風、様の送りた手拭ならば、裏や表はありやせまい」。

【集】また、【民俗藝術】第四巻第五號にも見える。加世田、栗野は、【三國名勝圖説】にも見える。「カセダサムライオドリ、ヤクリノサムライオドリ、ゴウジヨウオドリ、トギホシオドリ」。

治三年頃まで、これを踊つた事を記し、千歳ふる松の藤も君が代も、今こそ千歳の始めなりけり」その他四首の歌を挙げ、また熊毛郡にも、大體おなじ歌を記してゐる。

サマキイ座めき 座免喜なぞとも字をあてる。山口の南條、廣島の大隅にも見える。踊場に入つて座につき、最初に踊るものゝ意味か。サマキイさまらりや、サマモンジヤ

サモンジヤさまらりや 又、さもじや。出羽黒山神社の祭の夜の神歌。羽黒神社では一月卅一日の火祭松例祭、八月卅一日、飽海郡飛鳥神社では二月六日の火祭の夜に、社前の唐獅子や神馬の模様に寄りかゝり、一晩ぢう歌ふといふ。「エー羽黒ヤハイ、波川ヨホー、ヨーエー、波の前のお不動、ヨソホー、人に拜まれてヨ、ハヤレ笑ひ顔、ヤレサモジヤ、ヨソホーホー」。

また、「出羽の羽黒に三羽の鳥、又も夜明に鳴きたる」。「羽黒大堂の前で昔頭とる女、身は小さいども駒鳥だ」。

霜。「お茶は終るし、お茶師は踊る、ほいろぶち眺めて、目になみだ」。「お茶師の希頭さんが、めくらならよから、お茶の吟味も分るまい」。「ぬるいお茶でも、お前の手から、ついでもらへば熱くなる」。

サヨナラウターさよならの歌 東路の一つ。福岡では、さよなら三角、またきて四角、四角は豆腐、豆腐は白、白は兎、兎ははねる、はねるはかへる、蛙は青い。サミオクリノウタ

サラオドリ皿踊 長崎縣有田地方では新婚の家や出産の家に、三十歳以上の婦人十數名たづねて祝ひ、輪を作つて坐り酒肴の饗を受ける時、小皿二つづつ兩手の指に挿んだ婦人立つて、マダラぶしに合せて踊りつゝ、小皿を打つ。四竹を打つのに似てゐる。此處のマダラぶしは巡禮歌の如く緩徐のもので、歌詞は、めでたの若松様の類。これを皿をどりといふ。【民俗藝術】第百三十四號。サハサミブシ、サマダラ

サラシナブシ更科ぶし 信州川中島の唄。北原白秋歌、町田嘉章曲。信州信濃の更科そばは、ソラサイ、馬の鼻息で、サラサツト直

サマキイサマ

ぐゆだる、ナツチヨモノ」。

サリトテブシさりとてぶし 高知縣佐川町の猿踊の一。「おまへ百まで、わしや九十九まで、共に白髪が生えるまで、アリヤ、サリトテ何とする、陽気な氣なもの。また、おまへすまんのんし、おすまんのんし、前の小川の濁り水」。

サアルダブシ猿舞ぶし 【ひなの一ふし】に津輕の金獅子として記す。「仔細らしさよ、起上り小法師、ひとり寝まいとはね起きた。都がたの唄や近くの唄もある。原註に、「石がね春く雲堆にも唄ひ、又ざるあげぶしとて、鉾あらひの女のうたふ一ふし也」。

サラオドリウター猿踊歌 【俚語集】の熊本縣球磨郡の項に、相良侯昔日參觀交代の節、八代より船出せし景をうたひしものなり」と註をして、音に聞く、よし八代の徳の淵より御船に召され、御船の数が五百艘、御旗の数が一千本、十二の音楽たてさせ給へば、神もいらん佛もいらん。猿踊の義は不明だが、或は猿の面を冠つた者に祝儀の舞を舞はせたからかも知れぬ。

サマルバカ猿馬鹿 【俚語集】に、佐渡の猿馬鹿

鹿の詞句を記す。猿馬鹿は猿曳の自ら卑下する名らしい。歌舞伎の猿若と關係ありさうである。

サマルマイ猿舞 【俚語集】に、佐渡の猿舞の歌あり。「めでたや、さるとはめでたや、事の上はさるとはめでたや」云々。猿舞しの歌らし。

サワキイ騒ぎ 【松の葉】卷三に、「さはぎ」と稱する唄十六種、長短いろいろ見えるが、さはぎの義は不明。今日普通に云ふ騒ぎは騒ぎ歌、即ち遊里で呑めよ歌への場合のそれを指し、歌舞伎ではワドリ地の鳴物を用ゐる。忠臣蔵七段目の如し。但し宿場女郎の芝居には「しゆげさ」を唄ふ。サカシハザキサンガイ

サワキウター騒ぎ唄 サワキ

サワラオンドー佐原音頭 千葉縣佐原町の唄。竹葉金作歌、并屋佐吉曲、阪東三津五郎振。「利根の川瀬に追風を孕む、船にや米積む眞帆片帆、よいやさく」。「音に菊月、祭りも派手に、佐原囃子の音も冴える、よいやさく」。

数臺の山車が出る、その時の囃子もの。三味線が入る。佐原囃子として、音に菊月まつりも派手に、佐原囃子の音も冴える、ヨイヤサく、及び一つとや、二つとや富士と筑波を眺めつゝ、流れも清き利根の水く。猫おやぐの特唄があり、別に磯邊囃子もある。唄の無いのはサンギリ(シヤギリ)馬鹿囃子、花三番、津島等々。ヤイツベバヤシ

その殿御だよ。「わしが殿御には、みするしがござる、勇み舞にあい染めたてご、駒三歳産毛駒、ござんたばさみ熊皮のおをり、おちく三度懸け踏馬御免、今のはやりのさい節、唄ふて通る殿御は、あいつはわしの殿御だよ。殿さぶしの變化したものと(東北の民謡)にある。

サンコブシさんごぶし 鳥取縣の歌。うめてたぐが三つ重なりて、鶴と龜とが舞遊ぶ。「蝶々の心で来て下しやんせ、花の姿で待つわいな」。鳥根のサンコと同一か否か。『日本歌謡類聚』下巻に、安藤國御郡津田村の三鼓ぶしとして、まゝにならぬと御禮を投げて、そこらあたりはまゝだらけ。また慶應年中出雲より流行の三鼓ぶしとして、忠臣蔵ではわしやないが、雨が降るなら師直で、風が吹くなら由良の助、仕事は千崎彌五郎で、縞の財布はお軽でも、わしとお前は與市兵衛」。

サンガチウチウカ(山家鳥島歌) 寛文の頃に後水尾院が諸國に勅して、盆踊唄歌を集めさせられたものとして傳はり、諸國盆踊唄歌」と名がついてゐたが、明和八年の序文のあるものが近年発見された。題して「山家鳥島歌」といふ。盆踊と限らず多くの場合の民謡を収める。

サンコブシさんごぶし 越中富山市の圓隆寺の祇園會に行はれる。昔は六月十四、五日。近年しばらく絶えて、最近は七月の同じ日に復活。昔は七夕や盆や地藏祭にも行ひ可憐な娘たちが浴衣や帷子の着流し、紅白絞りの手拭の兩端に小さい鈴を二つ付けて帯に挿み、下駄にも鈴を入れたのを穿き、幾つも輪を作つて廻つて踊る。輪の中に年長者が屈んで歌ひ、踊子は「サーイサンサーイ、ヨンス」

サンコブシさんごぶし 越中富山市の圓隆寺の祇園會に行はれる。昔は六月十四、五日。近年しばらく絶えて、最近は七月の同じ日に復活。昔は七夕や盆や地藏祭にも行ひ可憐な娘たちが浴衣や帷子の着流し、紅白絞りの手拭の兩端に小さい鈴を二つ付けて帯に挿み、下駄にも鈴を入れたのを穿き、幾つも輪を作つて廻つて踊る。輪の中に年長者が屈んで歌ひ、踊子は「サーイサンサーイ、ヨンス」

サンガツジュウロクニチノウター三月十六日の唄 ヤオタケマイリ

サンコブシさんごぶし 對馬の島知村鶴知の盆踊。「國は大和や、山崎さんご、月を丸め、日の出の如く、貴はせま、上誰が身の上も」といふ馬方さんごの物語を唄ふ。タドキらしい。『全長崎縣歌謡集』所載。

サンコブシさんごぶし 越中富山市の圓隆寺の祇園會に行はれる。昔は六月十四、五日。近年しばらく絶えて、最近は七月の同じ日に復活。昔は七夕や盆や地藏祭にも行ひ可憐な娘たちが浴衣や帷子の着流し、紅白絞りの手拭の兩端に小さい鈴を二つ付けて帯に挿み、下駄にも鈴を入れたのを穿き、幾つも輪を作つて廻つて踊る。輪の中に年長者が屈んで歌ひ、踊子は「サーイサンサーイ、ヨンス」

以前は「サイサツサ、ヨリサノヨリナ、サユリナ」と唄つたといふ。これは佐々氏に代つて富山を治めた前田氏が、人心收攬の爲め、佐々氏を罵る意味の歌を新作して唄はせた時の名残り。「サイサツサ」は「佐々早く去れ」の意味、サユリは佐々氏の愛妾小百合を指したなぞと傳へる。歌は、「踊るまいか見まいか、島の徳兵衛の娘見まいか」。見見りや何ちや、目こそへがなれ器量よし。」「盆の十六日、お精霊、しよらい、しよらい、踊うて日が暮れた。」「東たんぼに光るもんなんぢや、蟲か螢か黄金の蟲か、蟲でないもんな火の玉ぢや。」「民俗藝術」第一巻第八號に歌詞を多く記載。小町踊、盆唄の一例。

サンサオドリさんご踊 愛知縣北部の盆踊。さんご押せ押せ下關までも、押せば港へ近くなる。「獅子の帯しめ腰よなよなど、あれがお庄屋の花嫁か。」「ぬしのくる夜は宵から知れる、裏の御池で鴨がなく。」「サンサオドリさんご踊」【ひなのひとぶし】に、南部澤内のさんご踊として、さんご踊らば、品よく踊れサンサ、秋がきたらば嫁にとろサンサ」。

サンサオドリさんご踊 兵庫縣養父郡の今日、筑前國箱崎に於て「云々と應神天皇の御事を歌ふ。同郡絲井村寺田では七月十五日の佐伎都比古阿流知命神社の祭に舞ひ、一日の太鼓踊とも云ふ。雨乞にも踊る。サンザカの語は恐らく雨のザア、降る音の形容であらう。菅笠に軍配の音頭二人、日月を象る圓形の物を二間ほどの竹に挿して背に負ひ、太鼓を附けた中踊二人を取巻いて輪を作る十人

萱屋の雨か、音もせできてぬれかゝる、しよんがえ」とあり、當時同地では歌はれたことが分る。また天保元年に江戸で書おろしの清元の淨るり土佐繪は、文政元年の常磐津の淨るり三つ人形に習つて、さんさ時雨を取入れてゐる。曰く「さんさ時雨か、かや屋の雨か、イヤ、トキましてどん、音もせできてぬれかゝる、しよんがえ、イヤトキましてどんせで来てナ、せて来て様よ、エ、せてきてぬるか、しよんがいな」と云ふ。何か拳の合方に使つたらしい。而して清元常磐津の此の歌は、今日も残つてゐるが、今日の仙臺地方で唄はれる節とは大差がある。仙臺では天正十七年に伊達政宗云々を云ふが「さんさしぐれか、かやの雨か、音もせできて、ぬれかゝる、しよんがえ」は、江戸時代の唄の調子である。仙臺地方では祝儀の席上、嚴かに手拍子を打つてこれを唱和し、このや屋敷はめてたい屋敷、鶴と龜とが舞進ぶ、「雉子のめんどり、小松の下で、つまを呼ぶ屋敷ちよちよと」を續ける。明治以來、あまり敬服できぬ唄の振もついた。福馬縣では、「さんさ時雨」は、こつちが本場と云ふ。今のところは、何

れが本場か分らぬ。下關に起つた事も或は肯定できぬ。なほ、萱野の雨」とも、「茅屋の雨」ともいふ。云ふまでもなく巖の唄だが、何か原因で、祝儀唄になつたのである。なほ一方から云へば、全國にひろがるシヨウガエブシの、一の例とも云へる(シヨウガエ)。然るに文政末年に羽後で成した菅江眞澄の「ひなの一ふし」(ヤヒナノヒトフシ)に、奥州贈澤の郡衣川の「こなたかなた祝言唄」として、「さんさ時雨と萱野のあめは、音もせできて降りかゝる」、「飲めや大黒うたへやえびす、いでしてしやくとれをかの神」の二首を記し、別にシヨウガエの事はない。然し當時シヨウガエが無かつたとは云へぬ。雉子言葉を省いて記す例も他にあるからである。また古く元祿の「落葉集」巻五の山庄太夫の中に、「さつさ時雨のナ、萱屋の露よ、音もせできて降り心、せて来て音を、音もせできて降り心」がある。なほ、「民族と歴史」第八巻第五號所載の阿波三好郡井内谷の雨乞唄に「さまは茅野の時雨の雨よ、音もせできてふりかゝる」とある。

サンサプシさんさぶし ● 「松の葉」巻三に

「寄は月にも紛れて済むが、更くる鐘にはサ

ヤナ。ちやうさいの義不明。 ↓シヨウガエ ↓ヨイヤナ

縣南高來郡の船唄に、「三十二反の帆を巻上げて、帆足揃へて、まんまとも、如何なる大名も叶やせん」云々といふ。まんまともは眞正面に風を受ける事。「俚語集」に、神奈川縣横濱市の漁夫が、漁業中に唄ふものとして、「三十二反の帆を巻上げて、返すの暇乞ひ、オヤマイタリ、ギリンコシヨ」。磯ぶしに、「三十五反の帆を巻上げて、行くよ仙臺石の巻」がある。「熊野民謡集」に、「三十六反帆を巻上げて、まめで居よとの手をあげる」。

三十振袖四十島田さ、サツササ、ヨイヤサ、伊達な振袖ゆかしなつかし。「松の葉」巻三の鹿兒島には、「こゝに流行らぬ、鹿兒島に流行るになさ、三十振袖四十島田、なほいさく」。後者の方が年代古いだけ古からう。

サンサプシさんさぶし ● 岩手縣紫波郡飯岡村地方の唄唄。その唄をサンサ唄といふ。「道樂したとて、ヤハエ、叱るな親爺、叱る親爺は賢におけ、サンサエー」。「あのや男から、ヤハエ、帯一本買った、江戸でさらして大阪で染めて、大阪染めはよい染めだ、サンサエー」。「民俗藝術」第二巻第十二號に歌詞多く記してある。

サンジュウニコクブネフナウター三十石船唄 昔、大阪と京都の交通機關とされた淀川の三十石船の船唄。「こゝは何處やと船頭衆に問へば、こゝは枚方鐘屋うら」。鐘屋は茶屋の名。「鐘屋浦には錠はいらぬ、三味や太鼓で船とめる」。「ねぶたかろけど、ねぶた目をさませこゝは五番の廻り場所」。「ねぶたかろけど、ねぶた目を覚ませ、こゝは大阪八軒家」。八軒屋は大阪天満橋に入軒の茶屋船宿のあるを云ひ、こゝを大阪の起點として、伏見までさかのぼる。

サンサプシさんさぶし ● 千葉縣鹿野山に盆に歌はれる。長さ五寸位の竹筒に小石を入れたのを兩手に一本づつ持ち、これを振りつゝ唄ふ。此の竹を籠とも呼ぶので、一にあやとり唄といふ。「籠をネー、エツサモナンデモセー、綾を取るなら鹿野山においてネー、オサンチヨエー、鹿野のネー、エツサモナンデモセー、鹿野の薬師は綾とり薬師ネー、オサンチヨエー」。又、心願ネ、心願かけるなら鹿野山におかけ、みんなネ、みんな願ひは叶ふ山、「九十九谷は鹿野山の名所、日の出、月

サンサプシさんさぶし ● 静岡縣中之町村の唄。「めだた〜の若松様よ、枝も染える葉もしげる」。「天龍川風、吹上げまなご、落ちて柳の葉にとまる」。「佐渡の民謡」に佐渡のを記す。「御寺の前で書いた文をひろて、なんだかなと、かいひろげて見れば、絲取り習へ續けり習へ」。

サンジュウニコクブネフナウター三十石船唄 昔、大阪と京都の交通機關とされた淀川の三十石船の船唄。「こゝは何處やと船頭衆に問へば、こゝは枚方鐘屋うら」。鐘屋は茶屋の名。「鐘屋浦には錠はいらぬ、三味や太鼓で船とめる」。「ねぶたかろけど、ねぶた目をさませこゝは五番の廻り場所」。「ねぶたかろけど、ねぶた目を覚ませ、こゝは大阪八軒家」。八軒屋は大阪天満橋に入軒の茶屋船宿のあるを云ひ、こゝを大阪の起點として、伏見までさかのぼる。

サンサプシさんさぶし ● 新潟縣三條町の唄。「三條名物、鍛冶屋に足袋屋、寺ちや御坊様、本成寺、エ、菓子に染物、風、眞馬」。

サンサプシさんさぶし ● 文政五年版の「浮かれ草」の、おどけ唄の中に見える。「松は唐崎、矢橋の歸帆、暮雪の月は石山、三井の鐘、堅田の落雁、瀬田の橋、膳所のお城は奇麗さんざ」。

サンジュウニコクブネフナウター三十石船唄 昔、大阪と京都の交通機關とされた淀川の三十石船の船唄。「こゝは何處やと船頭衆に問へば、こゝは枚方鐘屋うら」。鐘屋は茶屋の名。「鐘屋浦には錠はいらぬ、三味や太鼓で船とめる」。「ねぶたかろけど、ねぶた目をさませこゝは五番の廻り場所」。「ねぶたかろけど、ねぶた目を覚ませ、こゝは大阪八軒家」。八軒屋は大阪天満橋に入軒の茶屋船宿のあるを云ひ、こゝを大阪の起點として、伏見までさかのぼる。

サンサプシさんさぶし ● 新潟縣三條町の唄。「三條名物、鍛冶屋に足袋屋、寺ちや御坊様、本成寺、エ、菓子に染物、風、眞馬」。

の出、谷の敷」。ヤゴシタブシ  
 サンバイオロシさんばいおろし サンバイ  
 は田の神、オロシは招く義。田植歌の始めに  
 田の神おろしをするに歌ふ。「けふの田へヤ  
 ハレさんばい様をおろすには、ヤハレどの  
 盛へ、ヤハレどの盛へ、ヤハレ三角の盛  
 の真中へ」。『無語集』 ヲタウエウタ  
 サンビョウシ三拍子 木曾踊の古歌に、「さ  
 んびやうし踊を知らぬか子供、人と一度に手  
 を叩け」。三拍子といふこと各地の踊に見え  
 る。歌のない事も多い。いはゆる西洋音楽の  
 四分三拍子とは違ふもの。

サンマイオドリ三味踊 淡路下内膳村の盆  
 踊。三味は墓地の義。『淡路名所圖會』に云ふ。  
 毎年七月十六日夕、一村凡そ百二十餘家おの  
 おの先祖代々の亡霊の松明、長さ一尺五寸ほ  
 ど、廻り三寸ほどの物を左手に、また右手に  
 笹の枝を持つて墓地で輪を作り、鐘太鼓音頭  
 に合せて踊る。音頭に、「踊れやれこまよ、はね  
 よやれこまよ、ばくちのさいとなれこまよ」。  
 踊る所は山腹の平地の各所なので、高い方よ  
 り低い方へ、低い方より高い方へ松明を投げ  
 合ふ。一に内膳の火踊と云ふ。

サンヤさんや 『無語集』の廣島縣佐伯郡に  
 サンヤとして「高砂ヤノ」、尾上の松を白に  
 して、その木の枝をば杵にして、ヤンサ揚げ  
 つけ伊勢の米、伊勢の山田のせちの米。せち  
 の米の義不明。他に例の「めでたき物は芋の  
 茎」云々がある。サンヤの囃子詞は見えぬが  
 多分あるであらう。越後堀之内の花水祝ひ  
 にもサンヤがある(ヤミズイワイ)。この歌け  
 だし祝儀歌らしい。

サンヤオンド三夜音頭 能登輪島地方の盆  
 踊。「一つ心に二人が踊る、踊る三夜に夜が明  
 ける」。朱塗枕を持たせて寝ぐ、流石輪島は  
 漁りどころ。漆器の出る町なので此種の文句  
 が多い。花笠に浴衣で踊る。  
 サンヤレブシさんやれぶし 茨城縣龍ヶ崎  
 町に行はる。ハヤシ言葉の後に、終りの文句の  
 つくのが變つてゐる。むすめ十七、女化狐、花  
 と盛、月と雪、米の波等々ある。しんきてなら  
 ぬは、「ヨイヨイヨイ、長い町だよ、龍ヶ崎  
 や長い、ぐるり廻つて一里半、色で通ふにや  
 長すぎる、町は九つ、通りぬけたら夜が明け  
 た、オヤ夜が明けた、夜が明けた、ソソレガ  
 ジョーカ、ジョガマジョカ、ワタシハワッハ

ツカヌ、しんきてならぬ」。町つどきは、「ヨ  
 イヨイヨイ、昔や千軒せんだい御領、竹に  
 雀の籠でさへ、今は刈られて町つどきは、今は  
 町つどきは、通り町並、願く家数も二千軒、そ  
 りや二千軒二千軒(ハヤシ)、今は町つどきは、  
 支度までしたが、は、「ヨイヨイヨイ、今年や  
 どうでもかうでも、嫁入りさせなきやならぬ  
 鏡裏針箱たば盆、合羽にからかさ、下駄足  
 駄支度までしたが、へそが出べそで、それ  
 嫁はれた、嫁はれた(ハヤシ)、支度まで  
 したが」。

サンマイン参舞、散去舞 長崎縣の舞(青  
 年)に記す。後白河天皇熱病を煩はせ給ふ時  
 平重盛水堂觀世音の靈水を汲んで捧げて御平  
 癒の後、勅使参向して御願成就の舞を舞つた  
 に始まり、その時の衣裳が今も水堂にありと  
 云ふ。冠を冠り濃茶の上衣に大形の飯杓子  
 持つて舞ふ。大村地方に現存といふ。

シ

シアゲウター仕上唄 茶をつんで揉んで仕上

げる時の唄。遠州では、「わしが鳥なら茶部屋  
 の屋根で、鳴いて口説を聞かせたい」。

シアゲミブシ仕上唄 茶を仕上げる唄。  
 静岡縣の唄は、「お茶師」と名はよいけれど  
 朝の六つから丸裸。「あけておくれよ茶部屋  
 の障子、たまにやお茶師の顔みたい」。

ジイトコバアトコトとこばいとこ 木挽  
 唄。『無語集』に熊本縣天草郡の木挽唄をのせ  
 「わしが心は老岳山の、落つる木の葉の敷思  
 ひ、「木挽女房にやなるなよ娘、仲のよい木  
 を引きわける」として「アラチートコバート  
 コ」と囃子を記す。他地方でも云ふらしい。

爺とこ婆とこの意味も含めようが、ジートは  
 爺の音と思はれる。

シオカイブシ唄買ふし 熊本縣球磨地方の  
 山唄。薪を伐りつゝ唄ふ。一に山行き唄とい  
 ふ。「鹽の高さが二匁五分ヨ、ゲゲラノノには  
 換へられぬヨ」の唄より、鹽買ふしの名が出  
 たらしい。ゲゲラノノは蚊張を作る布。別に  
 「わいどま、山見にや行かんきやヨ、おいも  
 行くて、鉈研ぐヨ」。

シオカエウター汐換唄 薩摩の鯉舟の唄。鯉  
 の餌となるキビナゴを入れた桶の水を汲み換

へる時の唄。「雑魚が物云うた、樽の中の雑魚  
 が、汐さへ換へれば死なぬと云ふた」。三人で  
 汲入れ、一人で汲出す、一日六時間の労働に  
 唄ふ。沖の鯉舟と下の關の女郎は、裾がしめ  
 らにや、咽喉がひる」。これは漁師が三尋五寸  
 の布袋竹の竿で釣上げる時、水が掛つて裾を  
 ぬらす事が唄はれてゐる。また「あはれと思  
 へば、泣かぬ日もない、袖をしぼらぬ晩がな  
 い」。船が三艘出て、どへかどへと知れぬ、  
 中の新造船が様船。「荒く波が立つ、きつ  
 ござる、船は見えたが、馴染は見えぬ、馴染  
 は見えぬ管だよ、矢帆の陰」。人の馴染はけ  
 なげて歸る、わしの馴染は骨根まざる。夫と  
 妻の唄がある。今日は登動機船で、キビナゴ  
 の代りに鯉を用ゐる、汐換の必要がなくなつた  
 ので、此の唄も亡びつゝある。

シオガマオンド唄籠音頭 宮城縣鹽竈港の  
 うた。白鳥省吾歌、大村能章曲。「昇る朝日  
 は鹽竈でらし、大津通ひも岸につく、港深け  
 りや情も深い」、ハヤシ省吾「鹽竈よいとこ、よ  
 い港」。

シオガマコウター鹽籠小唄 宮城縣鹽竈港の  
 うた。白鳥省吾歌、大村能章曲。「ハハハ優ほの

ぼの鹽籠様に、咲いて港の、咲いて港の船に  
 散る」。ハヤシ省吾「ヤンレ、アンラ、エンヤサ  
 ヤンサノエ」。

シオガマジンク唄籠甚句 同じく鹽竈港に  
 行はる。ハヤシ詞の爲め、俗に「ハットセ」と  
 もいふ。今は藝妓の座敷と化す。「鹽籠街道  
 に白菊植えて、何をきく、アリア便り聞  
 く」。鹽籠出の時や、大手振りよ、奏社の宮  
 からアリア胸勘定。瀬藩時代こに遊廓があ  
 った、仙臺から馬で通つた者の朝歸りに、意  
 氣揚々と遊廓を出て、途中より財布の事を考  
 へる者を冷笑した唄。『東北の民話』に、アイ  
 ヤ節から出たものと記す。ヤアイヤブシ

シオジリジンク唄尻甚句 信州鹽尻町が中  
 山道の宿驛として築えた頃からの唄。鹽尻女  
 郎衆と鉢盛山は、西ちや高いと人が云ふ。西  
 は二朱に掛ける。「鹽尻峠が海ならよかる、か  
 あい主さと舟で越す」。

ジオドリ地踊 地唄、地酒と同じく、その  
 土地の踊の意。盆踊などで他より輸入のもの  
 に對して、久しくその土地に行はれた踊をい  
 ふ。

シオナタジンク唄名田甚句 長野縣北佐久

郡中津村の古い宿場の唄。明治中期の作といふ。「昔や壘名田、關所と同じ、手形で通れ、いかだ越し、キタサツサ、ヨイヤサ」。↓シオナタブシ

シオナタブシ 壘名田ぶし 「壘名田名所は千曲川、ハアヨイシヨ、次に名所は瀧の水、コリヤ、駒形様の厄落し、ヨイシヨ、涼味ゆたかな中津橋、コリヤ、ヨイヤサ」。↓シオナタジツク

シオノエコウタ 壘之江小唄 香川縣壘之江温泉の唄。椎名六郎選、佐々紅筆曲。「さぬき壘の江、いでゆの名所、白い素足に湯がにほふ」。

シオバラコウタ 壘原小唄 栃木縣壘原温泉のうた。泉深太郎歌、藤井清水曲。「五里の街道トコサ、自動車とばしや、嬉しや壘原湯の匂ひ、オヤ湯の匂ひ」。ハヤシ、ソレ壘原ヨイトコ、ヨイ」。↓

シガク 試樂 祭禮に行ふ歌舞を、その前日に行ふこと。所によりナラシと云ふ、馴らしであらう。所に依りシガクと云ふ。本樂に對する言葉。所に依り本樂に全部を行はず、却つて試樂に全部を行ふ。

シカオドリ 鹿踊 鹿をカノシシと云ふ爲め鹿踊と書きシシオドリと云ふ。東北地方、殊に岩手、宮城に多い。人間一人が鹿一頭に扮し、鹿の頭を冠り、胸に太鼓をつるして兩手の撥で打ちつゝ踊る。牝鹿一頭、他は牡鹿で數頭をり、他に歌ひ手が居る。その内容は他のシシマヒに似る。共通の歌も多い。嬉しやな風が霞を吹拂ひ、今こそ牝じしに逢ふぞ嬉しや」。↓シシマイ

シカケダイコ 仕掛太鼓 『俚語集』に廣島市に明治半ばまで、盆の十五日、町の娘十三歳を頭として團扇太鼓を叩き町内を練る。之を仕掛太鼓といふと記す。年に一度の七夕様よ、何を御馳走に上げませうか、硯清めて五色の紙へ、思ひの歌を書き、歌の出どころ横町二丁目、つけて流すがさいこ町」。来い、小女郎しかけて来い、明日は盆の十五日、十五日を祝うておとのさん者は、十二の角が頭へ生えて、頭の心、蛇の心、蛇籠三匹や恐ろしゆないが、鬼の五匹が恐ろしや」。七夕をどりである。↓ヨイヨイヨコヨロウ ヲタナバオドリ シカンブシしかんぶし 鳥根縣八東郡大根

ものは、一人立ち即ち人間一人シシ一頭と、二人立ち即ち人間がシシの前足と後足になるもの、及び人間數人が獅子一頭になるものと三種ある。一人立ちは今は多くは胸に太鼓をつけ、兩手に撥を持つて踊る。牝一頭、牡二頭以上で、自ら太鼓を打ちつゝ踊り、別に笛、ササラを奏して歌を歌ふ。種々の曲目がある。牝じし隠しとは、牝が隠れた爲め牡達が悲しみ、後に無事なのを發見して喜ぶ筋、秘ガカリは秘にたはむれる筋である。天竺の逢初川のはたにこそ、牝じし牡じしを結び合せる」式の歌が歌はれる。二人立ち以上のシシには歌は無いらしい。くはしくは『民俗藝術』第三卷第一號(獅子舞)を見よ。總じてシシ舞は鹿であるといふを問はず、その歌詞は、「参りきて、これの御庭を眺むれば、黄金小草が足にからまる」式の三十一文字が普通で、多く下の句を二度くり返す。それを長歌と云ふ時は節を長く歌ひ、小唄と云へば早く歌ふ、また、太鼓の胸をキリリと締めて、ササラをサラリと摺りこめたよな」式の三十一文字以外もある。歌詞のない場合は固より笛を主にし、太鼓とササラがアシラヒになる。

鳥渡入地方の歌。米は四貫で石では二貫、廿五年の豊の秋、京や吉田の御託宜、ハレワイサノヨイ」。さても珍し大山の椿、もとは尾高で葉は日野川に、花は米子の城で咲く、ハレワイサノヨイ」。土地では佛優中村芝翫に因み芝翫ぶしと記すが、前記の歌が根本なら四貫ぶしであらう。

シタミオドリ 仕掛踊 年々新作する盆の踊を云ふらしい。即ち一つの文句、扮装を仕組むからであらう。

シコク 四國 香川縣の歌。古調と思はる。「四國阿波の鳴門の汐の早さに、沖漕ぐ舟はにひやアアつす、インヤににひやアアつす。右の「阿波の鳴門」の代りに、「土佐の津」、或は「箱の津」とも替へて云ふ。にひやアアつすの意味不詳。『俚語集』

シサクウタ 仕作唄 岩手縣下のもの。今、神賀郡に残るといふ。五通りの勢舞歌をつらねたもの。一は田植唄、一本植あれば千本になるかいど、早稲の種こそ、かいどなどは固くなる、黄金の蔵は九つ、九つの蔵の主は、四十四五とも見えたり、お早乙女に着せるとて紺の敷を見れば、紺の敷は三百六反、藍つ

シシマイ 猪舞 山形縣の山寺(立石寺)の舊曆の七夕に、猪に扮する舞がある。傳説では慈覺大師が立石寺草創の折に附近一帶の殺生禁断を命じたので、山々谷々より猪が群集して大師に謝した事に始まると云ふ。別に豊年を祝ふためとも云はれる。

シシマワシ 獅子廻し 祝言城の一。『俚語集』に福岡縣三井郡の歌詞を記す。さて獅子なんどと申するは、此界にても始まらず、唐天竺にも始まらず、めん瀧をん瀧さんない瀧、中に住んだが獅子となる」云々。

シズオカチヤツミウタ 靜岡茶摘唄 靜岡縣下の唄。お茶のでんぐり揉みや、小腕が痛い揉ませたくない我がつまに。お茶の出どこは安西茶町、つけて流すが宮ヶ崎、宮ヶ崎から車についで、牛に引かせて清水まで。ジゾウツン 地蔵尊 秋田のうた。ひなのひとふしに記す。童女うちむれて七月唄ふ、是もあきたのかりねに記しぬ」としてきてんてに花籠かたにかけ、花をつめとやどれ、桔梗かるかやをみなへし、いろよき花をばつみに、めんづごんづの鬼どもが、つみたる花をばかきちらし。和讃の類か。

き染の帷子。二は、田の草取の唄、お茶所と川の瀬は、いつもドンドと鳴るがよい、川の鳴る瀬に絹機たて、浪に織らせて、瀬に着せる。三は、親すり唄、乙部町、柳の葉より狭い町、狭くとも一夜の宿で錢をとる、錢も錢、諸國を廻る丸い錢。四は米搗の唐臼踏の唄。「初めて唐臼踏まれけり、足を見れば、足に豆が九つ、九つの豆を見れば、親の在所が懸しい。五は、米搗の手杵搗の唄、あねこ女郎、呼ばれてきたか、たど来たか、たども来ない、秋機おりに来たどサ」。高橋剛、武田忠一郎諸氏に依り紹介された。

シシオドリ 鹿踊 ↓シシオドリ

シシオドリ 鹿踊 し、舞に同じ。但し、糸竹初心集』や『紙書』にシシ踊(獅子とも鹿とも)の歌詞をのせる。「うらううらのせきのををしみいづらはあゝ、よごとをにおつれまどをなもをたあたあぬううまいそりや」。又、前歌として、浅ましや腰が身は、たど一夜で落ちて名を流す、まいそりや一夜で落ちて名を流す」。

シシマイ 獅子舞、鹿舞、猪舞、いづれもシシマヒと讀む。現在各地に行はれる





本は、元はたかまの又五郎さまよ、今は習ふて踊ります、ヨイヤナ。シテナの語、古語と思はる。

シトトコフシしととこぶし 鳥根縣藤川郡の田植歌の一。ついでにはたいで白うして、おまゝにたいたら山となる、酒につくりし泉酒、その酒呑んだ人ならば、孫子の末まで富貴繁昌。【俚語集】

シナガワコウター品川小唄 東京市品川のうた。柴井二郎歌、小田島樹人曲、花柳徳太郎振。願や天王荒神さまも、結ぶえにしの守り神、懸し品川、瀧の香、瀧の香、まじる紅の香、ホンニ浮いたくね。

シナノオイワケイ信濃追分 ヨオイワケシナノブシ信濃ぶし 長野市の唄。野口雨情歌、梓屋六二郎曲、花柳壽輔、三之輔振。

「信濃善光寺さんに、常夜燈がついてヨ、いつが日暮れで、夜明けやら、イヤミスズトセ。」シナノミンヨウシウ山信濃民謡集 昭和四年に信濃毎日新聞が全信州の小唄人気投票をやつた時の記念出版。二十八種の新舊民謡の由来、歌詞、曲、振を記してゐる。

シノキオンド 篠木音頭 愛知縣篠木地方の

唄。加藤秀水歌。篠木よいとこ、庄内川の、水の瀬音が響て聞ける。

シノダヤマボンオドリ信太山盆踊 懸しくは尋ねきて見よの傳説の地、大阪府泉北郡信太山の盆踊は八月十五日より行はれ、府下第一の大太鼓に三十人の音頭、二十人の三味線その他胡弓も加はり、踊子二千と號するもの。「古き傳への信太の森に、ソレイイドッコイセ、昔ながらの月燈照れど、サーヨイヤセ、ヨイヤセ、ドッコイサノセ、愛と浮世のあの板挟み、ソレイイドッコイセ、いとしま子と此世の別れ、(以下ハヤシ省略)思ひ残して陣子に歌を、おはれ悲しき萬の葉経よ、心ひかる、我子の養頭、せめて一目よ保名の君よ、思ひ残して津の國の里、おはれはかなく信太の森へ。」

シノバスコウター不忍小唄 東京市下谷區下忍池を中心の唄。時雨音羽歌、佐々紅葉曲。「花に花さく上野の露、オヤ西郷さんに辨天さん、浮かれ舞々も飛んでくる、ハヤシお鏡子、鏡子、その調子、調子に乗つて飛んでこい。」

シノハラオドリ篠原踊 奈良縣吉野の連峯

の谷あひ、篠原の盆踊。特色あるものといふ。シノマキウター篠原歌 篠を束ねる歌か。【新本伊豫民謡集】に見ゆ。「わしとお前は焼野のかづら、かづら焼けても根は焼けぬ。」

シバガキ柴垣 江戸初期の踊歌。【糸竹初心集】に「柴垣、柴垣、柴垣越しに、雪の振袖ちらと見た、振袖、雪の振袖、ちらと見た」とあり、各書に見える。二人向合ひ、掌を打合せ胸を打つ。今日のセツセツセの如きもの、恐らく右の歌(及び音頭を)くり返し、歌ひ續けて行ふものであらう。長唄の羽根の禿、清元の二人奴、その他に見えるもの、往時の柴垣であらう。昔唄、昔の振も多いらしい。シバタコウター新發田小唄 新潟縣新發田町の新小唄。年に一度の諏訪さま祭り、伊達な花笠、揃ひの着付、夏の短夜にくらしや、サツサ短夜にくらしや。

シバタゴマンゴター新發田五萬石 同じ新發田(柴田)の民謡。しばた松坂ともいふ。文政五年版の『浮かれ草』に「柴田五萬石、枯らそとまゝよ、悪所通ひは止めはせぬ、おめではいはしやる、どびんでは茶が出る、西瓜のばりめが、姉さの眞似して、眞赤な汁出す。」

「しばた松坂、習ひたかござれ、畑休んでも教へませう、うんとこけ醤油樽、天井板めくるやうだ。」 ヲナライタカゴザレ ヲマツサカ

シバタジク新發田甚句 同じく新發田町の盆踊唄。「新發田十萬石、狭いよで廣い、おぬし探すに夜が明けた。」背中文庫にして、豆の草とれば、二王子山から、そよ／＼と。

文庫はボンゴかも知れぬ。ナガオカジクシバタマツサカ柴田松坂 ヲシバタゴマンゴク ヲマツサカ

シバトリウター芝取唄 芝刈の唄。【俚語集】に、廣島縣産品郡の唄を記す。刈れや／＼、この芝の芽を、刈らにや荷が出来ぬ、飯がない。「女房のよい人だちや、山行きや早い、人が二に行きや、三にゆく。」

シバニナリター芝になりたや 「芝になりたや箱根の芝にヤレサ、諸國諸大名の敷芝に、ノンノトサンヤ、ノトノトサンヤ。」この唄天明四五年の流行歌『小歌吾聞久爲志』に、和泉式部の歌、うつろはぬ常磐の山もを引き、ノト／＼は長閑にの意なりと説くが如何なものか。ノンノコサイサイ、ノトサマエイなぞに

似た無意味の囃子言葉であらう。今日箱根では、「竹になりたや、箱根の竹に、諸國諸大名の杖竹に」と唄ふ。 ヲハコネクモスケウタジビキウター地曳唄 房州富浦邊の地曳網の唄。遠く離れてオイヤナ、逢ひたい時にや月が鏡となればよいツト、オイヤナ／＼。

シブヤコウター渡谷小唄 東京市渡谷區の新小唄。平山蘆江歌、千振勲二曲。ぬれて色ま寸道支坂の、櫻の時雨に雪の富士。「雨がふるふる富士嶺町と、圓山あたりの花の雨。」

シホウガター四方固め 神事の舞に多い。東西南北の地を固める事、即ち悪魔を追放し安全とする事で、神事の始めに行ふ舞で、獅子舞にもある。地固めとも五方固めとも云ふ。五方は東西南北中央の意味で、四方も五方も此の場合は變りはない。

シマイノウスー終ひの白 白を使つたあとには神樂を上げて敬意を拂ふ。石川縣の粗摺唄に「しまひの白や、白に神樂をあげてくれ」と【俚語集】にある。また餅搗にもしまひの白の事がある。 ヲモチツキウタシマイノウスー終ひの歌 終りに歌ふ歌。 ヲサケツクリノウタ ヲドウホン

シマオンドブシ島音頭ぶし 「ひなのひとぶし」に見える。北海道松前の唄。海を隔て、關梁をもてば、からす鳴きさへ氣にかゝる。或は追分の類か。

シマジンター島甚句 遠島甚句の略稱。 ヲトオシマジクシマター島田 岐阜縣本巣郡根尾村の盆踊唄。樂器なし。島田ヤーハイ流れる、金谷は焼ける、殿の關札どこに立つ、「島田ヤーハイ親切丸鬚くぜつ、銀杏返しは二心。」島田ヤーハイ白歯に、お齒黒そめて、早く女房と云はれたい。

シマダオンドー島田音頭 靜岡縣島田町の唄。「島田ナーよいとこ、大井川がござる、ウシヤトコセー、ヤレコレワイサノサ、山で木を伐るヤンレー洗し出すヨ、エンヤラセの調子で木はザンザ、ソコダニヨ、ホホホイ。」

シマトナガツキヤー島と名がつきや 伊豆七島では「島と名がつきや、どの島も可愛い、まして利島はなほ可愛い」と島ぶし(シマブシ)に唄ふ。長崎縣では「島と名のつきや、どの島も可愛い、まして、まして高島は可愛い、アラシヨカ、シヨカネ」と高島ぶしに

云ふ。ヤタカシマブシ

シマネミンヨウ山根民謡 鳥根縣の民謡を集めた小冊子。昭和八年に同縣の濱田町の高等女學校で出版。

シマノサイフの財布 稿の財布が空になると云ふ文句あり。上の句は、「二度と行くまい丹後の宮津」。また、「伊豆の下田に長居はおよし」とも。

シマノユケムリ四萬の湯煙 上州四萬温泉の歌。松村鶴人歌、石田友太郎曲。山奥の煙る湯けむり、谷間の流れ、四萬は湯どころ、ほのく」と。

シマブシ島ぶし 伊豆七島の島の唄。どこが本場か不明だが、大島のが最も知られて、特に大島ぶしと云はれる。新島のも同じ節。

シミズコウタ清水小唄 静岡縣清水港の歌。野口若松歌、藤井清水曲。櫻花なら風吹きや散ろが、ヤレソレ久能の横現さんにや、チャツチャノセ、ナントシヨ、さうよ、ほんとにさ、日は暮れぬ、イチャナイカネ。

シメガカリ注通掛り 獅子舞の曲目の一。四隅に竹を立て、注通を張る。その注通に獅子がたはむれて舞ふ。

シモウサフシ下浦ぶし 文政五年版の『浮かれ草』にある。向ふ通るは、おら庄屋だんべいか、猪だべいか、おらが庄屋だんべいか、猪だべいか、うしろから覗いたら、面ひツかかれべいか、されはしやうや、しかられべいか。終りの文句が誤植らしい。

シモダブシ下田ぶし 文政五年版の『浮かれ草』に見えるのが、「伊豆の下田に急いで押せば、風も椰の葉、おいもよく、チヨイトチヨイ」。椰の葉を唄つたのは、「今度ござらば持てきてござれ、伊豆のお山の椰の葉を」の歌が名高くて、伊豆と云へば椰を聯想した時代だからであらう。「おひもよく」は、「追風もよく」の意かも知れぬ。今、下田港に唄はれる下田ぶしは、相模灘や東北風で、石廊崎やエー、アヨイヨイ、西風よ、間の下田がダシの風エー」の本文に、「ヤレ千日夜夜逢はずとも、先きさへ心が變らなまや、なんて私が變らうぞ、日々思ひが増すわいな、アエ、オ、サヨウタノ」とはやしが附く。

また、「伊豆の下田を朝山エー、アヨイヨイまけば、晩にや志州の鳥羽の浦エー」の本文に、「ヤレ傳馬を漕いで八帆まいて、帆足を

ろへて行く時は、下田を戀しと思ひ出して、泣きやがれ、泣きやがれ、アエ、オ、サヨウタノ」とはやしが附く。又初めに「ア、ヨイトサノエ」とはやす。

シモウイブシ下津井ぶし 岡山縣の唄。下津井港は、はいり良て出よて、まともまき良て、まきり良て、トコハイトノエナノエソレソレ。「下津井港に錨を入れりや、町の行燈の灯が招く」。

シモツマツウダイ下妻さうだい 茨城縣眞壁郡下妻町の唄。埼玉千葉にも行はれる萬作唄(中山唄)に、サウダイと稱する一群のクドキぶしやうの長い歌があり、手をどりが附く「さうだよ、遙か向うに屋の棟見ゆるが、あれこそ誠に下妻でたなに、間違ひござらぬ」云々。

シモツマブシ下つまぶし 文政五年版の『浮かれ草』にある。「下津まのさアやれ、檀上の御所化の言傳に、さアやれ、おひさぜうはまめだかア、ねら子そだつかさア、」。シモノセキブシ下關ぶし 文政五年版の『浮かれ草』にある。「船ちや寒かる、着て行かしやんせ、わしが着替への此の小袖、しよんが

打出し、或は幕切れごとの囃子となる。シャギリは、本來歌舞伎の言葉でなく、神社佛閣で大太鼓や、それに合せて鉦を打つをいふ。『遊遊笑覽』に、江戸初期のシャギリ關係の歌を多く記す。今日も祭禮の練物に、屋敷で三味線太鼓ではやし立て、これをシャギリをやるといふ所が多い。

シャクシノウタ杓子の唄 杓子を持ち飯を盛るのは主婦の役であり、且つ杓子を持つ事は主婦の權力を意味する。そこで、「添ふて八年子のある仲だ、飯に杓子を渡さんせ」、「年が寄つても意疎しても、嫁に杓子は渡されぬ」等の老若の争ひが歌に歌はれる。

シャクシマイ杓子舞 またシャモジ舞。杓子は招福の呪ひとして巖島神社、多賀大社でも名物だが、従つて農村の祝言の舞に杓子を持ち、「杓子舞を見さいな」と歌つて舞ふ事がある。

シヤダマオドリしやぐま踊 支那の犂牛の尾は馬の尾より白くて光るので、寺院では拂子に用ゐる、これを赤く染めたのをシヤダマと呼んで、左義長の唱門師を始め、鬼に扮する神事の舞人、及び雨伊勢の羯鼓踊その他で愛

代りに用ゐる、これを冠る踊をシヤダマ踊と俗に云ふ。シヤミセンオドリ三味線踊 ヲクローマルオドリ

シヤメンチオドリ救免地踊 京都府愛宕郡八瀬村の十月十一日の、秋元神社の祭に行はれる。八瀬は古くから禁裏御料地で年貢諸役を免ぜられてゐたが、寶永四年に繪曾文を取上げられ、八瀬山に結界の杭を立て、村民の入る事を禁じたので、薪を採る事が出来ず業を失ふやうになつたので、訴訟を起した。これが長びいて寶永七年、秋元但馬守の努力で端み達せられた。然るに其時但馬守は既に故人となつてゐたので、村民は氏神天満宮の側に秋元神社を建て、救免地踊を催したと傳へる。一に繪曾祭燈籠踊といふ。假舞臺で十二三歳の娘達が、花笠を冠り、美装して草鞋穿きで踊る。樂器は大太鼓、和讃に似た節の歌があり、曲に依つて持物が變る。別に女装した青年が八人、頭上に燈籠を戴いて出るが、今は此の者は踊らぬ。燈籠は遠くから見ると極彩色だが、實は紙細工を貼りつけたものである。踊の振は、踊ると云ふより舞に近

え。「さんざ時雨か、賣家の雨か、音もせてきてぬれかゝる、しよんがえ」。元祿十七年(寶永元年)版の『落葉集巻』七には、下の關ぶしとして、本圖子「思案橋とんくく」越えてな、お宿にごさんすくか、そこせひく、三里隔てし波の上、色と情けを小船に乗せて、くるは誰ゆえ、そさまゆえ」その他三首あつて、「ソコセヒく」の囃子言葉が共通してゐる。シモベコウター下部小唄 甲州下部温泉の歌。野口雨情歌、中山晋平曲。朝の下部は横現さまの、杉の木にまで雲が立つ、杉の木にまで雲が立つ。

シヤオドリ蛇踊 長崎市の諏訪祭の奉納踊。長い蛇の作物を、十人の使ひ手が六尺棒で空中に突上げ、玉を追ふしぐさをし、ラツバや銅鑼や太鼓が入る。凡て唐人の服裝をし、音楽が序破急いろくく變るにつれ、蛇も面白く踊る。唄は無い。『遊遊笑覽』卷十に依ると古く長崎の支那人の家では、正月十五日に之を行つたらしい。

シヤギリしやぎり 『歌舞伎事始』卷二に、「入よせの内、樂屋に鐘太鼓を雜へ拍子を取る、是を舍來留といふ」とあり、但し後には

い。横に二列に並び、みな同じ事をする。始め道明につれて出る。忍ぶ夜道に山椒を植えて、行くとき一つ、戻るとき一つ、忍ぶ夜道の目ざましよ、ヒイヤアイ、ハアハアヒヤ、忍ぶ夜道の目ざましよ」の如きもの、他に二首ある。沙波踊は能の松風の沙波踊やうの物を持ち、沙を汲む所作をする。姫は都の者なるが、能登の濱にて沙を汲む、沙波踊をひとをどり」の如きもの他に三首。花摘踊は花籠を持ち、吉野の山に花つむほほどに、花見におちやれ、お姫たち、花摘踊をひとをどり」の如きもの他に三首。終りは常に、「何々をどりはこれまでよ」と云ふ。『民俗藝術』第三卷第十一號、『俚語集』に歌詞が見える。↓トウロウオドリ

シヤラオドリシヤラ踊 寛政甲寅版の「丹波志」一に記す。天田郡大神村の廣谷大明神の祭にピンザサラを持つて笛太鼓に合せて踊り之をシヤラ踊と云ふと。シヤラはササラの訛か。常の田樂と思はれる。

ジャンガラシヤンがら 長崎縣北松浦郡の平戸島の各村に行はれ、盆に豊年を祝ふ意を含み、自安和樂、治安和樂と宛字する、一人

或は二人の中踊は輪の中で、多くの側踊は半圓形の輪を作り、胸の太鼓を打つて踊る。凡て美しく飾つた背笠を冠り、笠につけた幕で顔を隠し、他に笛の役、鉦の役も居て、徳長「徳實出え」の一句をくり返し、唄ふ。平戸町平戸に於ては今は八月十八日、紐差村は八月十五日に行ふ。

ジャンガラオドリシヤンがら踊 阿蘇縣石城郡豊間村の舊盆の踊。シヤンがら念佛の一。↓ジャンガラネンブツ

ジャンガラネンブツトシヤンがら念佛 じやんがらは鉦なぞの音より来た言葉、一種の念佛踊。阿蘇縣、長崎縣その他に行はれる。阿蘇の平町地方を中心とするのは、淨土宗の祐天上人が石城郡四ツ倉町に生れ、その地の最勝院に住持の頃、布教の方便に始めたといふ。鉦を持つた人が輪を作り、太鼓に和して踊る。念佛六回くり返して、盆が来たのに、なぜ足袋はかぬ、はげばよごれる、底ぬける。また「盆と正月、一度に來たら、炬燵抱へて蚊帳をつる」なぞと唄ふ。同縣石城郡草野村では念佛を唱へるのみ。磐崎村は右の如き常の踊歌を云ふ。同縣下では土地に依り、ジャンガ

ラ踊、ジャンガラ念佛と云ふ。シヤントコーシヤんとこ 鳥取の一つとえ。忠臣蔵を歌ふ。六つとこ、胸に餘りし判官が殿中バツと騒がせて、騒動かいな、九つとこ、九つ梯子の二階から、鎌がらお舞を後より、おろさうかいな」。

シユウギウタ 祝儀歌 各種の祝儀の折の歌。『事物索引』に就いて一々を見よ。

シユウクモンブツシ十九文ぶし 熊本縣阿蘇郡の歌。「一の谷まで行かしたんすか、わしや何ぼうでも離れやせぬ、邪魔になるなら今ここに、殺いてたもれよ我夫さん、チーナンデモカソデモ十九文」。十九文の義不詳。『俚語集』

シユウゲンウタ 祝言歌 ↓ヨソレイウタ

シユウゴハマジンク十五演甚句 浪島甚句の事。所に依り此の名あり。「一つ歌ひます十五演甚句、地なし節なし、ところ節」。

シユウゴヤツナヒキウタ十五夜綱引唄 熊本縣球磨郡で中秋の十五夜、綱引をする時の唄。「十五夜の晩に綱引がござる、チヨイ、エイヤと云へば根が切れる、根が切れる、ヨイ根が切れる」。「十五夜の晩に、綱引かぬ者は

チヨイ、先の世ぢや、鬼が杵で搦く、杵で搦く、イヨ杵で搦く」。

シユウサンヒメゴ十三姫子 岐阜縣揖斐郡西郡のひねり踊に、これより東の七が池に、十三姫子が背を刈る、何にするとして背を刈る

義にするとして背を刈る、義であるまい筈である、笠は何等越後笠、越後の町へと出たなれば、一貫五百と値がついた、一貫五百で賣るよりは、越後様へ上げますと云々。羽鳥郡では右の終りを、一貫五百で賣るよりも、踊る子供に冠せましよ。雨乞踊の歌で、その踊姿の聯想から出た歌か。

シユウシチ十七 妙齡の娘を十七と云ひ、十七を歌ひこんだ歌が各地に行はれる。十七は柳の下で芹をつむ、芹つめど、柳もよれてからまるや、如き古調から、十七八には田植をさすな、晩にや殿御さんが、泥臭いとおしやる」如き過渡期より、十七つれて長の旅、のろけは富士の山ほど」等々に轉じ、八百屋お七を引用しても歌はれるやうになつた。田植歌、草取歌、麥打歌等に歌はれる。シユウシチオドリ十七踊 紀州有田の雨乞踊の一。妾等十七まだ殿ないよ、何につけて

も殿欲しござる。殿を欲しくば清水の、觀音様へ籠らんせ」云々。十七ぶしの一か。『紀州有田民俗誌』

シユウシチブシ十七ぶし 『俚語集』の千葉縣安房郡、山武郡の項に見える。十七は十七歳の女の意。十七が初のみもちで、何か食ひたい食はせたい、奥山の雪か氷か、霜月師走の節か。「十七が小雀を手に持ち、柳の下で芹を摘む、日は暮れる、芹はたまらず、柳は折れてよれかゝる、柳殿許して下さい、お前も主ある花だもの。また、十七八百屋のお七が」云々、「十七と八百屋のお七が」云々の歌もある。七の字の縁でついただけ。

シユウニノタマゴ十二の卵 豊島が十二の卵を生み、卵かへつて摘つて飛ぶといふ事。祝儀歌として廣く歌はれる。琉球にては駕の鳥ぶしの名表はれる。『俚語集』にも散見し、鳥根縣飯石郡の苗取歌、田植歌に、鶏は十二の卵を生みそへ、諸國の寶をかきよせる」。

同書廣島縣の田植歌にも鶏がある。大體おなじ文句。また同書鹿兒島縣熊毛郡に白鷺といふ祝ひ歌には、白鷺がく、濱邊の松の二の枝に、しばかきよせて菓をくんで、十二のひこ

を生みそへ、十二が一度に目を開く、親もろ共に立つ時は。また同じ場合に歌ふ「秋の田」には、鶏が十二羽飛ぶ事がある。↓アイスマツサカ

シユウロクオドリ十六踊 愛知縣北部の盆踊。今年や十六、さゝげの年よ、誰に摘ましよか初なりを初なりを、誰につましましよか初なりを。銀のかんざし落すに拾へ、手から手渡しや名が立つに、名が立つに、手から手渡しや名が立つに。↓ササゲ

シユウロクサシ十六挿し 鳥根縣能登郡の田植歌。十六は十六株の略か。即ち此の歌で十六株の挿苗をする意か。昔、鎌倉さまの御拜の上にとまりし鳥は何鳥か、ヤハレ、早乙女何鳥かヤハレ天下の鳥で恐しい。『俚語集』鎌倉様は神社の名であらう。御拜は向拜である。鳥は何鳥か不明。或は鳥か。シユウロクニチウタ十六日唄 ↓オタケマイリ

云々の、燕と云ふ歌に合す。  
 シニケーシニ 山家 下カシワザキサンガイブ  
 シニケーシニ  
 シニケーシニ十五七ふし 『ひなのひとふし』に見える。十七ふしと同じであらう。十五七がやい、澤をのぼりに笛を吹く、峯の小松がみななびく」といふ文句の如き、今も岩手縣で「十七がやい」て唄ふ。八月邊の唄と同書に記す。十五七は十五歳——十七歳か、十七七かであらう。コは東北人の慣用語。  
 シニケーシニ 修善寺寺頭 靜岡縣修善寺温泉のうた。相原泳芳歌。春はのどけき桂の露間、川のいて湯に氣も浮きうきと、かつぐお神輿人の波、櫻が岡や嵐山、雲か霞か薄くねなるの、色は匂へどちりぬる花と、風がもてくる虎溪橋、ヨイ〜〜〜ヤサ〜。

シニケーシニ 修善寺寺頭 靜岡縣修善寺温泉のうた。吉田絃二郎歌、片屋榮藏曲、花柳三之輔振。「あの山この山、どの山見ても修善寺なつかし、サイノヨ紅椿、サイノヨ〜〜〜エーサイノヨ」。また、「あやめ五月雨、水懸鳥は、誰をよぶやら、今日も鳴く」。  
 シニケーシニ 修善寺寺頭 靜岡縣修善寺温泉のうた。相原泳芳歌。春はのどけき桂の露間、川のいて湯に氣も浮きうきと、かつぐお神輿人の波、櫻が岡や嵐山、雲か霞か薄くねなるの、色は匂へどちりぬる花と、風がもてくる虎溪橋、ヨイ〜〜〜ヤサ〜。

シニケーシニ 修善寺寺頭 靜岡縣修善寺温泉のうた。相原泳芳歌。春はのどけき桂の露間、川のいて湯に氣も浮きうきと、かつぐお神輿人の波、櫻が岡や嵐山、雲か霞か薄くねなるの、色は匂へどちりぬる花と、風がもてくる虎溪橋、ヨイ〜〜〜ヤサ〜。

シニケーシニ 修善寺寺頭 靜岡縣修善寺温泉のうた。相原泳芳歌。春はのどけき桂の露間、川のいて湯に氣も浮きうきと、かつぐお神輿人の波、櫻が岡や嵐山、雲か霞か薄くねなるの、色は匂へどちりぬる花と、風がもてくる虎溪橋、ヨイ〜〜〜ヤサ〜。

シニケーシニ 修善寺寺頭 靜岡縣修善寺温泉のうた。相原泳芳歌。春はのどけき桂の露間、川のいて湯に氣も浮きうきと、かつぐお神輿人の波、櫻が岡や嵐山、雲か霞か薄くねなるの、色は匂へどちりぬる花と、風がもてくる虎溪橋、ヨイ〜〜〜ヤサ〜。

シニケーシニ 修善寺寺頭 靜岡縣修善寺温泉のうた。相原泳芳歌。春はのどけき桂の露間、川のいて湯に氣も浮きうきと、かつぐお神輿人の波、櫻が岡や嵐山、雲か霞か薄くねなるの、色は匂へどちりぬる花と、風がもてくる虎溪橋、ヨイ〜〜〜ヤサ〜。

る、伊豫の今治や二度はやる、ハヤシ、おしさを、つたが屈いたか、屈いたく、買てたいてく、て旨かつたな、げんかいまじにし、まてまとも、帆足揃へてやる時にや、内の女房子も思やせぬ、ヤレそんなもんぢや、ハヤシ。

シヨウウーシヨカ 上州吾妻小唄  
上州吾妻地方の新小唄。ひびくサイレン朝霧はる、アチャネ、若い草葉の靴の音、隠しなつかし、あの人のせてヨ、パスは出てゆく中之條。

シヨウウーシヨカ 上州馬追唄  
雨が降りやこそ松井田泊り、降らぢや越しましよ坂本へ、ハヤシ、ハ一本陣どこだい問屋の前だよ、問屋ぢや貧乏で長持や頼いと。右の本陣は茶屋本陣であらう。また、「主は赤城で、わしや鎌名山、ちよいと備けた子持山」。ハヤシ「嫁さんどこへ行く、お里かい、お重は何だい赤飯かえ」。

シヨウウーシヨカ 群馬無全唄  
歌つた唄。野口雨情歌、中山晋平曲、新民歌として比較的廣く各地に唄はれたもの。赤城山から風が吹き出して、風で蝶々が飛ばされる、サーサ妙義の山ほととぎす、朝の草刈り

目をさせ、ホラ、ギツチヨソ、チヨソ、チヨソ。また、「濡いて洗れる草津の湯さへ、別れ惜しさに霧となる、サーサ山越え谷川越えて、四萬は浮世の外にある」。

シヨウウーシヨカ 上州新小唄 内村俊一歌、町田嘉章曲。「上州秋かせ、あの娘の頬を、吹けばゆれます白萩小萩、赤城妙義はほの、狭霧、光りや碓氷の月となる、ランラン、月となる」。

シヨウウーシヨカ 酒田おぼこ  
山形縣庄内地方のうた。諏訪山歌、松平信博曲。「春の鶴岡、櫻の頃は、おぼこ島田に花吹雪、チヨイトネ、ヨエ、ヨエ、ヨエ、花ふんき、サノエエ」。

シヨウウーシヨカ 庄内おぼこ  
酒田おぼこに同じ。ヤサカタオバコ

シヨウウーシヨカ 山形縣庄内地  
方のおぼこ。諏訪山歌、松平信博曲。「春の鶴岡、櫻の頃は、おぼこ島田に花吹雪、チヨイトネ、ヨエ、ヨエ、ヨエ、花ふんき、サノエエ」。

シヨウウーシヨカ 庄内おぼこ  
酒田おぼこに同じ。ヤサカタオバコ

シヨウウーシヨカ 山形縣庄内地  
方のおぼこ。諏訪山歌、松平信博曲。「春の鶴岡、櫻の頃は、おぼこ島田に花吹雪、チヨイトネ、ヨエ、ヨエ、ヨエ、花ふんき、サノエエ」。

り行く、さてもはかなき浮世かな、南無阿彌陀よ……(中略)五つとかよ、五つ七日は三十五日、三途の阿彌陀が御加護をなされ、廿五の菩薩と来迎なされる、さて有難や南無阿彌陀佛、南無阿彌陀よ。踊の輪の中心に、法師、法師、及び大太鼓を胸に掛けて打つ者が居る。右の數取りを十まで歌ひ、末を申せば未だ程長い、念佛踊はこれ限り」と納める。

シヨウウーシヨカ 京都府相樂郡上  
狛町に八月十四日に踊るもの。鐘太鼓を以て囃す。「法のお庭やア、法のお庭に法の船、導き給へやセイサイサ」。「日本歌謡集成」巻六にも記す。一にカンコ踊と云ふ。いはは、極樂踊、名所踊、殿御踊、汐波踊、日高踊、下草踊、七夕踊、帷子踊、信濃踊等の曲目あり。

シヨウウーシヨカ 岩手縣岩手郡  
の唄「しよがこ」と呼ばる時や、よかに、しよがこ、よめにけて、てこは、てたナ」。

うど崎の松、吹いてのぼせ上げようなだの夜嵐、又も吹いたら思ふ港、おらがとのじようは、かみあがり、最早上るとよみ、や細島」

シヨウウーシヨカ 秋田縣仙北郡淀川村の  
梵天唄、即ち梵天を神社に奉納する時の唄。出發にけ有名な、「めでた、の若松」及び、「今日は吉日、日柄もよいし、何かよるづの吉左右祝ひ」。鳥居に至り、一の鳥居に行列揃へ、社はるかに見て登る、「二の鳥居に拜みをおけて、この社に近くなる、境内にて、「このきざはし唐金造り、金銀金具でしめたやら、社前にて、「この社前に腰打掛けて、恐れながらに下足脱ぐ、奉納の時、「めでためでたと大福儀、このお宮に擔ぎ置く」等

また、しよがこ、と名を呼んでたもれな、わたしや、しよがやの孫娘だなり、ヤエしよがや、エー」。

シヨウウーシヨカ 色の黒いのに白粉つけて、當世はやりの銀鼠。また此の下の句、「おかん見てくれ、つるし柿。右は大阪市」。

シヨウウーシヨカ 飛騨の別天地白川の  
歌。「シヨツシヨどころか、けふこの唄は、人も知らない苦勞する、イカニモシヨツシヨ」。シヨメブシしよめぶし、ハチジヨウシヨメブシ

シヨウウーシヨカ 鹿兒島縣熊毛  
郡の船唄の一つとして記し、島主種子島公外遊歸島の際、主君の召船には四十八艇の船を立て、綾錦の幕を張り、えも云はぬ美觀を呈し、西之表港に入る時、其着埠の間を見計らひて歌ふなり」とあつて、今のうけしが何時もあるぞや、せうじは御免なれ、十二船だま艦に大黒、帆にえびす、中に召したは十二船ぞま、一、隣摩出いては七つばへ、帆影隠すは

シヨウウーシヨカ 秋田縣仙北郡淀川村の  
梵天唄、即ち梵天を神社に奉納する時の唄。出發にけ有名な、「めでた、の若松」及び、「今日は吉日、日柄もよいし、何かよるづの吉左右祝ひ」。鳥居に至り、一の鳥居に行列揃へ、社はるかに見て登る、「二の鳥居に拜みをおけて、この社に近くなる、境内にて、「このきざはし唐金造り、金銀金具でしめたやら、社前にて、「この社前に腰打掛けて、恐れながらに下足脱ぐ、奉納の時、「めでためでたと大福儀、このお宮に擔ぎ置く」等

シヨウウーシヨカ 鹿兒島縣熊毛  
郡の船唄の一つとして記し、島主種子島公外遊歸島の際、主君の召船には四十八艇の船を立て、綾錦の幕を張り、えも云はぬ美觀を呈し、西之表港に入る時、其着埠の間を見計らひて歌ふなり」とあつて、今のうけしが何時もあるぞや、せうじは御免なれ、十二船だま艦に大黒、帆にえびす、中に召したは十二船ぞま、一、隣摩出いては七つばへ、帆影隠すは

シヨウウーシヨカ 秋田縣仙北郡淀川村の  
梵天唄、即ち梵天を神社に奉納する時の唄。出發にけ有名な、「めでた、の若松」及び、「今日は吉日、日柄もよいし、何かよるづの吉左右祝ひ」。鳥居に至り、一の鳥居に行列揃へ、社はるかに見て登る、「二の鳥居に拜みをおけて、この社に近くなる、境内にて、「このきざはし唐金造り、金銀金具でしめたやら、社前にて、「この社前に腰打掛けて、恐れながらに下足脱ぐ、奉納の時、「めでためでたと大福儀、このお宮に擔ぎ置く」等

「ヨシヨシ」に暗示されたのであらう。「シヨウガイ」は恐らく「さうか」であらう。何かめでたい歌を歌ふと、他人が「さうか」と和した。それが初めではあるまいが。薩摩のシヨウガ節(シヨウガブシ)に、しよんが節なら豊屋が元よ、東豊屋がほんの元よ、ア、シヨウガ、嬉しめでたの若松様よ、枝も榮える葉も茂る、ア、シヨウガ。これらは何れも「ア、さうか」と解すべし。「俚語集」所載福岡縣糸島郡の石橋明に、「こちの裏には、めうがとふきと、ハ、めうがとふきと、冥加菜ゆりや富貴繁昌、ヘ、シヨウ、ヘ、シヨウ、ヘ、シヨウガエ。」これも、「さうか、さうかえ」である。シヨウガイは多く祝儀歌に見える。祝儀歌は何かめでたい事を云つて、終りに全くだ、その通りだ、さうか——と云ふのは、その通りにあれかしの願ひを含むわけである。然し各地のシヨウガエが本文の歌のふしそのもので、何か共通點があるか否かは各地の譜を比較しなければならぬ。尤も稀に踊歌にも見える。「俚語集」所載愛知縣西春日井郡にシヨウガイ踊の文句は、「ヒンヤレ、盆が来たとして蓮の葉が賣れる、ヤレわしの

道楽いつ賣れる、シヨウガイ、これに「ヨイソレ」が鳴る、明けりや、お寺さんの鐘が鳴るシヨウガイ」のはやしが附くが、崩れた文句である。シヨウガエ、しよんがえ。熊本縣飽託郡松尾村地方の盆踊歌。祝ひめでたのコレコレ、若松様よ、枝も榮ゆりやコレコレ、葉もしげるシヨウガエ。また、「思て三年コレコレ、通よたが五年ナ、通よた五年のコレコレ、面白さシヨウガエ。」はやしに、「シヨウガヤ島原、追手ぢや〜」。シヨウガブシ、しよんがぶし。薩摩の唄。「三國名勝圖繪」巻八、願桂郡の項に見える。元は古雅であつたが三味線を入れてより俗調となつた。麻浦、川尻浦に専ら行はれるとある。現行の唄に、「しよんが節なら、豊屋が元よ、東豊屋がほんの元よ、ア、シヨウガ」と云ふ豊屋は鹿兒島の市外に當る。現今は祝儀歌で、「嬉しめでたの若松様よ、枝も榮えて葉もしげる、ア、シヨウガ、叶た〜思ふたこと叶た、年中思ふたこと今かた」。シヨウガブシ、しよんがぶし。熊本縣球磨郡久米村、湯前村に行はれる。踊にも田の草

取りにも歌ふ。腰の痛さや敵町の長さ、四月五月の日の長さ。シヨウガウタともいふ。シヨウガブシ、しよんがぶし。「俚語集」の熊本縣玉名郡の項に見える。正月の二日の晩の初夜に、新造つくりてけさおろす」云々の船おろしの極り文句で、終りにシヨウガイといふ。シヨウガブシ、しよんがぶし。青森縣津軽地方では、津軽くどきともいふ。白石町、阿波鳴門など段物を唄ふ。「ア、こゝに哀れな順禮くどき、國は何處よと尋ねて聞けば、阿波の鳴門の徳島町よ、ア、主人忠義の侍なるが、家の寶の刀の詮議、何の不運か無實の難儀」云々。流行の範圍と種類は不明。新潟地方では明治初年ころ、「一つ日和山ひと花咲かせ、二つ俄にちよしろをおろし、三つ港に入船なさる、四つ四つ綱の鎖をおろし、五ついつまでも船とめおいて、七つ鯛染の子供衆よんで、八つやたらに太鼓や三味で、九つ小宿のその賑かさ、十に問屋家は御繁昌で暮らす」と云ふシヨウガブシが唄はれたといふ。なほ現在は石川縣下にもシヨウガブシが唄はれる。「東北の民謡」では、南津縣郡津瀬石

村の上河原(シヨウガラ)に發生した故この名があるが、元は佐渡より庄内に入り庄内ぶしとなつたものが、こゝで轉じたもので、こゝのシヨウガラブシも、最近古形を失つたと云ふ。

シライワブシ、白岩ぶし。ヤアネコモサシラカワウタネブツ、白河歌念佛。福島縣西白河郡の唄。中年以上の婦人が輪を作り、音頭、太鼓、鉦の囀りにつれて踊る。和讃やうの唄。石童丸の例、歸命頂禮石童丸、生れぬ先の御教訓、見もせぬ父にあこがれて、高野の山の麓なる、かむろの宿に隠れなき、玉屋與次兵衛の其宅へ、一夜の宿を無心して、一夜明ければ明日の日は」云々。

見て内の線見れば、策に目鼻をつけたよな。會津討たうか仙臺討とか、こゝが思案の二本松。「一夜泊りのデンデコさんに惚れて、あすは鳥のなき別れ」。シラカワオンド、白河音頭。福島縣白河のうた。白鳥省吾歌、福田蘭童曲。關は白河、關所のおとに、古い木立が若葉する、藤もからんで花が咲く、ハヤシ香葉、ホンニみちのく、ホイ〜ホーイ。また、河は阿武隈、川邊の道を、馬が小馬を連れて踊る、草に桔梗の花も咲く。

シヨウデコイ、しよんてこい。山形縣の東と北の村山郡の歌。東村山の金井村陣場に起るともいふ。しよんてこい、忍んで来いの意といふ。今は酒宴の歌。「大黒がナ、奥のヤレ座敷に晝寝した、コノしよんてこい、晝寝したナ、白きヤレ鼠が金運ぶ、コノしよんてこい。「鮎鱈魚が、裏の小川に晝寝した、釣師来たどこ夢に見た。一鷺は、梅の小枝に晝寝した、釣師来たどこ夢に見た。「東北の民謡」シヨウデコヤ

シラカワオケサ、白川おけさ。飛騨の別天地白川村のおけさ。おけさ見るとて葎の葉で目突いた、おけさ目に毒、よしや仇。また、「葎が枯れたらコリヤ石葎の白根をこまかに刻んで、やえんでおろして、大阪下りのあかがねやかんで、さつさとせんじて、親の代から三代つたひの、五郎八茶碗で二三杯もあがれよ、あがりや腰立つ、身に薬」。シラカワオドリ、白河踊。明治二年に美濃大垣藩の者、奥州に出征し、凱旋の日に藩主が増封されたのを祝ひ、奥州白河の土産と稱する盆踊を踊る。それ以前の川崎踊を凌ぐと云ふ。我慢出せ〜今に夜が明ける、明けりや御寺の鐘が鳴る、ヨイヤセイ。「白川女郎

シラカワワジマ、白川わじま。飛騨の別天地白川で行はれる。二より、わじまの、おさよ、ヤアアイナ、目こそすがなれナ、衣裳が良エ、めでた〜の若松様よ、枝が榮えて、葉が茂る。宴席で踊る。正木隆次郎氏云ふ、白川わじまは、慶屋ぶしと歌詞は違ふが、同じものである。ヤムギヤブシ、ワジマシラサキ、白鷺。「俚語集」の新潟縣佐渡郡

シライシジマボンオドリ、白石島盆踊。岡山縣小田郡神島外村に屬し、瀬戸内海に浮ぶ白石島の盆踊は、舊盆の十三日から、三十日の八朔踊につき、雨乞ひにも行ふ。歌詞は昔の兵庫くどきで、輪をどりであるが、老人組若衆組、娘組が、それ〜持物と委と手振を變へて、同一音頭に合せて同時に踊り、また突壁に踊の手ぶりを一變するのが特色である。

御寺の鐘が鳴る、ヨイヤセイ。「白川女郎

シラサキ、白鷺。「俚語集」の新潟縣佐渡郡

の苗取歌に、白鷺の舞はしやる時は、あの早稲も良い、早稲も良い、あの中稲も稲も晩稲も穂にさがる、晩稲も穂にさがる。同じく岩船郡の田植歌に、白鷺の舞ひもむ時は早稲かりや、中稲にまさる晩かりや、白鷺の舞ひ舞ふ年は早稲が良い、中稲にまさる晩もよい。右の舞ひもむは舞ひ舞ひで、キリを採むやうに飛ぶ形を云ふらしい。『俚語集拾遺』の折木の盆踊歌に、白鷺や、舟のへさきに菓をかけて、波にゆられて、しやんと立つ。また同書の三重縣の手毬唄に、白鷺はくく小首かたげて二の足踏んで、やつれ姿の水鏡水鏡く。白鷺は田植の傘や祭の蓋の飾物にされる。

シラサギ一白鷺 遠州大念佛の子供を甲ふ歌(ヤエシシウダイネブツ)。『俚語集』山形縣飽海郡の盆の獅子踊の歌に、白鷺は我子思へば立替わる、水を濁さず立てや白鷺く。シラサギオドリ一白鷺 飛騨の神代踊の曲目の一つ。白背笠の破れるも惜しや、忍ばれづまの笠ぢやもの、これから見れば近江が見える、笠買てたまれ近江笠、近江の笠は冠りよて着よて、緒が長て着よごさる、せぬじ

よね雨や、ヤレ花がちる、いざよひこやれこの庭を。ヤジンダイオドリ

野口雨情歌、中山晋平曲、藤蔭静枝振。ハリーヤアアアアアアア、中の川口蒸汽の乗場、いくどながめて待つたやら、アリアリヤ待つたやら、サイく。また同じ人のタコ音頭がある。白根タコ揚げ、男の意気か、空へ届いて風が立つ。

シラサギ一白鷺 有名な文句。娘かあいや白鷺で身持、聞けば男は旅の人。白鷺はおはぐろをつけぬ、おはぐろは土地に依り嫁となつてもつけ、年頃になつてもつける。こゝは後者、處女の意味。或は、可愛さうだよ白鷺で身持。下の句同じ。

シラサギ一白鷺 房州七浦區の白間津區の五年目の大祭(昭和六年がそれ)の六月十四日より三日間、戸主夫婦以外の全區の男女が参加する大規模のもの。ササラ踊、御寺踊、白間津をどり(こぶし踊)。御參宮踊(マギ踊、金太夫踊)。六角踊。コツキリ踊。牛若踊。綾歌始め等の踊が行はれる。白間津踊の歌は、ヤア安房國の白間津に千かる稲が三本あ

る、三本の稲を刈りほせば、千町ばかりに刈られます、ヤアそのや稲を米にして、三本で米が千石六斗、さても見事の世の中や、ヤアそのや米を酒にして、いぬの隅にかめ七つ、七つのかめを見てやれば、酒の泉がわきいづる、そのや酒呑む人は老も若きも残りなく、命長かれ末葉昌く。『民俗學』第四卷第五號に同じ。

シラサギ一白鷺 文句の尻を取つて更に附加へる事。多人數の労働歌の場合の如き、交互に歌ふに便利である。次は大分縣國東半島の白すり歌の一節、うまりや山國、育ちは中津、命すて場が博多町。山國川沿岸の村に生れて、中津の町で育つた青年が、博多の遊廓で青春を享樂する意味。これの尻取りで、博多町をば廣いと仰る、帯の幅ほど無い町を、帯にや短し帯にや長し、お伊勢編笠の緒に長かる。右は、伊勢参りの編笠の意味であらう。お伊勢編笠をこきやけて冠りや少しお顔が見とごさる、見ても見飽かぬ鏡と親は、わけて見たいは忍び妻。かくて次へ次へと續く。

シラサギ一白鷺 苗代唄の略稱。

シロガネコロバシ一白銀ころばし 白銀ころしとも。青森縣の東海岸白銀地方の唄。南部音頭ともいふ。山せ吹くのに、なぜ船来ない荷物ないのか、船止めか。松の根元に胡桃を植えて、待つ身も来る身も同じこと。長いのもある。沖から風くる、早だもかへせや、親方喜ぶ、チヨイ空だら天井見れ、あまげに屋ない、風けに雲ない、馬鹿げに丁度ない、チヨイ、此の編あげなきや親方も困る、若イ衆も困る、なんでもふばつて、やてけるチヨイ。

シロチヨウオンド一太郎長音頭 靜岡縣清水港のうた。野口雨情歌、藤井清水曲。意氣にや勝てよも情けにや勝てぬ、清水次郎長は男の男、云ふた言葉に二言ない、ハヤシ、咲けや咲け咲け花橋は、清水次郎長が男を磨く、名さへ床しい花ぢやもの。歌ごとに、それんちがふハヤシ言葉になる。シワタブネしわくふね 香川縣仲多度郡十瀬村の歌。しわく船か上君待つは、梶をソレ押へて名乗りあふ、つやに、ちややに、ちやうろりく、チャンくく、アアララ。『俚語集』多度津船か

シロカーシシク

上君待つは……。凡て同じ。シアマツコウタ一新天津小唄 千葉縣天津町のうた。野口雨情歌、町田嘉章曲。雨が降ります、天津の磯に、さうぢやない、降すが厭で、降るは私の泣く涙、アイサ、ヨイサ、ソリヤ、ソコドンく。また、霧が立ちます、清澄山に、さうぢやない、日和の知らせ、天津大漁で、なご續き。

シンカワコウタ一新川小唄 東京市日本橋區新川花街の新小唄。北原白秋歌、町田嘉章曲。『新川新唄』酒さへよけりや、よけりやサ、いつも酒づけ、こちや祭り、ハヤシ一の橋、二の橋、三の橋、靈岸橋ならサヨサ、寄の汐。又、筈早敷、ほら来た樽が、樽がサ、ころげく、て逢ひにきた。

シンキブシ一辛氣ふし 對馬の唄。しんきしんきと山道ゆけば、笠に木の葉がふりかゝる(ちりかゝるとも)。『豊の那祖師』あらたの神よ、一夜こもれば妻となる。常に終りに、バインノサヨといふ。『全長崎縣歌謡集』シンキョクサカタオンド一新曲酒田音頭 山形縣酒田のうた。廣瀬充歌、堀内敏三曲。ア一酒田よいとこ、その名もゆかし、サツサノ

セ、港したふて、汽船も煙を離かせよ。また、(冴えて耳引く船方節にや、しばし最上の、川の早瀬の瀬も淀む)。シンキョクレイガンジマ一新曲靈岸島 東京市同所花街の新小唄。北原白秋歌、町田嘉章曲。『永代の月の出汐の、身は浮葉鳥、寄は燈のぬれいろや、飛んでうつもの橋がまへ、桁が高うはないかない、えよそれほのりと影がくる、ホホヤレ新川、新堀、茅場町、こちや麗の靈岸島ぢやえ。

シンク一甚句 また甚九。諸國に何々甚句といふものがあるが、甚句といふ言葉は別に一定の約束は持つてゐないらしい。『小唄傳説集』に、昔、越後の國石地の浦の甚九といふ男が、大阪に出て成金となり、遊女を根引きして世を驚かしたが、四十だくと今朝まで思ふた、三十九ぢやもの、ソレ花ぢやもの、と歌へば、かの遊女、甚九甚九は、越後の甚九、越後甚九はソレ世界の花ぢや」と和し、こゝに越後甚九が生れ、やがて各地に甚句が出来たといふ説を排し、甚句は土地の句、地ン句であるといふ。なほ考ふべし。

の意味。清元の子守にもあり、現に此の名も  
行はれる。

シンタプシ 甚句ぶし 岐阜縣加茂郡田原村  
の盆踊歌。「高い山から谷底見れば、瓜やお茄  
子の花ざかり、ツケ「胡瓜ちや／＼赤いもな  
田原の種胡瓜、青いもな殿さにもんでかまし  
よ。「娘したがる親させたがる、婿子や殿子  
の巾着を、ツケ「娘の好きなは何ぢやいな、金  
持男に絹の糸」。

シンタロウ 甚九郎 佐賀縣西松浦郡大塚區  
夏祭の歌。「細名山を下る時、豆腐の角に蹴つ  
まづき、こんにやく小骨が喉に立つ、杵で搦つ  
ても搦れはせぬ、向う通るねえさんに、薬はな  
いかと問ふたらば、薬は段々ございます、海  
鼠の白玉に章魚の骨、山に立ちたる蛤と、海  
に立ちたる松耳と、夏ふる雪に寒なすび、氷  
の黒焼火に、つけて見なんせ、よく直  
る」。

シンコクブシ しんこくぶし 新穀の文字正  
しきかも知れず。岩手縣の唄。しんこくぶ  
のおかの神、何を捧げた、黄金の餅を捧げた  
餅のけたはかされた、餅のけたはつきれども  
古家の米はつきまい」。

シンジウタ オンド 新宿音頭 東京市新宿の  
新小唄。鶯亭金升歌、杵屋勝助曲。長唄風の  
もの。歌詞省略。別にビクター、コロムビア  
でも、それ／＼新宿音頭を出した。前者は、  
「名さへ新宿日の出の町よヨイトセ、延びる  
東京の音頭取る、ヨイシヨ／＼ナ、延びる東  
京の音頭取る、ホンニソヂヤナイカ、ヨイシ  
ヨ／＼ナ。後者は、「馬でシヤンコ／＼甲州  
街道、ヨイ／＼ヤサノセ、今ぢやハイヤで風  
を切る、夜も日も人の波、新宿ヨイ／＼人の  
波、今ぢやハイヤで風を切る」。

シンジウタ コウタ 新宿小唄 東京市新宿の  
新小唄。鶯亭金升歌。杵屋勝助曲。「東京新宿  
車の港、ヨイサコラサ、船ぢや見られぬ人の  
波、人の波、夜はネ、夜は綺麗な光りの都、  
ヨイ／＼金座銀座もなんのその、ヨイサコラ  
サ、ヨイ／＼」。

シンジョウウイウイウイウイ 新庄祝歌 山形縣新  
庄地方の祝儀歌。「福は内、鬼は外へとはやし  
豆、豆でこそ、豆でつぐなり又年一つ、豆で  
つぐなり又年一つ」此家に、恵比壽大黒舞ひ  
込んで、振れや振れ、ふれやふれふる黄金に  
米を、ふれやふれふる黄金に米を」。上下を着

て三方を持った者一人出て舞ふ。三下りの三  
味線が入る。「東北の民謡」

シンジョウウイウイウイウイ 新庄小唄 同じく新庄の  
うた。須藤康吉歌、佐久間清曲。「ハハ新庄田  
どころ黄金の垂穂よ、出来たお米で餅をつく  
餅は名物くら餅よ」。

シンジョウウイウイウイウイ 新庄音頭 同じく新庄町に  
唄はれる。新庄の萬場町の遊説に通ふ唄。ま  
た騒ぎ唄。猿羽根山越え、船形越えて、キタ  
サイ、来たぞえ／＼、萬場町に、「あの山高  
くて、新庄が見えぬ、キタサイ、新庄こひし  
や、山にくや」。「新庄習ひか、揚屋の(又は間  
味屋の)作法か、キタサイ、いつも仕切りが  
前勘定」間味屋(又は間宮)は遊廓の某家の屋  
號。二上り物。

シンジョウウイウイウイウイ 新庄盆踊 「東北民謡  
集」に、「山形縣には輪をなして踊る盆踊、極  
めて少し、その新庄附近に行はるゝは、簡單  
なる芝居がかりにて、大衆向きのものにあ  
らず」として「涙みかはす、さゝの機織もかほ  
ばせと、さとりおとめは顔に、色ほもみ  
ちば／＼の、知るも知らぬもなりやすい、日  
につく人のなれをめる、思はぬ袖の振合せ、

越後新潟は色港、八百八福のその中に、やご  
け／＼のなじみの女郎さ、ねんまり地蔵へは  
だして参る、これも他生の縁の端」。この他二  
つ。その一つは新内の赤坂並木を一寸探つた  
ものをのせてゐる。新庄の盆踊は同縣の鶴岡  
に習ひ、年々町内で新作して観演した舞臺藝  
術式のものである。

シンシロブシ 新城ぶし 愛知縣新城町の唄。  
「こゝは名所の櫻が淵よ、水に模様の花が咲  
く」。「淵れしやんすな、浮かれて浮いて、こ  
こは千尋の標淵」。

シンスルガブシ 新設河ぶし 靜岡縣のうた。  
北原白秋歌、町田嘉章曲、花柳徳太郎振。「駿  
河よい國ヨリヤサ、茶の香が匂ふてサ、ソリヤ  
サ、沖は大漁の、いつも大漁のナ、蟹ぶね、  
かつを船、ヨイヤサ、ア、ヨイヤサ」。

シンダイオドリ 神代踊 飛騨の一の宮たる  
水無神社(大野郡宮村)九月廿五日の祭に氏子  
の青年百人近く、一文字笠に紋付羽織着流し  
白扇を持って輪を作り踊る。別に女装四人上臈  
と云ひ加はる。輪の中に警固役居て曲目を指  
定する。天戸開、綾踊、池田踊、白菅踊、ひげ踊、  
よれ／＼踊(各その項を見よ)の曲目あり、綾

踊は綾を、他は白扇を持ち右に廻り、ひげ踊  
は持物なく左に廻る。此の時に歌ふ「向ひ七  
夕おいとしやないか、川を隔てゝ戀をめす」  
は「巷語集」の土佐踊にも見える。↓トリゲ  
ウチ

シンダイオバコ 神代おばこ ↓アキタオバ  
コ  
シンダイコ 錢太鼓 ↓ゼニダイコ  
シンタカオカコウタ 新高岡小唄 富山縣高  
岡市のうた。「祭り青葉に名も載る、夢の錦の  
七つ山車、遺る繁葉の華なれば、曳くや綾織  
る繪巻物、アツチャヨイネ繪巻物」。

シンチウタ 新地唄 シンチブシに同じ。  
シンチブシ 新地ぶし 熊本唄。歌詞は大  
雑節と同一(↓オザヤブシ)故、同じものか。  
「お菊は鈍な奴だ、いばどんに惚れて、アラヨ  
ナ、だ、いば子もある妻もある、オドンガエ  
キテミヤ、ネコマデシユスビレ」。「新地土手  
から、おざやを見れば、アラヨナ、おざや  
名所に水がない、ドーシテ新地ニヤ、キタロ  
レロン、ナンギノツラサニ、キタロレロン」。

「俚語集」宮崎縣西臼杵郡の項に新地ぶしとし  
て、「今年始めて御新地に出たら、ハラヨ、

ぶりのなひ道や、まだ知らぬ」とある。此の  
文句、熊本にもあり。「全長崎縣歌謡集」には  
「新地土手から、御座屋を見れば、アラヨ、  
なぐれお春やんが湯荷ふ」、また「金尾羅敷か  
ら小野島見れば、アラヨ、なぐれお春が湯  
荷ふ」。常に終りに、「来たたらば寄んない、道ば  
ちぢやつけん、だごして待つとる」と云ふ。

なぐれは、長崎地方では失敗する放浪するの  
意、新地ぶしは數百年前に、有明海を築く時  
若い男女が白鉢巻に赤袴で石や土を運んだ時  
の唄で、土工のお春が現れると其の美貌で男  
達の能率が非常に上つたが、埋立が完成する  
と其の姿は町から失せたと云ふ。又新地ぶし  
は長崎灣の埋立に始まるとも、大村の臺場が  
築かれた時に始まるとも云ふと、右の歌謡集  
に記してある。

シンチムラサヤブシ 新地村座や節 熊本  
唄。今年始めて御新地に來たりや、アラヨナ  
、がたの荷負ひみちや未だ知らぬ、ドツチ  
モヒユトリヨシニヨハイルナ」。

シンバイオドリ 神代踊 「攝陽群談」に記す。  
有馬郡安食莊島島村の若一王子社、七月十六  
日夜に少年が笹の枝に幣をつけて、鐘太鼓に



合せて踊るといふ。  
 シンハチノヘコウター新八戸小唄 青森縣八戸市のうた。東奥日報懸賞。演まゆみ歌、大村能章曲、西川喜美詞振。「秋は三島の川から澄んで、三社祭りの太鼓が響きや、濱の娘が濱の娘が出て踊る」。

年を許かにせず」として、新保廣大寺がお市がチヤンコなめた、なめたその口で御経よむ歌さく／＼とゆすぶり起し、とのさ砂地の芋でなし」がある。最近新潟局より放送の新保廣大寺ぶしには、新保廣大寺がめぐりこいてまけた、袈裟も衣も質におく、「新保廣大寺がねぎくて死んだ、見れば泣かれます、ねぎばたけ」その他がある。埼玉縣の萬作踊では、新保廣大寺と云ふ茶番狂言をするが、廣大寺の和尚が市といふ女に迷つて寺を開く滑稽である。市は能狂言の門前のいちやだが、とにかくこんな事が越後に在つたのは事實らしい。然るにコダイジ、コダイジブシ、シンポコダイジブシは段々と變化し、乃至は他の物と合體して諸國に行はれた。「俳諧集」二巻に種々の例がある。京都府中郡のコダイジは、歌毎に初めにコダイジと云ふ。コダイジは芋の子の育ち、すゝき延びゆく葉は開く、元はせんよの子を持ちて、末に小だまの露うけて。一種の祝儀歌らし。新潟中魚沼の高大寺として「前の棧の木に孔雀の鳥が、いつの間にかやら葉をかけ鳴いて、何と鳴る立寄り聞けば、こゝの娘をくれたるならば、水に字を書き石に花

咲かし、ヤ一雁木柱に胸貫はせう、他に一首。そして、「百年以前の流行なるよし、伊勢音頭と同じく歌に和して舞踏するなり、貴賤の別なく酒盛の席に用ゐらるゝなり」と註がある。鳥根の大原郡の盆踊にコダイズ踊がある。始めに必ず「コダイズが」と云ふ、「廣大寺の和尚が」の意味らしい。「こだいずが山に寺立て、人も參らず戸もあかず」、「こだいずが青竹踊りやる、與一乗せるとて籠組みやる」。與一はおいかも知れぬ。廣島縣雙三郡のコダイズは、「神樂の際、若い者の歌ふもの」として、「しんぼこだいじ、山に寺立てて、誰が參ろにや山寺に」その他がある。隠岐のドツサリぶしには、「お客望みならやりだいて見ましよ當世はやりのこだいじを」がある。相應に運ばれた歌の一つである。ヤコダイジ

シンポコダイジしんぼこだいじ 大正九年版の『新潟縣南魚沼郡誌』に、廣大寺ぶしに就き記して、廣大寺は中魚沼郡に在り、唄は此寺に因みて始まりしものなりといふ、そのとある。ヤコダイジ

シンボチ新設意 佛門に入り始めた人を云ふが、多くの神事の舞に青年の別して若い者が軍配を持ち、一々の踊の口上を云ふ役。關西方面に多い。

シンミンヨウ新設意 大正十二年暮に野口雨情、中山晋平の須坂小唄(ヤサカコウター)が出てから新民謡、民謡詩人の語が出た。こ

これは一般の詩に對して民謡體の詩、民謡情調の詩で、多分に郷土的色彩を持つものを指す。

ヤコダイジ

ス

最近に民謡を持たぬ町、古い民謡に倦きた町では振つて詩人と作曲家を招いて新民謡を作つて、その何割かは蓄音機のレコードに吹込まれて遠くの町にも知られるやうになつた。その結果、名勝を知られ、温泉のある事を知られ、名産のある事を知られたといふ例もある。その詩人としては、前期に野口雨情、後期に西條八十が、作曲家としては中山晋平、藤井清水、町田嘉章が多作した。固より多くの詩人作曲家は一つや二つの作品は作つてゐる。世間の景氣が衰へてきてからは、この需要も激減し、レコード會社の方で作つて各地へ供給するといふ現象が最近である。新民謡に就いては既に毀譽半ばしてゐる。然し最近には別として、元來が需要あつた爲め供給があつたので、作品に出来不出来のある以上、中には悪評を蒙つたものも生ずるわけである。本書に收めた作者、作曲家の姓名の明らかなるは凡て新民謡に屬する。その功罪は能く時が解決するものであらう。

スカガワコウター須賀川小唄 福島縣須賀川町のうた。小野賢一郎歌、大塚義秋曲。「玉のきざはし雲井にかほる、須賀川ヨイヨイヨイ花の在所は牡丹園、ヨイ／＼牡丹園」。

スコオドリ須古踊 長崎縣の踊。六十八人が行列を仕立て、踊場に集込み、先づ十人の棒使ひ、木刀使ひが入亂れて斬合ひ、次に須古踊の本文に入り、シンブチが出て竹に五色の紙片を結んだのを振つて口上を述べると笛太鼓、張太鼓、鉦の囀りになり、菅笠を冠つた二十人の踊子が、歌に合せて、扇を取つて踊る。「雲も静かに風をさまりて、民民なれば君も又、よはに榮えて豊かなり、末よしや末よし、末よしや末よし」。「松の枝には雄鶴の、育ちを見れば動きなく、思へば叶ふ末ぞ久しき」。行列の時は鳥毛槍を投げて受取る事もある。「青年」に依る。「全長崎縣歌謡集」に東彼杵郡福重村の踊として、文明年間大村純伊が有馬勢と戦つて勝ち、彼杵の舊領を復した時、浪人の法養なる者これを祝し謡を作り舞を舞つて城に入り、純伊喜んで自ら月の輪を冠つて舞ふたのが須古踊の始めであり、その後江戸時代は領内の慶事と領主参観の時に演じ、今に現存するとして、めでたき御代の始めかな、めでたき御代の始めかな、千代に八千代ませ國重りて御代久しかれ、久しかれ、

御代久しかり、久しかり、めでたき御代の始めなる、千代に八千代まで國重りて、仰がれやるぞめでたかり、仰がれやるぞめでたかりの如き唄三章、その間は笛でつなぎ、終りに早踊として、月は東の山端を急ぐ、月は東の山端を急ぐ、なびけや谷の姫小松、なびけや谷の姫小松、東窓より月うちあけて、東窓より月うちあけて、ふたりの枕敷しや、ふたりの枕敷しや」とある。他に記す、須古踊は壽古踊で、瀬川村の壽古郷に起ると。一に殿様踊といふ。壽古時代は藩主の命に依り隨時執行、今は一定の日に行はず。

スモウターズ一踊 ● また須古踊、壽古踊。長崎縣北松浦郡田平村下龜部落に、雨乞、願成就、落成式の祝ひ等に、一戸より父子二人づつ出て踊るもの。菅笠を冠り扇を持つて踊り道躰子で道をゆき、イリハで踊場に入り、踊の合間に合の笛を吹き、出ハは踊り終り出る時、サガリハは最後の退場に吹く。歌は七百、初め、めでたき御代の始めかな、千代八千代に國重なりて、御代久しかれ久しかれ。また「月は山端に隈もなや、待つ君はさて来もせいで、夜は早や明けそよ、ほのく」と、「松

の梢はしげくと、秋はまされど蟬の聲々」。右は『全長崎縣歌謡集』に見える。雑誌『青年』記載のものは此の部落らしい。これには始め十人くらゐの棒使ひ(杖使とも)が棒と木刀で切合ひ、次にシンブチの口上あつてスコ踊になり、人員凡て六十八人を要すとある。また、同縣西彼郡藤重の壽古踊は、月の輪を載く殿様一人、鍋冠りの笠の役、家來六人が笛太鼓と歌に合せ、太平と殿の凱旋を祝して踊る。また、北松浦郡生月村の盆踊を須古踊とも云ひ、豊年豊漁を祝ふと云ふ。花笠に扇の姿の中踊六人、大名三人、鐵砲持三人、槍振六人、旗振四人、杖使ひ四人、笠冠り十数人その他が、神社佛閣家を歴訪して踊る事がある。歌詞の一、君ヶ代のく、久しかるべし神注連のかねてぞ生ひし住吉の松。但し此の唄は同郡の六調子にも唄ふ。『全長崎縣歌謡集』では、前記の生月の須古踊を六調子とも記してゐる。

スモウターズ一踊 ● 須坂小唄 信州須坂町、山丸工場の唄。野口雨情歌、中山晋平曲、廣間靜枝振。「山の上からチョイト出たお月、誰を待つのか待たれるか、ヤ、カッターカタノタ、ソリヤ

カッターカタノタ」。『誰も待たない、待たれもしない、可愛いお前に逢ひたさに』云々。此の唄は大正十二年に作られ、いはゆる新長崎の最初のものとも云ふべき記念の作になつてゐる。

スモウターズ一踊 ● 鈴木主水 最も普遍的な盆踊のタドキ。江戸の新宿の華女白糸になじんだ鈴木主水の妻おやすが、男装して登壇して白糸に縁切を乞ひ、やがて自害して果てる物語。「花のお江戸のそのかたはらに、さても珍し心中ばなし、ところ四谷の新宿町の、紺の暖簾に桔梗の紋よ、音に聞えし橋本屋とて、あまた女郎衆のあるそのなかに、お職女郎の白糸こそは、年は十九で當世育ち、我もく」と名ざしてあがる、わけて御客をどなたと聞けば、春は花さく青山邊の、鈴木主水といふ侍は、女房持にて子供が二人、二人子供のあるそのなかに、今日も明日も女郎買ばかり、見るに見かねて女房のおやす」と。人口に膾炙した文句である。

は雀ぶりてあらう。雀踊は編笠を冠り竹に雀の模様の着物を着た奴さんの姿で、江戸初期の歌舞伎では大に踊つた。俗に「雀百まで踊忘れぬ」といふ。未詳。

スモウターズ一踊 ● 徳島縣阿波郡の正月の物もらひの中、裸で唄ふもの。すつたら坊がくる時は、世の中ようて世がようてお家が繁昌、村繁昌、頭にかけてる注連繩は一五三かい、五五三かい、いとさん、ぼんさん、ほうそ、はしかど、お軽いなく。『龍圖』

スモウターズ一踊 ● ヌトサボンウタ スミダオンド一隅田音頭 東京市向島花街のうた。久保田金徳歌、并屋佐吉曲。「筑波おろしに春吹く風は、隅田川原に花さそふ、春がきたとて経讀む鳥が、木毎々々の枝うつり、オーサ枝移り」。

スモウターズ一踊 ● 炭焼奉納踊 縣州池田炭の原産地、大阪府豊能郡止呂美村の人々は、京都の愛宕神社を火の神として毎年八月愛宕山上で炭焼奉納踊を行ふ。昨年よりお通夜大祭の夜に行ふ。「どなたもサンヨ、揃たかサンヨ、揃たらサンヨ、歌ひまじしサンヨ

ヤイラめでたや、な、炭焼踊のひとくさり祝ふてめでたう納めませう、ヤットセ、ドウシタヤイ。これより出世音頭と稱して、關取千兩職の例の江戸長崎のサワリを歌ふ。

スモウターズ一踊 ● 住吉踊 大阪市の住吉神社の御田植神事より始まり、神佛混淆の唄は神宮寺から踊が出て、天下泰平五穀成就を祈る。舞に幕のついた菅笠、着付、手甲、脚絆共に白く、墨の腰衣、素足わらぢ、口に覆ひをかけた者五人。一人は長柄の大傘を左に持つて立ち、右に刺竹を持つ。傘は鏡幕をめぐらし上に御幣を立て、四人は團扇を持ち傘を廻つて踊り、心の字を象ると云ふ。之は現在の形式で、明治初年中絶、大正十年に復興のもの。

スモウターズ一踊 ● 住吉様のイヤホイ、あら面白や神をどり、天長く地久しく、天下泰平五穀成就民榮え、治まる御代のためしとて、かねてぞ植ゑし住吉の岸の姫松めてたさよ、一の本社は底筒男命さま、二のお宮様は中筒男命さま、三のお宮は表筒男命さま、四のお宮は、これがいはゆる神功皇后さま、之を合して住吉四社明神と唱へ奉る、これ黄金の天の江ちほつおこんごおせんどく、四社のお前の

神かぐら、いつも變らぬ鈴の音、ヤレ住吉様の岸の姫松めてたさよ、「エ、エ、住の江の神の心を守るなら、家内安全商賣繁昌、家の内御祈禱、チリリヤタラリ、鶴の橋、どんどん川や流の橋、そうかれ橋や、かくの鳥居や玉出の岸や、岸の姫松めてたさよ」。一説に、住吉踊は御田植神事後、京都の村々を巡つて勸進したと云ふ。これ今日東京にも残る所以であらう。その姿も變遷があつた。『龍圖』に、住吉踊を致す者は願人坊主なり、年中色色に變るなり、左に記す、一住吉踊三月初日より六月迄日まで、一施餓鬼七月初日より同日まで、一鶴の足一夏の間、一壱垢離寒三十日の間、一淡島、一庚申、一鐘の緒、一籠佛、以上時なし。

スモウターズ一踊 ● 長崎縣南高來の唄。「めでたい、此の屋の館は、金と銀とのつぎ柱、とまは小判の重ね葺き、内にはひりて奥の殿を見てやれば、あいの建物金陣子、鶴が拜すりや鶴が舞ふ、鶴が拜すりや鶴が舞ひ七福神の御見物、末は鶴龜五葉の松」。スモウターズ一踊 ● 佐賀縣西松浦郡の歌。「二月初半旗が立つ、三月三日ひな立つ、四

月八日に甘茶のなかに羅迦が立つ、五月五日に轍立つ、六月祇園に山が立つ、七月七日は七夕様に笹が立つ、八月九月は秋風吹いてはこり立つ、十月出雲に神が立つ、十一月に天皇節で國旗立つ、十二月二十九日のその晩に借鏡取りが庭に立つ、その人目がけて腹が立つ、あけて元日には門松がねい。【俚語集】十一月三日は明治天皇の天長節だから、この歌は明治年間の物であらう。或は十一月だけ明治年間に改めた物であらう。角力歌とは或は祭禮に角力とる眞似をしつゝ、歌ふ歌でもあらうか。

スモトブシ一洲本ぶし ↓アワジスモトブシ スモトリジシク角力取甚句 熊本の唄。角力がやつてきた、どこ宿とるけね、宿は砂磔屋か谷川旅館。「藤州城の水俣町はね、袋みかんに薄原なし、やがて名の出る櫻野茶園」。【鳥根民謡】に、美濃郡吉田村の相撲取甚句として、「揃ふたや揃ひました、隔子が揃た、さんまよく揃ふた、稲の出穂よりさんまよく揃ふた」。スモトリブシ一角力取ぶし 鹿兒島縣に行はれる。急調の三味線が入る。角力にやほた負

け、女にや振られどこて男が立つものか。スリウスウター指白歌 白指歌と同じ。↓ウススリウター スリウター指白歌 指白は打込と同義らし。埼玉縣では、獅子舞の行列が、舞ふ場所に練込んでゆく、その道行の笛を指白笛といふ。道行笛と云ふに同じ。スルガオドリ一駿河唄 伊豆新島の盆踊の一つ。「ハンヤいざ踊る、ひと踊、ヒンヤ駿河踊や踊るよ、ハンヤころべころりとよ、ころべ尺八ござの前」云々。【民俗藝術】第二巻第七號に歌詞を記す。

スルガオドリ一駿河ぶし 駿河の茶つみ唄。固い約束、茶の木の陰で、茶の木や枯れても、まだ添はぬ。「お茶師さんにも女房があるか女房どころか、子まである」。スルスウター指白歌 ↓スリウスウター スワウウター一諏訪小唄 信州諏訪町の唄。伊藤松雄歌、中山晋平曲、花柳壽輔振。戀のひとすぢ氷のみちも、ヨイサカ、サツチヨコ、サイ〜、なんの辛から、おみ渡り、チヨコサイ。別に西條八十歌、町田嘉章曲の諏訪小唄もある。「ハハ絲を取る子の歌から明け

て、オヤ合點か、富士をうつした、小坂花岡諏訪のうみ、ヨイ〜トナ、アラヨイイトナ」。スワブシ一諏訪ぶし 信州諏訪町の盆踊唄。こゝは廿六字の文句で輪をどり。扇、四竹も持ち、手ぶらでも踊る。木曾で御歌、甲州で御歌、諏訪で立科、八ヶ岳。「木曾でござんす、甲州でござんす、諏訪の習ひでござんす」。娘忘れたか松の木の下で、くれたかござし、なぜさぬ。「旅と傳説」昭和九年七月號にくはしい。

スワラバネツ一須原ばねそ 信州木曾の須原の唄。ハネツの一種。「須原ばねそはお十六ばねそ、足で九つ手で七つ」。これは踊の動作をいふらし。「須原ばねそを習ひたかござれ、金の四五兩も持てござれ」。↓アシデココノツズンチキチン〜づんちきちん ↓アアンジウオドリ セイオウボノウター一西王母の歌 三重縣阿山

郡柄田村の柄田神社、舊四月一日の祭に、シヤグマを冠り小轡を負ひ、胸に太鼓を附けた大太鼓踊子二人、小踊子六人、次の歌に合せて馬場を三周する。西王母の古へは、滋賀の浦の明神で、げにもさや〜、高砂の松なれや、名木と覺えた、げにもさや〜、祝ひ久しき松なれや、サンヨレイ〜。西王母の古へは、滋賀の浦の明神で、げにもさや〜源氏平氏の時代には、千重の菊を供へた、ゲニモサヤ〜、祝ひ久しき菊なれば、サンヨレイ〜。

セイシコウウシノウター一製絲工女の唄 【俚語集】に、山梨縣東山梨郡の例を記す。心甲州で身は長野縣、落つる涙は釜の中。「甲州出る時や涙で出たが、今ちや甲州の風も嫌」。この歌は甲州の者が信州で働く時のものであらう。セイシコウウカワサキブシ一勢州川崎ぶし 文政五年版の『浮かれ草』に、「大坂離れて、早や玉造、笠を買ふなら深江が名所、ヤアトコセ、ヨイヤナ、アリヤ、コノ、なんでもせ」。伊勢音頭であらう。セイシコウウロブシ一清十郎ぶし 三重縣北牟

婁郡赤羽村の盆踊の一つ。向ひ通るは清十郎ぢやないか、笠がよく似た者の笠、笠が似たとて清十郎であれば、お伊勢参りはみな清十郎。「清十郎殺さば、お夏も共に、同じ刀でもろとも、清十郎ほどなる衣裳持ちやないが、浴衣一つで死出の旅」。セキオンド一關音頭 岐阜縣關町のうた。野口雨情歌、藤井清水曲、島田麗振。關の孫六三本杉は、ハンドトシヨ、水もしたるアリヤ玉も散る、志波の三郎も關の鍛冶、ソコズン、ソコズン、ズイラホノサツサ。

セイシコウウター一關小唄 凡て關音頭に同じ。美濃の關町たとへて見れば、夏の野に咲く、ナシヨ〜マタエ、アリヤ百合の花、關は年毎花がます、ナンシヨ〜マタエ。「關は千軒、鍛冶屋の名所、わざを傳ふる九百年、意氣で打出す鑪の音」。セキゾロノウター一節季候の歌 【守貞漫稿】に記す。昔は三郡共有之由、今世は大坂に無之江戸には有之て毎歲臘月中旬頃より非人乞食等二三人、各紙の頭巾を冠り白紙の前垂に松竹梅を畫き、小形の太鼓を打ち、さゝらをすり、せきぞろござれや、ハアせきぞろめでた

い〜、と最も喧く戸前に呼びて乞錢也、繁多の時節故衆人困て錢を與ふ。【俚語集】に、廣島縣賀茂郡の歌を記す。註に、「十二月朔日より後は關編笠に齒染を刺したるを冠りて」云々と。歌詞は、吾國大和の國からござつた節秀候。ツレ、御家の掛りを、あら〜申せば。台詞「四方の類には水をた〜へ」、「八棟造りの槍の無節」、「先年飛騨の匠が建てたる御家か、さても見事や」、「せきぞろ」。同書に、關岡市、三井郡の歌詞も記す。

セイノゴホンマツ一關の五本松 出雲の美保の關の港口の山に昔は五本の松があつて、沖を通る舟の目じるしとなつてゐたが、ある時大名の行列が通つて、槍がつかへたので、一本伐らせた。漁師達は後の四本を伐られては難儀に及ぶので、關の五本松、一本伐りや四本、あとは伐られぬ、めうと松シヨ〜ホイノマツホイ」と唄ひ、それが殿様の耳に入り、あとの四本の生命は助かつたといふ。此の唄は安來ぶしにつれられて、大正昭和年間に全国的に流行し、替歌も多く出た。【佐渡の民謡】に、「羽黒の一本杉だ、二本伐られておしひとり」といふ盆踊りたがある。或は、「關

の五本松の歌も、由来する所古からう。他に風が寄せるか女郎衆が呼ぶか、關の港へ掛る船、「一夜泊りがつい二晩に、美保はよいとこ、いつまでも」。

セキノジツウ關の地蔵 嘉永四年ごろ大阪で流行つたといふ。關の地蔵さんはナア、ヨイトソリヤ親切者よ、雨もく降らぬに、かさくれた、ヨイトソリヤソリヤソリヤ。旅の女郎衆はナア、ヨイトソリヤ眞實深い、一夜お客に肌ふれた、ヨイトソリヤソリヤソリヤ。この關は東海道五十三次、關の地蔵様で名高い鈴鹿山麓のそれであらう。今でも歌舞伎の下座で唄ふ。後には俗謡と化しても、始めは民謡であつたであらう。また、關のお地蔵は親よりましたや、思ひくぬの妻たもる」。

セキノフネノウタせきふねの歌 セキノフネの義不明。三重縣北牟婁郡錦村の舊正月十七日に太鼓に合せて歌ふ祝儀歌。船唄らし、ヨイヤサ、ヤンヤ、アアラめでたいは、ハヨイ、エー何よりもめでたい先づ正月の御祝に、松竹に鶴龜、千歳も萬歳も、さて其外は限りなし」云々。カスリもある。めでたのオーヤ若枝もヨ、榮えるノエ木の葉も葉もかくヤナ

セノウエブシせのうへ節 福島縣伊達郡の唄。伊達の川俣養意所、キタサイ、娘やりませうか、はたおりに、コラサイ。セワウタ世話歌 物に意を寄せて歌を作る事。阿波の語。『民俗學』第三卷第十二號に見える。

センゲンオドリ浅間節 三重縣度會郡鳥津村古和浦では、舊五月廿八日に浅間山上の浅間神社を祭つて踊る。即ち富士講の祭で、同郡郷方村費浦でも同日に行ふ。後者の歌の方が古風を存する。足も軽かれ、御山もよかれ泊りくぬの宿よかれ、そよと吹いたは雨の風よ、吉田の港へそよくと、吉田通れば二階から招く、而も鷹子の振袖で、吉田通りて白塚越えて、大井川には水が無い、金谷峠を上りて見れば、お富士お山に雪もない、富士の裾野の一村すまき、いつか穂に出て現れる、富士の裾野で髪をしたら、お山よいと夢を見た、富士のお山にチンチラ、お山道者か白鷺か、お鉢廻りて御來光拜し、下山心の嬉しさや、お山土産に杓子をもろた、これも御山の御利生かな、今度くるなら持てきておくれ、伊豆のお山の葉を、伊豆のお山

ア、四角ヨイ柱のヤ一角のない、角のヨないヨエこそ添ひ、添ひ、十七八、殿も持たいで齒を染めて、笹に降る雪、身を隠す、笹に降る雪この花、さらくと書くはいとまの文を書くよ、このなま。セツクノウタ節句の歌 廣島縣安藝郡地方では舊の三月三日に、老若男女が終日山遊びをし、その時に歌ふのを云ふ。「室尾はよいとこ南を受けて、かしまあらしがホンニそよそよと、ササ寄りあいこ、寄りあいこ」。この歌詞は節句の歌らしくないが、囃子言葉がそれらしい。この樂譜は廣井清水氏採譜のもの。『民俗藝術』創刊號に見える。セトコウタ瀬戸小唄 愛知縣瀬戸の唄。野口雨情歌、廣井清水曲、廣間久枝振。瀬戸へおいでよ、くよくよと、ソレチヤラリコセ、山の土までササ金となる、ハヤシ、ジツくる日をわたしや待つ、セノセ。ゼニダイコ鐘太鼓 ジンダイコともいふ。九州中國の一部では竹筒に銅錢を入れて振つて歌に合す。これは竹筒に小石や小豆を入れる綾竹の變形である。然るに琉球八重山の鶴龜踊では唐鼓と云ふものを打つて踊るが、そ

に柳の葉なくば、お伊勢お山の銀杏の葉を、竹になりたや御山の竹に、且那榮えるしるし竹、富士の御山も三條の山も、山の高さは同じこと、西は曇りて雨となる、東は日照りて山よかれ、頼みますぞや先達様に、わしの殿御はしんきやくよ、浅間さんは踊れよとおしやる、踊りて振を御目に掛きよ。ヤフジマイリノウタ

センゲンマチ千軒町 鹿兒島縣揖保郡揖保町の、めでたき儀の時に歌ひ踊るもの。樂器なし。志布志千軒町は掃き掃除の、志布志千歳儀の掃き。こは重富、越ゆれば吉野、吉野越ゆれば鹿兒島の島。掃たくよ踊子が揃た、稻の出穂より、まだ掃た。い、めは、い、まい、不必要ならん。意、意は有名な女の名。センコウバオケサ選鐘場おけさ 佐渡のうた。おけさの一種。朝の暗いのにカンテラさげて、鐘山通ひのほどのよさ。ゼンコクキョウドミンヨウシウ『全國郷土民謡集』 松川二郎著、昭和五年刊。大半は新

の時の撥をジンダイコの撥といふ。長さ一尺直径七分ほどの丸竹の両端に一厘錢を三枚づつ入れたもの。撥を錢太鼓の撥といふならば一方を錢太鼓といひさうなものだが、唐鼓といふ。では錢太鼓なるものが他にあるかと云ふにさうでない。然るに青森のエンブリや宮城の田植踊で錢太鼓といふのは錢の輪を二重にし、その間に一厘錢を入れて振つて鳴らすので、此の方には撥も何もない。何故に錢太鼓といふ言葉があるか不詳。ゼニダイコ鐘太鼓 或はジンダイコぶし。佐賀縣西松浦郡では竹筒に青銅錢を入れ、振りつつ踊る。その唄、神戸伎、北前園へよ、今は大阪の川團ひ、アトサイサイ。『俚語集』 ↓ゼニダイコ

の祭日に、太鼓笛、尺八に鐘の囃子で、揃ふた。若衆が揃た、稻の出穂よりまだ掃た」と歌ふ。センザイロウマンザイロウ千歳ろ一萬歳ろ一 千歳製萬歳樂の詠りか。元日より數日間兒童が此の唄を唄ひ各戸に錢を乞ひ、繪馬を買つて神社に奉納し、殘金で飲食する事、博多古來の習慣であつたが、近年亡びたといふ。歌詞は『俚語集』に記す。「千歳ろ一萬歳ろ一」と始めて云ひ、終りに、「年の數は十三文、錢やんなさい」と云ふ。

センザンブシ一錢座ぶし 岩手縣九戸郡の歌。「南から色よき鳥が一つがひ、錢をばくはへて金運ぶ」。つばくらが、けせんの八ほうに葉をかけて、夜明ければ、錢おせふけとさやぶる、さやぶる、さやぶる慶のめでたさよ。元は大迫の唄で、鐘錢の時に歌ふ。今は祝儀歌となる。『東北の民謡』